―茨城県土浦市―

形　部　遺　跡

―老人介護保健施設建設に伴う―
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年

医療法人　慈厚会
土浦市教育委員会
形部遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

形部遺跡（かたべいせき）

老人介護保健施設建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年

医療法人　慈厚会
土浦市教育委員会
形部遺跡調査会

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川、花室川など水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。このような遺跡は当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり郷土の発展のために大切なことであります。

この度、医療法人慈厚会の老人介護保健施設建設に伴い、形部遺跡の一部について記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の結果は本文に記載されているとおりですが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり医療法人慈厚会をはじめ、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成17年９月

土浦市教育委員会
教育長　冨 永 善 文

第１号住居跡出土土器

第11号住居跡出土土器

例　　言

1．本書は医療法人慈厚会の老人介護保健施設建設事業に伴う、茨城県土浦市大字右籾1113に所在する形部遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は形部遺跡調査会（会長 須田直之）が実施した。

3．発掘調査は2003(平成15)年３月11日から４月26日まで行い、その後整理作業を行った。

4．発掘調査は大渕淳志（有限会社日考研茨城)、整理は小川和博（有限会社日考研茨城）が担当した。

5．本書の編集は小川和博、小林孝秀（専修大学大学院生)、黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当した。

6．本書の執筆等整理分担は下記のとおりである。

執　　筆　　第１章第１節・第２章・第３章・第６章：黒澤春彦
第１章第２節・第４章第２節～第４節・第５章：小川和博
第４章第１節：窪田恵一

図版作成　　小川和博

写　　真　　遺構：大渕淳志　　遺物：嶋田圭吾　　写真レイアウト：小林孝秀
航空写真：㈱シン技術コンサル

7．調査及び整理では下記の機関、方々よりご協力、ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

医療法人慈厚会　㈱島田建設設計　㈱川村建設　茨城県教育庁文化課　土浦市文化財保護審議会
野上 厚　渡邊 力　本田 純　塚原悦男　塚原順子　塚原きぬ子　島田 哲　広瀬喜一　小野寿美子
福田礼子　吉澤 悟

8．本遺跡の資料は上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。

凡　　例

1．形部遺跡の記号は右籾(みぎもみ)に所在する形部(かたべ)遺跡の略として「ＭＫ」と表記する。

2．遺構番号について、遺構の種別ごとに付したが、調査や整理の過程で遺構でないと判断したものは 欠番とした。

3．土層や遺物における色相の判断は「新版標準土色帖」(日本色研事業株式会社）を使用した。

4．各遺構の実測図は原図、竪穴住居跡等１/20、付属施設１/10を使用し、縮尺１/３を基本とした。

5．実測図中の標高はすべてｍ単位で示している。

6．本文・図版の記号は下記のとおりである。なお、原稿や台帳、遺物注記にもこの記号を用いている。
「ＳＩ」竪穴住居跡、「ＳＫ」土坑、「Ｐ」ピット、「K」攪乱、「カ」竈、「貯」貯蔵穴

7．遺物図版中の実測遺物に付した番号は遺構図や遺物出土状況図、写真図版の番号に一致する。

8．遺構図や遺物出土状況図において、接合関係にある遺物は各々を実線で結んだ。

9．遺構図中におけるスクリントーンの指示は下記のとおりである。

焼土　　竈

10．遺物の縮尺は１/３を基本としたが、甕、支脚等大型遺物は１/４など大きさにより変えている。

11．遺物実測図のスクリントーンの指示は下記の通りである。

繊維土器断面　　赤彩　　黒色処理　　須恵器断面

形部遺跡調査会組織

会　　長　　須田　直之（土浦市文化財保護審議会長）
副 会 長　　石毛　一美（土浦市教育委員会教育次長）
理　　事　　大塚　　博（同市文化財保護審議会委員）
　　飯沼　正勝（同市都市整備部参事兼建築指導課長）／来栖　忠雄（同市都市整備部建築指導課長）
　　岩沢　　茂（同市教育委員会文化課長）／広瀬　昌則（同市教育委員会参事兼文化課長）
監　　事　　桜井　正広（同市教育委員会総務課長）
　　山本　順一（同市監査事務局長補佐）／大内　誠二（同市監査事務局長補佐）
事務局長　　宇津野利雄（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）
事務局次長　　三須　洋一（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長補佐）
事務局員　　堀部　　猛（土浦市教育委員会文化課主幹）
　　比毛　君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹）
兼出納員　　黒澤　春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹）

調　査　者　名　簿

発掘調査

主任調査員　　大渕　淳志（有限会社日考研茨城）

整　　理

主任調査員　　小川　和博（有限会社日考研茨城）
調　査　員　　遠藤　啓子（有限会社日考研茨城）
　　窪田　恵一
　　嶋田　圭吾
　　小林　孝秀（専修大学大学院生）

事　　務　　鈴木ひと美

発掘調査作業員

石黒　　勇　　飯村　二美　　海老原龍生　　大久保敦子　　小野　　豊　　河合　淳子
酒井　悦子　　佐賀　　実　　竹内　政江　　土田　幸子　　露久保三郎　　露久保みつ子
寺島　靖子　　友部　政夫　　中島とみ子　　中島　秀雄　　中島　　實　　中野富美子
長谷川はるみ　　長谷部裕子　　松浦　博子　　松浦　正美

整　　理

大野　美佳　　大渕由紀子　　酒井　悦子

目　　次

口絵
序
例言　凡例　形部遺跡調査会組織　調査者名簿
目次　挿図目次　写真図版目次
第１章　調査の経緯と経過…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査経過…… 1
第２章　環境…… 2
　第１節　地理的環境…… 2
　第２節　歴史的環境…… 2
第３章　調査…… 7
　第１節　調査の成果…… 7
　第２節　調査の方法…… 7
第４章　遺構と遺物…… 10
　第１節　旧石器時代…… 10
　第２節　縄文時代…… 14
　第３節　古墳時代…… 35
　第４節　近世以降・その他…… 94
第５章　まとめ…… 103
　　竪穴住居跡一覧…… 108
第６章　総括…… 109
報告書抄録…… 110
写真図版

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形図…… 3
第２図　周辺の遺跡位置図…… 4
第３図　調査区位置図…… 8
第４図　形部遺跡遺構配置図…… 9
第５図　花室川右岸の段丘地形と調査地点位置図…… 11
第６図　ローム考古学層序断面図…… 11
第７図　形部遺跡検出の旧石器…… 12
第８図　花室川谷沿岸の旧石器時代遺跡分布図
　　（ＡＴ降灰期以前）…… 13
第９図　第８号住居跡実測図…… 15
第10図　第８号住居跡炉実測図…… 16
第11図　第８号住居跡出土遺物出土状況図…… 16
第12図　第８号住居跡出土遺物（１）…… 17
第13図　第８号住居跡出土遺物（２）…… 18
第14図　第８号住居跡出土遺物（３）…… 19
第15図　遺構外出土縄文土器（１）…… 26
第16図　遺構外出土縄文土器（２）…… 27
第17図　遺構外出土縄文土器（３）…… 28
第18図　遺構外出土縄文土器（４）…… 29
第19図　遺構外出土縄文土器（５）…… 30
第20図　遺構外出土縄文土器（６）…… 31
第21図　遺構外出土縄文土器（７）及び石製品…… 32
第22図　第１号住居跡実測図（１）…… 36
第23図　第１号住居跡実測図（２）…… 37
第24図　第１号住居跡カマド実測図…… 37
第25図　第１号住居跡出土遺物出土状況図…… 38
第26図　第１号住居跡出土遺物（１）…… 39
第27図　第１号住居跡出土遺物（２）…… 40
第28図　第１号住居跡出土遺物（３）…… 41
第29図　第１号住居跡出土遺物（４）…… 42
第30図　第２号住居跡実測図（１）…… 46
第31図　第２号住居跡出土遺物（１）…… 47
第32図　第２号住居跡出土遺物（２）…… 48
第33図　第３号住居跡実測図（１）…… 50
第34図　第３号住居跡実測図（２）…… 51
第35図　第３号住居跡カマド実測図…… 51
第36図　第３号住居跡出土遺物（１）…… 52
第37図　第３号住居跡出土遺物（２）…… 53
第38図　第４号住居跡実測図…… 56
第39図　第４号住居跡カマド実測図…… 56
第40図　第４号住居跡出土遺物…… 57
第41図　第５号住居跡実測図（１）…… 59
第42図　第５号住居跡実測図（２）…… 60
第43図　第５号住居跡カマド実測図…… 60

第44図　第５号住居跡出土遺物（１）…… 61
第45図　第５号住居跡出土遺物（２）…… 62
第46図　第５号住居跡出土遺物（３）…… 63
第47図　第５号住居跡出土遺物（４）…… 64
第48図　第６号住居跡実測図…… 69
第49図　第６号住居跡出土遺物…… 70
第50図　第７号住居跡実測図…… 72
第51図　第７号住居跡カマド実測図…… 73
第52図　第７号住居跡出土遺物…… 73
第53図　第９号住居跡実測図…… 75
第54図　第９号住居跡カマド実測図…… 75
第55図　第９号住居跡出土遺物（１）…… 76
第56図　第９号住居跡出土遺物（２）…… 77
第57図　第９号住居跡出土遺物（３）…… 78
第58図　第10号住居跡実測図（１）…… 80
第59図　第10号住居跡実測図（２）…… 81
第60図　第10号住居跡カマド実測図…… 81
第61図　第10号住居跡出土遺物…… 82
第62図　第11号住居跡実測図…… 85
第63図　第11号住居跡カマド実測図…… 86
第64図　第11号住居跡出土遺物（１）…… 88
第65図　第11号住居跡出土遺物（２）…… 89
第66図　第11号住居跡出土遺物（３）…… 90
第67図　第11号住居跡出土遺物（４）…… 91
第68図　第12号住居跡実測図…… 92
第69図　第12号住居跡出土遺物…… 93
第70図　溝状遺構実測図…… 95
第71図　土坑実測図（１）…… 96
第72図　土坑実測図（２）…… 97
第73図　土坑実測図（３）…… 98
第74図　土坑出土遺物…… 99
第75図　風倒木痕実測図…… 101
第76図　風倒木痕出土遺物…… 102
第77図　第８号住居跡出土浮島Ⅰｂ式土器類型…… 103
第78図　住居跡規模関係図…… 105
第79図　住居跡主軸方位相関図…… 105
第80図　第１・３・５号住居跡出土坏類法量及び割合… 106

写真図版目次

ＰＬ１　調査区航空写真　試掘状況
ＰＬ２　形部遺跡遠景　調査前全景　調査終了全景
ＰＬ３　第８号住居跡完掘　第８号住居跡炉址　第８号住居跡遺物出土状況
ＰＬ４　第１号住居跡完掘　第１号住居跡遺物出土状況（１）　第１号住居跡遺物出土状況（２）
ＰＬ５　第２号住居跡完掘　第３号住居跡完掘　第３号住居跡遺物出土状況
ＰＬ６　第４号住居跡完掘　第５号住居跡完掘　第５号住居跡遺物出土状況
ＰＬ７　第６号住居跡完掘　第６号住居跡炭化物出土状況　第７号住居跡完掘
ＰＬ８　第９号住居跡完掘　第９号住居跡遺物出土状況（１）　第９号住居跡遺物出土状況（２）
ＰＬ９　第10号住居跡完掘　第11号住居跡完掘　第11号住居跡遺物出土状況（１）
ＰＬ10　第11号住居跡遺物出土状況（２）　第12号住居跡完掘　第12号住居跡遺物出土状況
ＰＬ11　第１号土坑完掘　第２号土坑完掘　第３号土坑完掘　第４号土坑完掘　第５号土坑完掘　第６号土坑完掘　第７号土坑完掘
ＰＬ12　第８号土坑完掘　第９号土坑完掘　第10号土坑完掘　第11号土坑完掘　第12号土坑完掘　第14号土坑完掘　第15号土坑完掘
ＰＬ13　第16号土坑完掘　第１号風倒木痕　第３号風倒木痕　第４号風倒木痕
ＰＬ14　第１号溝状遺構完掘　第２号溝状遺構完掘　第２号溝状遺構断面
ＰＬ15　旧石器時代出土遺物　第８号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ16　第８号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ17　第８号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ18　遺構外出土縄文土器（１）
ＰＬ19　遺構外出土縄文土器（２）
ＰＬ20　遺構外出土縄文土器（３）
ＰＬ21　遺構外出土縄文土器（４）
ＰＬ22　遺構外出土縄文土器（５）
ＰＬ23　遺構外出土縄文土器（６）
ＰＬ24　遺構外出土縄文土器（７）及び石製品
ＰＬ25　第１号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ26　第１号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ27　第１号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ28　第１号住居跡出土遺物（４）　第２号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ29　第２号住居跡出土遺物（２）　第３号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ30　第３号住居跡出土遺物（２）　第４号住居跡出土遺物
ＰＬ31　第５号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ32　第５号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ33　第５号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ34　第６号住居跡出土遺物　第７号住居跡出土遺物
ＰＬ35　第９号住居跡出土遺物
ＰＬ36　第10号住居跡出土遺物
ＰＬ37　第11号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ38　第11号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ39　第12号住居跡出土遺物　土坑出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

2002(平成14)年３月１日、右籾地区の介護老人保健施設を予定している土地について、土地所有者から遺跡の有無と取扱いの照会があった。それを受け市教委文化課職員と上高津貝塚ふるさと歴史の広場職員は５月８日に現地踏査を行った。現地は山林や荒地となっており確認は困難な状況であった。しかし一部地面が露出している個所があり、土器の散布が見られた。また周辺には遺跡が多く存在し、地形からも遺跡の可能性は十分考えられた。踏査の状況をもとに、事業者宛に開発エリア内には遺跡が存在する可能性がある旨を伝えた。

５月28日、遺跡の有無や性格などを把握するために、土地所有者の協力を得て試掘・確認調査を実施した。結果、縄文早期・前期の土器片や遺物包含層、古墳時代後期の住居跡が確認された。確認された地点は未周知であるため、字名から形部遺跡と命名し、県教育長宛に遺跡の発見届を提出した。

その後事業者と協議を重ね、現状保存が困難であることから発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることで合意した。

調査は形部遺跡調査会（会長　須田直之）を組織して実施することになり、2003(平成15)年３月５日に調査会を発足、３月６日、事業者と形部遺跡調査会で契約を締結した。発掘調査は３月11日から表土除去を開始し、12日から本格的な調査に入った。

文化財保護法関係では事業者から提出された57条２を３月５日付けでに県教育長宛に進達した。

58条２については2003年３月19日付で県教育長に報告した。

第２節　調査経過

３・11　本日より調査を開始する。重機により表土層除去開始。（重機は４月１日まで継続する。）

３・12　本日より作業員が参加し、表土層除去後の遺構検出にあたる。

３・13　調査区南側の遺構検出で、竪穴住居跡を確認し、第１号住居跡と命名し、周辺の精査にかかる。

３・18　第１～３号住居跡の調査区を設定し、覆土除去に入る。

３・20　第２・３号住居跡を完掘する。第４・５号住居跡の調査を開始する。

３・22　第２～４号住居跡を完掘し、写真撮影を行う。調査区中央から第５～７号住居跡を検出する。

３・26　第５～７号住居跡の調査区設定後、覆土除去を開始する。

３・29　第７・９号住居跡の平面実測を行う。第10号住居跡の覆土除去を継続する。第１号土坑を検出する。

４・１　本日で重機による表土層除去作業を終了する。第11号土坑を確認し、覆土除去に入る。

４・４　第11・12号住居跡の平面実測･写真撮影。第８・12号住居跡の掘形調査を開始。

４・９　第３～５号住居跡の掘形調査を行う。本日より旧石器時代の確認調査を開始する。

４・17　第８号住居跡の平面実測。旧石器文化層の確認調査の継続。遺構全測図作成。

４・18　第８号住居跡の平面実測後、写真撮影。旧石器文化層の確認調査の継続。

４・19　本日にて旧石器文化層の確認調査を完了し、土層断面実測を行う。

４・23　空中写真撮影を行う。旧石器文化層の土層断面実測。

４・24　旧石器文化層の土層断面実測を完了し、グリッドの埋戻作業を行う。

４・26　埋め戻し作業を終了し、機材を撤去し調査を終了する。

第2章　環　境

第1節　地理的環境

土浦市は茨城県の南部、霞ヶ浦土浦入りの西岸に位置する。北西方向には筑波山塊が連なっており、筑波山頂は市街地から北西に約18㎞の位置である。気候（平成13年度）は最高気温36.4度、最低気温－6.4度、年平均14.4度、降水量は1,143㎜で、比較的過ごしやすい。東京からは北西に約60キロの位置にあり、近世以降、霞ヶ浦水運の拠点として栄えた商業都市である。交通網も発達し、鉄道では常磐線、道路では常磐高速道路や国道６号線が南北に走る。現在人口は135,000人、面積は91.6㎢で、西に隣接するつくば市と並び県南の中心的な市である。

地形をみると、市の中央に桜川が北西から流れている。桜川は栃木県との境、八溝山系に水源を持ち、筑波山系の西側を流れ霞ヶ浦に注ぐ全長約50㎞の河川である。ウルム氷期のころ、現在の桜川低地は古鬼怒川（現在の鬼怒川と区別するため古鬼怒川と呼ぶ）が流れていたが、２万２～３千年前頃、下館付近で西に流路を変え、土浦方面は桜川が本流となった。台地は古鬼怒川によって分断され、現在の桜川の北を新治台地、南を筑波稲敷台地と呼んでいる。どちらも標高は25m前後で、桜川河口付近での比高差は約23mである。土浦市内の筑波稲敷台地は、つくば市一の矢、玉取地区を水源とし桜川と平行して流れる花室川によって分断されている。花室川は全長15㎞の小河川で、河口付近の低地幅は約400mである。桜川と花室川に挟まれた台地は本遺跡付近で幅２㎞、標高は約27m、低地との比高差は約15mである。花室川両岸の台地には上位段丘が東西に見られる。またこの地域は樹枝状に谷津が発達し、広い平坦面は少ない。谷津は湧水が多く、古墳時代以降水田として利用されたと思われる。本遺跡は現在の霞ヶ浦から西へ４㎞、花室川から南へ600mに位置し、台地幅は約100mの北に伸びる細長い尾根状台地に立地している。

地質をみると砂層である木下層の上層にシルト層の常総層が堆積し、その上層に関東ローム層が堆積している。ローム層の厚さは約２mである。当遺跡のローム層については第４章第１節に詳しい。ローム層の上層はローム漸移層、耕作土などの表土が堆積している。表土の厚さは30～50㎝が標準である。

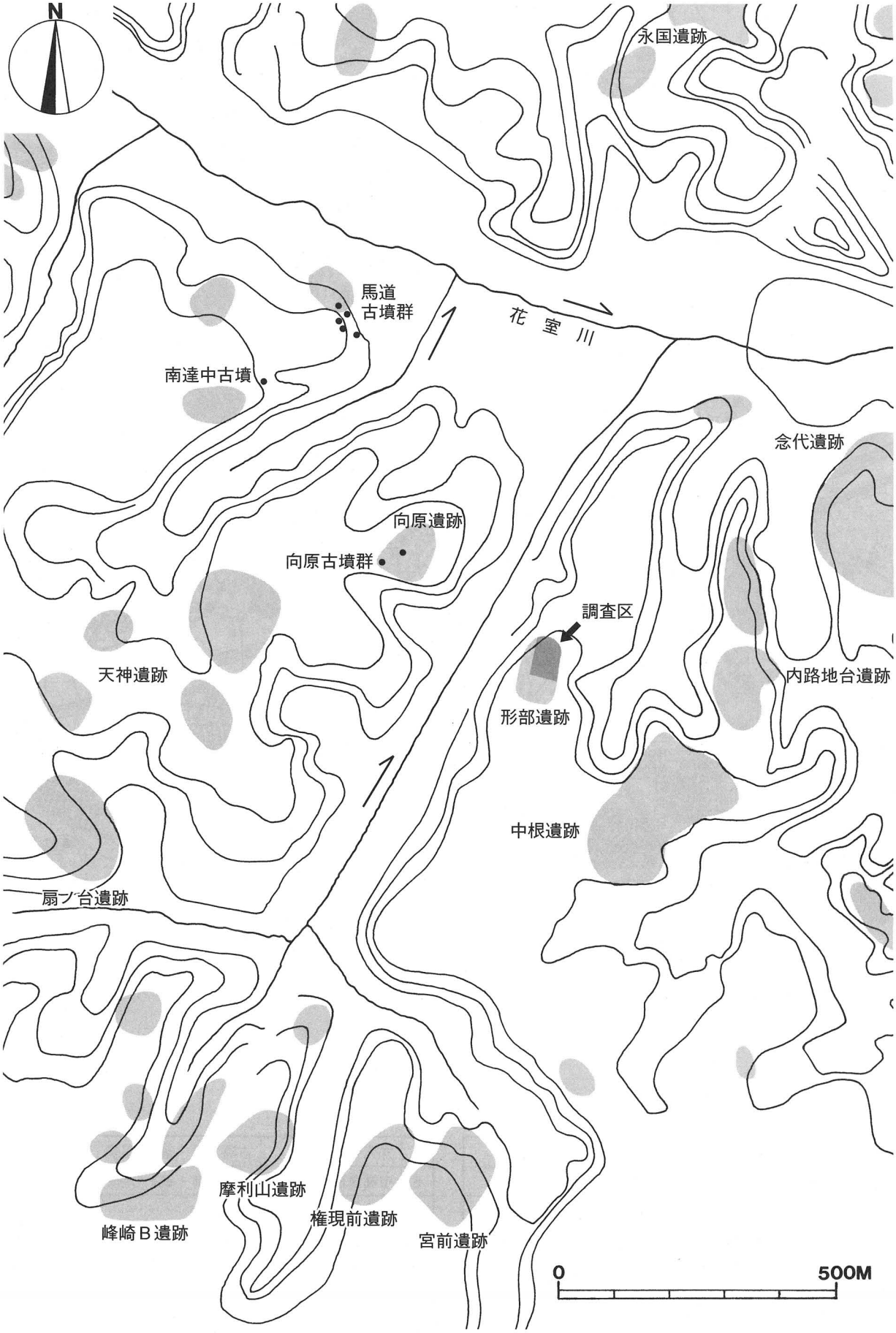
第2節　歴史的環境

本遺跡が立地する花室川下流域は遺跡が密集する地域で、各時代にわたり多くの遺跡が存在する。

旧石器時代の遺跡は向原遺跡（57）、宮前遺跡（70）、和台遺跡（18）、永国遺跡（24）、阿ら地遺跡（26）、内出後遺跡（37）など比較的多い。向原遺跡からは黒曜石を中心としたブロックが発見されている。また、花室川流域はナウマンゾウの化石が発見されることで知られている。

縄文時代の遺跡をみると、早期では永国遺跡、炉穴が発見された内路地台遺跡（75）、無文土器（天矢場式）や茅山下層が発見された阿ら地遺跡がある。前期では烏山遺跡（92）から関山期、右籾貝塚東遺跡（71）からは黒浜期、権現前遺跡（69）からは浮島期の住居跡が発見された。内出後遺跡からは遺構外からではあるが石製の抉状耳飾が２点出土している。中期では和台遺跡、六十原遺跡（16）、六十原Ａ遺跡（15）、峰崎遺跡（65・66）、宮前遺跡、扇ノ台遺跡（60）で阿玉台期から加曽利Ｅ期の集落が調査された。後晩期は峰崎遺跡や小松貝塚（13）から発見されている。花室川下流域の縄文遺跡を見ると、早・前期は流域に多く、中・後期は宮前遺跡や峰崎Ｂ遺跡のように奥まった地点に多く存在している。

弥生時代になると遺跡数は減少する。後期前半の和台遺跡、烏山遺跡、終末期の永国遺跡、中根遺跡（72）で住居跡が発見されているが小規模で集落の長期継続はみられない。


N
永国遺跡
馬道
古墳群
花室川
南達中古墳
念代遺跡
向原遺跡
向原古墳群
調査区
天神遺跡
内路地台遺跡
形部遺跡
中根遺跡
扇ノ台遺跡
摩利山遺跡
峰崎Ｂ遺跡
権現前遺跡
宮前遺跡
0
500M

第１図　遺跡周辺地形図

（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

第２図　周辺の遺跡位置図

No.	遺跡名	主な時代
1	形部遺跡	縄文（中・前）・古墳（中・後）
2	寄居遺跡	縄文(前)・古墳(前)・奈良～中世
3	うぐいす平遺跡	弥生・古墳（前・後）・奈良・平安
4	新町遺跡	縄文（前）・平安・中世
5	龍善寺遺跡	縄文（中）・古墳（前）
6	下高津小学校遺跡	古墳（後）・平安

7	弁天社東遺跡	古墳（前・後）・平安
8	中高津西原遺跡	古墳（前・後）・平安
9	高津天神山古墳	古墳
10	大久保遺跡	古墳
11	国分遺跡	縄文（中）
12	池の台遺跡	縄文（中～晩）・古墳（後）
13	小松貝塚	縄文（後・晩）

14	小松遺跡	古墳（後）・平安
15	六十原Ａ遺跡	縄文（中）
16	六十原遺跡	縄文（中）
17	ビヤ首遺跡	古墳（前・中）・平安
18	和台遺跡	縄文（中）・弥生・古墳（前）
19	寺家ノ後Ｂ遺跡	古墳（中）
	寺家ノ後Ｂ古墳群	古墳（終）
20	十三塚Ｂ遺跡	古墳（後）
21	寺家ノ後Ａ遺跡	古墳（中・後）・平安
22	亀井遺跡	古墳（前・後）・平安
23	永国御りょう遺跡	縄文（中）・古墳（中）
24	永国遺跡	旧石器･縄文(早～中)･弥生～平安
25	才ノ内遺跡	縄文（早）・古墳（後）
26	阿ら地遺跡	縄文（早・前）・古墳（中～後）
27	桜ケ丘遺跡	古墳（後）
28	桜ケ丘古墳	古墳（終）
29	房谷遺跡	古墳（後）
30	三芳古墳	古墳（中）
31	東谷遺跡	縄文（早）・古墳（前）
32	霞ヶ岡北遺跡	縄文・古墳（後）・平安
33	霞ヶ岡古墳	古墳
34	内根Ｂ遺跡	縄文（中・後）・古墳（後）～平安
35	内根Ｃ遺跡	平安
36	霞ヶ岡遺跡	縄文・古墳（後）・平安・中世
37	内出後遺跡	縄文（前）・古墳～中世
38	いさろ遺跡	古墳（前）～平安
39	谷畑遺跡	平安
40	南古屋敷	中世
41	東出遺跡	古墳（後）・平安・中世
42	神出遺跡	古墳（中・後）・中世
43	中居遺跡	平安・中世
44	木曽遺跡	古墳（後）・平安
45	西根宮脇遺跡	弥生・古墳（後）～中世
46	西根平遺跡	古墳（前・後）・平安
47	諏訪遺跡	古墳・平安
48	平代地遺跡	縄文・平安・中世
49	大日・浅間古墳	古墳
50	白楽遺跡	古墳
51	南達中Ｂ遺跡	古墳（前・後）・平安
52	馬道古墳群・遺跡	古墳
53	南達中Ａ遺跡	古墳（前）
54	南達中古墳	古墳
55	谷原門Ｂ遺跡	平安
56	谷和門Ｃ遺跡	縄文・平安・中世
57	向原遺跡	旧石器･縄文(早･前)･古墳(前～後)

58	天神遺跡	縄文・平安・中世
59	谷和門Ａ遺跡	縄文（中）・古墳（中）・平安
60	扇ノ台遺跡	縄文（中）・平安
61	木の宮北遺跡	縄文（中）
62	木の宮南Ｃ遺跡	縄文
63	木の宮南Ａ遺跡	縄文（後）
64	木の宮南Ｂ遺跡	縄文（後）・平安
65	峰崎Ｂ遺跡	縄文（中・後）
	峰崎貝塚	縄文（中）
66	峰崎Ｃ遺跡	縄文（中・後）
67	摩利山遺跡・貝塚	縄文（中）
68	峰崎Ａ遺跡	縄文（中・晩）
69	権現前遺跡	縄文（前・中）
70	宮前遺跡	縄文（中）・古墳（中・後）
71	右籾貝塚東遺跡	縄文（前）
72	中根遺跡	弥生・古墳（前）・中世
73	塚田遺跡	平安・中世
74	牧の内遺跡	平安・中世
75	内路地台遺跡	縄文（早・前・後）・平安
76	右籾宮塚遺跡	縄文（前）
77	小谷遺跡	平安
78	右籾館跡	中世
79	念代遺跡	古墳（前・後）・奈良～中世
80	平坪遺跡	古墳（前）・奈良～中世
81	沖の台遺跡	古墳～平安
82	堂地塚遺跡	縄文（前）・古墳（前）・平安
83	松原遺跡	縄文・奈良・平安
84	永峰遺跡	弥生・古墳（後）
85	宮塚遺跡	中世
86	数光遺跡	縄文（前）・平安・中世
87	長峰遺跡	奈良・平安
88	烏山Ａ遺跡	平安
89	烏山Ｂ遺跡	平安
90	小西遺跡	縄文（前）・平安
91	北平南遺跡	縄文（前）・平安
92	烏山遺跡	縄文（前）・弥生（後）～平安
93	北平北遺跡	平安
94	南丘遺跡	古墳～平安
95	堂後遺跡	縄文（中）・古墳（前・後）・平安
96	烏山貝塚	縄文（前）
	石倉山古墳群	古墳（後～終）
97	立の越古墳群	古墳
98	西郷遺跡	縄文（早・前）・古墳（後）～中世
99	一区北遺跡・貝塚	縄文
100	阿見貝塚	縄文

古墳時代になると再び遺跡は増加する。集落を見ると前期では烏山遺跡、永峰遺跡（84）、向原遺跡、中根遺跡、和台遺跡、永国遺跡、阿ら地遺跡、内出後遺跡などで発見されている。注目される遺構として烏山遺跡の玉作工房跡がある。メノウの勾玉工房跡としては全国で最古に位置付けられる。

中期では神出遺跡（42）や向原遺跡、宮前遺跡、永国遺跡、阿ら地遺跡、内出後遺跡から集落が発見されている。向原遺跡では線刻された小形壺や石製模造品が出土した。須恵器を伴う集落も多く、烏山遺跡、内出後遺跡、神出遺跡から甕などが出土している。

後期では本遺跡、神出遺跡、向原遺跡、池の台遺跡（12）、永国遺跡、阿ら地遺跡、内出後遺跡などから集落が発見されている。内出後遺跡では祭祀用の土器とともに土鈴が出土した。須恵器は永国遺跡、烏山遺跡、内出後遺跡、永峰遺跡から出土している。中期後半から後期にかけての集落はこの地域に数多く存在する。

古墳をみると、埴輪を持つ馬道古墳群（52）、や南達中古墳（54）、石棺が発見された桜ヶ丘古墳（28）、終末期の石倉山古墳群（96）、向原古墳群（57）、寺家ノ後古墳群（19）がある。ほとんどが後期から終末期の古墳で、大型の前方後円墳や前期古墳は未確認である。

奈良・平安時代、本遺跡周辺は茨城郡と信太郡の境であった。また、東海道のルートも想定されている。

遺跡では「中家」の墨書土器が発見された念代遺跡、「大家」等の墨書土器や刀飾りが出土した烏山遺跡、皇朝十二銭や多数の掘立柱建物跡が検出された扇ノ台遺跡など多くの遺跡が存在する。

中世以降も遺跡は多く、右籾館跡（78）、南古屋敷跡（40）などの館跡や、内出後遺跡、神出遺跡、霞ヶ岡遺跡（36）、右籾十三塚（73）などが存在する。

参考文献

1975　大森信英　「土浦市烏山遺跡群」茨城県教育委員会

1981　汀　安衛　「池の台遺跡」土浦市教育委員会

1983　大川　清　「永国遺跡」日本窯業史研究所

1987　越川敏夫　「向原遺跡」土浦市教育委員会

1988　大川　清　「烏山遺跡」土浦市教育委員会

1990　小松崎毅彦　第60集「永国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書」㈶茨城県教育財団

1991　浅井哲也　第64集「一般国道125号道路改良工事地内発掘調査報告書」㈶茨城県教育財団

1996　矢ノ倉正男　第111集「主要地方道土浦竜ヶ崎線道路改良工事地内発掘調査報告書」㈶茨城県教育財団

1996　肥田順一　「六十原Ａ遺跡」土浦市教育委員会

1997　大関　武　第118集「都市計画道路荒川沖木田余線街路改良工事地内発掘調査報告書」㈶茨城県教育財団

1999　平岡和夫　土生朗治　「東出・神出・中居遺跡」土浦市教育委員会

1999　平岡和夫　土生朗治　「扇ノ台遺跡」土浦市教育委員会

2000　福田礼子　「権現前遺跡」土浦市教育委員会

2001　比毛君男　「いさろ遺跡」土浦市教育委員会

2002　窪田恵一　「永国遺跡２次」土浦市教育委員会

2002　黒澤春彦　「阿ら地遺跡」土浦市教育委員会

2003　小川和博　「六十原遺跡」土浦市教育委員会

第3章　調　査

第1節　調査の成果

本遺跡は縄文時代、古墳時代の集落跡であるが、旧石器時代、近世の遺構・遺物も発見されている。遺構は竪穴住居跡12軒、土坑16基、溝状遺構2条が検出された。それぞれの概要は下記のとおりである。

旧石器時代

石器ブロックは確認されなかったが、後世の遺構中や表土中からガラス質黒色安山岩の剥片やトロトロ石の石核が発見された。

縄文時代

遺構は前期浮島式の竪穴住居跡1軒と早・前期の土坑13基が検出された。遺構外からは早期の撚糸文系土器、沈線文系土器、前期浮島式土器、少量ではあるが早期の条痕文系土器、前期の黒浜式土器、諸磯b・c式土器、中期の五領ヶ台式土器、加曽利E式などが出土した。

古墳時代

本遺跡の中心となる時期で中期末から後期（5世紀末から7世紀初頭）の竪穴住居跡11軒と土坑2基が検出された。遺物は土師器の甕、杯などが多い。特に第1号住居跡からは50点を超える杯が出土し、第11号住居跡からは45cmを超える大型の甕が出土した。須恵器は少なく蓋2点が出土した程度である。他には手捏土器、土製勾玉、土製円盤などの祭祀遺物や滑石製紡錘車が出土した。

近世

溝状遺構2条が検出された。

その他

時期不明の土坑1基と風倒木痕4基が検出された。

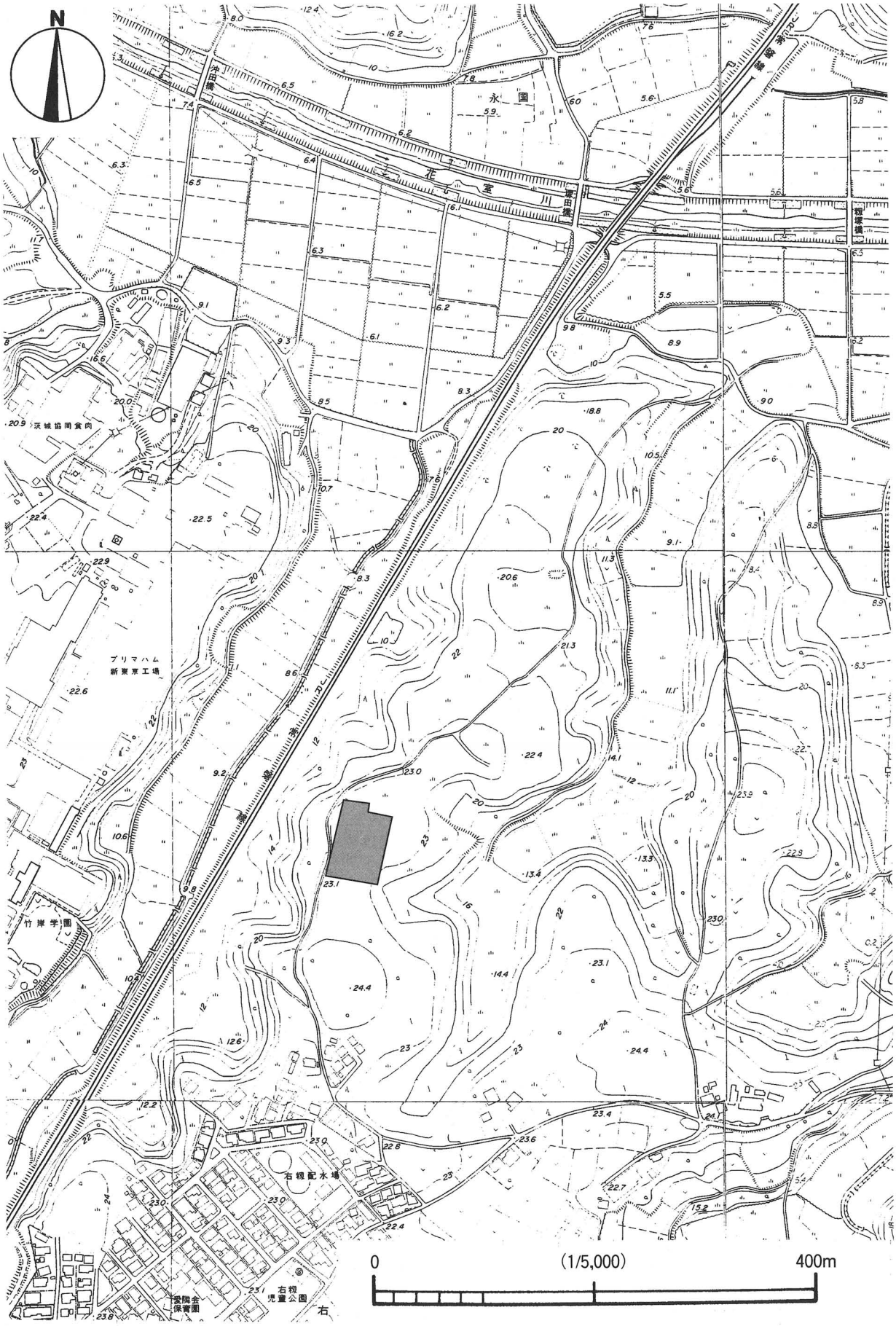
第2節　調査の方法

確認調査で表土の厚さが30cm前後であること、遺構の確認面はローム漸移層からローム層上であることが確認された。この深さであれば重機でも遺構を傷めないと判断し、遺構確認面直前まで重機による表土除去を行った。基準点は任意に設定し4m四方のグリットを設定した。グリットの名称は東西ラインに西から東へアルファベット、南北ラインに北から南へ算用数字を用いた。北西のポイント名がグリットの名称となる。確認された遺構は土層観察用のベルトを設けて検出作業を行った。竪穴住居跡については生活面調査後、床下の確認を行なった。

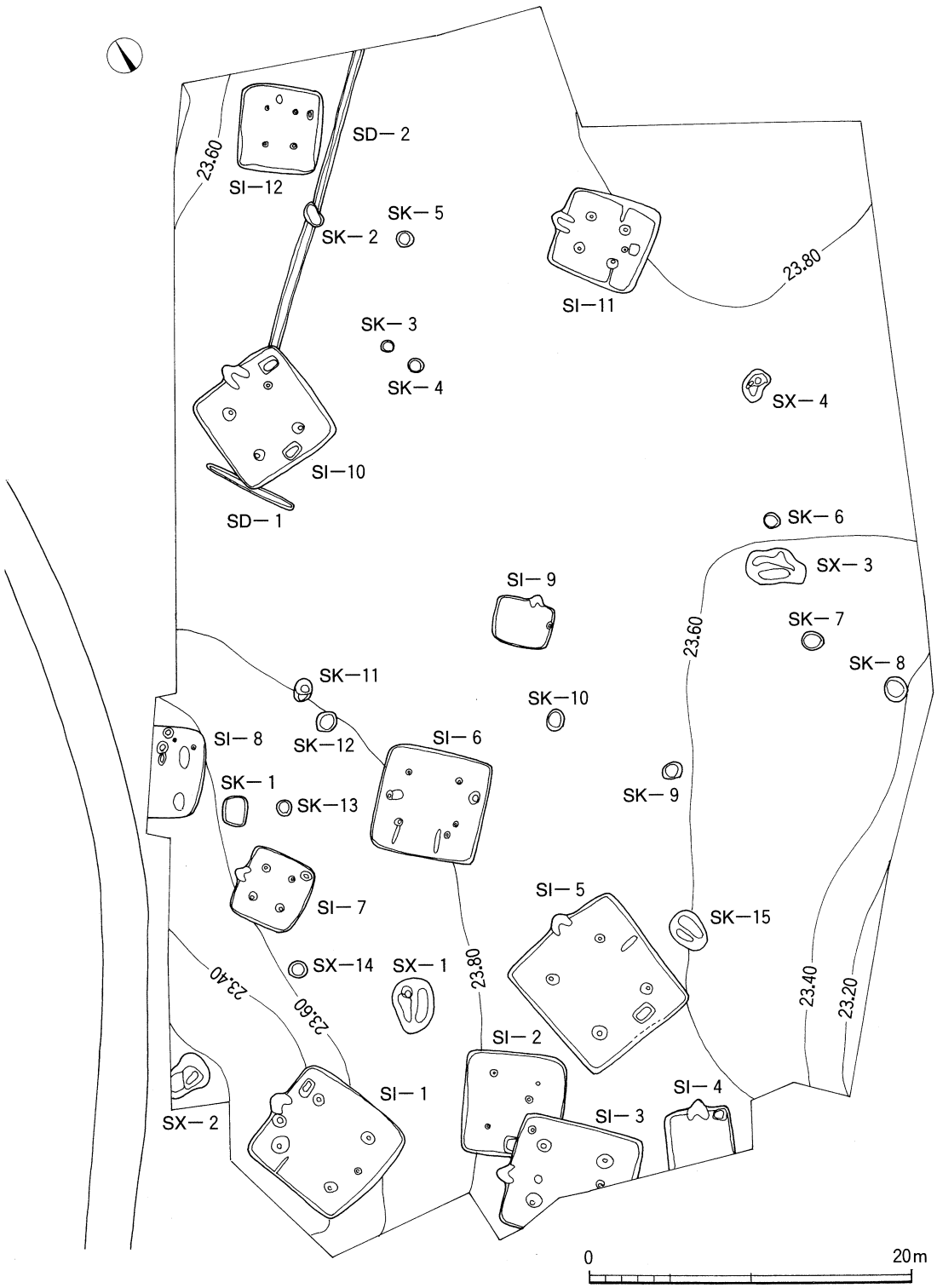
遺物出土図や遺構平面図は遣り方測量と平板測量を併用した。図の縮尺は20分の1を基本とした。

写真は35mm一眼レフカメラを使用し、フィルムはモノクロームとカラーリバーサルの2種類で撮影した。航空写真はラジコンヘリで中判（6×6）を使用し、カラーネガとモノクロームで撮影した。

整理作業は調査終了後に実施した。遺物写真は、中判（6×7）を使用しモノクロームで撮影した。


N
永国
花室川
茨城協同食肉
プリマハム
新東京工場
竹岸学園
右籾配水場
右籾
児童公園
愛隣会
保育園
0
(1/5,000)
400m

第３図　調査区位置図



第４図　形部遺跡　遺構配置図

第４章　遺構と遺物

第１節　旧石器時代

１．現地調査の概要（第５図）

住居跡の調査中に旧石器時代の石器と判断できる資料が出土したことから、旧石器時代の調査を計画した。調査区は南北に細長く形成された半島状の台地平坦面にあるため、関連資料の検出と関東ローム層の堆積環境を観察する目的から、南北に４箇所、東西に２箇所と合計６箇所の試掘調査坑（PG－１～６）を設定して掘削調査した。PG－１～５の各調査坑は12層（常総粘土層）まで、PG－６は８層まで掘削し風成堆積層を観察して北壁と西壁で考古学土層区分を行い、写真撮影と層序図の実測を実施した。PG - ２では、４層中に炭化物粒子の集中箇所を壁面にて確認したが、人工遺物の追加資料は出土しなかった。

２．ローム層の堆積環境と地形（第６図）

形部遺跡は花室川右岸の台地上に立地し、中位第１段丘面（M1・成増面相当）と比高差で２ｍ低い中位第２段丘面（M2・武蔵野面相当）と２段の河成段丘地形を成す。今回の調査区は、中位第１段丘面上にある。

ローム層の堆積を観察すると、既に東側の開析谷斜面部では箱根東京軽石層が流失して傾斜地となり、５万年前以降の風成層堆積は、現在の地表面の傾斜と平行することを確認した。５万年前頃に東西の開析谷はすでに形成され、現在の地形に近い痩せ尾根状の地形であったと考えられる。

《土層観察内容》（～○㎜：最大直径を表す）

１．褐色（7.5YR4/6）軟質ローム　　赤褐色スコリヤ（～0.5㎜）、黒色スコリヤ（～0.5㎜）を共に多く含む。ローム最上部の軟質ローム層で、下部は楔状に硬質ローム内に入り込み、最深で７層に達する場合がある。

２．褐色（7.5YR4/4）硬質ローム　　赤褐色スコリヤ（～0.5㎜）、黒色スコリヤ（～0.5㎜）を共に多く含む。１層中にブロック状に残った状態で確認した。立川ローム第１暗色帯に相当する。

３．褐色（7.5YR4/4）硬質ローム　　白色粒子（～１㎜）を僅かに、赤褐色スコリヤ（～0.5㎜）を多く含む。AT 火山灰と考えられる透明ガラス粒子を多く認めた。

４．暗褐色（7.5YR3/4）硬質ローム　　赤褐色スコリヤ（～１㎜）を多く、青灰色スコリヤ（～0.5㎜）を僅かに含む。立川ローム第２暗色帯と考えられる。

５．明褐色（7.5YR5/8）硬質ローム　　赤褐色スコリヤ（～0.5㎜）、黄白色軽石粒子（～１㎜）を共に多く、青灰色スコリヤ（～0.5㎜）を僅かに含む。黄白色軽石粒は赤城鹿沼軽石（Ag-KP）と考えられる。

６．明褐色（7.5YR5/6）硬質ローム　　赤褐色スコリヤ（～0.5㎜）を僅かに含む。

７．褐色（10YR4/6）硬質ローム　　青灰色スコリヤ（～0.5㎜）を非常に多く、赤褐色スコリヤ（～0.5㎜）を僅かに含む。鎌掛け作業で最も砂質感が強い。青灰色スコリヤは青色不発泡質火山灰（BCVA）と考えられる。

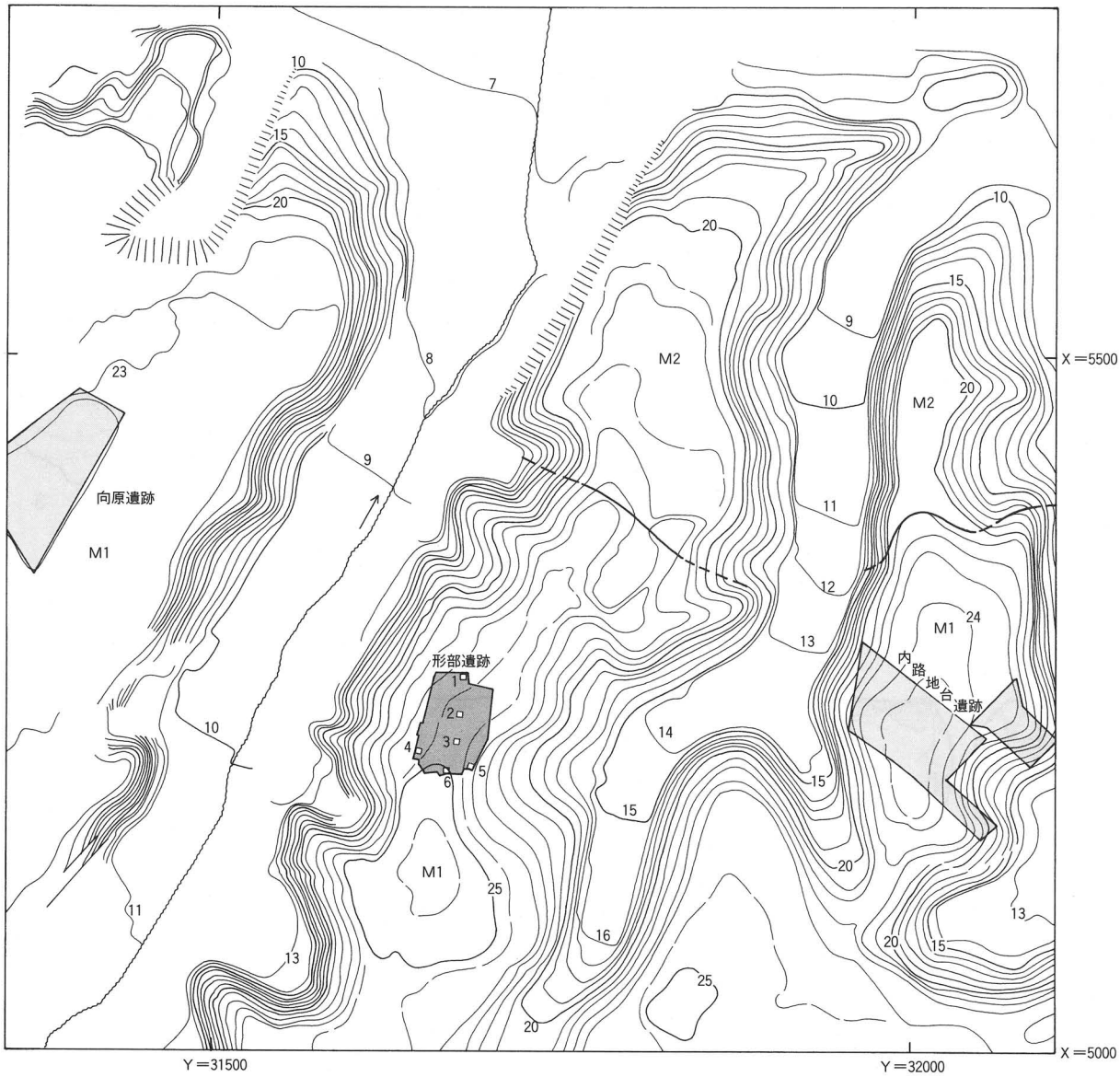
８．褐色（10YR4/6）軟質ローム　　青灰色スコリヤ（～0.5㎜）を７層の半分くらいと、赤褐色スコリヤ（～0.5㎜）を僅かに含む。１層の軟質状態とは異なり、細かなクラックが縦方向に多く生じているため軟質層として認識可能である。

９．褐色（7.5YR4/4）硬質ローム　　黒色スコリヤ（～0.5㎜）を多く含む。７層ほどの硬質感はない。

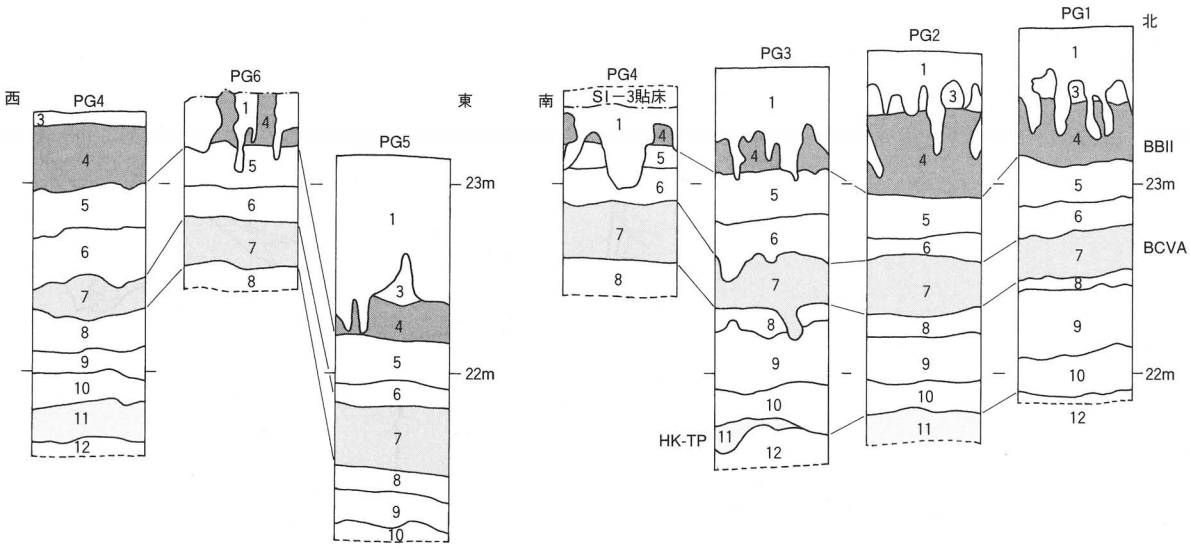
10．褐色（7.5YR4/6）硬質ローム　　褐色スコリヤ（～３㎜）を多く、黒色スコリヤ（～0.5㎜）を僅かに含む。本層以下の粘性が強くなっていく。

11．明褐色（10YR5/8）硬質ローム　　橙色軽石ブロック（～20㎜）を多量に含む。この軽石が箱根東京軽石（Hk-TP）と考えられる。

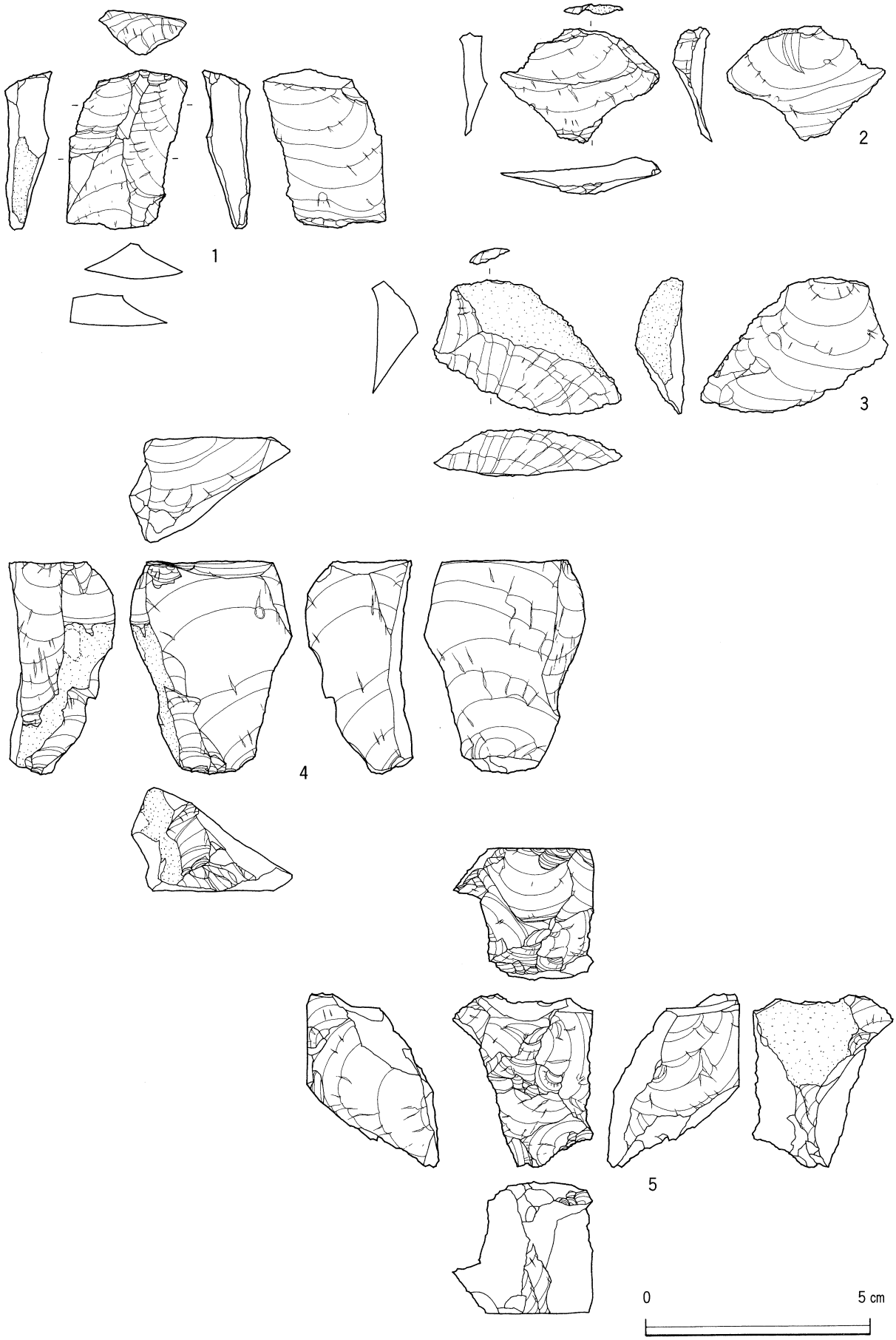
12．橙色（7.5YR6/6）粘土　　橙色軽石粒（～５㎜）を僅かに含む。締まりに欠ける。以下は水成堆積層で、掘削していない。



第５図　花室川右岸の段丘地形と調査地点位置図（Ｓ＝1/5000）



第６図　ローム考古学層序断面図



第７図　形部遺跡検出の旧石器

3．出土した石器（第７図）

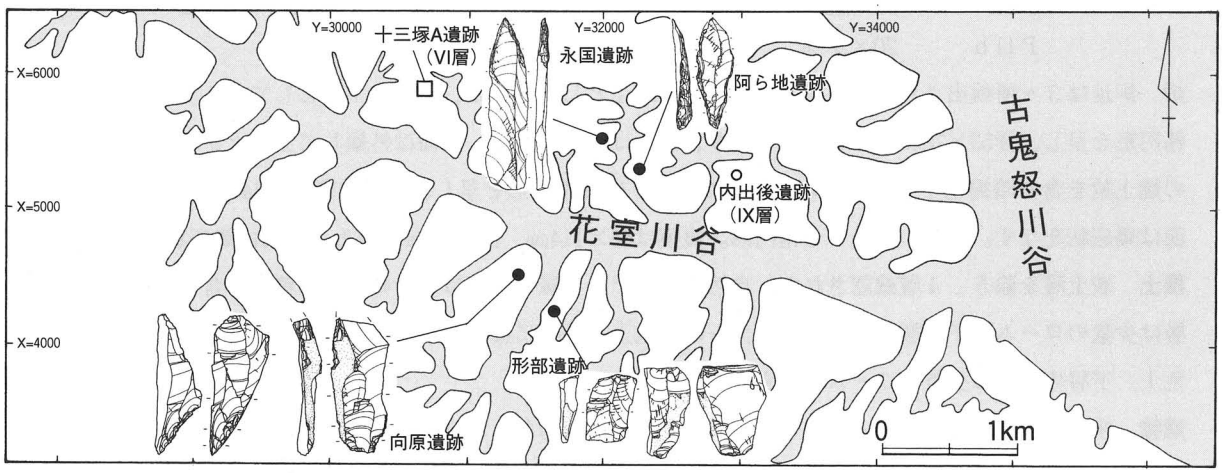
今回検出の旧石器は、本来の包含層であるローム層中からの検出例はなく、後世の遺構中からや表土中からの検出石器資料から抽出した。構成器種は剥片が３点、石核が２点である。以下実測図を提示して、規模計測値と特徴を記す。

剥片　１は縦長剥片である。長さ36.1㎜、幅28.6㎜、厚さ11.1㎜、重量8.7ｇ、打面長10.8㎜、打面幅19.7㎜、剥離角108°、石材種はガラス質黒色安山岩。背面側には腹面と剥離方向が一致する打面側からの剥離面が4面と、180度剥離方向が異なり中央部分で接する剥離面が１面認められ、上下両設打面の石核から剥離されたと考えられる。打面縁辺には剥離作業面端部に対する調整加工を施している。腹面の打点下にはリップが生じリングも横に広がり、軟質ハンマーを使用した直接打撃による剥離であったようだ。２は横長剥片である。長さ25.9㎜、幅35.5㎜、厚さ8.3㎜、重量3.0ｇ、打面長2.7㎜、打面幅13.1㎜、剥離角112°、石材種はガラス質黒色安山岩。背面に残る剥離面は腹面と剥離方向はほぼ一致している。腹面の打面下にはリップが生じている。３は横長剥片である。長さ30.9㎜、幅42.6㎜、厚さ10.5㎜、重量10.0ｇ、打面長2.3㎜、打面幅9.0㎜、剥離角128°、石材種はガラス質黒色安山岩。背面は90度や180度方向が異なる剥離面から構成される。腹面の打面下にはリップが生じている。

石核　４は剥片を転用した石核である。長さ48.6㎜、幅36.9㎜、厚さ23.2㎜、重量32.1ｇ、石材種はトロトロ石。素材は他の剥片よりも長さがあり厚みのある石刃状剥片であったようだ。その剥片剥離時には複剥離面打面（打面長9.6㎜、打面幅17.9㎜、剥離角131°）を使用し、打点下にバルブを生じている様子から、間接具を使用した剥離と考えられる。器体途中で折断して、折断面を打面とした剥離作業を旧石刃状剥片の小口面で行い、２枚の縦長剥片を剥離したことが認められる。５は石核である。長さ38.9㎜、幅31.2㎜、厚さ30.2㎜、重量26.2ｇ、石材種は流紋岩。不定形な剥片が多数剥離されている。

今回検出した遺物の所属時期については、本来の包含層であるローム層内からの検出例ではないことに加えて、成形工程が認められる石器は含まれていないため明確には指摘しにくい。強いて言えば、４の石刃状剥片を素材としながら小規模な石刃剥離に転用した石核の存在から、下総台地の資料と対比してAT降灰期以前の時期が候補として考えられる。

形部遺跡周辺には、AT降灰期以前と考えられる石器が少数ながら分布していることを確認している。多くは硬質頁岩製で縦長剥片素材のナイフ形石器が認められるが、トロトロ石製の資料は、古鬼怒川（現在の桜川）北岸に立地する常名台の弁才天遺跡や田村町の下郷遺跡［平石2000］で検出例が認められる。



第８図　花室川谷沿岸の旧石器時代遺跡分布図（ＡＴ降灰期以前）

第２節　縄文時代

１．概要

今回の形部遺跡における縄文時代の遺構として、住居跡１軒および土坑13基が検出された。調査した住居跡の半分以上は調査区域外に広がっていたものの、長方形を呈し、炉の作りもよく、また出土遺物も豊富で内容のある遺構となった。なお、構築時期は前期後半・浮島式期に比定される。次に土坑からは、破片の縄文土器が出土している。明確に時期が判断できる土坑は、早期中葉・田戸下層式期の土坑２基（第14・15号土坑）と前期後葉・浮島式期の土坑３基（第１・６・12号土坑）である。土坑は群として纏まることなく調査区のほぼ全域に分布している。

２．竪穴住居跡（ＳＩ）

第８号住居跡（ＳＩ－８）（第９～14図、ＰＬ３・15～17）

位置　調査区の西端部、住居跡の約半分は調査区外に広がっており、検出面は東壁辺側のみである。

規模　検出された東壁辺6.67ｍ、確認幅3.24ｍ。

主軸方向　炉址の設置位置が北東側で、北東軸を主軸とするとＮ－36°－Ｗを示す。

壁　東壁確認面からの深さは10～11㎝、ほぼ垂直に立ち上っている。なお、南壁および北壁は撹乱を受けており不明である。

床　確認面はほぼ貼床で、掘形は15～22㎝の深さで掘り込み、ローム粒・褐色土の混合土で貼床を形成している。

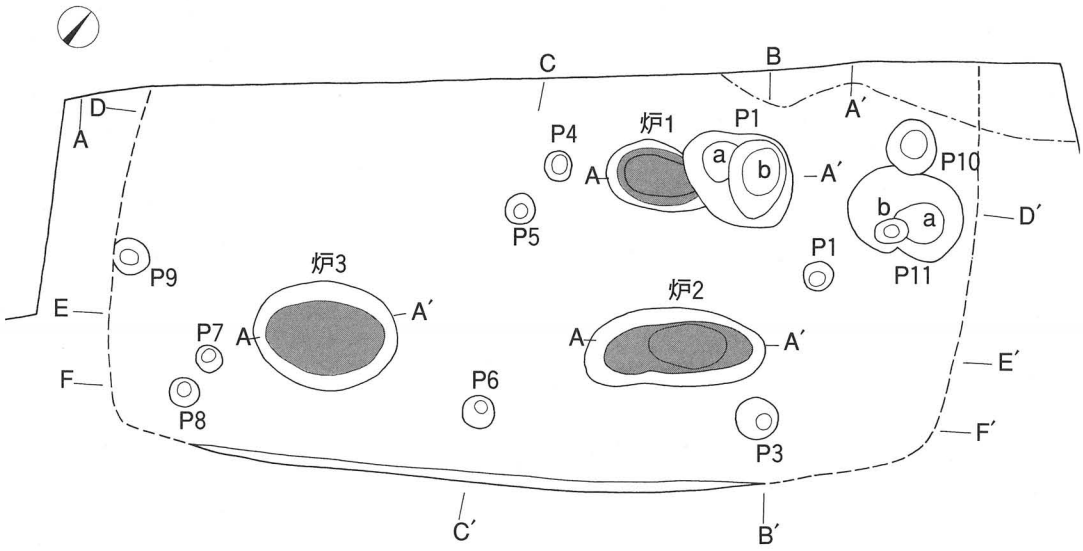
ピット　柱穴は13本検出している。壁際周縁および炉址周囲に位置し、明確な主柱穴を確認できない。しかし、配置から判断するとＰ２・Ｐ３・Ｐ６・Ｐ８・Ｐ９の５本が主柱穴となろう。柱穴の規模は下記のとおりである。

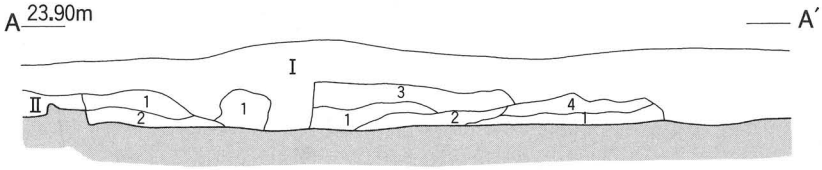
番号	規模	深さ	番号	規模	深さ
Ｐ１ａ	70×94㎝	41㎝	Ｐ１ｂ	45×62㎝	53㎝
Ｐ２	21×24㎝	50㎝	Ｐ３	33×34㎝	31㎝
Ｐ４	21×23㎝	48㎝	Ｐ５	24×26㎝	33㎝
Ｐ６	25×26㎝	36㎝	Ｐ７	21×22㎝	37㎝
Ｐ８	22×24㎝	30㎝	Ｐ９	28×29㎝	40㎝
Ｐ10	39×44㎝	38㎝	Ｐ11ａ	66×81㎝	54㎝
Ｐ11ｂ	20×26㎝	58㎝			

炉　炉址は３ヶ所検出されているが、北側中央炉址１としたものが、本跡の主炉としている。規模・形状は楕円形を呈し、径53×78㎝、深さ８㎝を測り、底面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。覆土は多量の焼土粒を含む暗褐色土である。北東寄りの炉址２は長楕円形を呈し、規模は径61×142㎝、深さ７㎝で底面は鍋底状をなす。南側の炉址３も楕円形。規模は86×114㎝、深さ８㎝を測る。底面は鍋底状を呈する。

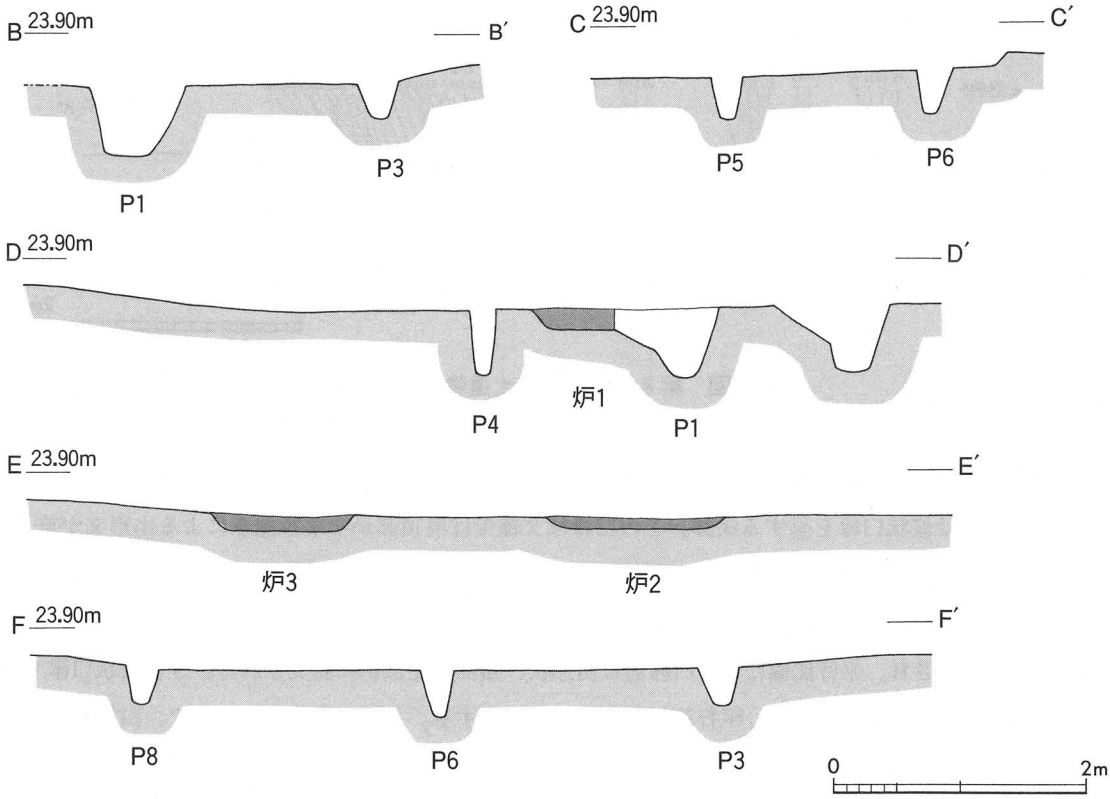
覆土　表土層を除き、４層確認された。自然堆積層で、上層の３層は少量のローム粒子を含む暗褐色土。４層は少量のローム粒子と微量の焼土粒を含む暗褐色土。床面に接する中層１層は少量のローム粒子を含む褐色土。下層の２層は少量のローム粒子を含む暗褐色土。

遺物　検出面が限定されているとはいえ、出土遺物は比較的多く、完形もしくは復元可能な縄文土器はないものの、多量の縄文前期後葉・浮島式土器片のほか、石鏃２点、石鏃未製品２点。剥片４点が検出された。

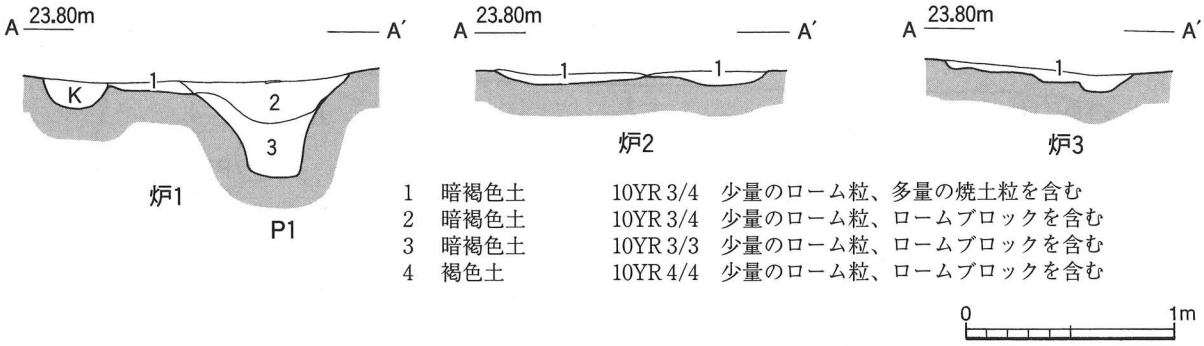




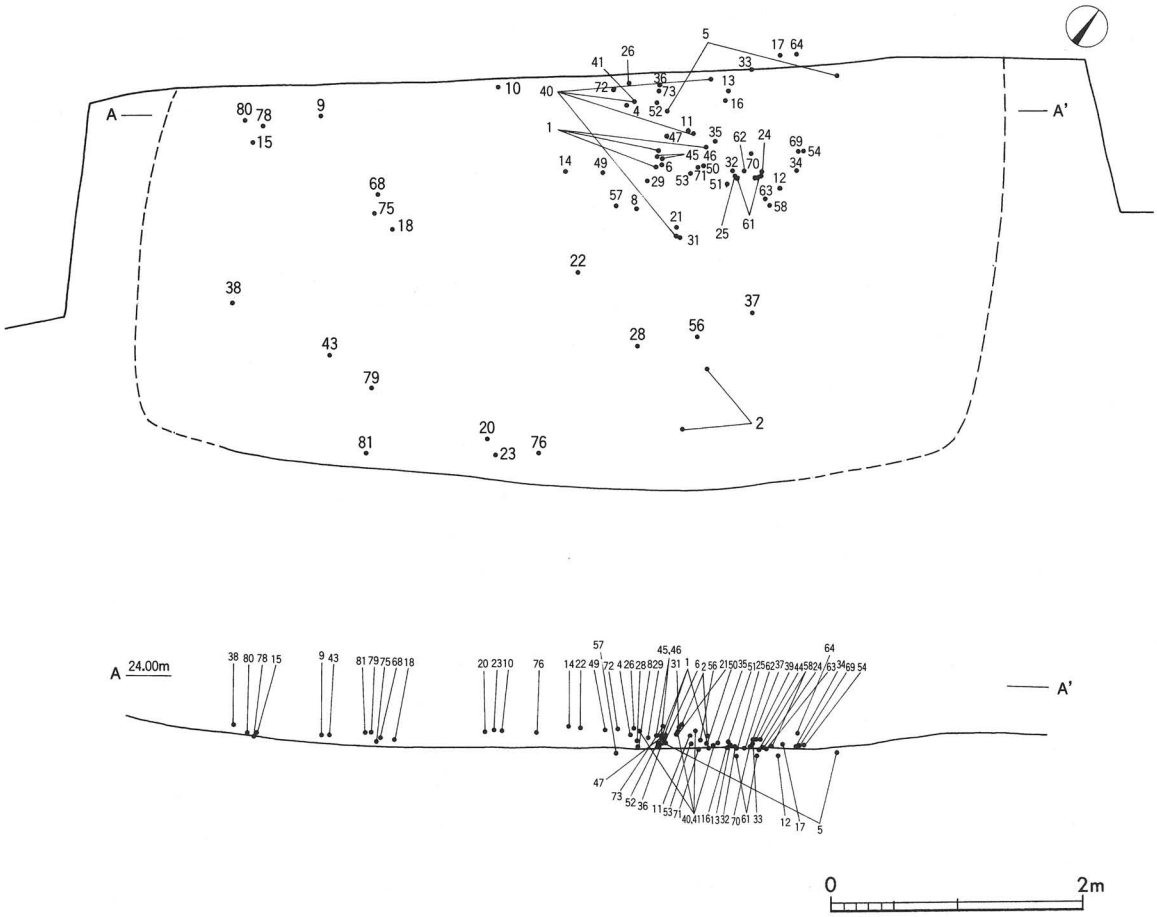
Ⅰ	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	カクラン
Ⅱ	暗褐色土	10YR 3/4	多量のローム粒を含む
1	褐色土	10YR 4/4	少量のローム粒を含む
2	暗褐色土	10YR 3/4	少量のローム粒を含む
3	暗褐色土	10YR 3/3	少量のローム粒を含む
4	暗褐色土	10YR 3/3	少量のローム粒、微量の焼土粒を含む



第９図　第８号住居跡実測図



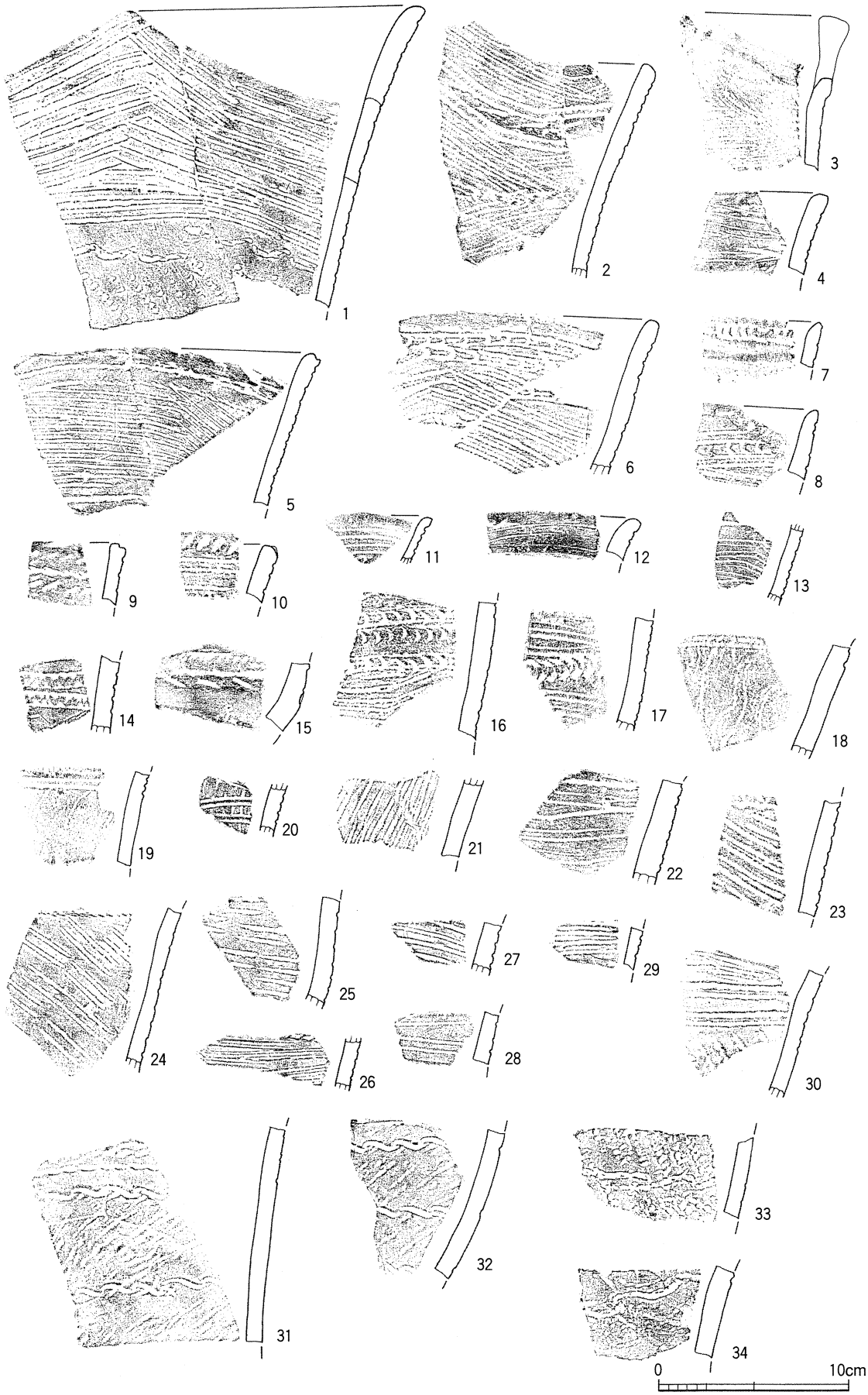
第10図　第８号住居跡炉実測図



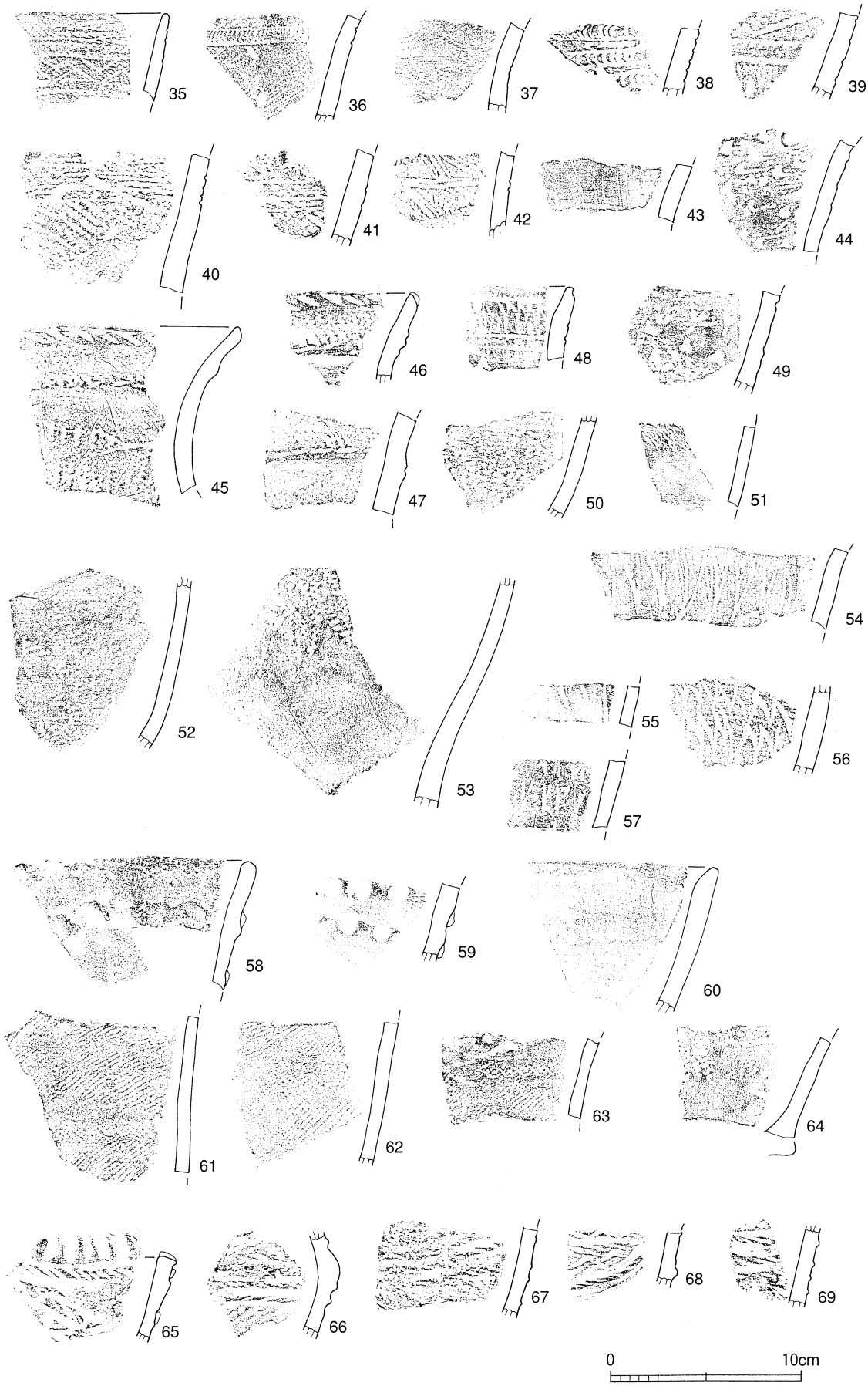
第11図　第８号住居跡出土遺物出土状況図

縄文土器（第12図１～第14図73　ＰＬ15～17）

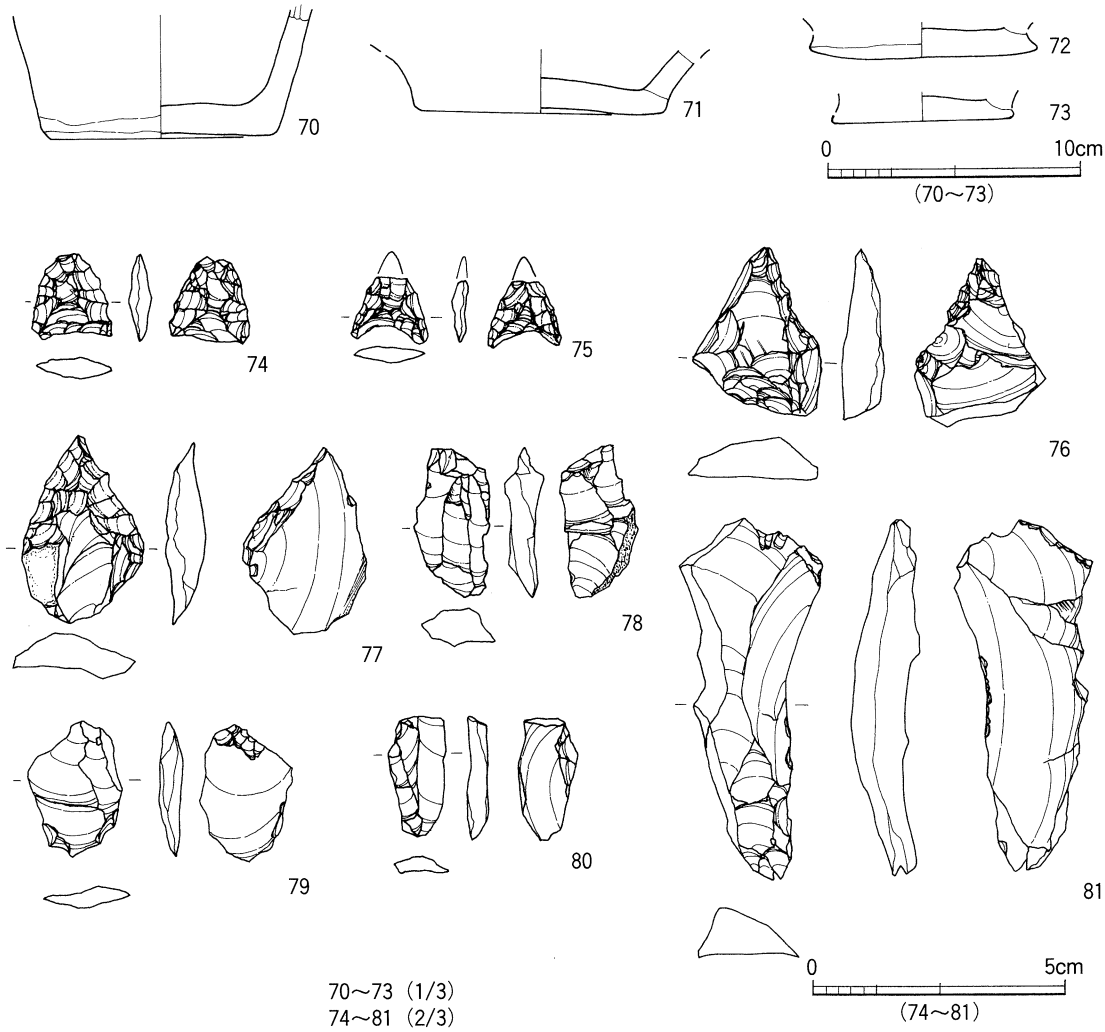
第12図１～３は波状口縁を呈する深鉢。１の口縁部文様帯は波頂部から平行沈線による山形文が施され、胴部には末端結節部と撚糸が施文される。２は口唇部形状が外削状を呈し、区画文として波状口縁に平行して２列の爪形文に挟まれた隆帯が巡り、隆帯上には斜行する短沈線が施文されている。この隆帯によって口縁部と頸部が区画され、平行沈線により口縁部は山形状、頸部は菱形状に施文される。３は波状口縁であるが、波頂部下の口縁部は無文とし、平行沈線文を水平に施文する。４～12は平縁の深鉢で、口縁部破片である。いずれも平行沈線文と爪形文が施文されている。４は浅い平行沈線文に、頸部付近は隆帯文によって区画される。５は口唇部に竹管外側で押圧・横引きによる短沈線を刻み、口縁部上部と頸部に変形爪形文を巡



第12図　第８号住居跡出土遺物（１）



第13図　第８号住居跡出土遺物（２）



第14図　第８号住居跡出土遺物（３）

らし区画文とし、区画内に斜行施文する平行沈線文を充填する。爪形文はやや間隔のあいた施文方法で行われている。６は口縁に平行し２列の爪形文を周回させ区画文とし、区画内に平行沈線文を山形状に充填する。７は口唇部が内削状を呈し、爪形文を巡らす。８は爪形文と平行沈線文。９は口唇部にヘラ状工具による刻目状の短沈線を斜行施文し、口縁部は変形爪形文を巡らす。10は口唇部下に斜行の刻目が施され、口縁部は水平の平行沈線文である。11・12は平行沈線文を施文する。13～30は平行沈線文が施されている深鉢の胴部破片である。13・14・16・17・22・23は爪形文も施文されているが、16を除き変形爪形文である。15は爪形文にヘラ状工具による斜行刺突文が巡る。18～21・36・44は撚糸文を地文とする。18～20は平行沈線文、36は変形爪形文、44は爪形文が施文され、18・19・44は撚糸Ｒ、20・21は撚糸Ｌである。24・25は平行短沈線文が斜行に施文されている。30は平行沈線文に、平行短沈線、さらに２条の有節平行沈線文および胴部に波状貝殻文が施されている。31～34は１と同じように末端結節文と撚糸が施されているもので、31はさらに変形爪形文が施文されている。31・32は撚糸Ｒである。35は口縁部破片。やや内湾気味に立ち上がる。口縁部に平行する２条の変形爪形文を区画文とし、貝殻腹縁文を地文に平行沈線による鋸歯文を区画内に巡らす。37も貝殻腹縁文を地文に平行沈線による連弧文を施す。38は爪形文、39は変形爪形文を施す。40～42は縄文を地文とする。40・41は同一個体である。単節ＲＬを地文に平行沈線文を施す。胎土に比較的大粒の石英粒

を多量に含み、焼成はあまり良くない。42は単節ＲＬを地文に平行沈線によるモチーフが施されている。43は櫛歯状工具による縦位の条線文を垂下させる。45～57は波状貝殻文を主文様とするもので、45～47は同一個体である。口縁部を大きく外反させ、口唇部に斜行する短沈線を施し、口縁部は短沈線が施文された隆帯を区画文に波状貝殻文を充填させ、胴部も波状貝殻文を施文する。48は波状貝殻文を地文に平行沈線文が周回する。58・59は凹凸文土器である。58は口縁部下に指頭状の押圧が加えられ、59はヘラ状の工具によって施文されている。60は無文土器の口縁部破片である。横位の比較的粗いヘラケズリによって整形されている。61～63は同一個体と思われる。結節縄文がみられ、地文は無節Ｌが施文されている。64は深鉢の底部破片。末端結節部と撚糸文が施文される。65～69は浮線文をもつ諸磯ｂ式土器である。65は口縁部破片で、口唇部に明瞭な刻目をもち、縄文浮線文が施されている。66～69も縄文浮線文が施されている。70～73は深鉢の底部破片である。70は縦位の丁寧なヘラナデによって整形されている。71は底面が整形痕の明瞭なヘラケズリ痕を残す。72・73は底部接合部が明瞭である。

石器（第14図74～81　ＰＬ17）

74・75は石鏃である。74はチャート製で先端部が僅かに欠損している。基縁部の抉入部が浅く、側縁部がわずかに丸みをもつ現存長1.68cmの小型鏃である。75は安山岩製で、先端部を欠損している。抉入部は深く、形状はほぼ二等辺三角形を呈する。76・77は石鏃の未製品である。いずれもチャート製で、76は図右側縁部のみ調整剥離を施している。77は両側縁部に調整剥離が施されているが、基部が未調整のまま残置されている。78～81は剥片である。いずれもチャート製である。

石器計測表　　（単位；cm）

挿図番号	遺物番号	器　種	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
第１４図	74	石　鏃	チャート	(1.68)	1.58	0.41	1.12	先端部欠損
第１４図	75	石　鏃	安 山 岩	(1.29)	1.45	0.29	0.48	先端部欠損
第１４図	76	石鏃未製品	チャート	3.38	2.62	0.89	6.92	
第１４図	77	石鏃未製品	チャート	3.76	2.47	0.76	5.32	
第１４図	78	剥　片	チャート	3.12	1.43	0.65	2.58	
第１４図	79	剥　片	チャート	2.79	1.92	0.41	1.66	
第１４図	80	剥　片	チャート	2.41	1.10	0.31	0.94	
第１４図	81	剥　片	チャート	7.14	2.66	0.96	16.10	

所見　当住居跡は、出土遺物の様相から縄文時代前期後半・浮島Ｉb式期に営まれたものと推定される。

３．土坑（ＳＫ）

縄文時代に属すると推定される土坑は全部で13基検出した。形状は円形を主体とする楕円形もので、縄文早期中葉および前期後葉であるが、とくに前期後葉段階における土坑は墓壙として確認されるものが各地で多く報告されている。しかし、本遺跡における土坑がいわゆる墓として構築されたものか出土遺物の少なさから判断できなかった。

第２号土坑（ＳＫ－２）（第71図　ＰＬ11）

位置　調査区北端に位置する。第２号溝によって切られている。

規模と平面形　長軸1.10m・短軸0.83mの不正楕円形を呈する。確認面からの深さは42cmである。

長軸方向　N－1°－E。

壁面　外傾しながら立ち上がる。

底面　ほぼ平坦であるが、やや浅い鍋底状を呈する。

覆土　暗褐色土(10YR3/4)の単一層で締りがあり、粘性にとむ。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

第３号土坑（ＳＫ－３）（第71図　ＰＬ11）

位置　調査区北側、第４号土坑の北側に接して位置する。

規模と平面形　長軸0.60m・短軸0.58m、円形を呈する。確認面からの深さは５cmである。

長軸方向　N－43°－E。

壁面　外傾しながら立ち上がる。

底面　ほぼ平坦である。

覆土　暗褐色土(10YR3/3)の単一層で、ローム粒を少量含み、締りがあり、粘性にとむ。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

第４号土坑（ＳＫ－４）（第71図　ＰＬ11）

位置　調査区北部、第３号土坑の南側に接して位置する。

規模と平面形　長軸0.62m・短軸0.58mの円形を呈する。確認面からの深さは４cmである。

長軸方向　N－69°－W。

壁面　壁面は明瞭ではなく、緩やかに外傾する。

底面　平坦面はなく、浅い鍋底状を呈する。

覆土　暗褐色土(10YR3/3)の単一層で、ローム粒を少量含み、締りがあり、粘性にとむ。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

第６号土坑（ＳＫ－６）（第71・74図　ＰＬ11・39）

位置　調査区東部、第３号風倒木痕の北側に位置する。

規模と平面形　長軸0.65m・短軸0.58mの円形を呈する。確認面からの深さは12cmである。

長軸方向　N－10°－E。

壁面　垂直気味に外傾して立ち上がる。

底面　平坦面は少なく、起伏にとむ。

覆土　暗褐色土(10YR3/4)の単一層で、少量のローム粒子を含む、締まりがあり、粘性にとむ。

遺物　縄文時代前期後葉・浮島式土器が出土している。図示したのは第74図５の有孔浅鉢である。口径9.8cm、現存器高6.3cmを測る。無文土器で、口縁部直下に円孔列が穿たれている。

所見　縄文時代前期後葉。

第７号土坑（ＳＫ－７）（第71図　ＰＬ11）

位置　調査区東部、第３号風倒木痕の南側に位置する。

規模と平面形　長軸1.05m・短軸0.83mの楕円形を呈する。確認面からの深さは24cmである。

長軸方向　Ｎ－70°－Ｗ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　平坦面は少なく、起伏にとむ。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているが１層少量のローム粒を含む暗褐色土(10YR3/4)、壁際に堆積しているのが２層褐色土(10YR4/6)で多量のローム粒を含む。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

第８号土坑（ＳＫ－８）（第72図　ＰＬ12）

位置　調査区南東端部に位置する。

規模と平面形　長軸1.42m・短軸1.30m楕円形を呈する。確認面からの深さは12cmである。

長軸方向　Ｎ－１°－Ｗ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　検出面ではほぼ平坦である。

覆土　褐色土(10YR4/6)の単一層で、多量のローム粒子を含み、締まりがある。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

第９号土坑（ＳＫ－９）（第72図　ＰＬ12）

位置　調査区南部に位置する。

規模と平面形　長軸1.13m・短軸0.81mの楕円形を呈する。確認面からの深さは23cmである。

長軸方向　Ｎ－83°－Ｗ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　平坦面は少なく、起伏にとむ。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているが１層少量のローム粒を含む褐色土(10YR4/4)、壁際に堆積しているのが２層褐色土(10YR4/6)で多量のローム粒を含む。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

第10号土坑（ＳＫ－10）（第72図　ＰＬ12）

位置　調査区中央部、第６号住居跡の東側に接している。

規模と平面形　長軸1.32m・短軸0.91mの楕円形を呈する。確認面からの深さは16cmである。

長軸方向　Ｎ－70°－Ｗ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　検出面ではほぼ平坦である。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているが１層少量のローム粒を含む暗褐色土(10YR3/4)、壁際に堆積しているのが２層褐色土(10YR4/6)で多量のローム粒を含む。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

第12号土坑（ＳＫ－12）（第72・74図　ＰＬ12・39）

位置　調査区西部、第６号住居跡の北側に接している。

規模と平面形　長軸0.81ｍ・短軸0.77ｍの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは16㎝である。

長軸方向　Ｎ－45°－Ｗ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　検出面では鍋底状を呈する。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているが２層少量のローム粒を含む暗褐色土(10YR3/3)、壁際に堆積しているのが１層暗褐色土(10YR3/4)で多量のローム粒を含む。

遺物　縄文時代前期後葉・浮島式土器が出土している。第74図９～14を図示した。９は口縁部破片で、多段の爪形文間に斜行する短沈線文を施文する。10は波状口縁を呈する深鉢、平行沈線による山形文を施文する。11・12ともに平行沈線の横施文。13は平行短沈線を斜行施文する。14は撚糸文を地文とする。浮島Ｉ式土器。

所見　縄文時代前期後葉。

第13号土坑（ＳＫ－13）（第72図）

位置　調査区西部、第７号住居跡の北側に接している。

規模と平面形　長軸0.62ｍ・短軸0.61ｍの円形を呈する。確認面からの深さは９㎝である。

長軸方向　Ｎ－40°－Ｅ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　検出面では平坦面は少なく、鍋底状を呈している。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているが２層少量のローム粒を含む暗褐色土(10YR4/6)、床面に接して堆積しているのが１層黄褐色土(10YR4/6)で多量のローム粒を含む。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

第14号土坑（ＳＫ－14）（第73図　ＰＬ12）

位置　調査区西部、第７号住居跡の南側に接している。

規模と平面形　長軸0.79ｍ・短軸0.69ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは12㎝である。

長軸方向　Ｎ－11°－Ｅ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　検出面ではほぼ平坦である。

覆土　褐色土(10YR3/1)の単一層で、多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。

遺物　縄文早期中葉・田戸下層式土器。図示した第74図15は胴部破片で、縦位の太沈線を施文する。

所見　縄文時代早期中葉・田戸下層式期。

第15号土坑（ＳＫ－15）（第73・74図　ＰＬ12・39）

位置　調査区南部、第５号住居跡の東側に接している。

規模と平面形　長軸2.20m・短軸1.59mの楕円形を呈する。確認面からの深さは52cmである。二段掘りで、西側が浅くなっている。

長軸方向　Ｎ－25°－Ｗ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　検出面では平坦面はなく、鍋底状を呈する。

覆土　３層に分層できる。覆土の上面を覆っているが１層多量のローム粒を含む褐色土(10YR4/4)、壁際を覆っているが２層多量のローム粒を含む黄褐色土(10YR5/6)、床面に接して堆積しているのが３層褐色土(10YR4/6)で多量のローム粒を含む。

遺物　縄文早期中葉・田戸下層式土器。図示したのは第74図16・17で、同一個体である。口縁部破片で、口唇部が外削状を呈し、縦位の太沈線文に半肉状に器面を盛り上げる刺突文を施文する。

所見　縄文時代早期中葉・田戸下層式期。

第16号土坑（ＳＫ－16）（第73図　ＰＬ13）

位置　調査区北部、第10号住居跡の西側に接している。

規模と平面形　長軸0.71m・短軸0.49mの楕円形を呈する。確認面からの深さは14cmである。

長軸方向　Ｎ－49°－Ｗ。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　検出面ではほぼ平坦である。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているが１層多量のローム粒・ロームブロックと少量の焼土粒を含む黄褐色土(10YR5/8)、２層褐色土(10YR4/6)で多量のローム粒・ロームブロックを含み、多量の焼土粒を含む。

遺物　図示していないが、縄文時代前期後葉・浮島式土器の小片が出土している。

所見　縄文時代前期後葉。

4．遺構外の出土遺物

縄文時代の遺構である住居跡および土坑出土以外の遺物をまとめる。大半は古墳時代の住居跡より出土したもので、時期は早期前半撚糸文系土器から中期加曽利Ｅ式期の土器群のほか、石鏃や磨石類等の石器も検出された。

1．縄文土器

a）早期の土器（第15図１～60　ＰＬ18）

１～３は早期前半・撚糸文系土器である。いずれも胴部破片で、１・２は撚糸Ｌ、３は撚糸Ｒが施文されている。稲荷台式土器である。

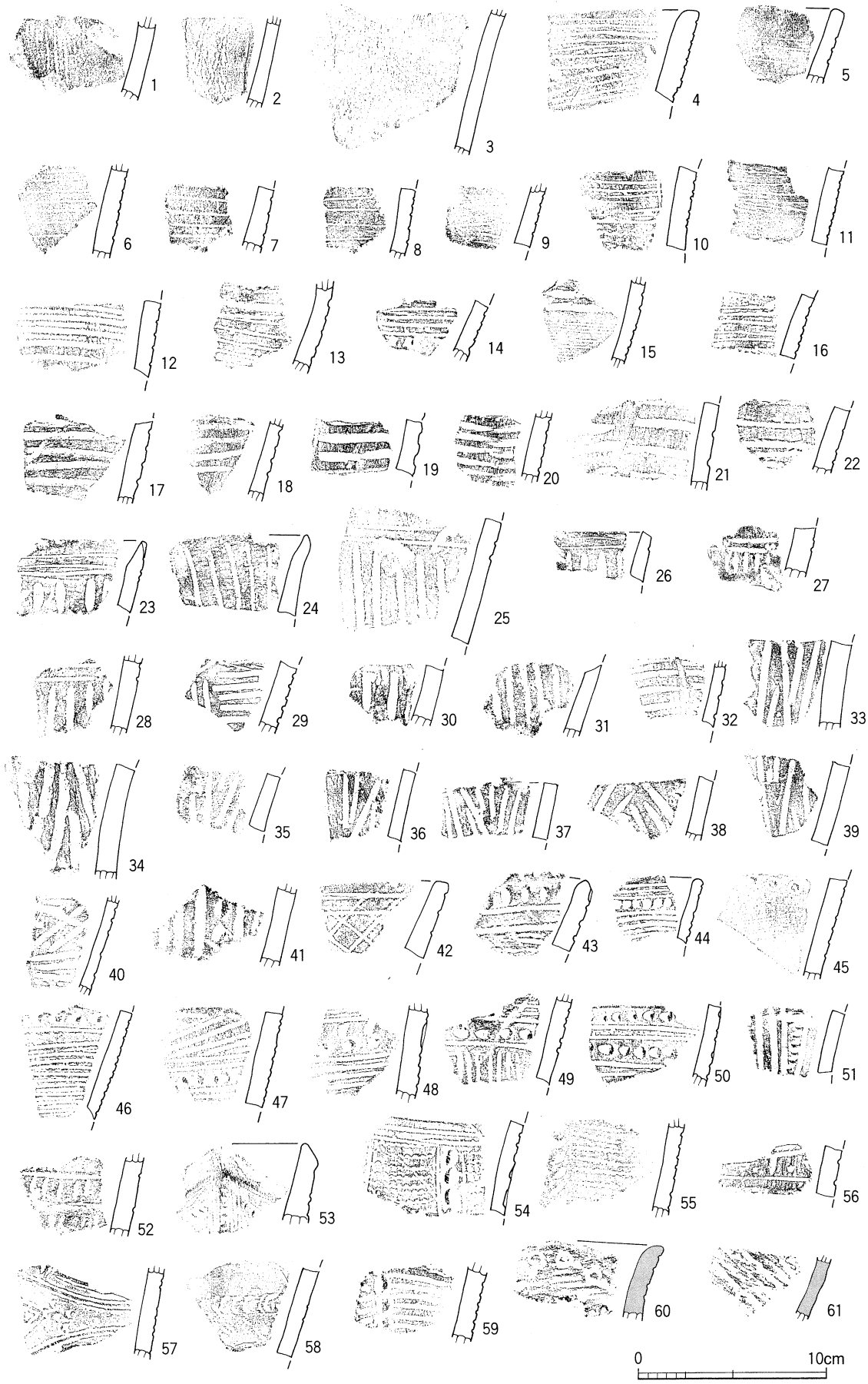
４～59は中葉・沈線文系土器である。４・５は口縁部破片で、口唇部はいずれも角頭状を呈する。４は細沈線文にアナダラ属の貝殻復縁文が併施文されている。10・16も同じように細沈線文と貝殻復縁文が施されている。５～９・11は細沈線が横位方向のみ施文されている。12・22は太沈線と細沈線の中間の沈線文が施文されている。13・15は横方向施文の細沈線文と太沈線文を併施文されている。14は細沈線と刺突文の併せ施文されている。17～21は太沈線文を横施文している。なお、21は間欠状に施されている。23は口縁部破片で、口唇部が先細りの丸頭状を呈し、口縁部に平行して平行細沈線を巡らし、下位に縦位の太沈線文を垂下させる。24も口縁部破片。口唇部が先細りの丸頭状で、太沈線文を口唇部直下から施文する。26の口唇部は角頭状を呈し、口縁部に平行して平行細沈線文を周回させ、下位に縦位の太沈線文を垂下させる。25・28は胴部破片であるが、横方向の細沈線文に縦位の太沈線文を併せ施文し、27・29は横施文と縦施文の工具が同じ幅をもつ。30は縦位の太沈線文に直交するように細沈線文が施文される。31は縦方向の太沈線文施文。32は横太沈線文に縦位の太沈線文で縦分割する。35～41は縦方向の太沈線区画文に、縦位もしくは斜位の太い短沈線文を併せ施文する。41は縦位の太沈線文に刺突文を垂下させる。42は口縁部破片で、口唇部の形状は角頭状を呈し、細沈線による格子目文の施文後、横位の平行沈線文を施す。43も口縁部破片。口唇部下に縦位の短沈線文を巡らし、横位の沈線文で区画する。44・46～50・59は沈線文間に刺突文を施文する。44は口縁部破片で、口唇部は角頭状を呈する。49は横位と縦位の沈線文を施す。45は細沈線文に円形竹管文を施文する。51・52は沈線文間に短沈線文を施文する。53は波状口縁の波頂部の破片。口唇部は外削状を呈し、波頂部から隆帯を垂下させる。幅狭の口縁部文様帯が形成され、文様帯に縦位の細沈線文を刻み、胴部は細沈線文による区画文で、隆帯上および区画内に刺突文を施す。54・55はアナダラ属の貝殻復縁文が施文されているもので、54は横沈線文に縦位沈線文を区画文とし、幅狭区画内に刺突文、幅広の区画内に貝殻復縁文を充填する。55は貝殻復縁文に刺突文が併せ施文される。56・57は平行沈線文を区画文に区画内に刺突文を施す。58は円形竹管状工具による爪形文を施文する。

60は早期後半・条痕文系土器である。口縁部破片で、表裏面ともに条痕を地文に施文し、口縁部に沿って円形竹管文を施す。胎土に繊維を含む。

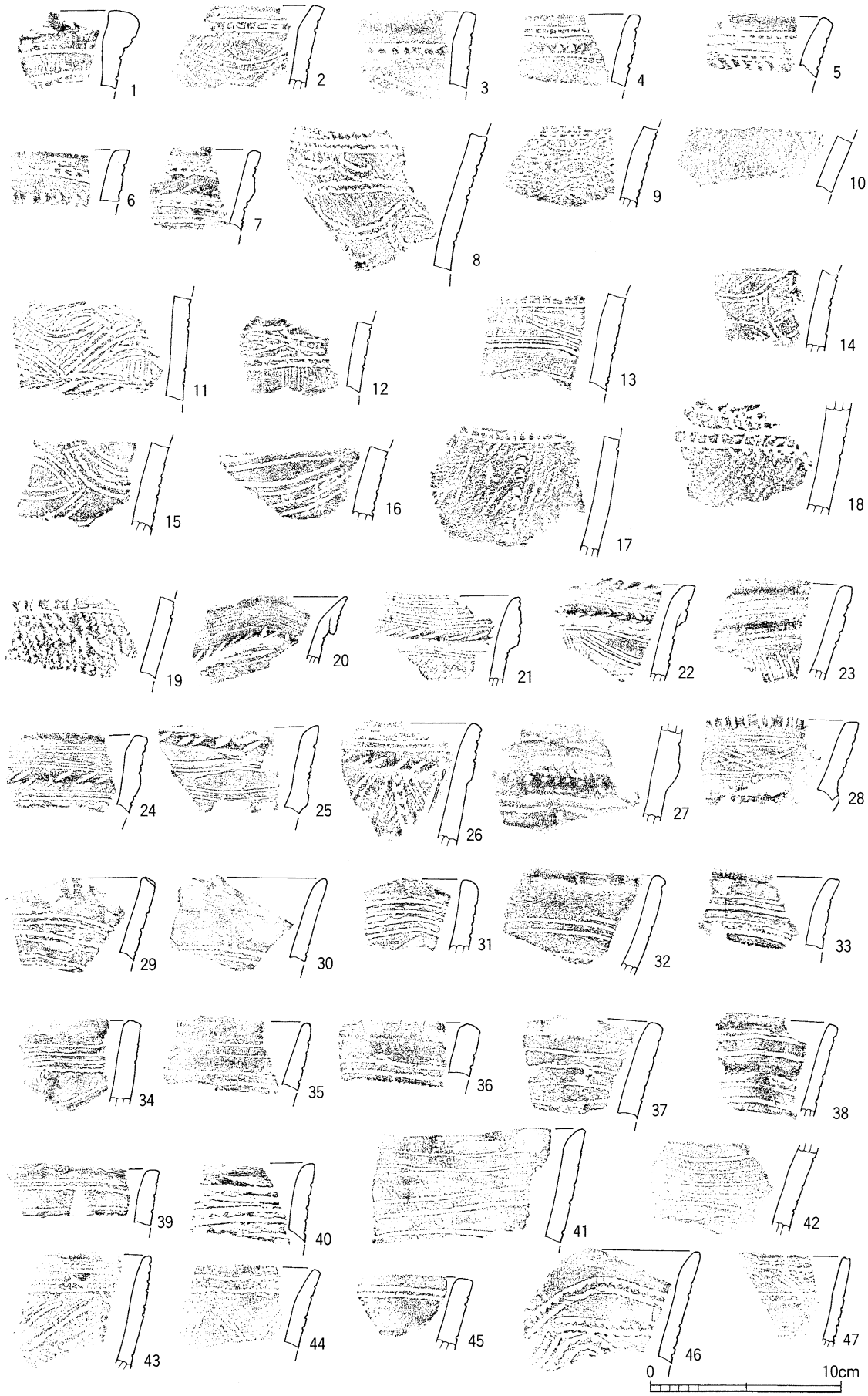
b）前期の土器（第15図61、第16～21図１～13、24～26　ＰＬ18～24）

第15図61は前期中葉・黒浜式土器の胴部破片。縄文施文され、胎土に多量の繊維を含む。

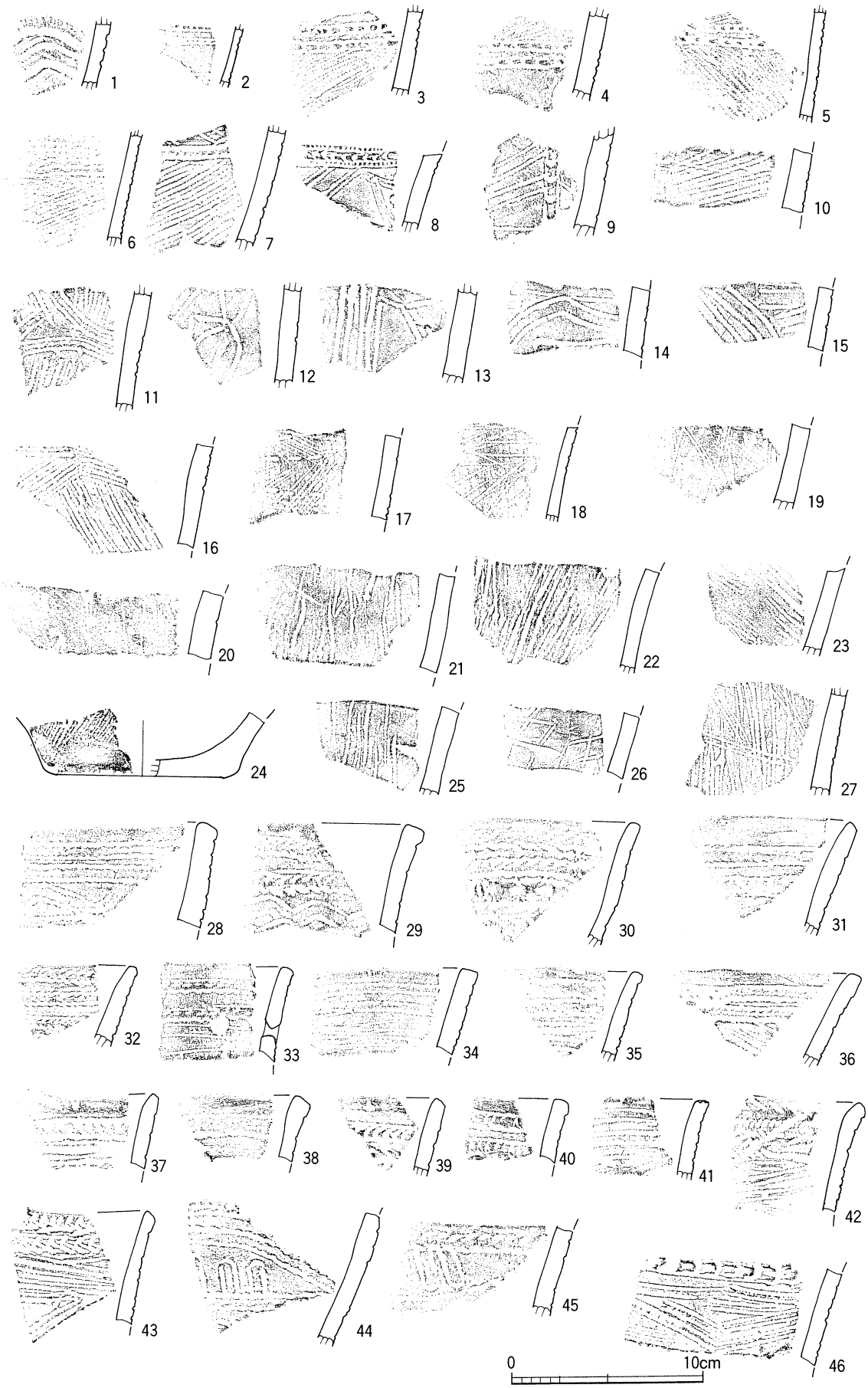
第16～21図は前期後葉・浮島式土器を一括する。第16図１～19・43～47は爪形文を施文するもので１～７は口縁部破片である。１は小突起を有する波状口縁の深鉢。波頂部は肥厚し、爪形文を巡らす。２・４は地文に撚糸文を施文する。７は斜行する短沈線が施文された隆帯を伴う。８は撚糸文を地文に変形爪形文による連弧文、入組弧線文が施文される。９は撚糸文を地文に平行沈線文による木葉文と爪形文が区画文とされる。10は貝殻復縁文を地文に平行沈線による弧線文が描かれる。11・12・14～16も撚糸文を地文に平行沈線



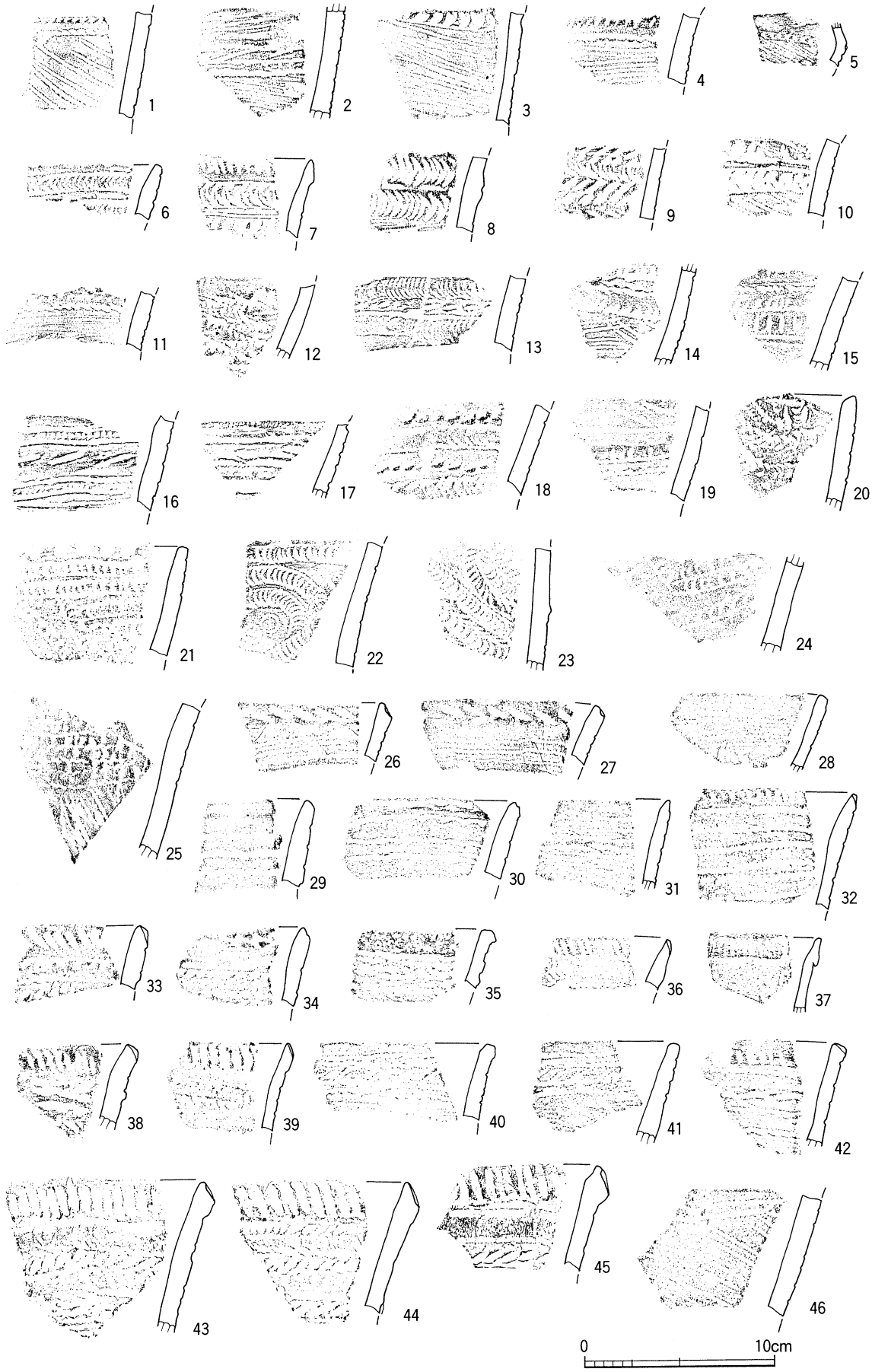
第15図　遺構外出土縄文土器（1）



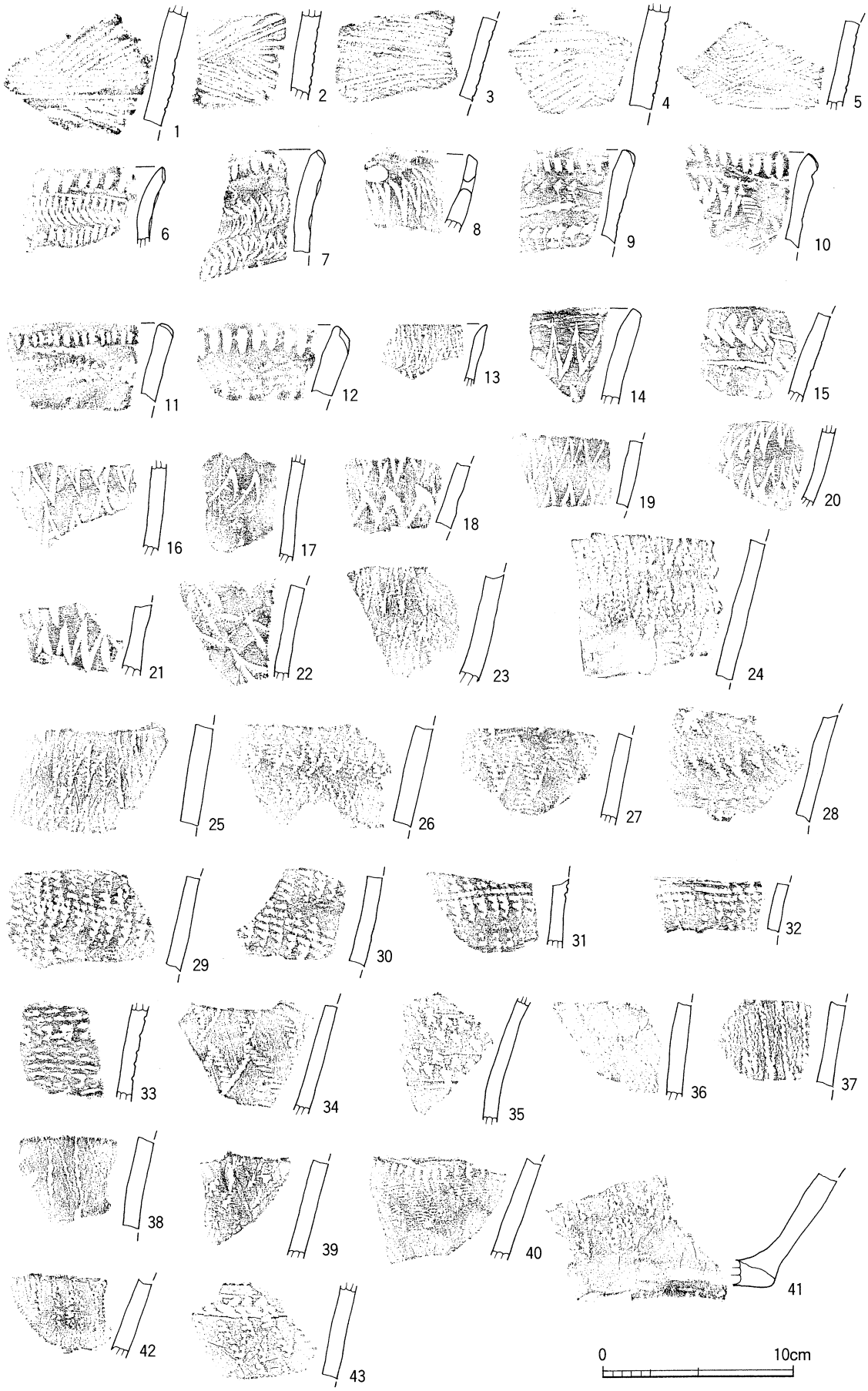
第16図　遺構外出土縄文土器（２）



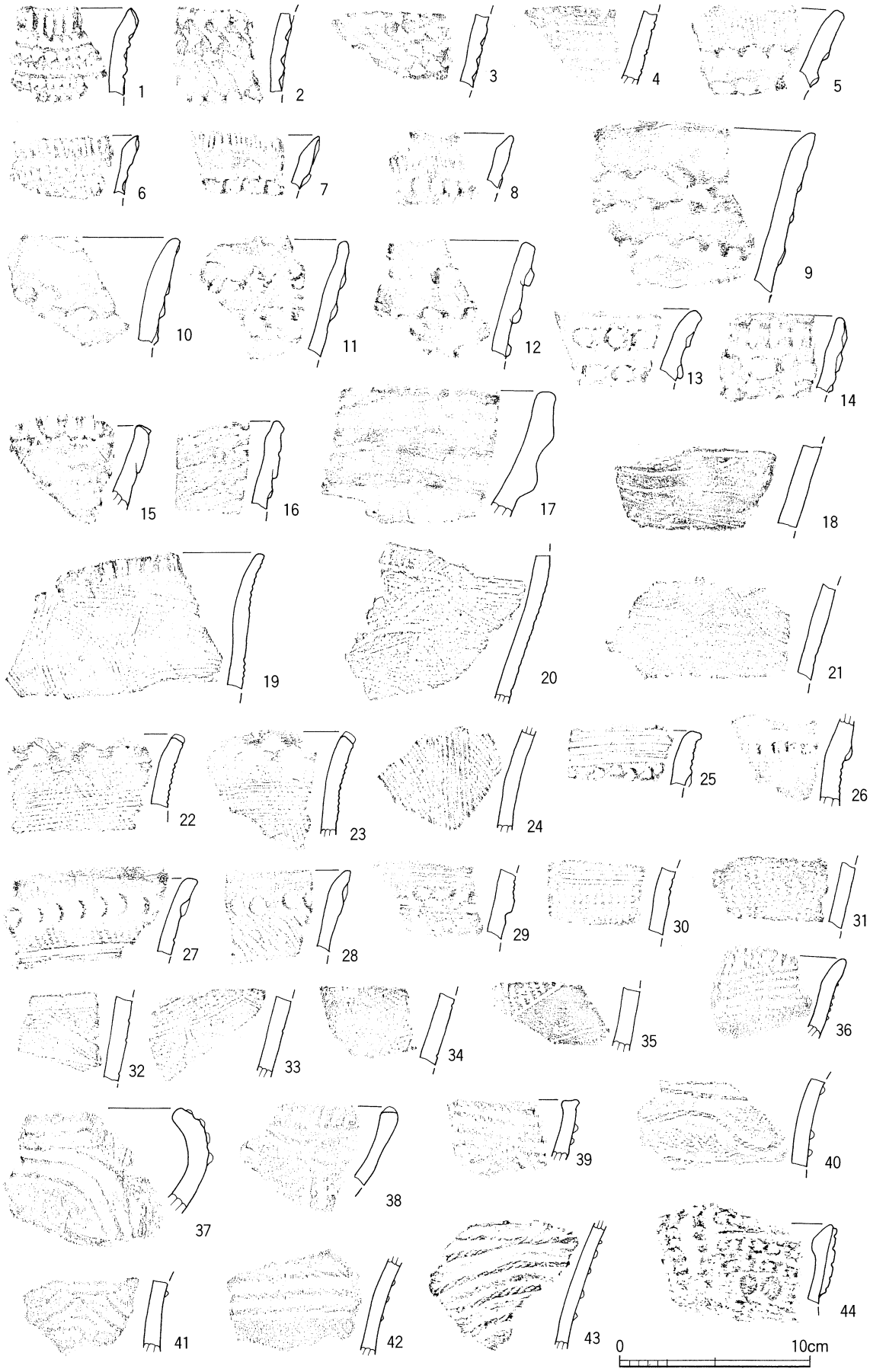
第17図　遺構外出土縄文土器（3）



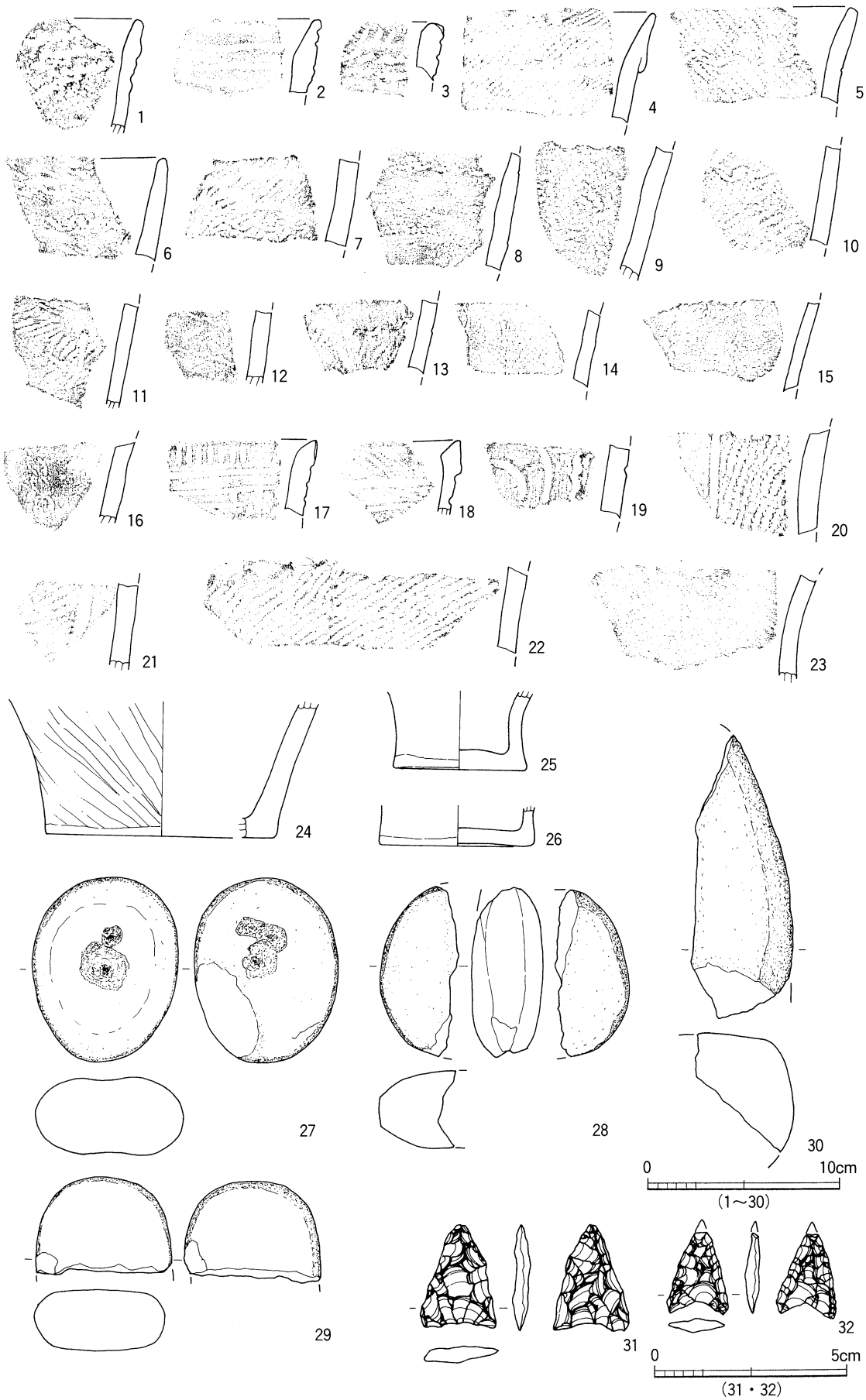
第18図　遺構外出土縄文土器（4）



第19図　遺構外出土縄文土器（５）



第20図　遺構外出土縄文土器（6）



第21図　遺構外出土縄文土器（７）及び石製品

による木葉文、入組弧線文、連弧文が施されている。13は撚糸文を地文に爪形文と平行沈線文が施文されている。17は撚糸文を地文とし、爪形文を区画文に刺突文を垂下させる。18・19は縄文地文に爪形文が施文される。43は爪形文に平行沈線による矢羽根状に施文する。44は変形爪形文が山形状に施される。46は弧線状に施文され、47は変形爪形文が区画文となり、区画内に斜行短沈線が充填する。20～22は輪積折返し口縁を有するもので、口縁部に平行沈線文を巡らし、口縁部下端に斜行する短沈線文や爪形文を施す。23～27は隆帯を区画文として施文する。隆帯上には斜行する短沈線を施すものがある。なお、26は平行沈線文と爪形文を垂下させる。28は口縁部破片で、口唇部に刻目が施され、平行沈線による区画文と区画内に山形文が充填する。29～42は平行沈線文が施文されている。30・31は波状口縁を呈する。40は施文が深い平行沈線文であるが、押引き状に施されている。

第17図１～3・７～10は爪形文が施文されるもので、１は変形爪形文が弧線状に施され、２は鉢形土器で、口縁部に沿って２列の爪形文が周回する。３・７～10・16は平行沈線文が施文される。９・10は肋骨文である。4～６は平行沈線文に有節平行沈線文が併施文される。11～15・17～20は平行沈線文によるモチーフが描出される。21～27は地文に撚糸文が施文されているもので、24は底部破片。27は撚糸文を地文に平行沈線文が併せ施文される。28～38・41～45は変形爪形文が施文されたもので、28は変形爪形文による横波状文が施され、29は同じように平行沈線による波状文が横走する。31・33～36・41～43は平行沈線文を併せ施文される。44・45は変形爪形文によるモチーフが表出される。39・40・46は爪形文が施文され、46は平行沈線による菱形文が描出される。

第18図１～45は爪形文および変形爪形文が施文されている。１～４・11・14は変形爪形文に斜行する平行沈線文が併せ施文される。５は赤彩が施されている浅鉢の小破片。口縁部に赤彩が施され、頸部に爪形文によって区画され、胴部は斜行する平行沈線文が施される。６は爪形文が施文された口縁部破片。７～10は幅広い変形爪形文が施されている。12は変形爪形文を重層させる。13・15・16～19は爪形文を区画文とするもので、13・17は横位の短沈線を充填させ、15は縦位の短沈線文。16・18は斜行短沈線文を充填させる。19は隆帯上に縦位の刻目を施す。20～25はやや幅広の爪形文による円形、幾何学文が描出される。26～36・38～45は変形爪形文が施文されるもので、26・27・30・32～34・36・38・39・42～45は口唇部に短沈線文が刻まれ、また35は小円形竹管文が施文される。31は平行沈線文が併施文され、43～45は同一個体で、変形爪形文間に斜行の刻目が施される。40・41も同一個体でやはり変形爪形文間に斜位の短沈線文が施される。46は平行沈線文が斜行する。37は折返し口縁を有するもので、口縁部に条線状の密集する縦位の短沈線が充填する。胴部は結節縄文が垂下する。

第19図１～５は平行沈線文による矢羽根状、山形状に施文する。６～32・34～43は波状貝殻文が施文されている。６～14までは口縁部破片である。その中で６・７・９～12は口縁部上端にヘラ状工具による縦位の短沈線を刻む。施文具の背が円形をもつもの(６・７・10・12)と平坦のもの(９)、籤状に比較的細いもの(11)がみられる。また８は口唇部に短沈線の刺突文が施されている。なお口縁部直下に補修孔がみられる。８・13は口唇部が丸頭状を呈する。

第20図１～４は三角文が施されたもので、いわゆる横位ロッキング手法により施文される。１は口縁部破片で、口縁部上端は縦位の短沈線を刻む。５～８は口縁部上端に縦位の沈線文を刻むように密に施文する。６の口縁部は爪形文を横走させる。他はいずれも凹凸文帯が施文される。９～16は凹凸文帯が施され、15の口唇部には竹管状工具の押圧による刻みが巡る。17は口縁部破片で、断面三角形の隆帯が施文されている。18は無文土器で、横位のヘラ状工具によるナデ整形。19～24櫛歯条線文が施されたもので、19～21は同一個

体であろう。７本単位の櫛歯状工具による弧線文を描出するもので、19の口縁部破片では口縁部上端は半截竹管工具による縦位の刻目が巡る。22・23は口唇部に竹管状工具の押圧により、小波状口縁を作出している。口縁部は７本単位の櫛歯状工具による山形文に横区画文を併施文する。これら櫛歯条線文は興津Ⅱ式式であるが、24の集合条線文が幾何学的に表出されたものは諸磯ｃ式である。25は口縁部破片で、平行沈線と刺突文が併施文される。26は横位の櫛歯条線文に刺突文による凹凸文が巡る。27は貝殻復縁文を地文に櫛歯状刺突文が施される。28は口縁部上端に縦位の短条線帯をもち、竹管状押圧痕を巡らす、さらに波状貝殻文を施文する。29も同様に押圧痕に波状貝殻文を施す。30は貝殻復縁文、31は波状貝殻文を施文する。32～35は磨消貝殻文の土器で、地文の貝殻復縁文に細い沈線文による幾何学状モチーフを描出させ、区画内を磨消す。興津Ⅱ式。36～43は縄文施文の浮線文が施された諸磯ｂ式。44は条線文を地文に刺突文が施された棒状浮線文とボタン状貼付け文を配する。諸磯ｃ式。第21図１～３は縄文施文の土器で、いわゆる粟島台式土器である。４は折返し口縁を有する土器で、口縁部上から無節Ｒを縦位施文する。５～13は結節縄文がみられる土器で、３～13は横位に施されている。24～26は前期後半の深鉢底部破片。

ｃ）中期の土器（第21図14～23　ＰＬ24）

第21図14～16は結節縄文がみられる土器で、縦位に施されている。17は口縁部に縦位の短沈線を施し、沈線区画内に交互刺突文を施文する。五領ケ台式。18は口唇部が肥厚し、平行沈線文が施される。地文に単節ＬＲが施文されている。五領ケ台式土器。19は縦位の条線文を地文に単沈線による渦巻文と蛇行懸垂文を垂下させる。20・21は縄文地文に幅広の磨消懸垂文を垂下させる。加曽利Ｅ２式。22・23は縄文施文の加曽利Ｅ式土器。

ｄ）石器（第21図27～32　ＰＬ24）

27～29は磨石である。27は砂岩製で、図面裏面の一部を欠損する。長さ9.75cm、幅7.65cm、厚さ3.96cm、重さ449ｇを測る。表裏両面に敲打痕である皿状の凹部を有し、側面には擦痕が明瞭に残されている。28は約１/３を残存するのみである。安山岩製で、現存長9.03cm、幅3.91cm、厚さ3.83cm、重さ152ｇを測る。凹部は不明であるが、全面磨耗痕が認められる。29は約１/２を残存する。安山岩製で、現存長4.83cm、幅7.11cm、厚さ3.67cm、重さ192ｇを測る。やはり凹部は不明であるが、全面磨耗痕が認められる。30は石皿である。縁辺部の破片で、安山岩製である。現存長15.03cm、幅5.16cm、厚さ5.03cm、重さ301ｇを測る。現存面全体に整形痕・研磨痕が残存している。31・32は石鏃である。31は完存品で、チャート製である。長さ2.70cm、幅2.03cm、厚さ1.39cm、重さ2.06ｇを測る。基部の抉入部は浅く、側縁部は二等辺三角形を呈する。表裏両面とも調整剥離が施されている。32は流紋岩製で、先端部を欠損している。現存長2.16cm、幅1.51cm、厚さ0.32cm、重さ0.86ｇを測る。基部の抉入部はやや深く、側縁部はほぼ二等辺三角形を呈する。表裏面とも丁寧な調整剥離が施されている。

第３節　古墳時代

１．概要

調査区のほぼ全面で、古墳時代の住居跡が11軒検出されている。５世紀後半から６世紀中葉にわたる比較的短期間に形成された集落跡で、その前後については確認されていない。出土遺物も豊富で、とくに集中して出土する住居跡はすべて６世紀代で、第１・３・５・11号住居跡が顕著であり、なかでも、第１号住居跡と第５号住居跡の土師器・坏、第11号住居跡の土師器・大甕の出土が特徴的である。

２．竪穴住居跡（ＳＩ）

第１号住居跡（ＳＩ－１）（第22～29図　ＰＬ４・25～28）

位置　調査区の南西端、標高23.5ｍに位置する。

規模　長軸である南北軸7.23ｍ　東西軸7.15ｍの方形を呈する。

主軸方向　カマドは北壁中央に設置してあり、主軸方向はＮ－３°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは35～55㎝。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝　壁溝は南壁面のみに構築されている。幅20～25㎝、深さ５㎝の断面Ｕ字形を呈する。また西壁北側に直交するように間仕切り溝が構築されている。長さ121㎝、幅21㎝、深さ８㎝を測り、断面Ｕ字形を呈する。

床　起伏はなく、ほぼ平坦で、カマドから中央にかけて特に踏み固められている。

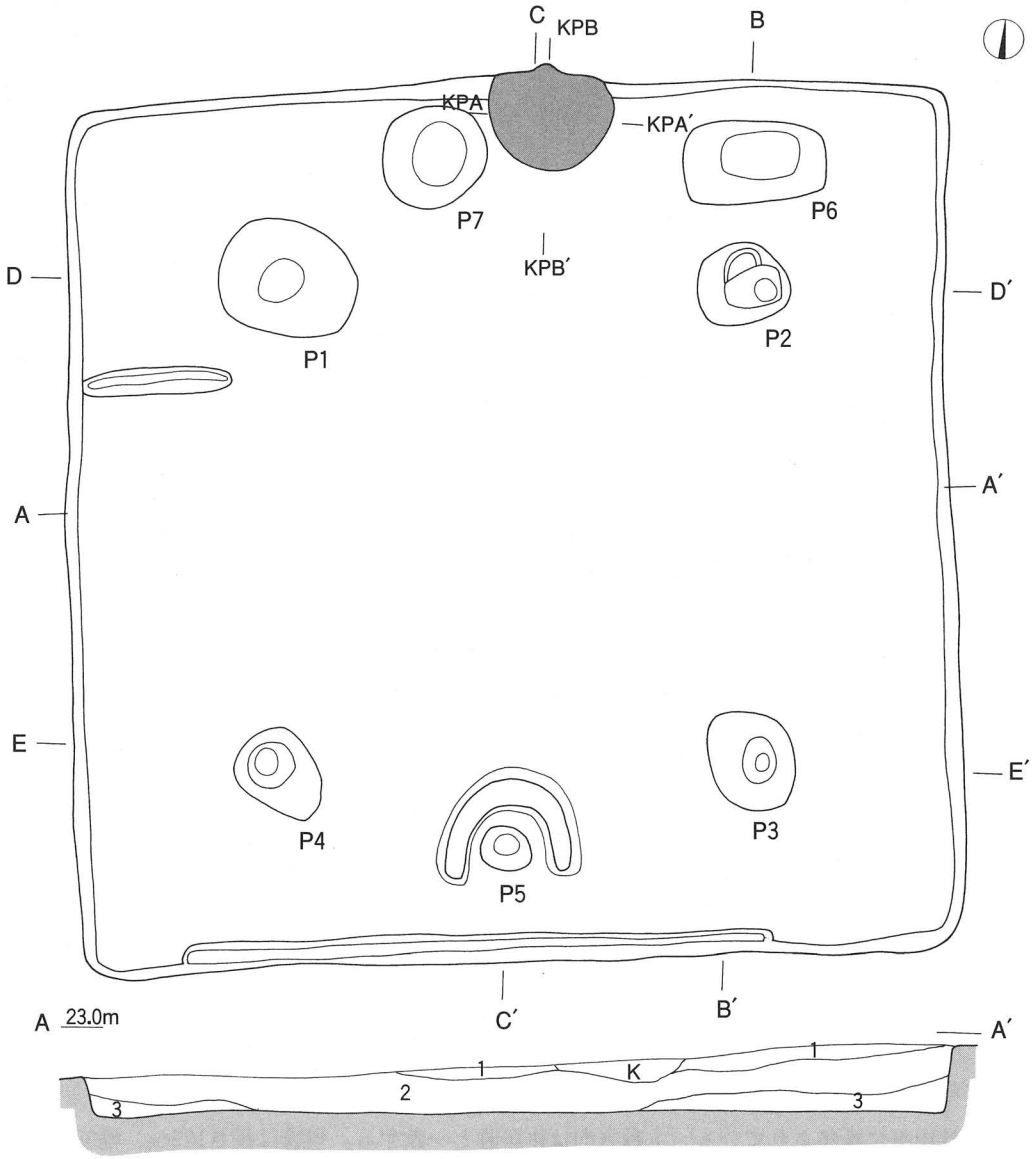
ピット　主柱穴は竪穴対角線上に４本検出されている。Ｐ１は径113×94㎝、深さ50.5㎝の楕円形。Ｐ２は径86×69㎝、深さ79㎝の楕円形。Ｐ３は径89×70㎝、深さ74.5㎝の楕円形。Ｐ４は径79×62㎝、深さ53㎝の楕円形を呈する。南壁中央に梯子穴Ｐ５が穿ってある。径42×35㎝、深さ６㎝の円形で、柱穴北側には高さ４㎝程の半円状の土塁が巡り、入口部を構築している。

貯蔵穴　カマド両脇部に貯蔵穴が２基構築されている。Ｐ６貯蔵穴は長軸116㎝、短軸67㎝、深さ95.5㎝の隅丸長方形を呈する。Ｐ７貯蔵穴は長軸87㎝、短軸82㎝、深さ16.5㎝の浅い円形を呈する。

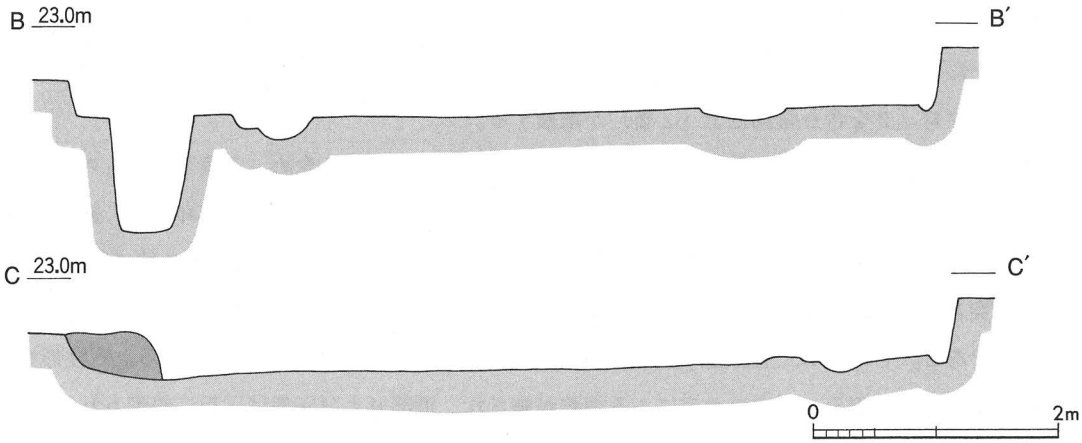
カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡と一致する。規模は長さ125㎝、幅98㎝で、袖部は壁面に貼付けられ、灰白砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径48×70㎝、深さ３㎝の楕円形状に掘り窪められ、火床面は径32×46㎝を測る。奥壁は35°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅35㎝、奥行22㎝を測る。上層の１層褐色土は少量のローム粒子・焼土粒子を含む。下層の２層に暗褐色土は少量のローム粒子・焼土粒子を含む。

覆土　床面上に少量のローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土が堆積し（３層）、その上に多量のローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土（２層）が堆積する。

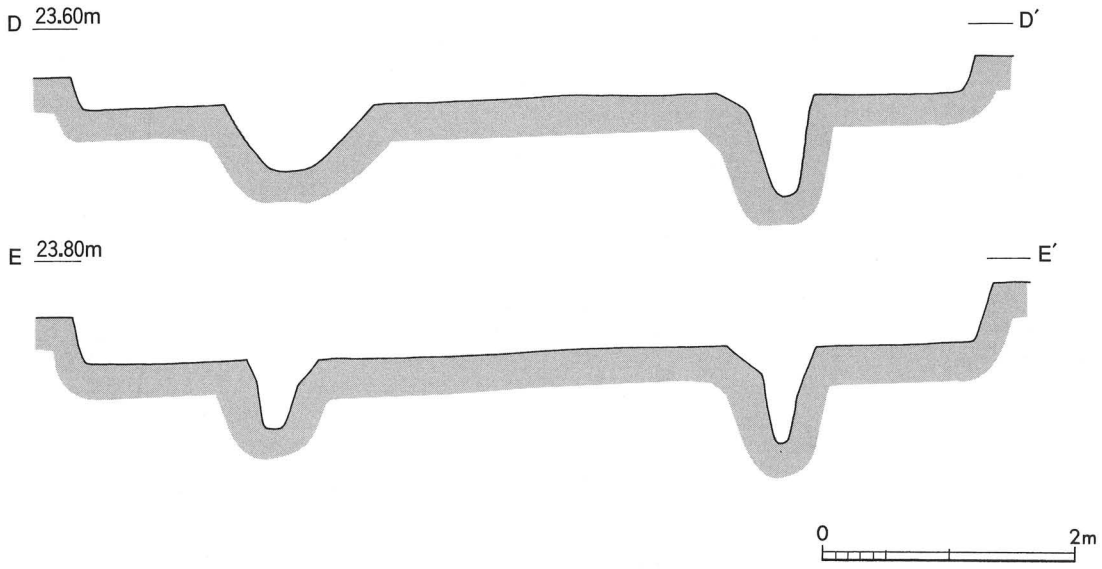
遺物　本跡からは多量の遺物が出土している。とくに土師器坏は完形品を含め、実測可能なものが50点まとまって出土しており、黒色処理を施したものも多いのが特徴である。その他土師器高坏４点、鉢３点、埦１点、甕７点、甑１点と器種構成は整っている。なお、多量に出土した土師器坏は大きく２種に器種分類でき、口縁部下に突き出した明瞭な段状の稜を有する須恵器模倣坏ＡＩのものと口縁部が短く稜が僅かで坏ＢＩを呈するものである。そのほか、土製支脚、砥石、小玉が出土している。68は土製支脚である。円柱形を呈し、長さ16.4㎝、径4.5㎝を測る。縦位のナデによる調整が施され、頂部および底部は平坦に整形されている。胎土に石英・長石粒を含み、橙色7.5YR6/6を呈する。69は凝灰岩製の砥石である。一部欠損しているものの、



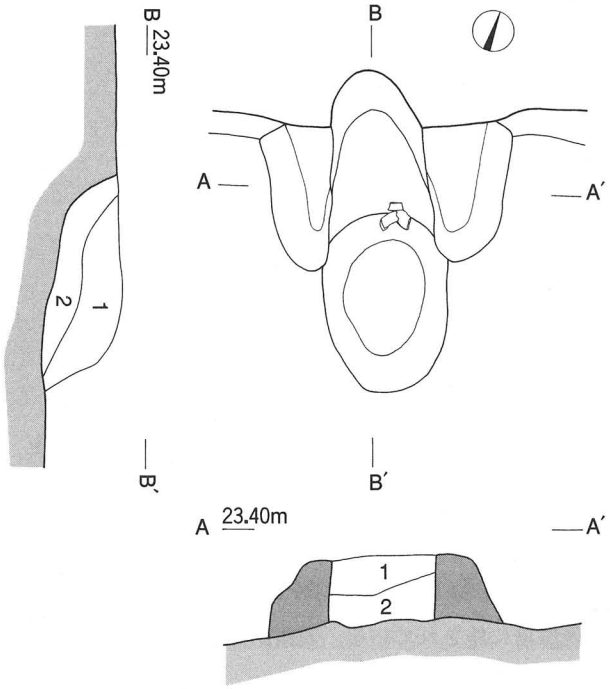
1　黒褐色土　10YR 3/2　微量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR 3/3　少量のローム粒、ロームブロックを含む
3　褐色土　10YR 4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む



第22図　第１号住居跡実測図（１）



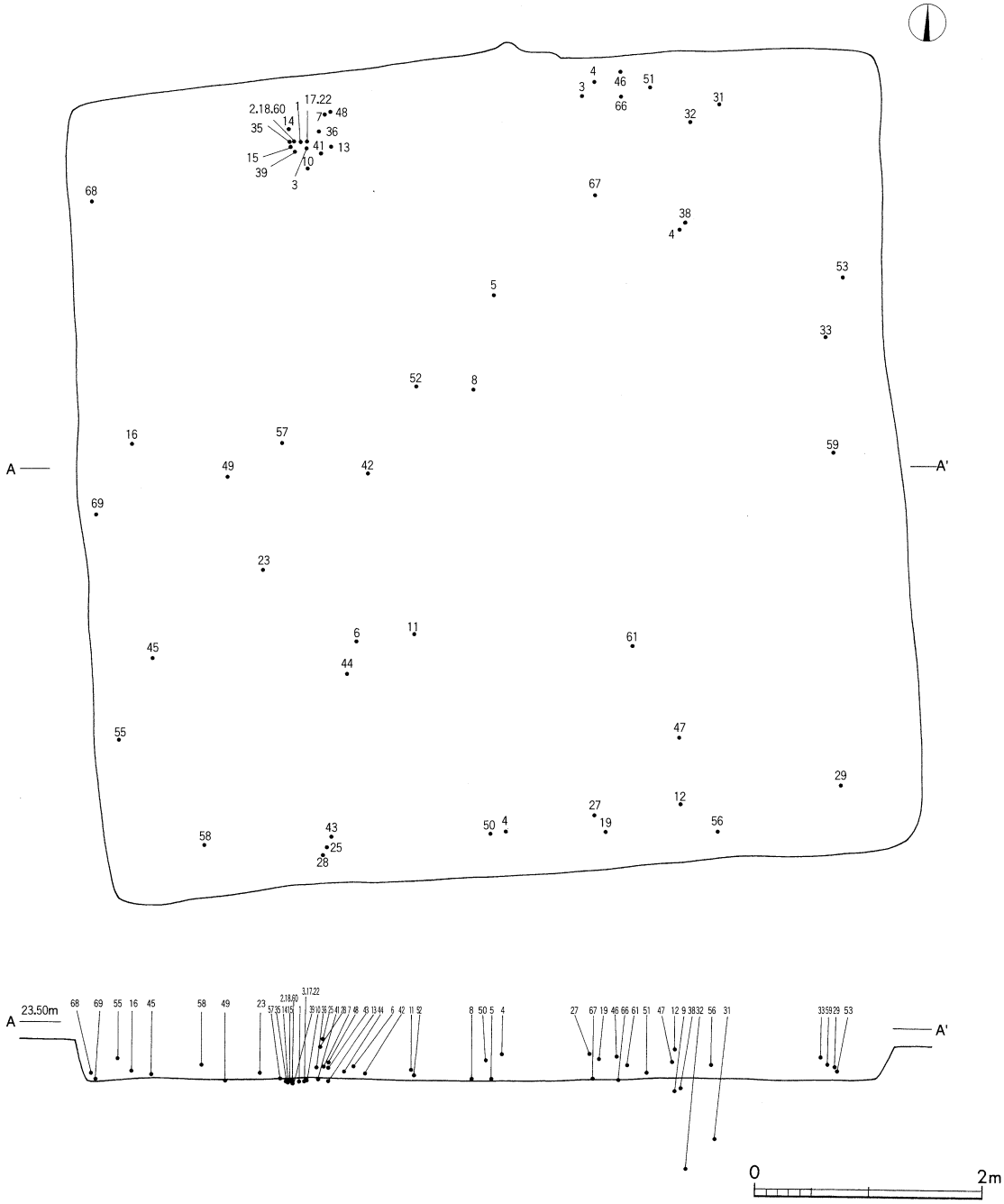
第23図　第１号住居跡実測図（２）



1　褐色土　10YR 4/4　少量のローム粒、焼土粒を含む
2　暗褐色土　10YR 3/4　少量のローム粒、焼土粒を含む

0　1m

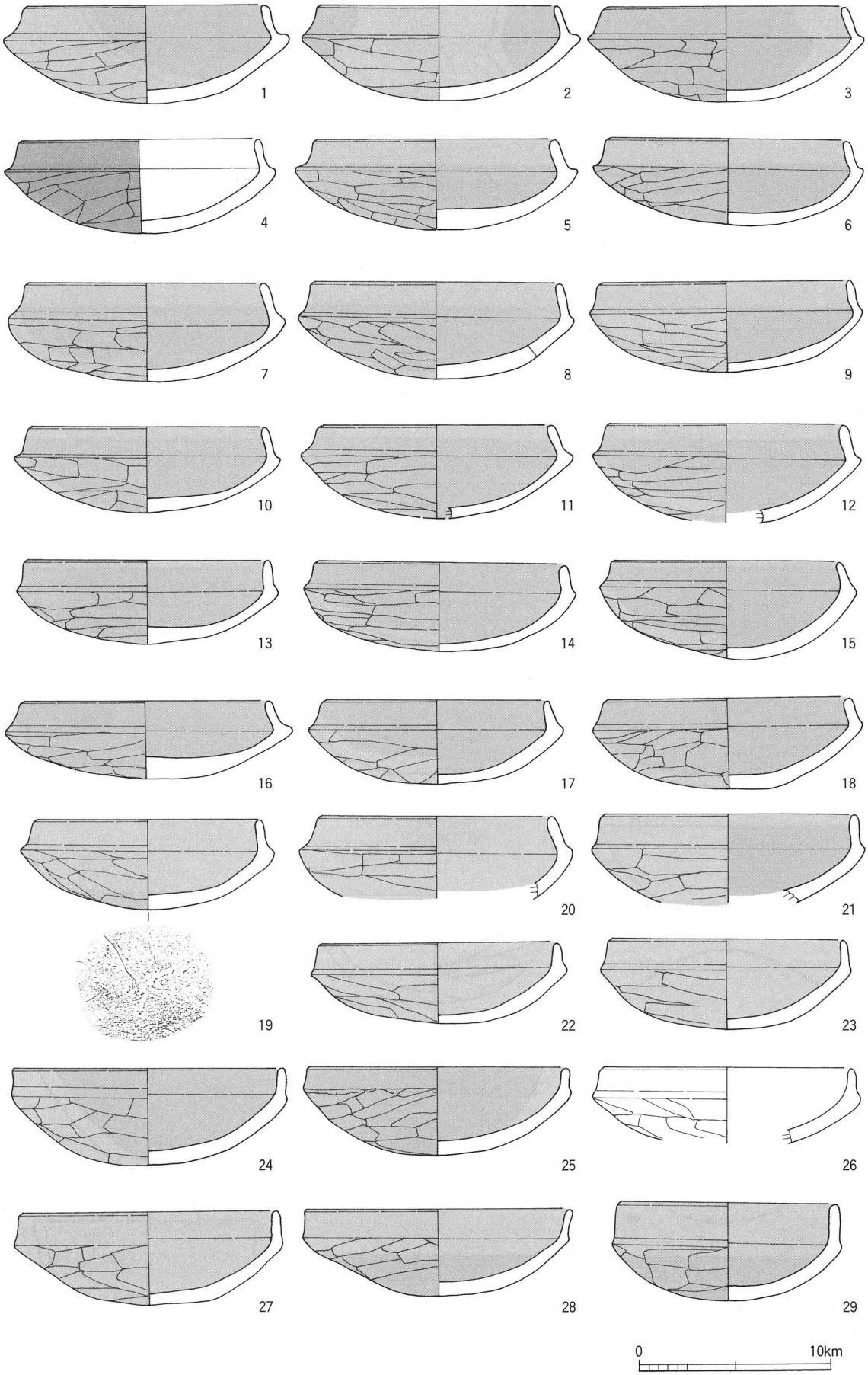
第24図　第１号住居跡カマド実測図



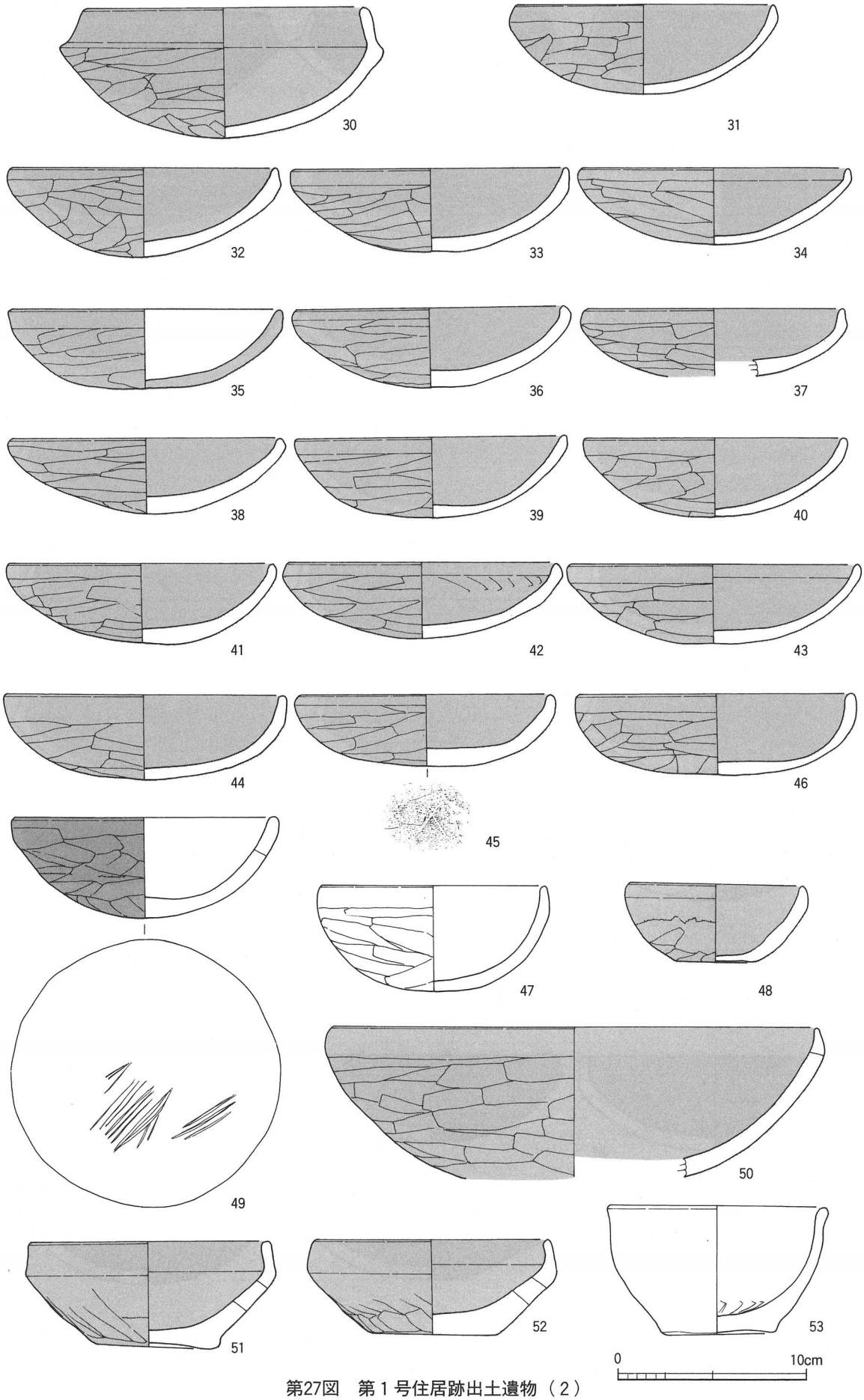
第25図　第１号住居跡出土遺物出土状況図

丁寧に使い込まれている。最大長さ19.61㎝、最大幅2.58㎝、最大厚さ4.00㎝、中央厚さ1.20㎝、重さ211ｇを測る。基本形は長方形であるが、両端部裾広がりの形状で、中央部が研磨により極端に細くなっている。下端部面には粗い擦痕が認められ、また上端部付近にＶ字状の刻み痕がある。両端部を除く４面すべてがよく研磨されている。70は土製小玉である。径7.3㎜、厚さ5.4㎜、孔径1.5×2.8㎜の楕円形、重さ0.29ｇを測る。小粒であるが、比較的丁寧に仕上げられている。穿孔は焼成前に施されている。表面が黒色10YR2/1を呈し、黒色処理を施している。

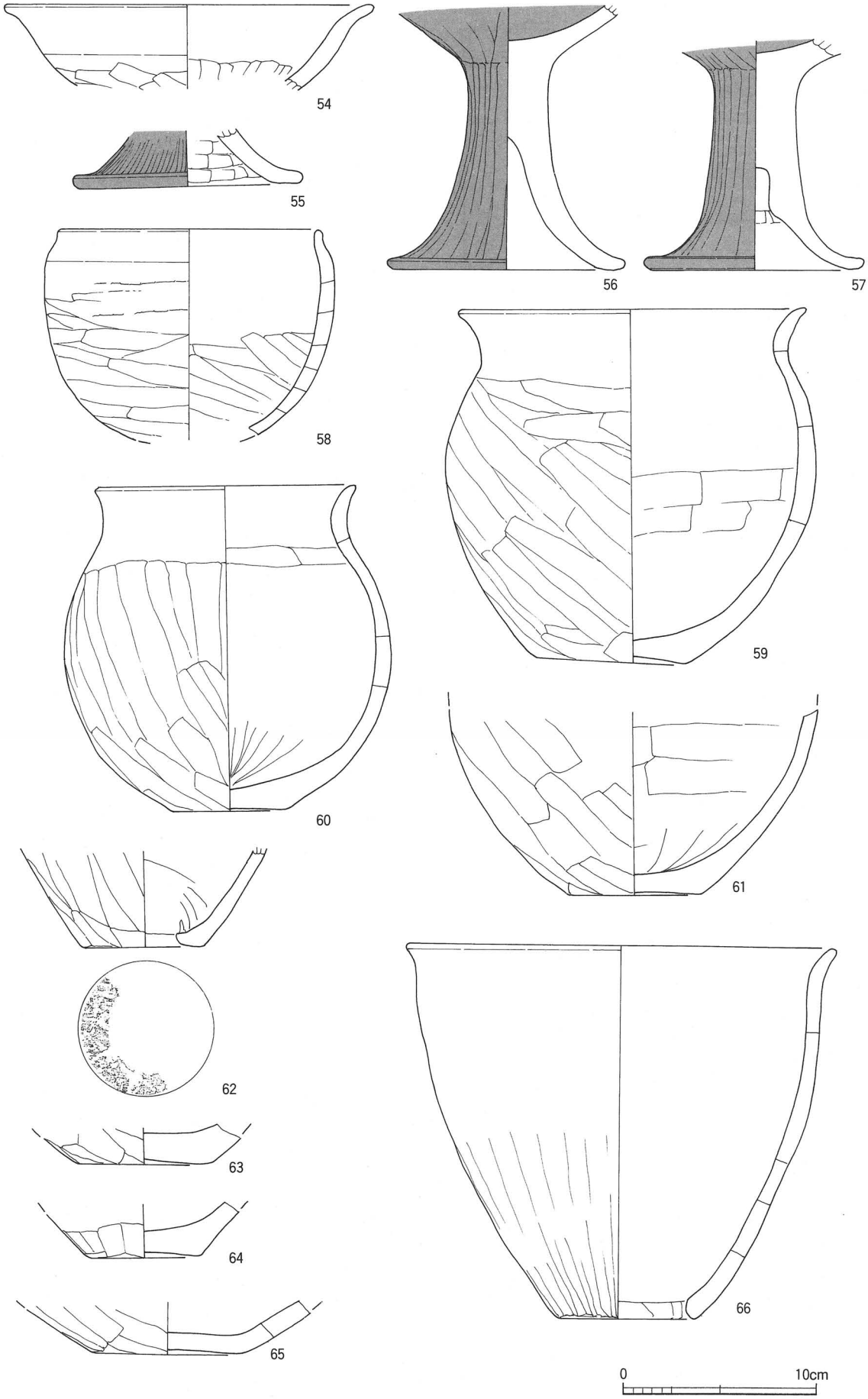
所見　出土遺物から古墳時代後期・６世紀後半に営まれたと推定される。



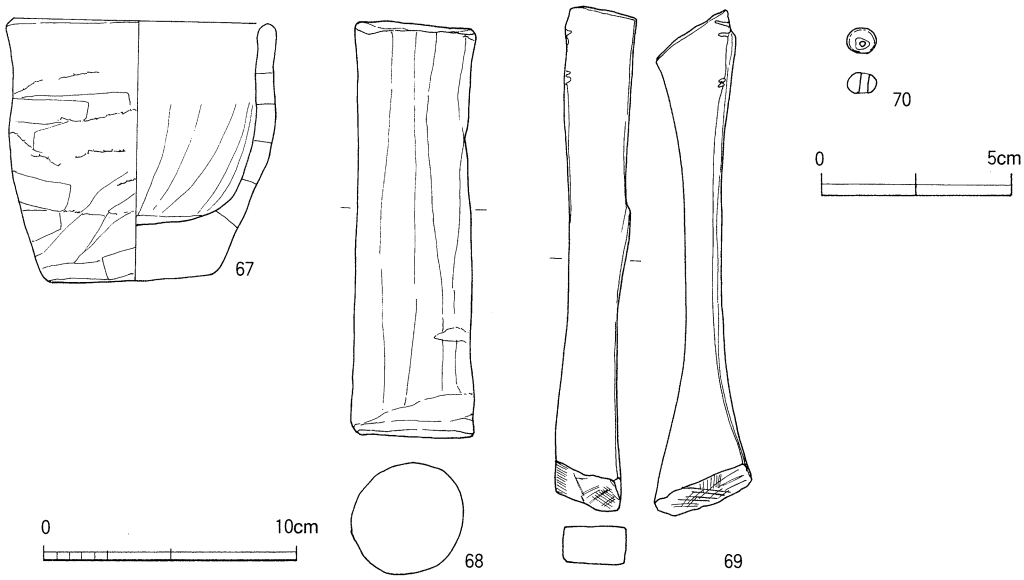
第26図　第１号住居跡出土遺物（１）



第27図　第１号住居跡出土遺物（２）



第28図　第１号住居跡出土遺物（３）



第29図　第１号住居跡出土遺物（４）

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径　12.60 底径　— 器高　4.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	白色針状物質･石英･長石粒を含む にぶい黄色（2.5Y6/3） 良好	口縁部1/4 欠損 黒色処理
2	土師器 坏	口径　12.60 底径　— 器高　5.00	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒色（10YR1.7/1） 良好	口縁1/2欠損 黒色処理
3	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　5.00	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR6/2） 良好	口縁部3/4 欠損 黒色処理
4	土師器 坏	口径　12.60 底径　— 器高　4.90	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア･石英･長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/3）内外 灰褐色（7.5YR5/2） 良好	口縁部１/2 残存 外面赤彩
5	土師器 坏	口径　12.60 底径　— 器高　4.80	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	口縁部1/2 欠損 黒色処理
6	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　4.50	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR2/1） 良好	口縁部2/3 欠損 黒色処理
7	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　5.20	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒色（10YR2/1） 良好	1/2残 黒色処理
8	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 良好	1/2残 黒色処理
9	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　4.80	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒色（10YR7/1） 良好	口縁部1/2 欠損 黒色処理
10	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　4.50	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR5/2） 良好	完存品 黒色処理
11	土師器 坏	口径　12.00 底径　— 器高　4.90	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 灰黄色（2.5Y7/2） 良好	1/3残存 黒色処理
12	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 黒色（10YR1.7/1） 良好	1/3欠損 黒色処理

13	土師器 坏	口径 12.80 底径 — 器高 4.40	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	ほぼ完存品 黒色処理
14	土師器 坏	口径 12.80 底径 — 器高 4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR4/2） 良好	ほぼ完存品 黒色処理
15	土師器 坏	口径 11.80 底径 — 器高 5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/3） 良好	完存品 黒色処理
16	土師器 坏	口径 13.00 底径 — 器高 4.00	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・雲母・石英・長石粒を含む 黒褐色（10YR3/1） 良好	完存品 黒色処理
17	土師器 坏	口径 11.60 底径 — 器高 4.40	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR3/1） 良好	1/3欠損 黒色処理
18	土師器 坏	口径 12.80 底径 — 器高 4.70	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色（10YR2/2） 良好	完存品 黒色処理
19	土師器 坏	口径 11.60 底径 — 器高 4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 黒褐色（2.5Y3/1） 良好	口縁部1/4 欠損 黒色処理 底面ヘラ書き
20	土師器 坏	口径 12.20 底径 — 器高 4.20	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5YR3/1） 良好	口縁部1/4 残存 黒色処理
21	土師器 坏	口径 12.40 底径 — 器高 4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は短く直行する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	口縁部1/4 残存 黒色処理
22	土師器 坏	口径 12.40 底径 — 器高 4.20	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は短く直行する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒色（2.5Y2/1） 良好	ほぼ完存品 黒色処理 内面ヘラ書き
23	土師器 坏	口径 12.40 底径 — 器高 4.20	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は短く直行する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒色（2.5Y2/1） 良好	口縁部1/8 欠損 黒色処理
24	土師器 坏	口径 14.00 底径 — 器高 5.00	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は短く直行する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	1/2残存 黒色処理
25	土師器 坏	口径 13.40 底径 — 器高 4.70	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は短く直行する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 赤褐色（5YR4/5） 内面 浅黄橙色（10YR8/3） 良好	1/3欠損 黒色処理
26	土師器 坏	口径 13.00 底径 — 器高 3.80	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は短く直行する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい黄褐色（10YR5/3） 良好	口縁部1/3 残存
27	土師器 坏	口径 13.40 底径 — 器高 4.90	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は短く直行する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/3） 良好	口縁部1/3 欠損 黒色処理
28	土師器 坏	口径 13.60 底径 — 器高 4.50	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/3） 良好	口縁部1/8 欠損 黒色処理
29	土師器 坏	口径 11.40 底径 — 器高 5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は直立する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 外面 黒褐色（10YR3/1） 内面 褐灰色（10YR4/1） 良好	完存品 黒色処理 底面ヘラ書き
30	土師器 坏	口径 14.60 底径 — 器高 6.90	大型の坏で、底部は丸底で、体部は深く内湾気味に立ち上がり、器受け部がシャープに張り出し、口縁部は内傾する。	口縁部内外面横方向、体部内面粗いミガキ。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒色（10YR1.7/1） 良好	完存品 黒色処理
31	土師器 坏	口径 13.60 底径 — 器高 4.60	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	石英・長石粒を含む 黒色（10YR1.7/1） 良好	ほぼ完存品 黒色処理
32	土師器 坏	口径 14.00 底径 — 器高 4.70	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/2） 良好	口縁部1/4 欠損 黒色処理

33	土師器 坏	口径 14.60 底径 — 器高 4.50	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5YR3/1） 良好	ほぼ完存品 黒色処理
34	土師器 坏	口径 14.20 底径 — 器高 4.10	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR4/2） 良好	1/2残存 黒色処理
35	土師器 坏	口径 14.40 底径 — 器高 4.20	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/3） 良好	ほぼ完存品 黒色処理
36	土師器 坏	口径 14.20 底径 — 器高 4.20	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 褐灰色（10YR4/1） 良好	完存品 黒色処理
37	土師器 坏	口径 13.60 底径 — 器高 3.60	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	石英・長石粒を含む 黒色（10YR2/1） 良好	口縁部1/3 残存 黒色処理
38	土師器 坏	口径 14.40 底径 — 器高 4.90	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰褐色（7.5YR4/2） 良好	ほぼ完存品 黒色処理
39	土師器 坏	口径 14.20 底径 — 器高 4.30	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	石英・長石粒を含む 黒色（7.5YR/1） 良好	ほぼ完存品 黒色処理
40	土師器 坏	口径 13.80 底径 — 器高 4.20	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 良好	1/3残存 黒色処理
41	土師器 坏	口径 14.00 底径 — 器高 4.40	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄色（2.5Y8/3） 黒色（2.5Y2/1） 良好	口縁部1/3 欠損 黒色処理
42	土師器 坏	口径 14.20 底径 — 器高 4.00	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黄灰色（2.5Y4/1） 良好	1/3欠損 黒色処理
43	土師器 坏	口径 15.40 底径 — 器高 4.30	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 外面 灰黄褐色（10YR5/2） 内面 黒色（10YR1.7/1） 良好	口縁部1/4 欠損 黒色処理
44	土師器 坏	口径 14.80 底径 — 器高 4.60	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒色（5YR1.7/1） 良好	ほぼ完存品 黒色処理
45	土師器 坏	口径 13.40 底径 — 器高 3.70	底部が平底に近く、口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（2.5Y3/1） 良好	完存品 黒色処理
46	土師器 坏	口径 14.80 底径 — 器高 4.30	底部が平底に近く、口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（7.5YR8/3） 良好	口縁部1/5 欠損 黒色処理
47	土師器 坏	口径 14.00 底径 — 器高 5.40	半球形の椀形を呈す。短い口縁部下に僅かに稜を持つ。口縁端部内面は内削ぎ状になる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデでミガキ風。	チャート・雲母・石英・長石粒を含む 橙色（5YR6/6） 良好	ほぼ完存品 底部転用砥石 外面赤彩
48	土師器 坏	口径 12.00 底径 — 器高 5.60	半球形の椀形を呈す。短い口縁部下に僅かに稜を持つ。口縁端部内面は内削ぎ状になる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデでミガキ風。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5YR5/3） 良好	口縁部1/2 欠損
49	土師器 坏	口径 9.40 底径 — 器高 4.20	上げ底気味の小底部から体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く直立し、端部で鋭くなる。	器面全体剥離が顕著で、口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。黒色処理。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（10YR6/3） 良好	完存品 黒色処理
50	土師器 鉢	口径 25.40 底径 — 器高 [8.00]	大振りな椀形で、口縁部下に稜を有し、口縁部は内湾気味に短く立ち上がる。	内面上半ヨコナデ、下半雑なミガキ。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 淡黄色（2.5Y8/3） 黒色（2.5Y2/1） 良好	口縁部1/3 残存 黒色処理
51	土師器 坏	口径 12.80 底径 — 器高 5.70	やや上げ底気味の底部は肥厚し、体部は外傾して開き、口縁部は内傾する。	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 灰黄橙色（10YR8/4） 良好	口縁部1/4 欠損 黒色処理
52	土師器 坏	口径 12.40 底径 — 器高 5.10	平底の底部は肥厚し、体部は外傾して開き、口縁部は内傾する。	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒色（10YR1.7/1） 良好	ほぼ完存品 黒色処理

53	土師器 埦	口径　11.60 底径　6.40 器高　6.90	やや上げ底気味の底部は肥厚し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部ヨコナデ、体部縦位のヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	スコリア・黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5Y5/4） 黒色（7.5YR1.7/1） 良好	口縁部1/6 欠損
54	土師器 高坏	口径　19.00 底径　— 器高　[4.30]	坏部のみ残存。体部は外傾して開き、口縁部は外反する。	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/2） 内面 黒褐色（10YR3/1） 良好	口縁部1/4 残存
55	土師器 高坏	口径　— 底径　11.80 器高　[2.90]	脚部は中空で、柱状部から裾部の移行はなだらかである。	脚部外面ヘラミガキの後、赤彩。内面横位のヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2 赤褐色（2.5YR4/6） 良好	裾部残存 赤彩
56	土師器 高坏	口径　— 底径　12.20 器高 [13.70]	脚部の柱状部は太めで長く、裾部はなだらかな弧線を描くながらラッパ状に開く。	脚部外面ヘラミガキの後、赤彩。内面横位のヘラナデ。	白色針状鉱物・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR7/6） 良好	裾部2/3欠損 赤彩
57	土師器 高坏	口径　— 底径　11.40 器高 [11.80]	脚部の柱状部は太めで長く、裾部はなだらかな弧線を描くながらラッパ状に開く。	脚部外面ヘラミガキの後、赤彩。内面横位のヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（2.5Y3/1） 良好	脚部残存 裾部1/2欠損 黒色処理
58	土師器 埦	口径　13.60 底径　— 器高 [10.60]	底部を欠損する。体部は内湾して立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもち、口縁部は内傾気味に直立する。	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。後黒色処理。	石英・長石粒を含む 黒褐色（10YR3/1） 良好	完存品 黒色処理
59	土師器 甕	口径　17.80 底径　8.00 器高　18.50	球胴形を呈する甕で、口縁部は弧状に外反する。底部は、中央がやや窪む。	口縁部ヨコナデ、胴部内面ハケナデ、外面斜方向のヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（5YR6/4） 良好	ほぼ完存品
60	土師器 甕	口径　13.50 底径　5.80 器高　16.90	球胴形を呈する甕で、口縁部は弧状に外反する。底部は、中央がやや窪む。	口縁部ヨコナデ、胴部内面ハケナデ、外面斜方向のヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 橙色（5YR6/6） 黒褐色（5YR2/1） 良好	1/2残存
61	土師器 甕	口径　— 底径　7.00 器高　[9.60]	やや上げ底気味の底部から球形の体部へ移行する。	外面体部斜行するヘラケズリ、内面横位のヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄褐色（10YR5/4） 良好	底部残存
62	土師器 甑	口径　— 底径　6.20 器高　[5.20]	底部中央部が穿孔される。体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/4） 良好	底部1/2残存 底部木葉痕
63	土師器 坏	口径　— 底径　6.60 器高　[2.00]	やや上げ底気味の底部は肥厚する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	底部1/2残存 外面赤彩
64	土師器 甕	口径　— 底径　6.00 器高　[2.80]	やや上げ底気味の底部は肥厚する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい赤褐色（2.5YR4/4） 良好	底部2/3残存
65	土師器 甕	口径　— 底径　7.80 器高　[2.80]	やや上げ底気味の底部から球形の体部へ移行する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	スコリア・石英・長石粒を含む 暗赤褐色（5YR3/3） 良好	底部2/3残存
66	土師器 甑	口径　22.00 底径　7.20 器高　19.30	単孔式の甑で、胴部は僅かに脹らみ、内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	チャート・黒色粒子・石英・長石粒を含む 橙色（5YR6/6） 良好	ほぼ完存品
67	土師器 埦	口径　10.60 底径　6.70 器高　10.40	底部は平底で肥厚し、体部は直立的に立ち上がる。口唇部は丸頭状を呈する。	外面体部ヘラケズリの後、部分的にヘラナデ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/4） 良好	口縁部1/3 欠損

第２号住居跡（ＳＩ－２）（第30～32図　ＰＬ５・28・29）

位置　調査区南端部、標高23.8ｍに位置する。住居跡の南東側では新期の竪穴住居跡（第３号住居跡）によって約１/５が切られている。

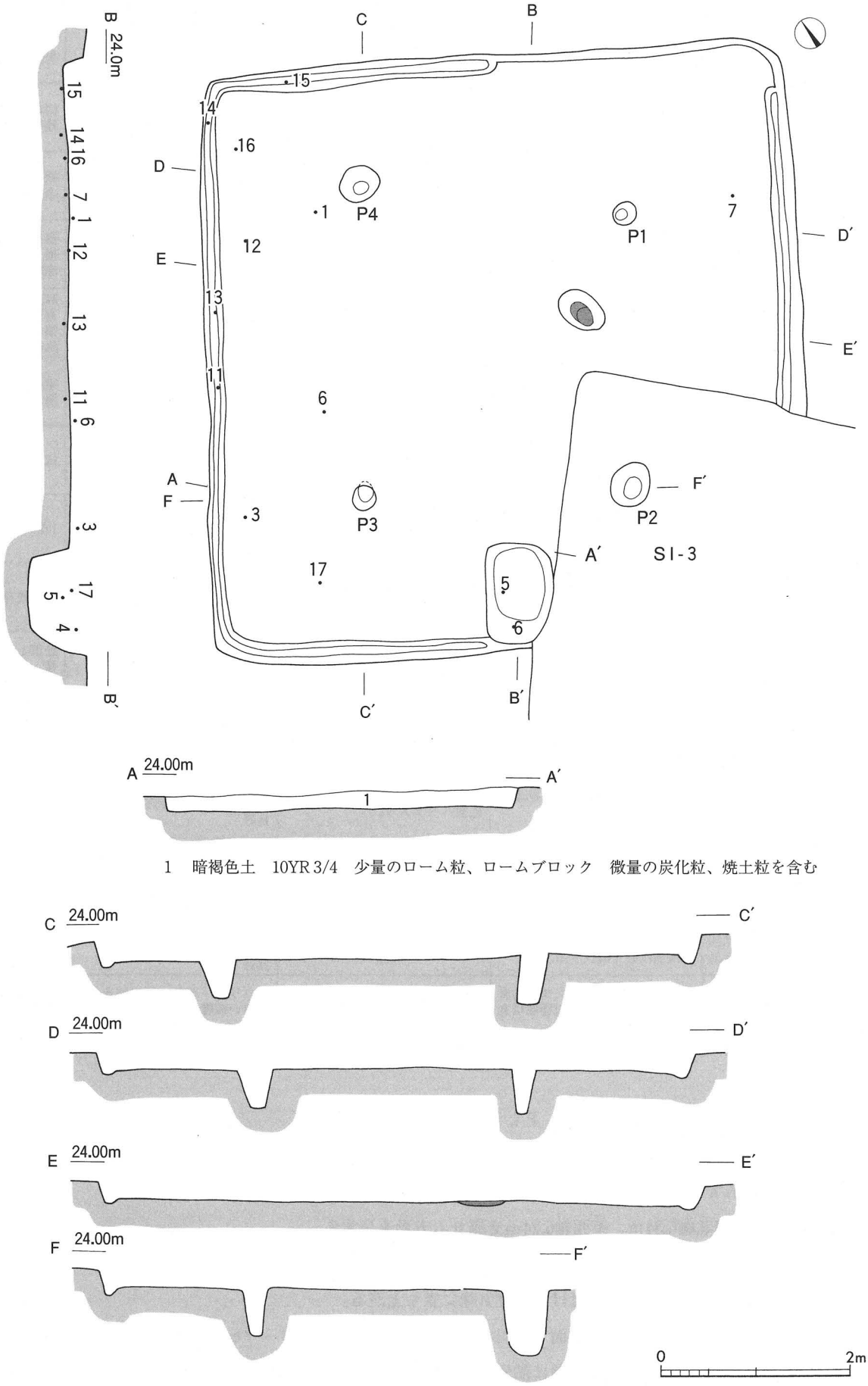
規模　長軸である南北軸6.34ｍ、東西軸6.24ｍを測り、方形を呈する。

主軸方向　炉址の位置を主軸とするとＮ－115°－Ｅを示す。

壁　確認面からの深さは20㎝。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。

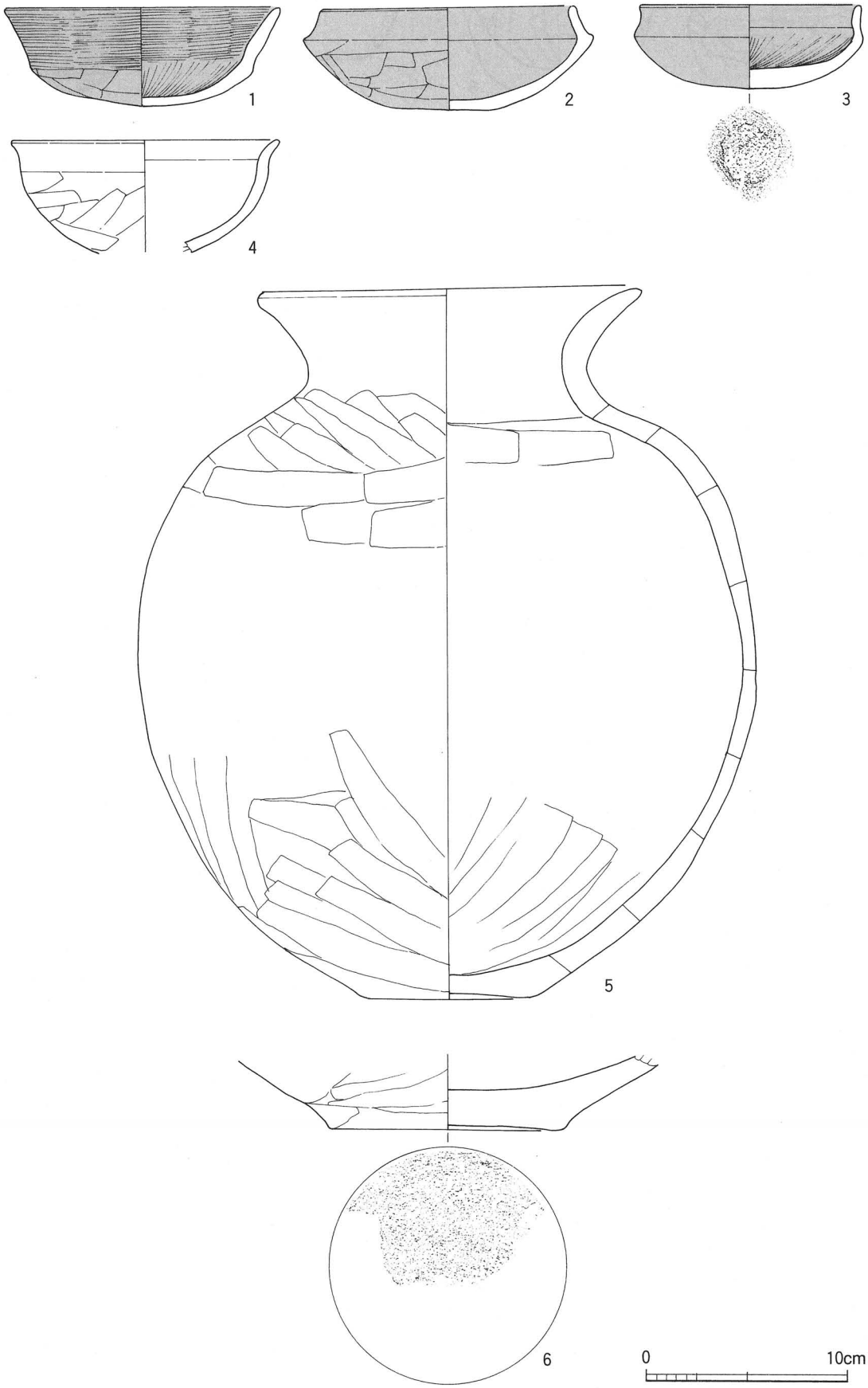
壁溝　壁溝は北壁東側半分を除き確認面で周回する。幅18～34㎝、深さ３～７㎝の断面Ｕ字形を呈する。

床　床面はほぼ平坦で、貼床は炉址周囲に部分的に検出されるものの、掘形は明瞭ではない。

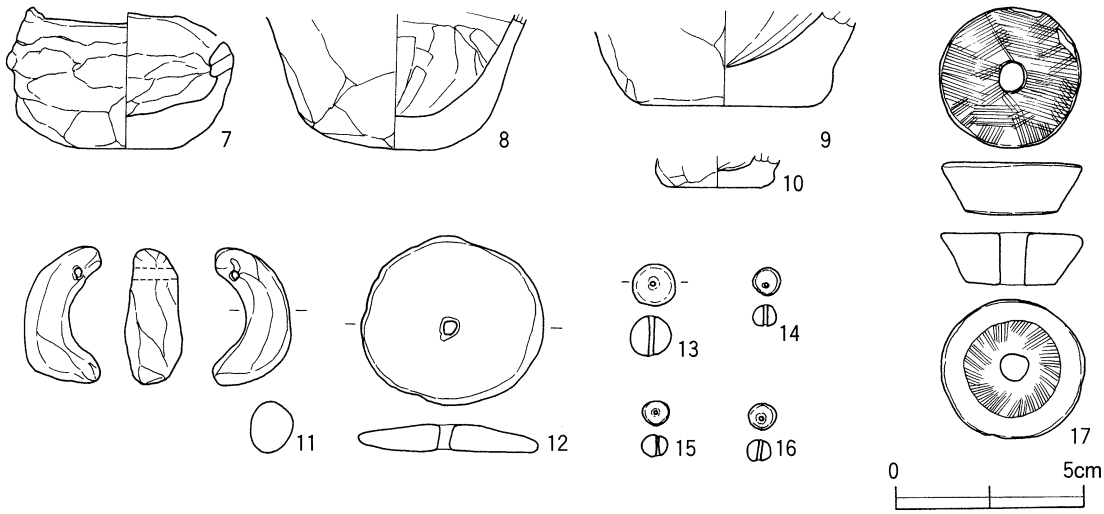


1　暗褐色土　10YR 3/4　少量のローム粒、ロームブロック　微量の炭化粒、焼土粒を含む

第30図　第２号住居跡実測図（１）



第31図　第２号住居跡出土遺物（１）



第32図　第２号住居跡出土遺物（２）

ピット　主柱穴は竪穴対角線上に４本検出されているが、Ｐ２は第３号住居跡の床面に柱根のみ検出されている。Ｐ１は径24×24cm、深さ46cmの円形。Ｐ２は径41×45cm、深さ18cmの円形。Ｐ３は径25×28cm、深さ50.0cmの円形。Ｐ４は径38×44cm、深さ39cmの楕円形を呈する。

炉　住居の主軸上、東壁寄りの位置に南北に長い楕円形に掘り窪めた地床炉で、規模は径35×55cm、深さ３cm。底面は鍋底状を呈し、上層にやや硬化した焼土、下層は粘性にとむ黄褐色の灰質土が堆積していた。

覆土　浅い掘形のため、１層のみ確認された。埋め戻し土層で、少量のローム粒子・ロームブロック、微量の炭化粒子・焼土粒を含む暗褐色土である。

遺物　出土した遺物は少ないが、祭祀遺物である手捏土器と玉類の出土がある。まず土師器は坏・甕である。祭祀遺物として手捏土器４点、土製勾玉１点、小玉４点、土製円板１点が出土している。とくに祭祀遺物は西壁の北側に集中して検出されている。土師器・坏は坏ＡⅠ28個体に対し、坏ＢⅠ16個体である。７～10は手捏土器である。７は椀形を呈する完形品で、口縁部に粘土紐による輪積み痕が明瞭に残る。外面も大まかに形作られ、指ナデだけではなく、ヘラケズリによって整えられている。８は口縁部上端を欠損する。手捏ねで粗い成形を施した後に、外面はヘラケズリ。内面はヘラナデによって整形されている。９は外面が手捏ねによるナデ整形。内面はヘラナデで仕上げられている。10は底径がわずかに３cmの小型の手捏土器である。11は土製勾玉の完形品である。長さ36.5mm、最大幅14.5mm、最大厚11.5mm、孔径1.16×1.35mmの楕円形、重さ8.89ｇを測る。頭部と尾部が先細りとなり、腹部が肥厚する。頭部の穿孔は片面から施されている。全体的に粗い整形である。胎土に石英・長石粒を含み、色調は橙色7.5YR6/6を呈する。12は土製円板である。形状はほぼ円形で中央部が肥厚し、端部で薄手となり、中央に小円孔が穿ってある。焼成前の穿孔である。大きさは長径47.6mm、短径44.7mm、最大厚6.8mm、最小厚2.4mm、孔径3.1×3.6mmの円形、重さ13.08ｇを測る。色調は明赤褐色5YR5/6。胎土に石英、長石、黒色粒子を含む。13は土製丸玉である。径10.9mm、厚さ10.5mm、孔径1.6mm、重さ1.32ｇを測る。丁寧に仕上げられている。表面の色調は明赤褐色5YR5/6を呈し、ミガキの後赤彩処理を施している可能性がある。14～16は土製小玉である。いずれも小粒で表面が黒色10YR2/1を呈し、黒色処理を施している。14は径5.9mm、厚さ5.1mm、孔径0.5×2.2mmであるが、比較的丁寧に仕上げられている。楕円形、重さ0.34ｇを測る。15は径6.5mm、厚さ5.8mm、孔径1.1mmの円形、重さ0.24ｇを測る。16は一部欠損している。径5.5mm、厚さ4.5mm、孔径1.4mmの円形、重さ0.24ｇを測る。17は滑石製の紡錘車である。完存品で、上面径3.74cm、下面径2.53cm、孔径0.81cm、高さ1.40cm、重さ29.96ｇを測る。斜面は縦位の削り痕が明瞭に残

り、やや凹面状を呈する。上面は若干の丸みをもち、下面は平坦である。上側辺部は面取り状に加工が施されている。上・下面とも使用痕とみられる細かな擦痕が残されている。

所見　炉址が住居跡の南東方向に位置し、さらに検出された遺物の中に勾玉・小玉・手捏土器といった祭祀に係わる遺物が北側に集中して検出されるなど特殊遺構のひとつといえる。なお出土遺物から古墳時代後期・6世紀初頭に営まれたと考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径　13.60 底径　— 器高　4.90	底部はやや丸底で、体部は低く、内湾気味に開き、口縁部は外傾して立ち上がる。黒色処理。	外面ヨコナデ、ヘラケズリのちヘラミガキ。内面ナデのちヘラミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR5/4） 良好	黒色処理 底部ヘラ書き 口縁部1/3欠損
2	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5Y3/1） 良好	黒色処理 1/3残存
3	土師器 坏	口径　11.00 底径　— 器高　4.20	須恵器坏蓋模倣形態の坏で、外稜を有し、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデのちヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/3） 良好	黒色処理 底部木葉痕 ほぼ完存品
4	土師器 坏	口径　13.20 底径　— 器高　5.60	底部は欠損する。体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	口縁部1/4残存
5	土師器 甕	口径　19.00 底径　7.80 器高　35.10	やや上げ底の底部から体部は胴長気味の球形を呈し、口縁部は強く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR6/4） 良好	胴部1/3欠損
6	土師器 甕	口径　— 底径　11.80 器高　[3.70]	やや上げ底の底部を呈する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR6/6） 良好	底部木葉痕 底部1/3残存

第3号住居跡（ＳＩ－３）（第33～37図　ＰＬ５・29・30）

位置　調査区南部、標高23.8mに位置する。南側で第2号住居跡を切って構築しており、また南側コーナーの大半は調査区外に広がっている。

規模　長軸は南北軸で7.59m　東西軸7.50mを測り、平面形態は方形を呈するものと推定できる。

主軸方向　カマド設置位置である北壁を主軸としてＮ－50°－Ｗを示す。

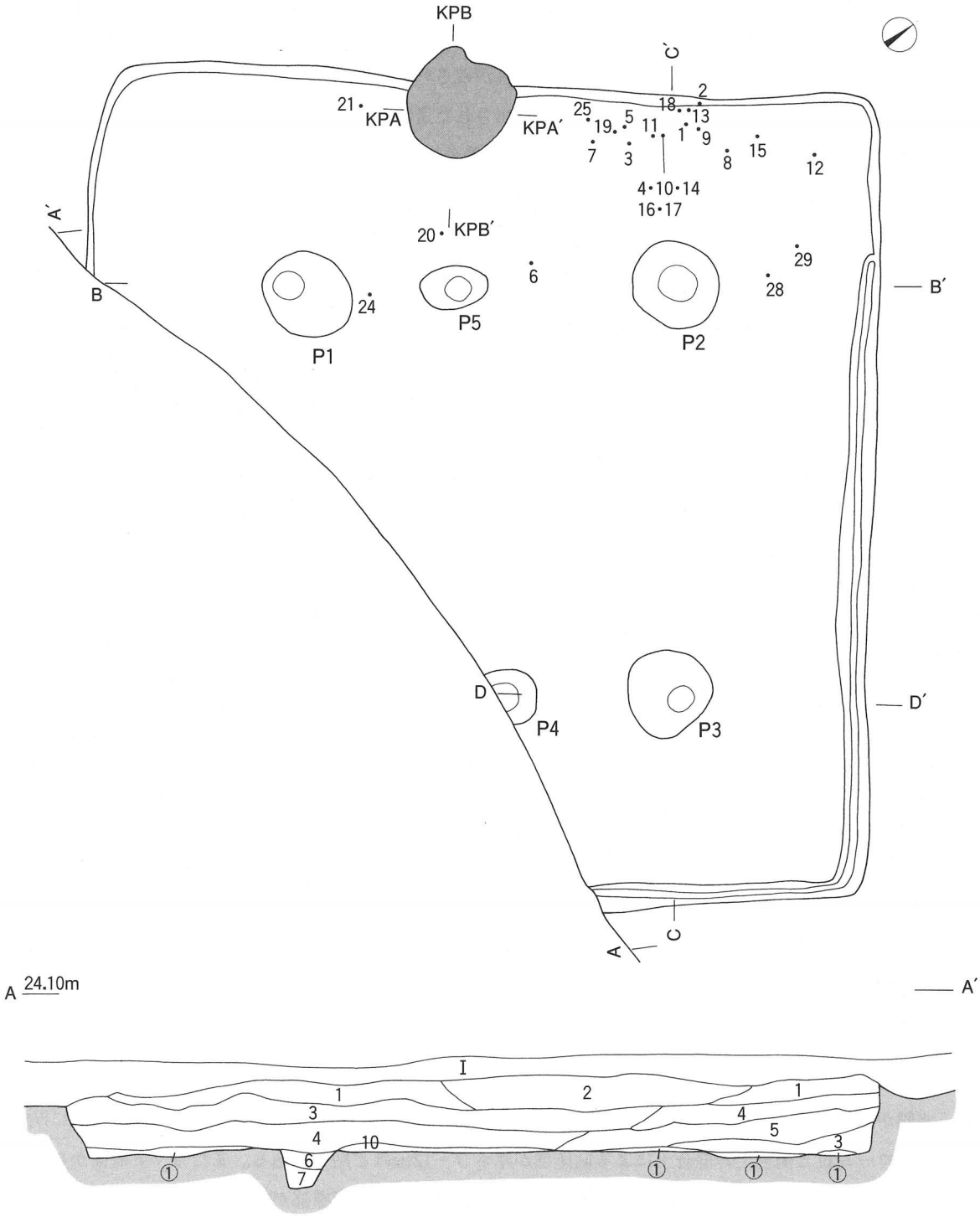
壁　確認面からの深さは24.5～32.5cmで、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

壁溝　壁溝は検出面で北壁および東壁で構築されている。幅20～29cm、深さ6～7cmの断面Ｕ字形を呈する。

床　北側が高く、南側がわずかに低く、その比高差は4cmである。起伏はなく、ほぼ平坦で、全体的に貼床である。ローム粒と褐色土の混合土による貼床部が厚さ5～12cmほど貼ってある。またカマド前面から住居中央部は著しく硬化しているのに対して、カマドの設置してある北壁両端部が極端に軟弱であるが、掘形の影響であろう。

ピット　主柱穴は南側コーナーが調査区外に広がっているため、竪穴対角線上には3本のみ検出されている。また南側柱穴間および北側柱穴間に1本ずつ検出されており、全体的には6本柱構造をもつものの、柱穴間ピットは3本主柱穴よりも深度が20cm以上も浅いため、支柱穴の可能性が高いと推定される。まずＰ１は径76×88cm、深さ55cmの楕円形。Ｐ２は径79×80cm、深さ58.5cmの円形。Ｐ３は径81×84cm、深さ70.5cmの円形。南側主柱穴間のＰ４は径50cm、深さ22cmの楕円形、北側主柱穴間のＰ５は径42×64cm、深さ43cmの楕円形を呈する。

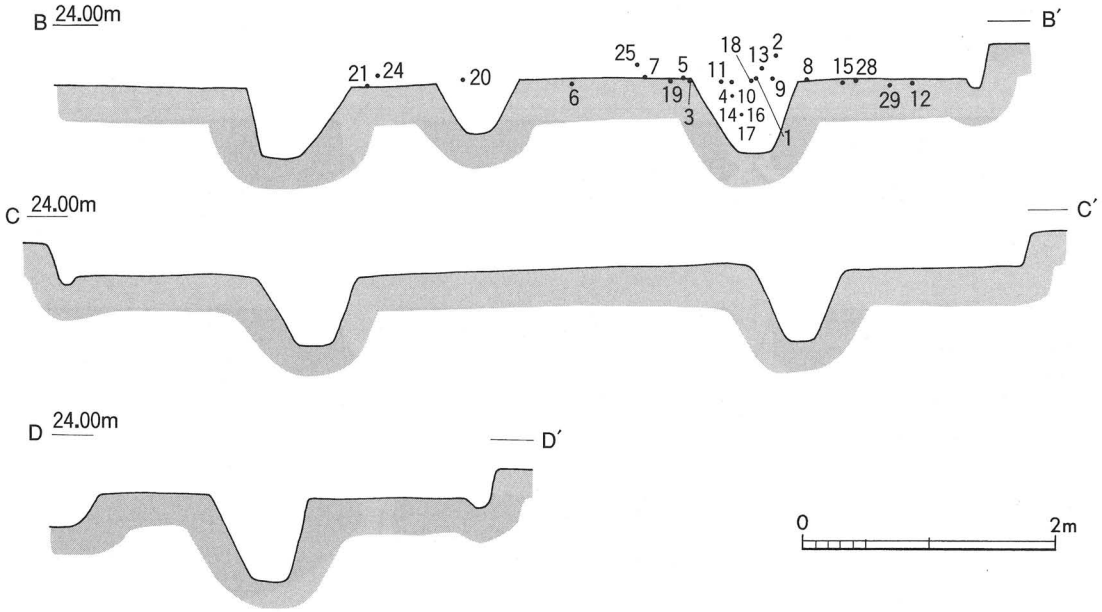
カマド　北西壁やや西寄りに構築されている。主軸方向は住居跡と一致する。規模は長さ142cm、幅92cmで、



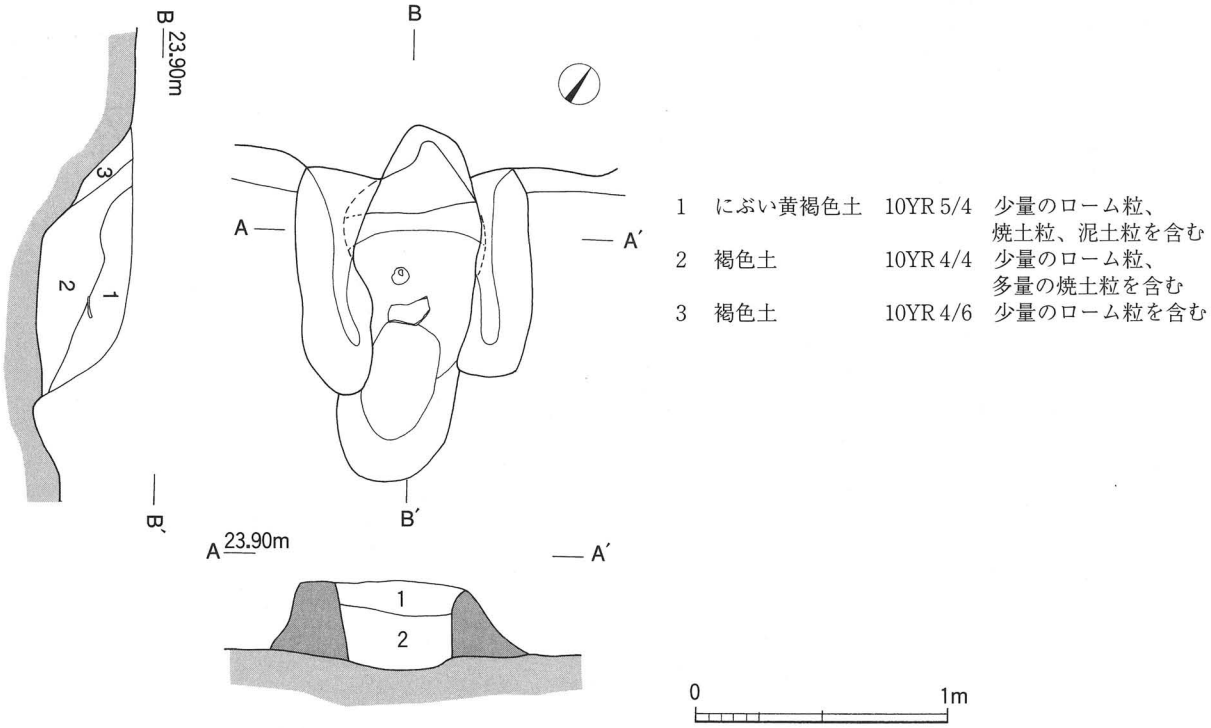
I	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	表土層
1	灰黄褐色土	10YR 4/2	少量のローム粒を含む
2	灰黄褐色土	10YR 4/2	少量のローム粒、微量のロームブロックを含む
3	にぶい黄褐色	10YR 5/4	多量のローム粒、ロームブロックを含む
4	褐色土	10YR 4/4	多量のローム粒、ロームブロックを含む
5	暗褐色土	10YR 3/3	少量のローム粒、ロームブロックを含む
6	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	多量のローム粒、ロームブロックを含む
7	褐色土	10YR 4/6	多量のローム粒、ロームブロックを含む
①	明黄褐色土	10YR 6/6	多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む（貼床）

0　2m

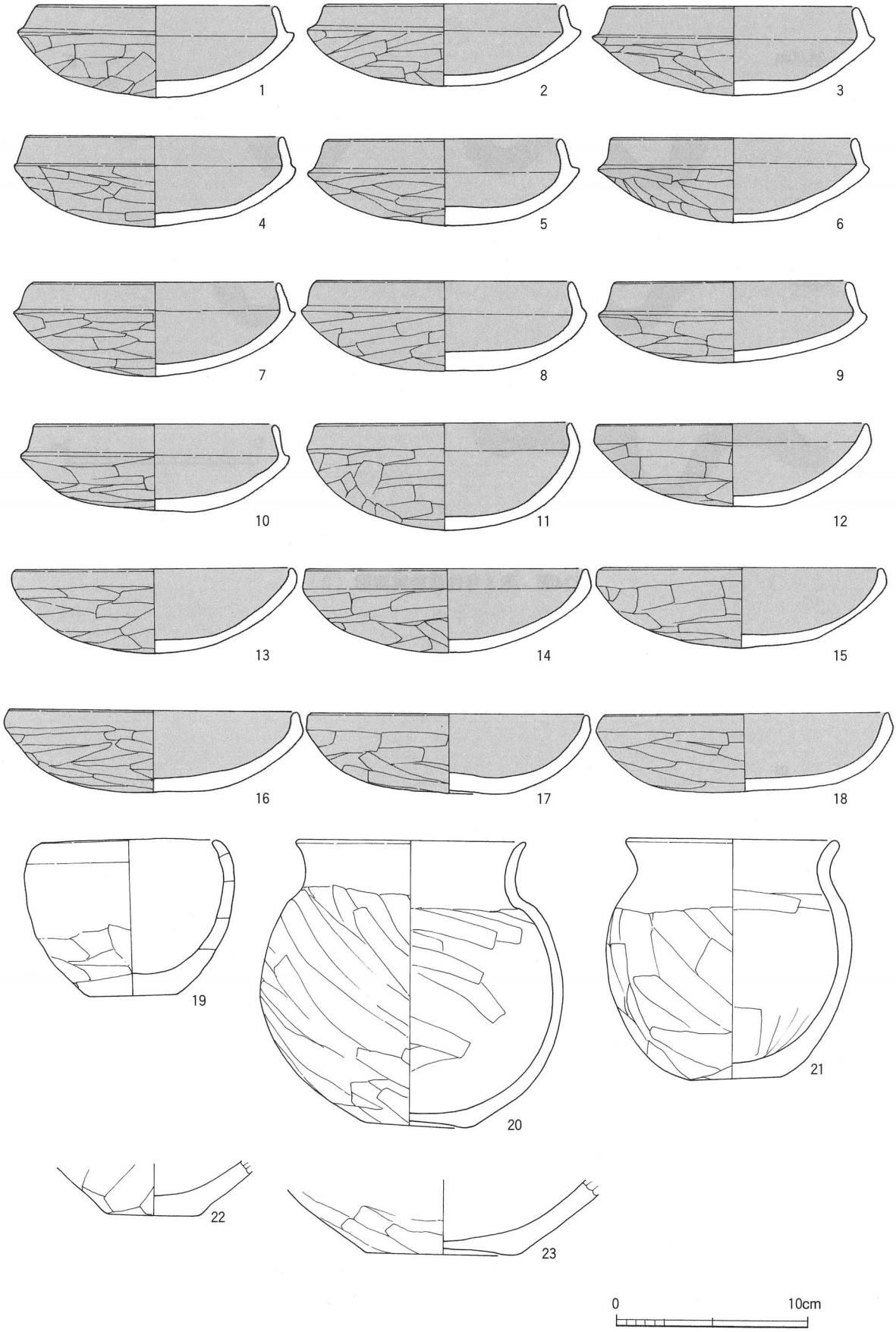
第33図　第３号住居跡実測図（１）



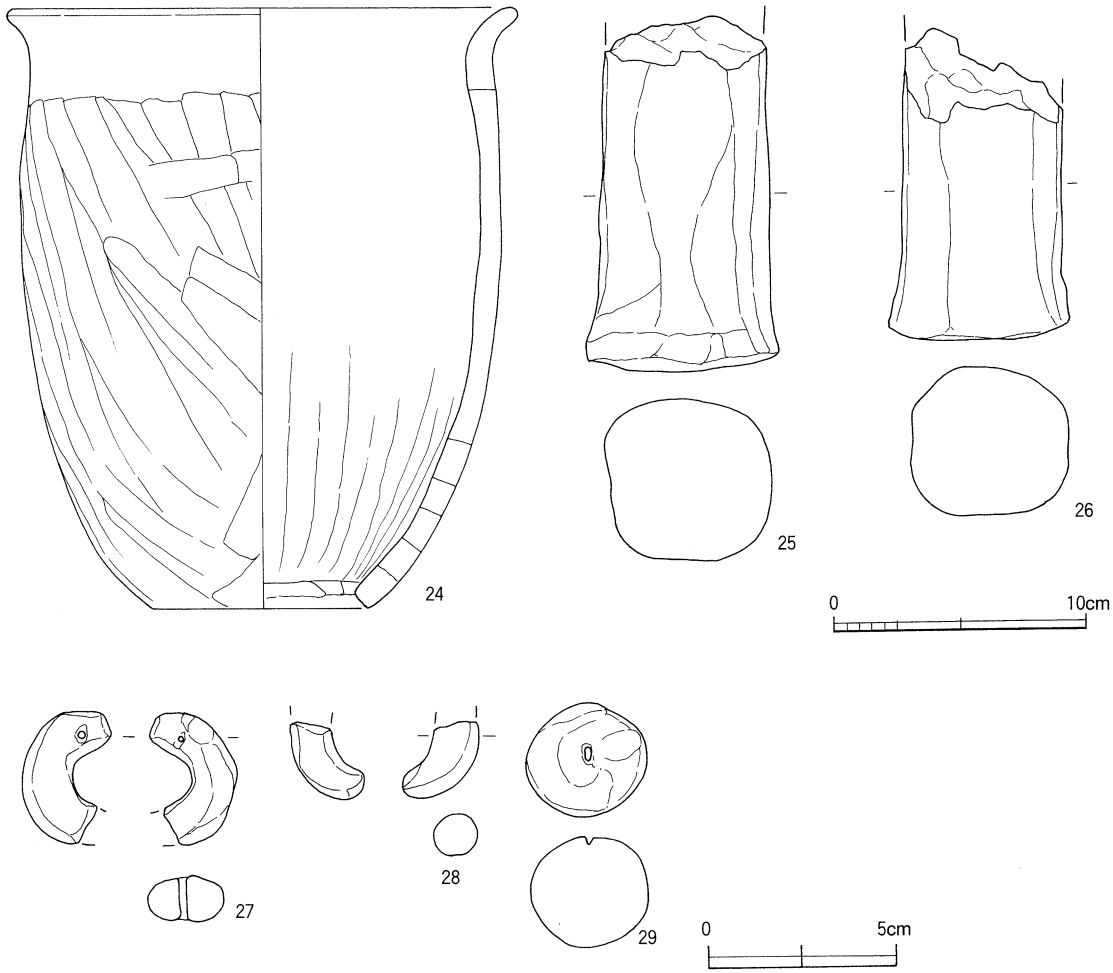
第34図　第３号住居跡実測図（２）



第35図　第３号住居跡カマド実測図



第36図　第３号住居跡出土遺物（１）



第37図　第３号住居跡出土遺物（２）

袖部は壁面に貼付けられ、灰白砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径45×116cm、深さ４cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径28×47cmを測る。奥壁は35°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅32cm、奥行18cmを測る。覆土は３層に分層でき、上層の１層にぶい黄褐色土は少量のローム粒、焼土粒子・構築材である粘土粒子を含む。下層の２層は褐色土で、少量のローム粒と多量の焼土粒子を含む。煙道部に堆積した３層は褐色土で、少量のローム粒を含む。

覆土　表土層を除き、未調査区に接した断面で７層が確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層の２層は少量のローム粒子と微量のロームブロックを含む灰黄褐色土。中層の３・４層は多量のローム粒子とロームブロックを含むにぶい黄褐色土と褐色土。床面を覆う４層は多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土。また５層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土である。６・７層は柱穴内の堆積土である。

遺物　出土遺物の多い住居跡に含まれる。土師器坏・鉢・甕、甑が出土し、そのほか土製支脚２点、土製勾玉２点、未貫通の孔を有する土玉１点である。土師器・坏は坏ＡＩと坏ＢＩが10：９の割合である。25・26は土製支脚である。いずれも上半部を欠損する。方形柱状を呈し、下端部でわずかに太くなっている。25は

現存長14.0㎝、太さ6.51㎝、下径7.52㎝を測り、横断面は隅丸方形である。手捏ね整形され、胎土にチャート・石英・長石粒を含む。橙色7.5YR6/6を呈する。26は現存長12.3㎝、太さ6.29㎝、下径7.26㎝を測り、横断面は略隅丸方形である。手捏ね整形され、胎土にチャート・黒色粒子・石英・長石粒を含み、にぶい赤褐色5YR5/4を呈する。27・28は土製勾玉である。いずれも欠損品である。27は尾部が欠損している。現存長3.49㎜、最大幅1.18㎜、最大厚1.23㎜、重さ7.94ｇを測る。頭部と腹部の厚さの差が0.8㎜前後と小さく、横断面は楕円形を呈する。頭部の穿孔は片面から施されている。全体的に丁寧な整形である。胎土に石英・長石粒を含み、色調は黒褐色5YR3/1を呈する。28は尾部のみ現存する。現存長25.9㎜、最大幅11.1㎜、最大厚11.7㎜、重さ3.48ｇを測る。尾部は先細りとなり、腹部が肥厚する。比較的丁寧な整形である。胎土に石英・長石粒を含み、色調は黒褐色5YR3/1を呈する。29は貫通孔がない土玉である。上部に穿孔作業の途中とみられる浅い凹部がみられ、未製品と思われる。径31.2㎜、厚さ28.7㎜、未貫通孔径3.5㎜、深さ3.1㎜、重さ24.50ｇを測る。比較的丁寧に仕上げられている。胎土に白色針状鉱物・石英・長石・スコリア粒を含み、色調は表面が灰褐色7.5YR5/2を呈している。

所見　出土遺物から古墳時代後期・６世紀後半と推定される。

第３号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　4.80	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/2） 良好	黒色処理 完存品
2	土師器 坏	口径　12.60 底径　— 器高　4.30	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	黒色処理 口縁一部欠損
3	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 淡黄色（2.5Y8/3） 良好	黒色処理 完存品
4	土師器 坏	口径　13.40 底径　— 器高　4.70	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR6/2） 良好	黒色処理 ほぼ完存品
5	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　4.50	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒色（10YR2/1） 良好	黒色処理 ほぼ完存品
6	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　4.40	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/3） 良好	黒色処理 口縁部1/4欠損
7	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　4.90	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄色（2.5Y8/3） 良好	黒色処理 口縁一部欠損
8	土師器 坏	口径　13.40 底径　— 器高　4.70	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰白色（2.5Y8/2） 良好	黒色処理 1/2残存
9	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　4.20	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/3） 良好	黒色処理 完存品
10	土師器 坏	口径　12.60 底径　— 器高　4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄色（2.5Y8/3） 良好	黒色処理 口縁一部欠損
11	土師器 坏	口径　13.30 底径　— 器高　5.60	丸底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内外面及び体部内面丁寧なミガキ。体部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	黒色処理 ほぼ完存品
12	土師器 坏	口径　14.00 底径　— 器高　4.30	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	黒色処理 ほぼ完存品

13	土師器 坏	口径 14.80 底径 — 器高 4.40	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	黒色処理 完存品
14	土師器 坏	口径 14.60 底径 — 器高 4.40	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	石英・長石粒を含む 灰黄橙色（10YR6/2） 良好	黒色処理 口縁部1/4 欠損
15	土師器 坏	口径 14.60 底径 — 器高 5.20	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 淡黄色（2.5Y8/3） 良好	黒色処理 完存品
16	土師器 坏	口径 15.00 底径 — 器高 4.30	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR7/6） 良好	黒色処理 完存品
17	土師器 坏	口径 14.40 底径 — 器高 4.20	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	石英・長石粒を含む 灰褐色（7.5YR4/2） 良好	黒色処理 口縁部1/6 欠損
18	土師器 坏	口径 14.80 底径 — 器高 4.10	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ。	石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 良好	黒色処理 完存品
19	土師器 鉢	口径 9.60 底径 4.60 器高 5.10	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、体部と口縁部の境に弱い稜を有し、口縁部は内傾する。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 橙色(5YR6/6) 良好	口縁部2/3 欠損
20	土師器 甕	口径 — 5.50 器高 [14.50]	やや上げ底気味の底部を呈し、球形の体部から口縁部は直立気味に外反して立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 良好	口縁部欠損 胴部1/3欠損
21	土師器 甕	口径 11.00 底径 4.50 器高 12.60	平底の底部から体部は球形を呈し、口縁部は緩く外反する。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	チャート・黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	口縁部1/3 欠損
22	土師器 甕	口径 — 底径 6.00 器高 [2.80]	小さな底部から体部は直線的に立ち上がる。	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 灰褐色（7.5YR4/2） 良好	底部2/3残存
23	土師器 甕	口径 — 底径 8.00 器高 [3.90]	やや上げ底気味の底部を呈し、体部は外傾して立ち上がる。	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR6/4） 良好	外面赤彩 底部1/3残存
24	土師器 甑	口径 20.00 底径 8.60 器高 23.70	単孔式の甑で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	1/2残存

第４号住居跡（ＳＩ－４）（第38～40図　ＰＬ６・30）

位置　調査区の南端、標高23.6ｍに位置する。本跡の南側約１/３が調査区外に広がるため、調査不可能である。

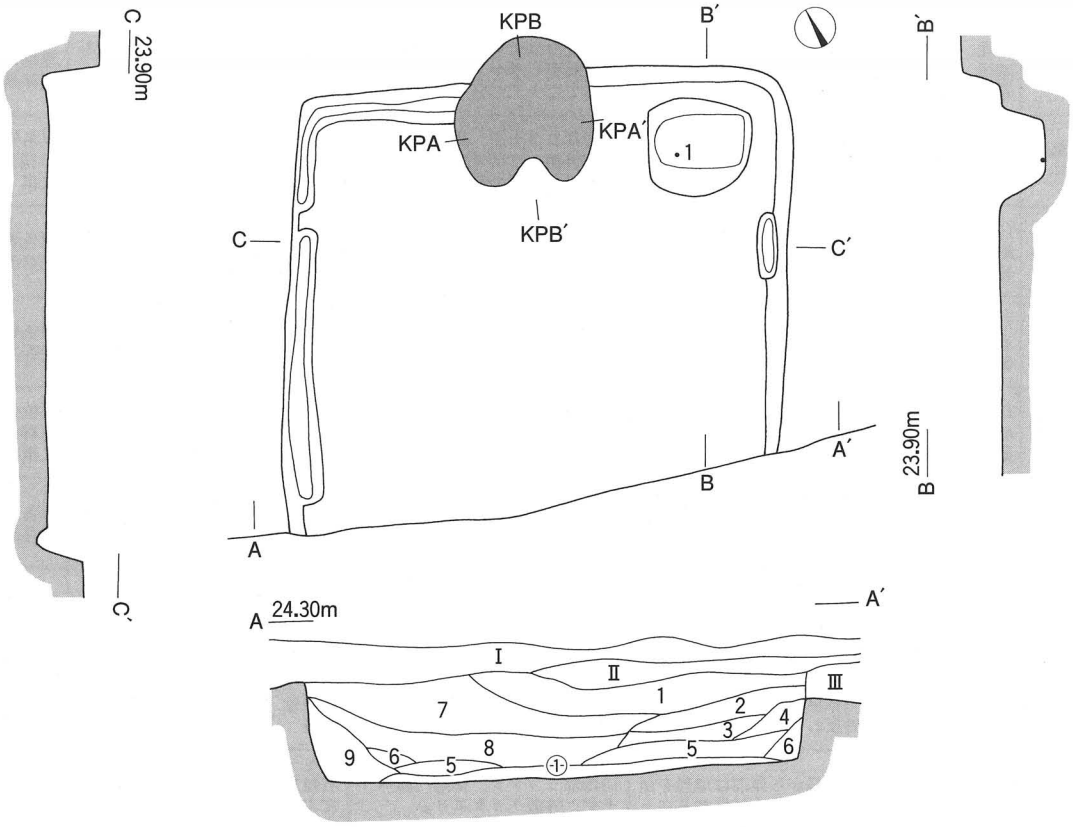
規模　南壁が調査不可能なため、東西軸3.90ｍを測るのみで、なお確認された南北軸は3.45ｍである。検出面の様相から判断して方形を呈するものと推定される。

主軸方向　カマドが北壁に設置されており、Ｎ－24°－Ｅを示す。

壁　検出された確認面からの深さは30～41.5㎝で、壁はほぼ垂直気味に立ち上る。

壁溝　壁溝は検出面で西壁および北壁の西側と東壁の一部で構築されている。幅16～31㎝、深さ３～５㎝の断面Ｕ字形を呈する。

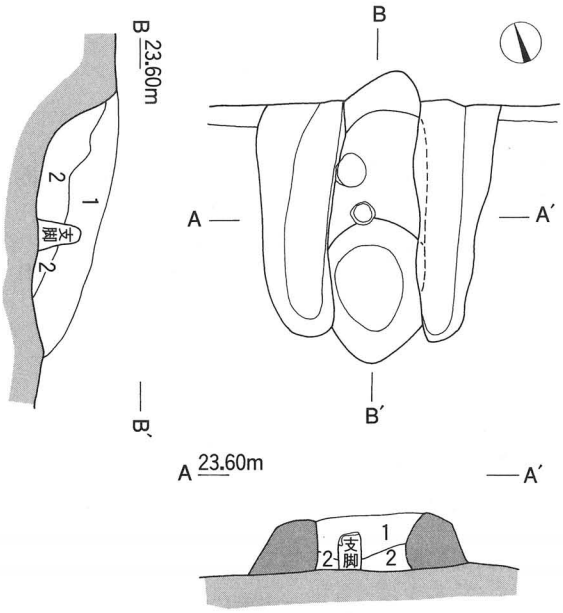
床　西側３～５㎝ほど低くなるものの平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されており、とくに住居中央周縁が顕著な硬化面が広がる。掘形は壁沿いが深く、中央部が浅く部分的に地山が床面になっている箇所がみられ、貼床が極端に薄層となっている。



Ⅰ	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	表土層
Ⅱ	褐色土	10YR 4/4	少量のローム粒、ロームブロックを含む
Ⅲ	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	少量のローム粒を含む
1	黒褐色土	10YR 3/2	少量のローム粒、ロームブロックを含む
2	暗褐色土	10YR 3/3	少量のローム粒、ロームブロックを含む
3	褐色土	10YR 4/4	少量のローム粒、ロームブロックを含む
4	褐色土	10YR 4/4	多量のローム粒、ロームブロックを含む
5	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	多量のローム粒、ロームブロックを含む
6	褐色土	10YR 4/4	多量のローム粒、ロームブロックを含む
7	黒褐色土	10YR 3/2	少量のローム粒、微量のロームブロックを含む
8	褐色土	10YR 5/6	少量のローム粒、ロームブロックを含む
9	黄褐色土	10YR 5/6	多量のローム粒、ロームブロックを含む
①	黄褐色土	10YR 5/6	多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む（貼床）

0　2m

第38図　第４号住居跡実測図

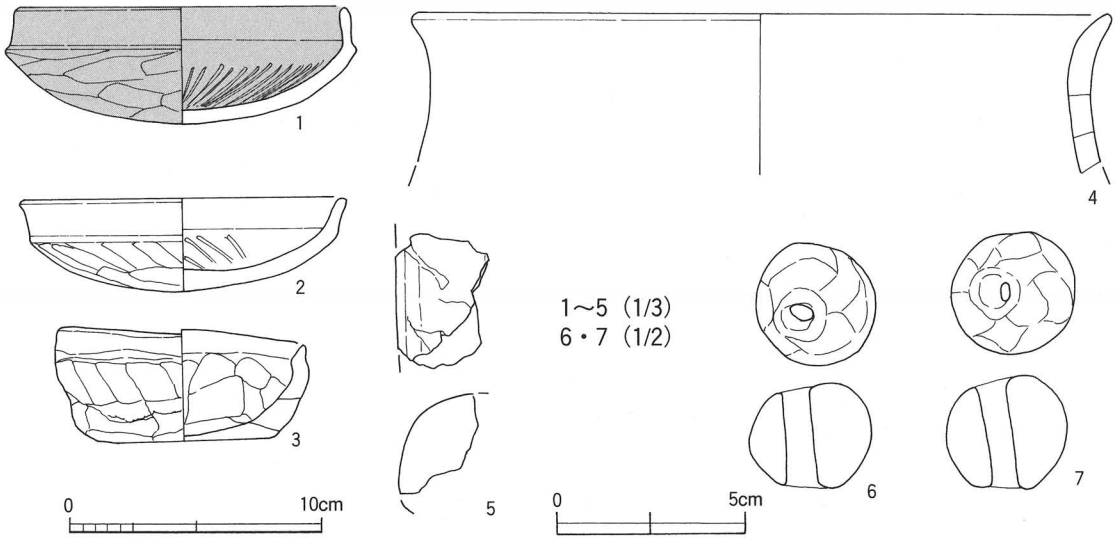


1　暗褐色土　10YR 3/4　少量のローム粒、多量の焼土粒、灰を含む

2　暗褐色土　10YR 3/3　少量のローム粒、多量の焼土粒、灰を含む

0　1m

第39図　第４号住居跡カマド実測図



第40図　第４号住居跡出土遺物

ピット　主柱穴は確認できず、カマド東側に貯蔵穴が１基検出された。長軸80㎝、短軸78㎝、深さ35.5㎝の長方形を呈する。

カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡と一致する。規模は長さ116㎝、幅93㎝で、袖部は壁面に貼付けられ、灰白砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径40×95㎝、深さ３㎝の楕円形状に掘り窪められ、火床面は径25×34㎝を測る。奥壁は35°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅28㎝、奥行12㎝を測る。火床部の北側上面に支脚が直立したままの状態で出土していた。また覆土は２層に分層でき、上層の１層暗褐色土は少量のローム粒と多量の焼土粒子・灰を含む。下層の２層も暗褐色土で、少量のローム粒と多量の焼土粒子・灰を含む。

覆土　表土層を除き、未調査区に接した断面で９層が確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層の１・２層はローム粒子・ロームブロックを僅かに含む褐色土と７層のローム粒子・ロームブロックを僅かに含む黒褐色土。中層の３・４・８層は同じくローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積し、床面を覆う５層は多量のローム粒子と少量のロームブロックを含むにぶい黄褐色土、同じく６層は多量のローム粒子・少量のロームブロックを含む褐色土が堆積し、９層は壁下に堆積した崩落土層で、ローム粒子・ロームブロックを多量に含む黄褐色土である。

遺物　住居の規模に比して出土遺物はやや貧弱な感がある。土器と土製品である土玉の出土があり、住居西側に浮いた状態で散在していた。器種構成は土師器坏と手捏土器１点、・土玉である。３は手捏土器で、椀形を呈する完形品である。体部に粘土紐による輪積み痕が明瞭に残る。外面も大まかに形作られ、指ナデだけではなく、ヘラナデによって整えられ、内面もヘラナデによって整形されている。５は土製支脚の破片である。円柱形を呈するものと思われる。現存長さ5.3㎝、現存径3.1㎝を測る。縦位のナデによる調整が施され、胎土に黒色粒子・石英・長石粒を含み、色調は橙色7.5YR6/6を呈する。６・７は土玉である。６は径32.3㎜、厚さ28.8㎜、孔径8.6㎜、重さ28.78ｇを測る。上・下面に面取りが施され、比較的丁寧に仕上げられている。胎土は石英・長石粒を含み、色調はにぶい黄橙色10YR6/4を呈する。７は径33.3㎜、厚さ30.1㎜、孔径9.2㎜、重さ3.90ｇを測る。上・下面に面取りが施され、比較的丁寧に仕上げられている。胎土は石英・長

石粒を含み、色調は明赤褐色5YR5/6を呈する。

所見　出土した土器群から６世紀後半と推定される。

第４号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径　13.20 底径　— 器高　4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内湾気味に直立する。	外面ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	雲母・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	黒色処理 1/2残存
2	土師器 坏	口径　12.80 底径　— 器高　3.60	須恵器模倣の坏で、体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は緩く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/4） 良好	ほぼ完存品
3	土師器 粗製土器	口径　9.80 底径　7.50 器高　4.40	坏形を呈し、平底の底部から体部は短く直立的に立ち上がる。	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ナデのちヘラミガキ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい赤褐色（5YR4/4） 赤色(10R5/8) 良好	完存品
4	土師器 甕	口径　27.60 底径　— 器高　[6.20]	口縁部のみで、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリのちヘラミガキ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい赤褐色（5YR5/4） 良好	口縁部破片

第５号住居跡（ＳＩ－５）（第41～47図　ＰＬ６・31～33）

位置　調査区の南側、標高25.8ｍに位置する。

規模　南北軸8.04ｍ　東西軸8.18ｍで、若干東西軸が長くなっている方形住居である。

主軸方向　Ｎ－９°－Ｗ。

壁　確認面からの深さは23.5～46.5cmで、壁面はほぼ垂直気味に立ち上る。

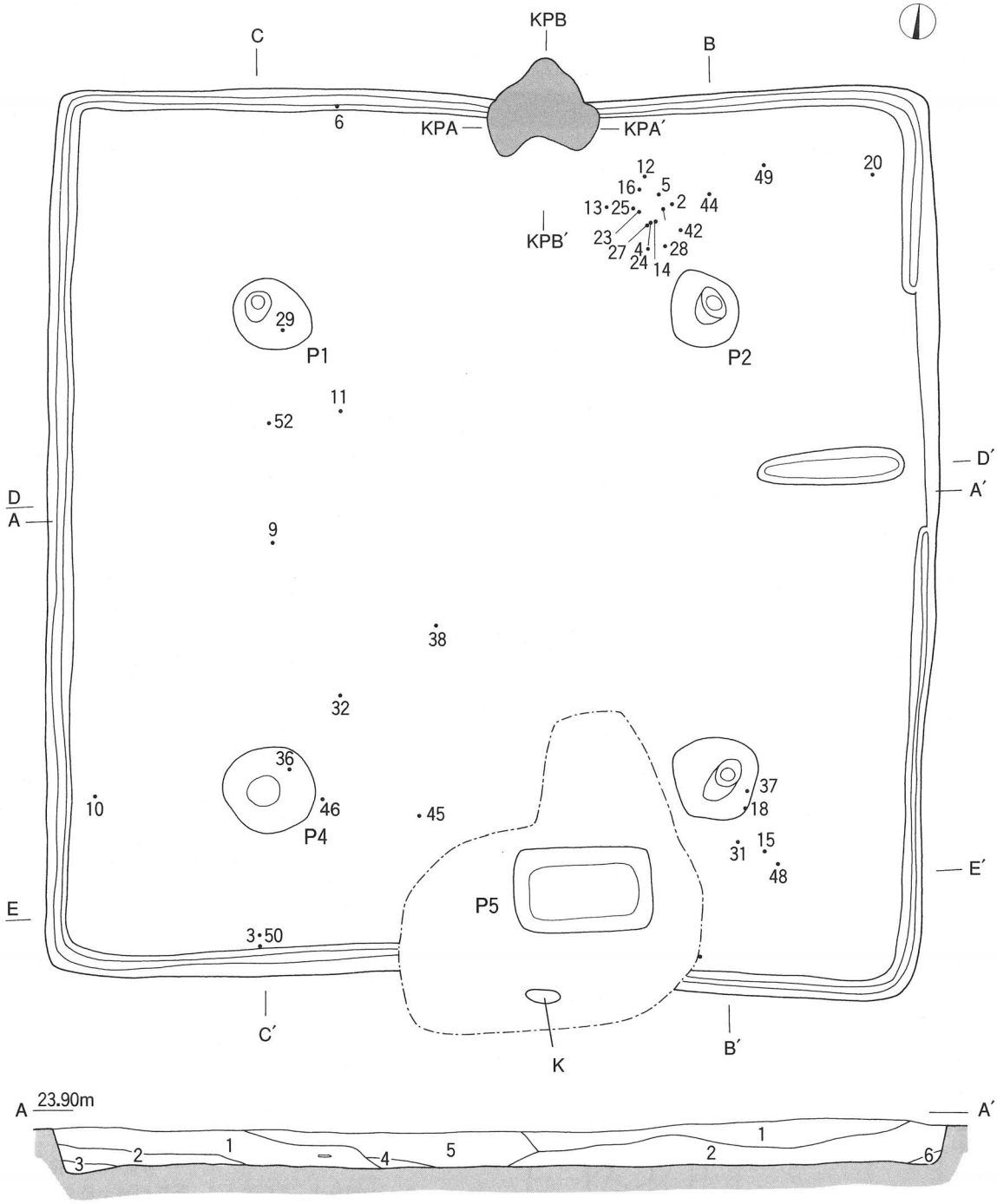
壁溝　壁溝は東壁の一部が欠損しているものの、ほぼ全周して構築されている。幅14～26cm、深さ３～９cmの断面Ｕ字形を呈する。また間仕切り溝として、東壁の北側に長さ135cm、幅22～34cm、深さ14cmを測る。

床　全体的に東側が高く、西側が低いものの、起伏はなく平坦である。貼床はローム粒と黒色土の混合土で全体的に施されており、またカマド前面から住居中央周縁にかけて顕著な硬化面が広がる。掘形は壁沿いが深く厚い貼床を構築しているのに対して、中央部が浅く部分的に地山が床面になっている箇所がみられ、貼床が極端に薄層となっている。

ピット　主柱穴は竪穴対角線上に４本検出されている。Ｐ１は径62×75cm、深さ72cmの円形。Ｐ２は径65×75cm、深さ56.5cmの円形。Ｐ３は径80×82cm、深さ67cmの円形。Ｐ４は径78×85cm、深さ49cmの円形を呈する。南壁中央に貯蔵穴Ｐ５が穿ってある。長軸126cm、短軸78cm、深さ77cmの方形を呈する。

カマド　北壁の中央に構築されている。主軸方向は住居跡とほぼ一致する。規模は長さ139cm、幅94cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径55×129cm、深さ11cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径32×50cmを測る。奥壁は45°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅55cm、奥行34cmを測る。なお、カマド本体中央に甕が直立した状態で出土していた。設置したままで埋没した状況が想定できる。なお、覆土は３層に分層でき、上層の１層暗褐色土は少量のローム粒、焼土粒子を含む。下層の２層は暗褐色土で、少量のローム粒と多量の焼土粒子を含む。煙道部に堆積した３層は赤褐色土で、多量の焼土粒を含む。

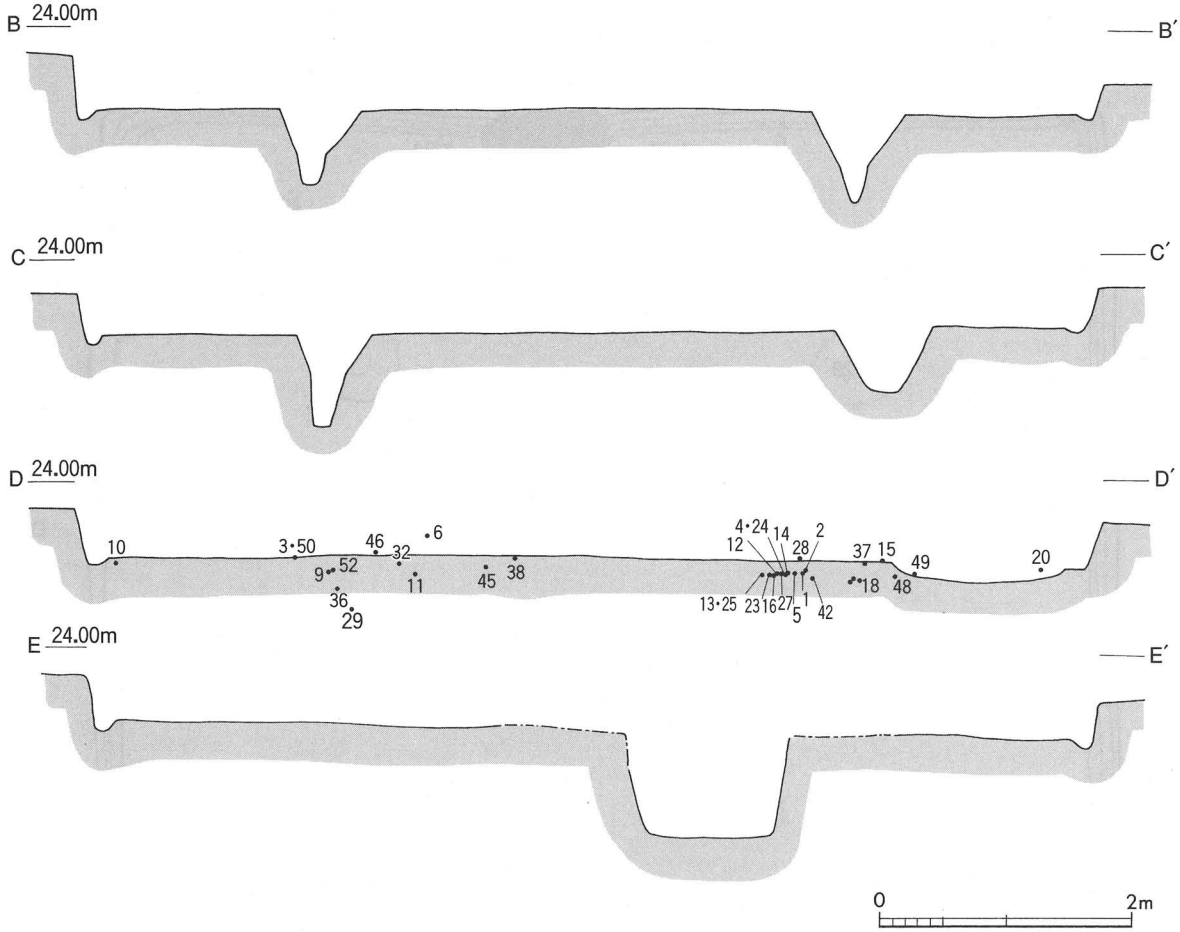
覆土　６層が確認された。上層の５層はローム粒子・ロームブロックを僅かに含む暗褐色土。中層の１層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土で自然堆積層である。床面を覆う２層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土。住居壁際を覆う３・６層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む褐色土と黒褐色土で、埋め戻し土層である。



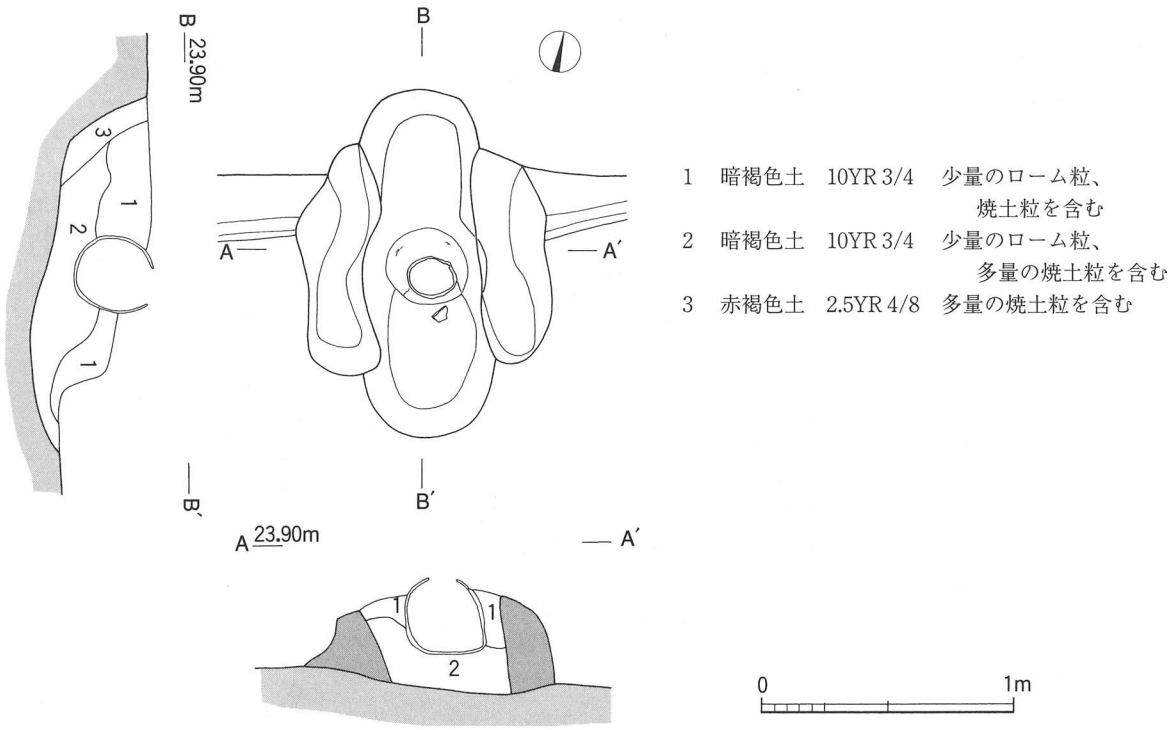
1　黒褐色土　10YR 3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
2　黒褐色土　10YR 2/3　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR 4/6　多量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR 4/4　少量のローム粒を含む
5　暗褐色土　10YR 3/4　少量のローム粒を含む
6　黒褐色土　10YR 2/3　多量の焼土粒を含む

0　2m

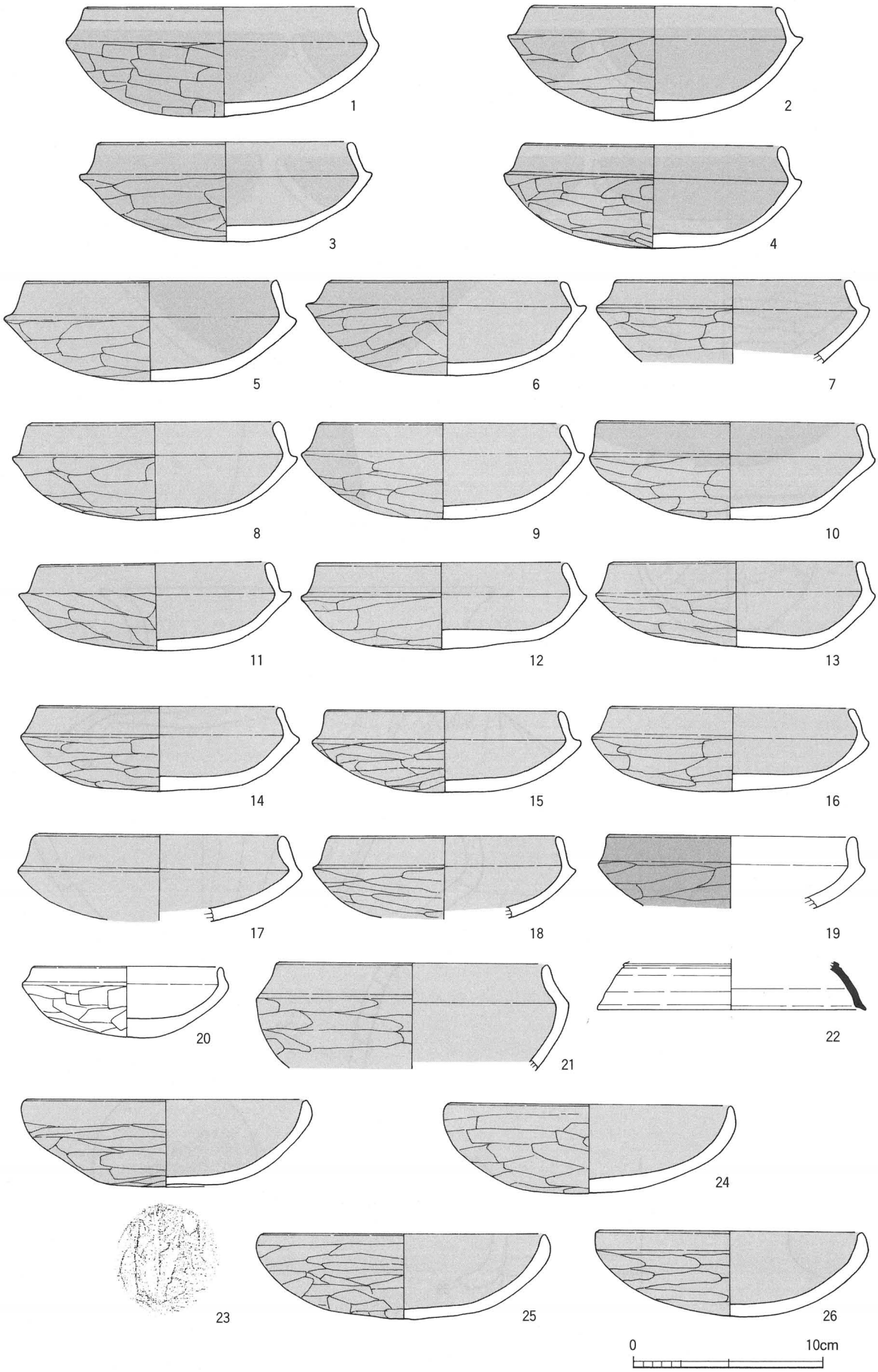
第41図　第５号住居跡実測図（１）



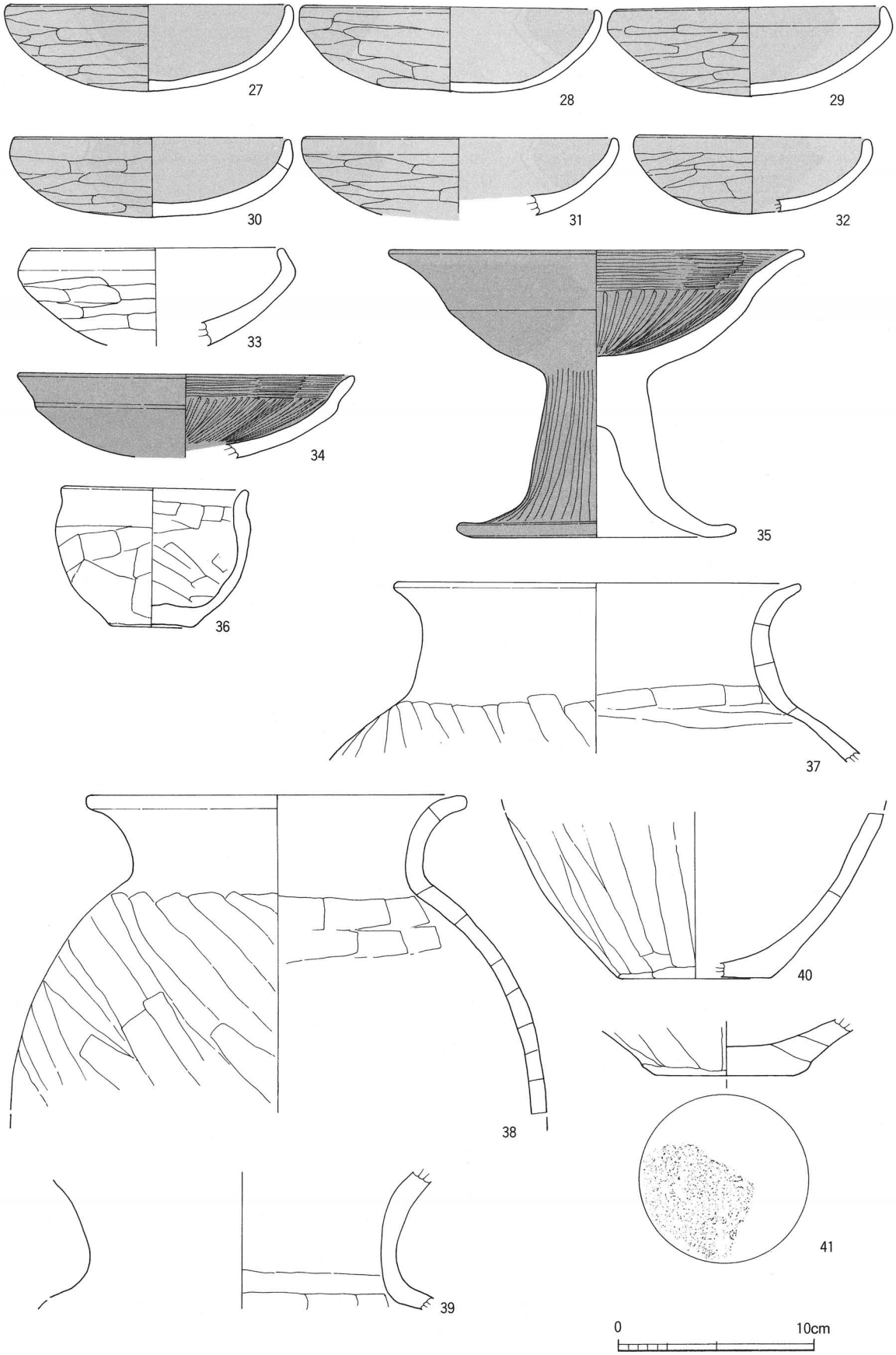
第42図　第５号住居跡実測図（２）



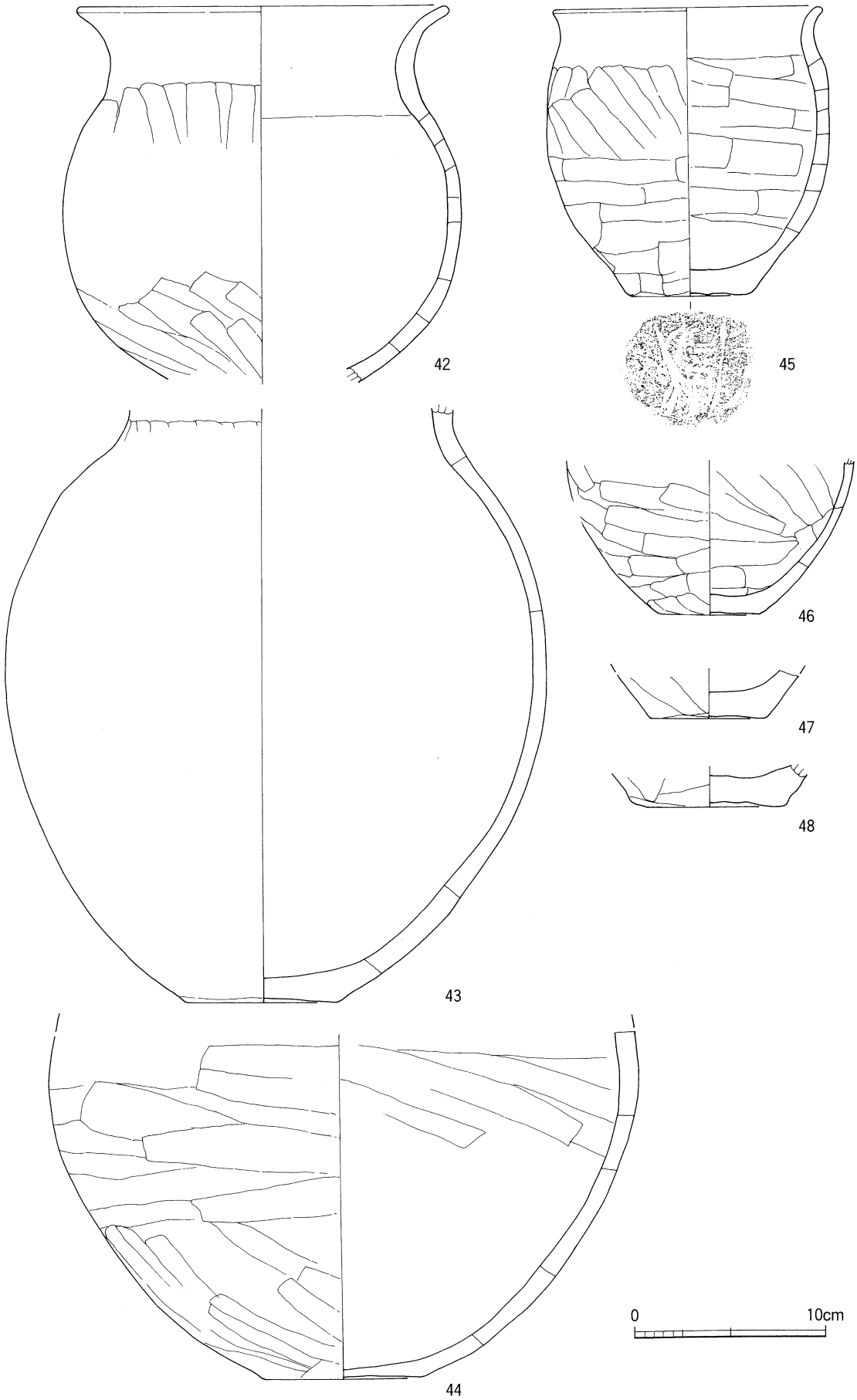
第43図　第５号住居跡カマド実測図



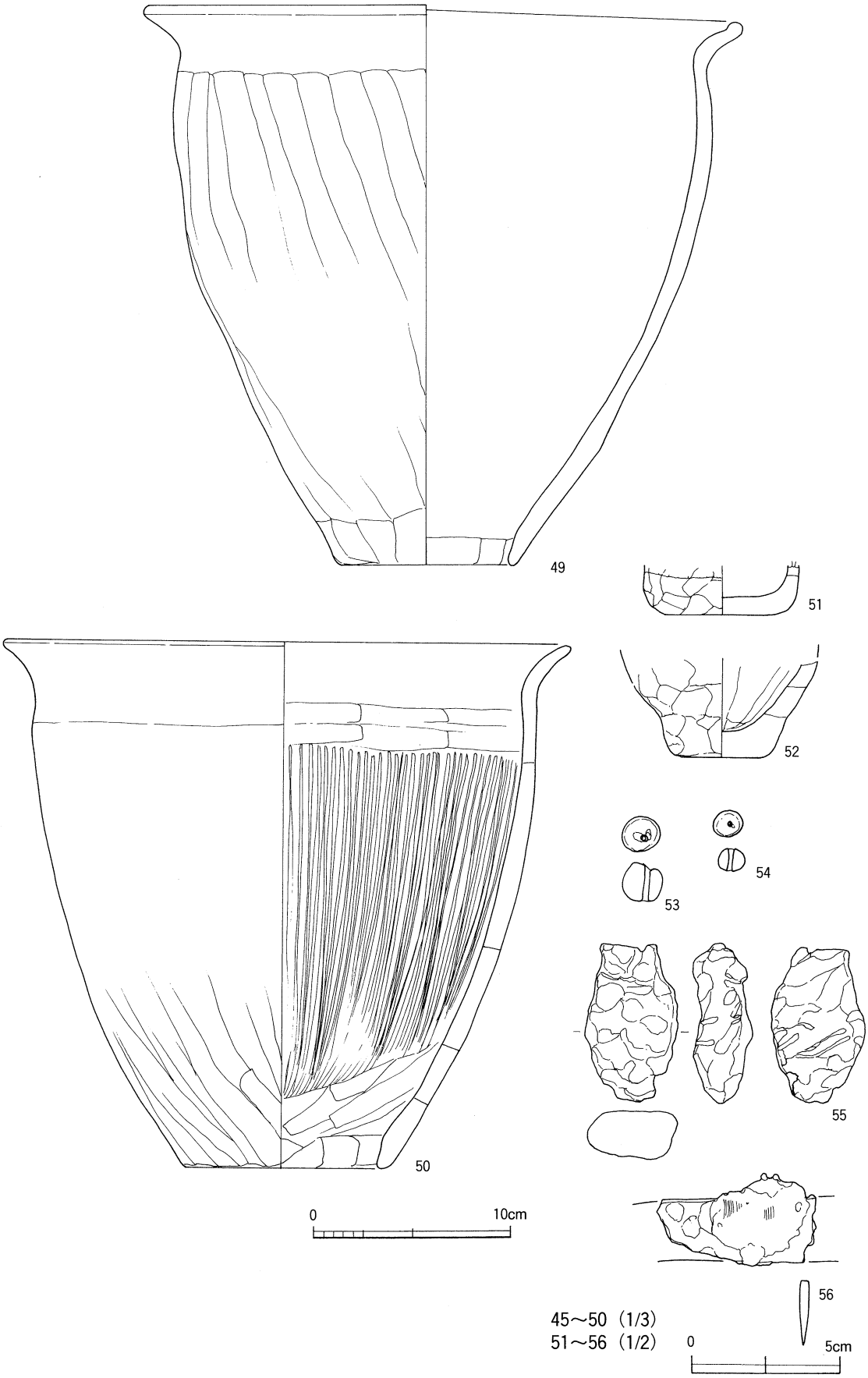
第44図　第５号住居跡出土遺物（１）



第45図　第５号住居跡出土遺物（２）



第46図　第５号住居跡出土遺物（３）



第47図　第５号住居跡出土遺物（４）

遺物　本跡からも多量の遺物が出土した。とくに第１号住居跡と同様に土師器坏は完形品を含め、実測可能なものが33点まとめて出土しており、やはり黒色処理を施したものも多いのが特徴である。その他土師器・高坏２点、鉢１点、甕12点、甑２点、粗製土器２点と器種構成は整っている。なお、ここでも多量に出土した土師器坏は大きく２種に器種分類でき、口縁部下に突き出した明瞭な段状の稜を有する須恵器模倣坏ＡⅠのものと口縁部が短く稜が僅かで坏ＢⅠを呈するものである。そのほか焼成粘土塊と鉄製鎌の刃部分が１点出土している。51・52は粗製土器である。51は坏形を呈する約１/４を残存する破片である。口縁部直下に輪積痕が明瞭に残り、指ナデによって整えられ、内面も指ナデで仕上げられている。胎土に石英・長石・スコリア粒を含み、色調はにぶい黄橙色10YR6/3を呈する。52は口縁部上端を欠損する鉢形を呈する。外面に明瞭な輪積痕を残し、手捏ねで粗い成形を施し、内面はヘラナデによって整形されている。胎土に石英・長石・黒色粒子を含み、色調は橙色7.5YR6/6を呈する。53・54は土製小玉である。53は全体的に歪んでいる。径13.7㎜、厚さ13.8㎜、孔は未貫通と貫通の２本がみられる。穿孔の際、やり直した結果２孔になったものであろう。貫通孔径2.4×4.3㎜の楕円形、重さ1.96ｇを測る。54は小粒で、径9.5㎜、厚さ8.7㎜、孔径0.9㎜の円形、重さ0.74ｇを測る。丁寧な仕上げで、表面が黒色10YR2/1を呈し、黒色処理を施している。55は焼成粘土塊である。長さ55.5㎜、幅21.1㎜、厚さ17.1㎜、重さ26.20ｇを測る。ヘラもしくは半截竹管状の工具痕が不規則にみられる。胎土に石英・長石・黒色粒子を含み、色調はにぶい橙色7.5YR7/4を呈する。56は鉄製鎌の刃部の破片である。現存長54.1㎜、刃幅最大23.1㎜、厚さ5.0㎜で、重さ16.54ｇを測る。銹化が著しく全体の形状を把握できない。

所見　出土した土器群は、いずれも古墳時代後期・６世紀後半期に相当するものである。

第５号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器坏	口径　14.60 底径　— 器高　5.80	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。口径がやや大きい。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR3/1） 良好	黒色処理 口縁部1/8 欠損
2	土師器坏	口径　13.00 底径　— 器高　6.00	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。器高がやや深い。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR3/1） にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	黒色処理 口縁部3/4 欠損
3	土師器坏	口径　13.40 底径　— 器高　5.20	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR7/6） 普通	黒色処理 口縁部1/4 欠損
4	土師器坏	口径　13.60 底径　— 器高　5.50	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR2/1） 良好	黒色処理 口縁部1/8 欠損
5	土師器坏	口径　13.20 底径　— 器高　5.30	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR3/1） 良好	黒色処理 完存品
6	土師器坏	口径　12.60 底径　— 器高　5.00	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	黒色処理 口縁部1/3 欠損
7	土師器坏	口径　12.40 底径　— 器高　[4.30]	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	黒色処理 口縁部1/4 残存
8	土師器坏	口径　13.20 底径　— 器高　5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 褐色（7.5YR4/3） にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	黒色処理 完存品
9	土師器坏	口径　13.00 底径　— 器高　5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5YR3/2） にぶい橙色（7.5YR7/3） 良好	黒色処理 ほぼ完存品

10	土師器 坏	口径　14.00 底径　— 器高　5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR5/3） 良好	黒色処理 完存品
11	土師器 坏	口径　12.20 底径　— 器高　4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 橙色（7.5YR6/6） 良好	黒色処理 完存品
12	土師器 坏	口径　13.20 底径　— 器高　4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒色（7.5YR2/1） にぶい橙色（7.5YR7/3） 良好	黒色処理 ほぼ完存品
13	土師器 坏	口径　13.40 底径　— 器高　4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒色（7.5YR1.7/1） にぶい橙色（7.5YR7/3） 普通	黒色処理 口縁部1/6 欠損
14	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　4.40	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/3） 良好	黒色処理 口縁部1/4 残存
15	土師器 坏	口径　12.50 底径　— 器高　4.30	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、のちヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	石英・長石粒を含む 黒色（5YR1.7/1） 良好	黒色処理 ほぼ完存品
16	土師器 坏	口径　12.80 底径　— 器高　4.45	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5YR2/2） 良好	黒色処理 完存品
17	土師器 坏	口径　13.20 底径　— 器高　[4.50]	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 良好	黒色処理 口縁部1/3 残存
18	土師器 坏	口径　12.40 底径　— 器高　[4.30]	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 黒褐色（7.5YR3/2） 良好	黒色処理 口縁部1/3 残存
19	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　[3.70]	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（5YR7/4） にぶい黄橙色（10YR6/3） 良好	赤彩 口縁部1/3 残存
20	土師器 坏	口径　10.00 底径　— 器高　3.80	やや口径が小さくなる坏である。須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 褐色（7.5YR4/3） 良好	完存品
21	土師器 坏	口径　14.20 底径　— 器高　[5.60]	器高が深い坏である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/4） 良好	黒色処理 口縁部1/3 残存
22	須恵器 坏蓋	口径　15.00 底径　— 器高　[2.20]	口縁部は若干内湾気味に開き、体部との境には稜を有する。口唇部は外方向につまみ出され、内面には内斜した面をもつ。	ロクロ成形。	石英・長石粒を含む 暗青灰色（5B4/1） 良好	口縁部破片 蓋もしくは 高坏の可能 性もあり
23	土師器 坏	口径　15.00 底径　6.50 器高　4.60	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰褐色（7.5YR4/2） 浅黄橙色(10YR8/3) 普通	黒色処理 底部木葉痕 完存品
24	土師器 坏	口径　15.00 底径　— 器高　4.70	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	黒色処理 口縁部1/8 欠損
25	土師器 坏	口径　15.00 底径　— 器高　4.50	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 褐灰色（10YR4/1） 良好	黒色処理 ほぼ完存品
26	土師器 坏	口径　14.00 底径　— 器高　4.50	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 浅黄色（2.5Y8/3） 良好	黒色処理 口縁部2/3 欠損
27	土師器 坏	口径　14.40 底径　— 器高　4.50	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR5/2） 内面 浅黄橙色（7.5YR8/4） 良好	黒色処理 完存品
28	土師器 坏	口径　15.00 底径　— 器高　4.30	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 褐灰色（7.5YR4/1） 良好	黒色処理 完存品
29	土師器 坏	口径　13.80 底径　— 器高　4.50	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	黒色処理 完存品

30	土師器 坏	口径 14.00 底径 — 器高 4.10	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/4） 良好	黒色処理 口縁部1/6欠損
31	土師器 坏	口径 16.00 底径 — 器高 [3.90]	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/2） 内面 褐灰色（10YR5/1） 良好	黒色処理 1/4残存
32	土師器 坏	口径 12.00 底径 — 器高 [3.80]	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/3） 良好	口縁部1/3残存
33	土師器 坏	口径 13.00 底径 — 器高 [5.00]	底部を欠損する。体部は内湾気味に開き、口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5YR1.7/1） 普通	口縁部1/4残存
34	土師器 高坏	口径 17.00 底径 — 器高 [4.30]	坏部のみ、体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。体部と口縁部の境に稜を有する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 赤褐色（2.5YR4/6） 良好	内外面赤彩 口縁部1/3残存
35	土師器 高坏	口径 21.20 底径 14.20 器高 14.50	脚部の柱状部はやや太めで、柱状部と裾部の移行はやや強く屈曲しながらラッパ状に開き、坏部は体部が内湾して開き、口縁部は大きく外反する。体部と口縁部の境に明瞭な稜を有する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 明赤褐色（2.5YR5/8） 良好	赤彩 口縁部2/3欠損 底部3/4欠損
36	土師器 小型鉢	口径 9.40 底径 4.40 器高 7.10	やや上げ底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、体部と口縁部の境に弱い稜を有し、口縁部は直立する。また底部と肩部は肥厚する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・チャート・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	口縁部2/3欠損
37	土師器 甕	口径 20.60 底径 — 器高 [9.10]	肩部が張り、頸部で内傾気味に立ち上がり、口縁部で強く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 灰黄褐色（10YR4/2） 良好	口縁部1/2残存
38	土師器 甕	口径 19.20 底径 — 器高 [16.30]	体部は球形を呈し、頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は強く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR4/2） 内面 にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	口縁部1/4残存
39	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高 [6.50]	肩部が張り、頸部で直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	頸部残存
40	土師器 甕	口径 — 底径 7.60 器高 [8.50]	平底の底部から体部は内湾気味に開く。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR3/1） 内面 にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	底部1/2残存
41	土師器 甕	口径 — 底径 8.60 器高 [2.80]	平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。底部は肥厚し、底面に木葉痕が残置している。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（2.5Y3/1） 良好	底部木葉痕 底部1/3残存
42	土師器 甕	口径 19.20 底径 — 器高 [19.60]	底部を欠損する。体部は球形を呈し、頸部でやや内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 明赤褐色（2.5YR5/6） 良好	口縁部1/3残存 体部1/4残存
43	土師器 甕	口径 — 底径 7.80 器高 [30.80]	やや上げ底気味の底部をもち、体部は胴長で、内湾気味に立ち上がる。	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/3） 普通	口縁部欠損
44	土師器 甕	口径 — 底径 8.20 器高 [18.10]	やや上げ底気味の底部から体部は球形を呈する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	底部残存 胴部1/2残存
45	土師器 甕	口径 14.00 底径 6.60 器高 15.00	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。底部は肥厚する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR4/2） 内面 橙色（7.5YR7/6） 良好	底部木葉痕 口縁部・体部1/2欠損
46	土師器 甕	口径 — 底径 5.40 器高 [8.00]	やや上げ底気味の底部から体部は球形を呈する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR6/6） 良好	底部残存
47	土師器 甕	口径 — 底径 6.00 器高 [2.60]	やや上げ底気味の底部から体部は外傾して立ち上がる。底部は肥厚する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	底部残存
48	土師器 甕	口径 — 底径 8.00 器高 [2.20]	やや上げ底気味の底部から体部は外傾して立ち上がる。底部は肥厚する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・黒色粒子・石英・長石粒を含む 黒色（7.5YR1.7/1） 内面 にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	底部2/3残存
49	土師器 甑	口径 23.20 底径 9.00 器高 28.40	単孔式の甑である。体部は内湾気味に大きく開き、口縁部は強く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（5YR7/4） 良好	口縁部1/3欠損

50	土師器 甑	口径　28.60 底径　8.60 器高　26.80	単孔式の甑である。体部は内湾気味に大きく開き、口縁部は外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデのちヘラミガキ。	チャート・石英・長石粒を含むにぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	口縁部1/4欠損
51	手捏土器	口径　— 底径　7.20 器高　[2.50]	平底の底部から体部は直線的に立ち上がる。	外面指頭によるナデ。内面ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含むにぶい黄橙色（10YR6/3） 良好	底部1/4残存
52	手捏土器	口径　— 底径　5.60 器高　[5.00]	鉢形を呈する。底部は小さく、体部は外傾して立ち上がる。	外面指頭によるナデ。内面ナデ。	チャート・石英・長石粒を含む橙色（7.5YR6/6） 良好	底部残存

第６号住居跡（ＳＩ－６）（第48・49図　ＰＬ７・34）

位置　調査区の中央、標高23.8ｍに位置する。

規模　南北軸6.58ｍ　東西軸6.68ｍで、若干東西軸が長くなっている方形住居である。

主軸方向　Ｎ－23°－Ｅ。

壁　確認面からの深さは33～49㎝を測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

壁溝　壁溝は西壁および北壁の西側に構築されており、床面からの深さは４～6.5㎝、幅18～23㎝で、断面Ｕ字状に掘り込まれていた。また間仕切り溝が２本検出されている。間仕切り溝１として、南壁の西側に構築されている。長さ128㎝、幅19～22㎝、深さ10㎝を測る。間仕切り溝２として、南壁の東側に構築されている。長さ138㎝、幅26～30㎝、深さ12㎝を測る。

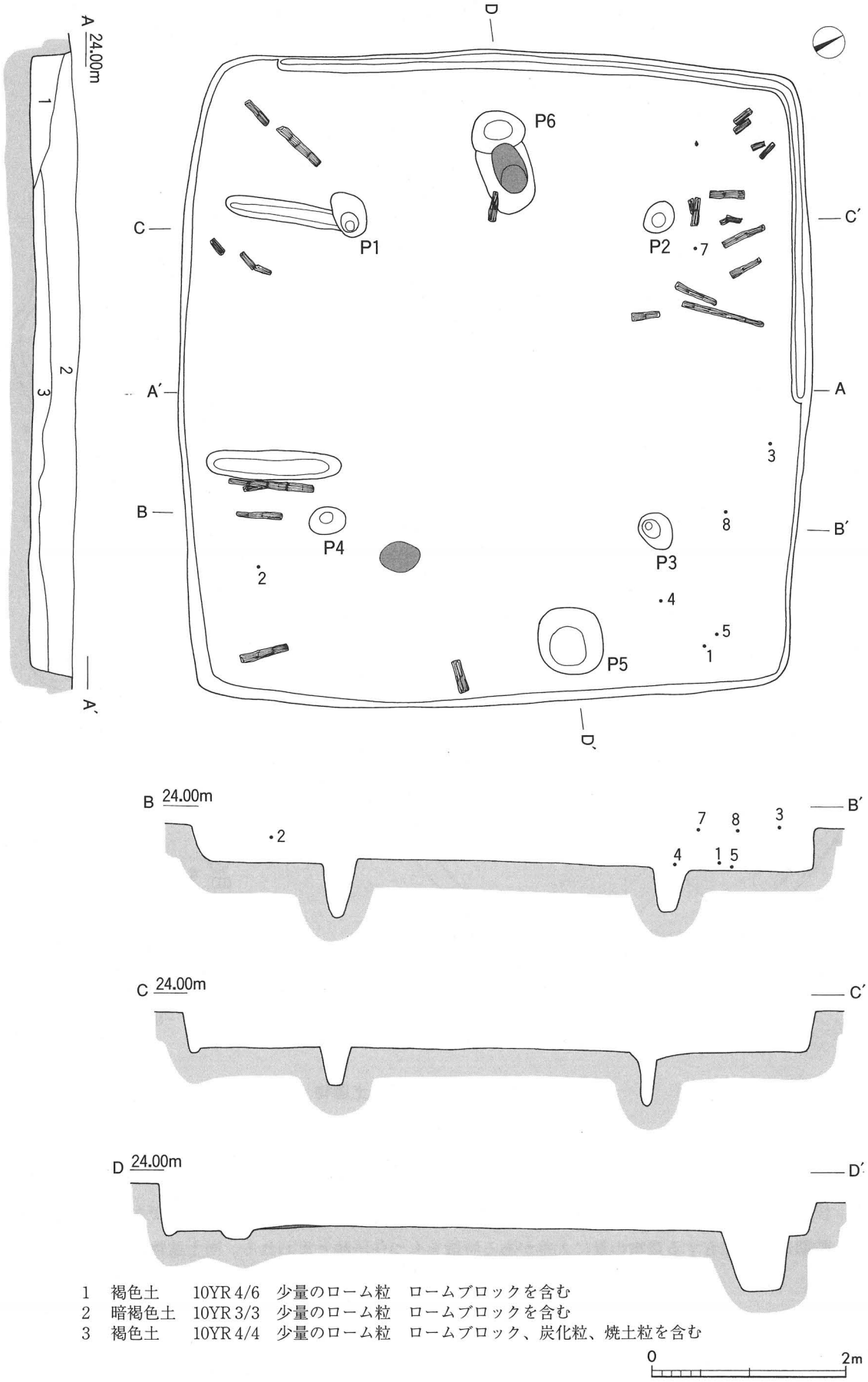
床　貼床で、部分的に硬化面を確認した。とくに西側炉址周辺および床面中央付近が顕著であった。掘形の深さはほぼ均等で、10～15㎝前後の掘削で貼床面を構築していた。なお、壁際に接して屋根材と推定される炭化物が検出された。

ピット　主柱穴は竪穴対角線上に４本検出されている。Ｐ１は径32×50㎝、深さ55㎝の楕円形。Ｐ２は径29×36㎝、深さ38㎝の円形。Ｐ３は径32×41㎝、深さ42㎝の円形。Ｐ４は径30×36㎝、深さ60㎝の楕円形を呈する。東壁中央北側に貯蔵穴Ｐ５が穿ってある。長軸69㎝、短軸66㎝、深さ60㎝の方形を呈する。また炉址の西側に接するＰ６は径40×54㎝、深さ９㎝の楕円形を呈する。

炉　西壁中央寄りに構築されている。長軸85㎝、短軸51㎝、深さ２㎝の楕円形で、炉址底面は火熱による赤化が著しい。覆土は僅かに焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積していた。

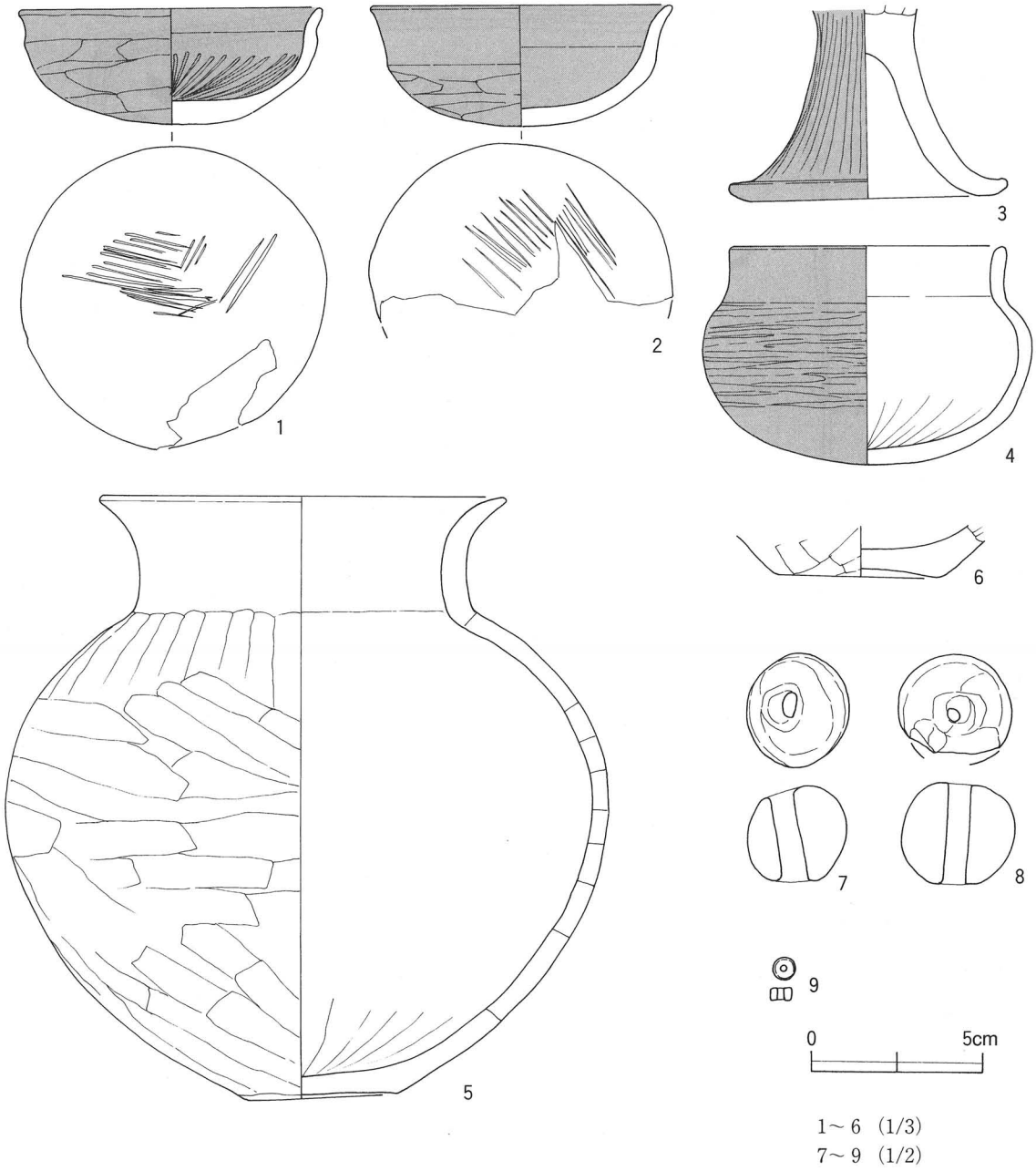
覆土　３層の覆土を確認した。埋め戻し土層で、上層の２層暗褐色土層は少量のローム粒子・ロームブロックを含み、若干締りに欠ける。床面直上の３層褐色土層は少量のローム粒子・ロームブロック・炭化粒・焼土粒を含むみ、締りがある。下層の１層褐色土は少量のローム粒・ロームブロックを含む。壁際に流れ込んだ堆積層であろう

遺物　住居跡の規模の割に出土遺物は今回検出された住居群のなかでは少ない部類に入る。土師器・坏２点のほか、高坏１点、短頸壺１点、甕２点のほか、土玉２点、臼玉１点が検出されている。うち、土師器坏の底面に転用砥石として利用された擦溝痕が認められる。７・８は土玉である。７は径31.8㎜、厚さ28.4㎜、孔径8.7㎜、重さ24.60gを測る。上・下面に面取りが施され、比較的丁寧に仕上げられている。胎土は石英・長石粒を含み、色調はにぶい赤褐色5YR5/4を呈する。８は一部欠損している。径33.5㎜、厚さ29.9㎜、孔径7.3㎜、重さ25.40gを測る。比較的丁寧に仕上げられている。胎土は石英・長石粒を含み、色調は橙色5YR6/6を呈する。９は滑石製臼玉である。完存品で、径6.2㎜、厚さ3.9㎜、孔径2.3㎜、重さ0.26gを測る。丁寧に仕上げられている。管切りによって成形していると考えられるが、上・下両面ともに切断面が平坦ではない。側面の



1　褐色土　10YR 4/6　少量のローム粒　ロームブロックを含む
2　暗褐色土　10YR 3/3　少量のローム粒　ロームブロックを含む
3　褐色土　10YR 4/4　少量のローム粒　ロームブロック、炭化粒、焼土粒を含む

第48図　第６号住居跡実測図



第49図　第６号住居跡出土遺物

擦痕は穿孔方向と平行についている。なお、片面からの穿孔である。色調は暗灰色N3/を呈する。

所見　住居跡は火災住居であり、一辺の大きさが6.5m超える大形住居の割に遺物の出土がかなり限定されていた。時期により保有する遺物の量に大差がある特徴をもつ住居跡と思われる。出土遺物から５世紀末葉に相当する。

第６号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径　13.10 底径　2.00 器高　5.00	丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は短く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 赤色（10YR4/6） 良好	赤彩 底部転用砥石 口縁1/8欠損
2	土師器 坏	口径　13.00 底径　4.00 器高　5.20	丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む 赤褐色（2.5YR4/6） 良好	赤彩 底部転用砥石 1/2残存
3	土師器 高坏	口径　— 底径　12.00 器高　[8.20]	脚部のみの破片。脚部は中空で、長めであり、柱状部から裾部への移行はなだらかなラッパ状に開く。	外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 明褐色（7.5YR5/6） 良好	赤彩 底部1/8残存
4	土師器 短頭壺	口径　11.90 底径　3.00 器高　9.50	丸底の底部から体部は扁平の球形を呈し、口縁部はほぼ直立して立ち上がる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリのちヘラミガキ。内面ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 赤橙色（10R6/8） 良好	赤彩 スス付着 ほぼ完存品
5	土師器 甕	口径　17.60 底径　6.80 器高　21.20	やや上げ底気味の底部から体部は球形を呈し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリのちヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5YR5/3） 良好	完存品
6	土師器 甕	口径　— 底径　7.00 器高　[1.80]	やや上げ底気味の底部から体部は外傾して立ち上がる。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	チャート・黒色粒子・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR4/2） 良好	底部1/4残存

第７号住居跡（ＳＩ－７）（第50～52図　ＰＬ７・34）

位置　調査区の南西側、標高23.61～23.80mに位置する。

規模　南北軸4.15m　東西軸4.44mで、若干東西軸が長くなっている方形住居である。

主軸方向　主軸方位はＮ－43°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは31.5～42.5cmを測り、ほぼ垂直気味に立上がる。

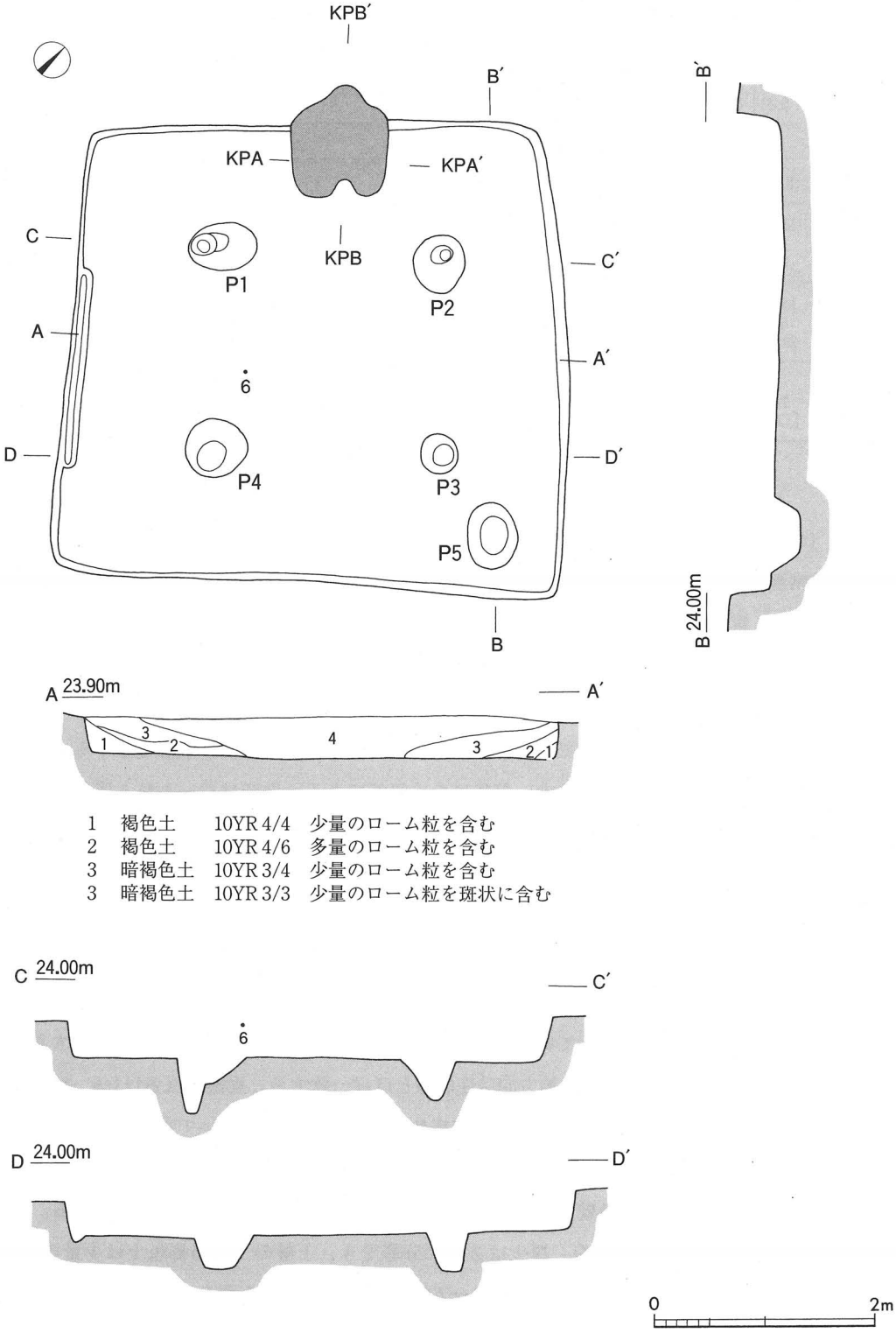
壁溝　壁溝は西壁の中央部のみ構築されている。幅13～16cm、深さ４cmの断面Ｕ字形を呈する。

床　全体的に北側が高く、南側が低いものの、起伏はなく平坦である。貼床はローム粒と黒色土の混合土で全体的に施されており、またカマド前面から住居中央周縁にかけて顕著な硬化面が広がる。掘形は壁沿いが深く厚い貼床を構築しているのに対して、中央部が浅く部分的に地山が床面になっている箇所がみられ、貼床が極端に薄層となっている。

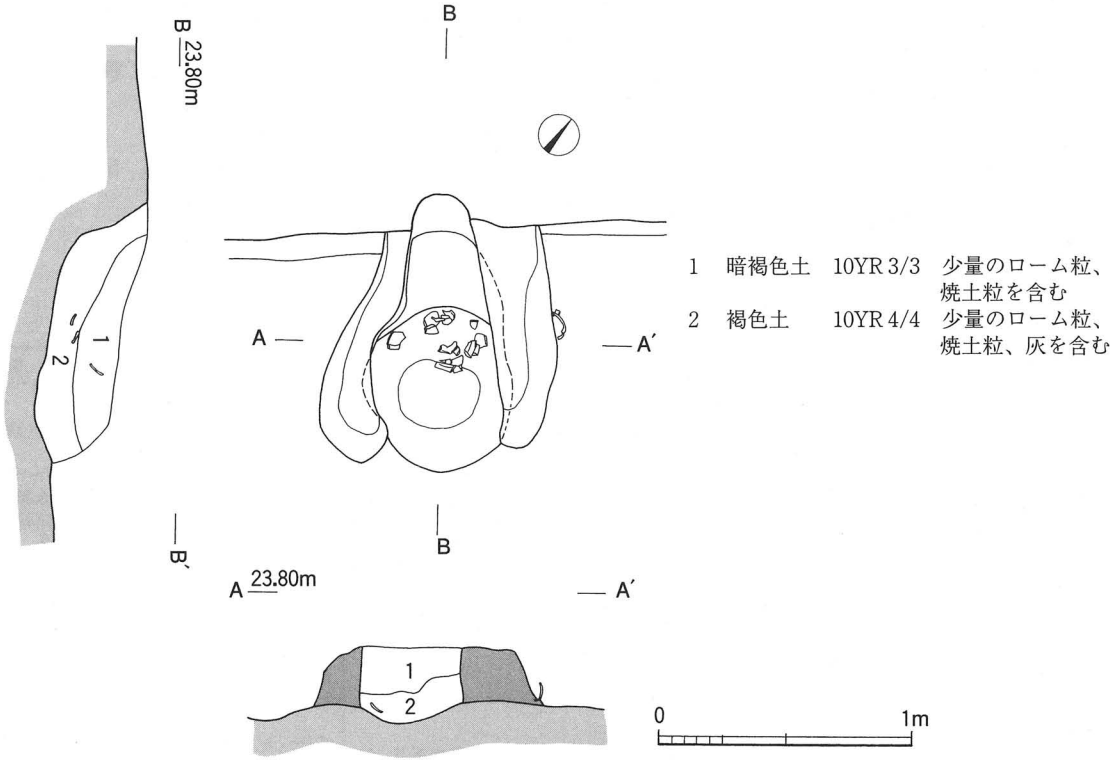
ピット　主柱穴は竪穴対角線上に４本検出されている。Ｐ１は径42×61cm、深さ50cmの楕円形。Ｐ２は径49×52cm、深さ46cmの円形。Ｐ３は径34×36cm、深さ35cmの円形。Ｐ４は径54×55cm、深さ28cmの円形を呈する。東コーナー壁に貯蔵穴Ｐ５が穿ってある。長軸60cm、短軸46cm、深さ21cmの楕円形を呈する。

カマド　北壁の中央に構築されている。主軸方向は住居跡とほぼ一致する。規模は長さ111cm、幅90cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径59×65cm、深さ６cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径28×31cmを測る。奥壁は45°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅25cm、奥行15cmを測る。カマド本体中央部から甕が２個体出土した。なお、覆土は２層に分層でき、上層の１層暗褐色土は少量のローム粒、焼土粒子を含む。下層の２層は褐色土で、少量のローム粒と焼土粒子・灰を含む。

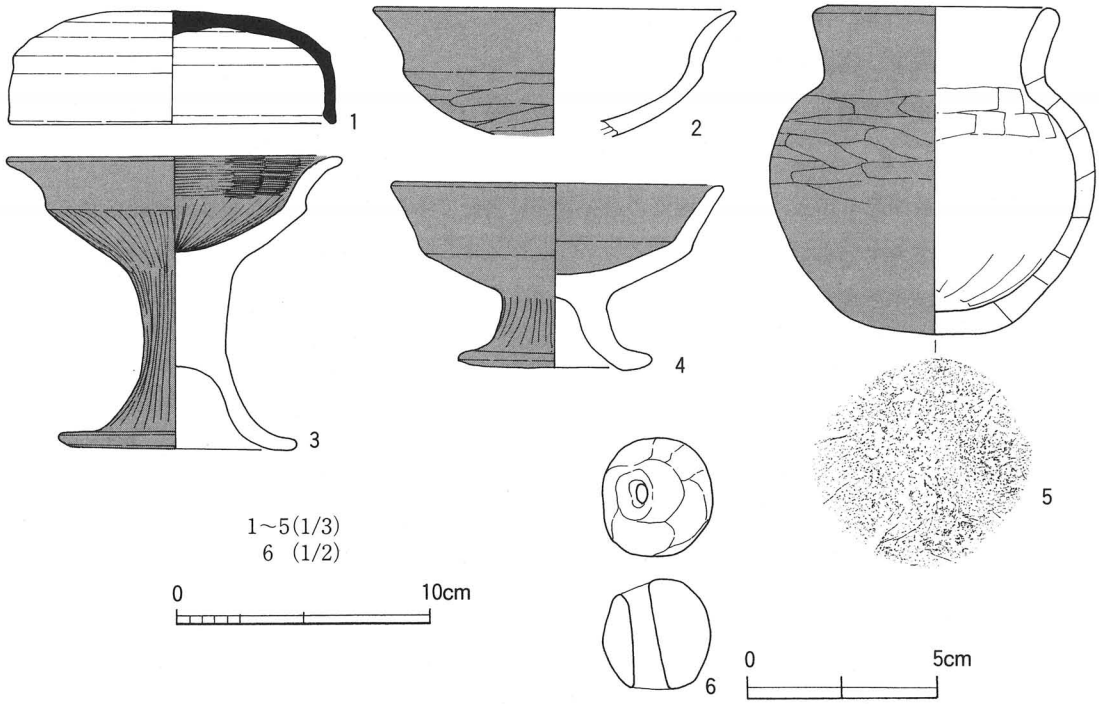
覆土　４層の覆土を確認した。埋め戻し土層で、上層の４層暗褐色土層は少量のローム粒子を含み、若干締りに欠ける。中層の３層暗褐色土層は少量のローム粒子を含むみ、締りがある。床面直上の２層褐色土層は多量のローム粒子を含み、締りがある。下層の１層褐色土は少量のローム粒を含む。壁際に流れ込んだ堆積層である。



第50図　第７号住居跡実測図



第51図　第７号住居跡カマド実測図



第52図　第７号住居跡出土遺物

遺物　遺物の大半はカマド址内から出土している。須恵器・蓋、土師器・高坏、小型甕のほか、土玉が出土している。６は土玉である。径31.4㎜、厚さ28.9㎜、孔径9.6㎜、重さ27.08ｇを測る。比較的丁寧に仕上げられている。胎土は石英・長石粒・黒色粒子を含み、色調はにぶい黄橙色10YR7/4を呈する。

所見　本住居跡はカマドを設置段階の初期に相当する。須恵器・蓋はＴＫ23型式併行であり、５世紀末葉に比定されるが、土師器については古墳時代後期・６世紀初頭の所産と考えられる。

第７号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	須恵器 蓋	口径　13.00 底径　— 器高　4.40	天井部は全体的にやや丸みをもち、体部は内湾気味で、体部と口縁部の境は明瞭である。口縁部は直立気味に下降する。	ロクロナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 灰色（N6/1） 良好	1/12残存
2	土師器 坏	口径　14.20 底径　— 器高　[5.00]	体部は内湾気味に開き、口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁部は弧線状に大きく外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	チャート・黒色粒子・石英・長石粒を含む 赤褐色（2.5YR4/6） 良好	赤彩 口縁3/4残存
3	土師器 高坏	口径　13.20 底径　9.50 器高　11.70	坏部の体部はやや内湾気味に開き、口縁部は弧状に外反する。体部と口縁部の境に稜を有する。脚部の柱状部は太めで長く、裾部はなだらかな弧線を描きながら開く。	外面ヨコナデ、ヘラケズリのちヘラミガキ。内面ナデのちヘラミガキ。	雲母・黒色粒子・石英・長石粒を含む 外面 橙色（5YR6/6） 内面 赤色（10R4/8） 良好	赤彩 底部1/3欠損
4	土師器 高坏	口径　13.00 底径　7.60 器高　7.30	坏部の体部はやや内湾気味に開き、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。体部と口縁部の境に稜を有する。脚部は中空で、太く、短めである。柱状部から裾部の移行は強く屈曲する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む 赤色（10R4/8） 良好	赤彩 口縁1/3欠損 底部1/2欠損
5	土師器 甕	口径　9.60 底径　5.00 器高　13.00	小型の甕である。丸底に近い底部から体部は球形を呈し、口縁部は直線的に外傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 外面 にぶい赤褐色（5YR5/6） 内面 黒褐色（10YR3/1） 良好	外面赤彩 口縁1/2欠損

第９号住居跡（ＳＩ－９）（第53～57図　ＰＬ８・35）

位置　調査区の中央で、標高23.73～23.79ｍに位置する。

規模　カマドを北壁に設置し、東西軸3.64ｍ、南北軸の短軸3.02ｍで、東西辺が長い長方形の住居跡である。

主軸方向　Ｎ－17°－Ｅ。

壁　確認面からは最深部で16㎝、南壁と西壁の遺存状態は良好である。壁はいずれも外傾気味に立ち上がる。

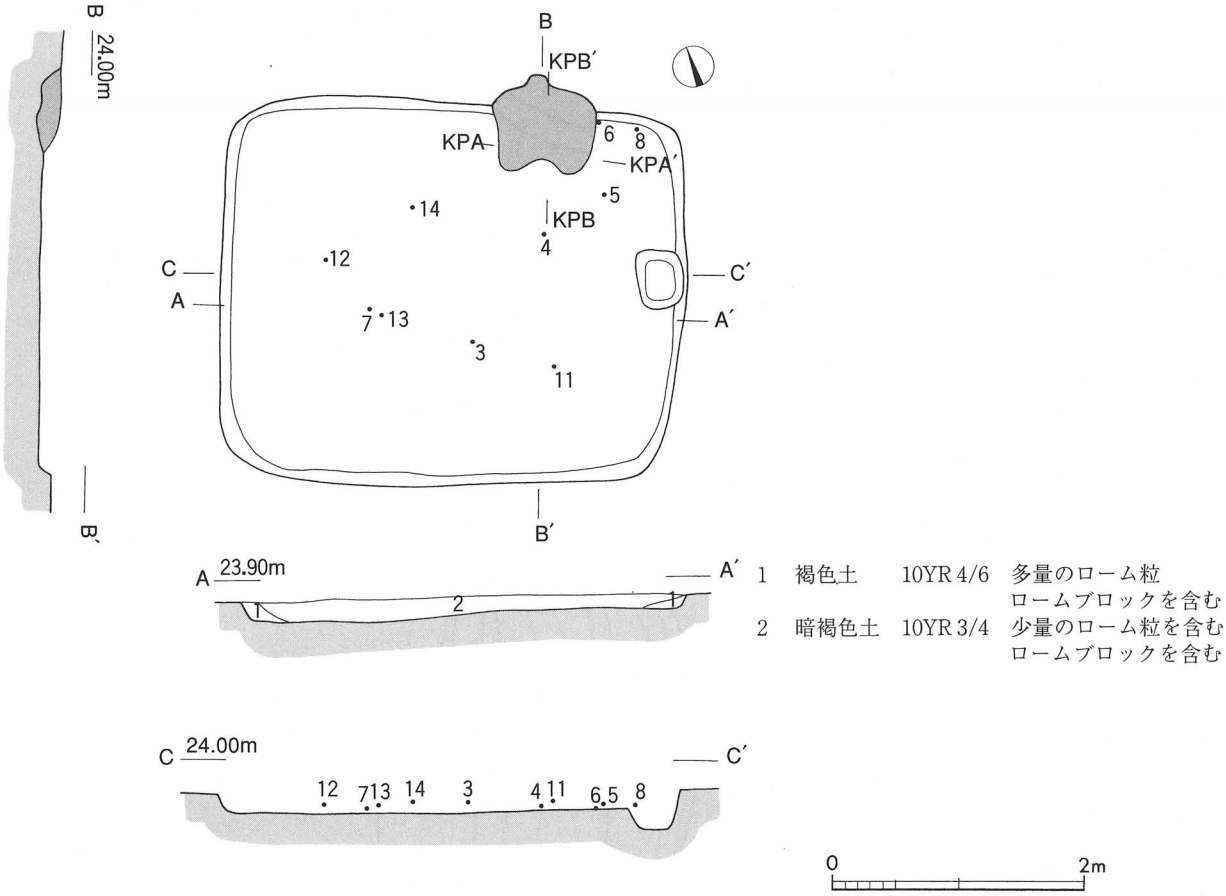
壁溝　壁溝は構築されていない。

床　貼床で、掘形は不整形に掘り込むものの、極端に深く掘り窪めることはなく、５～15㎝前後とほぼ均等に掘り込んでいる。

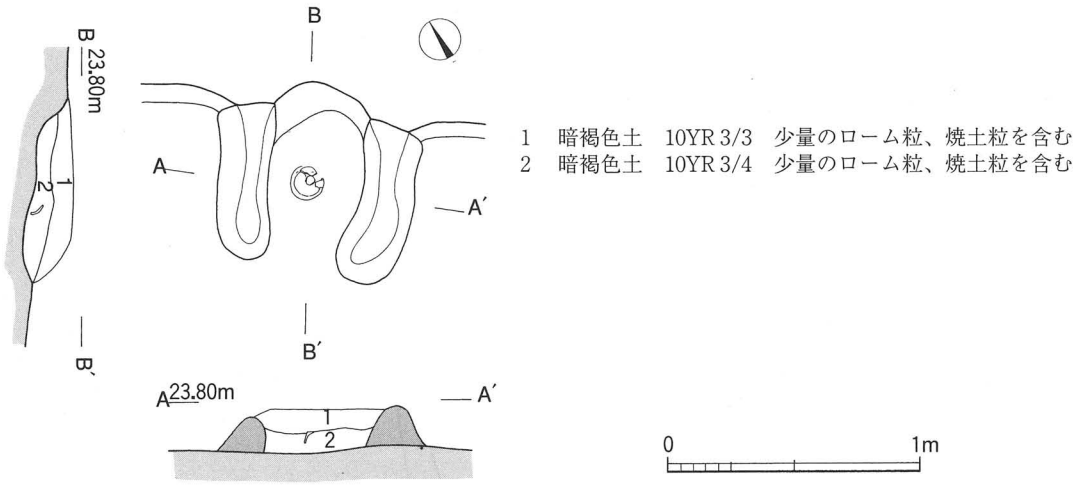
ピット　東壁際中央に沿って１本穿っている。方形ピットで径36×45㎝、深さ15㎝を測る。

カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡と一致する。規模は長さ80㎝、幅77㎝で、袖部は壁面に貼付けられ、灰白砂質粘土を構築材に、暗褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径34×55㎝、深さ４㎝の楕円形状に掘り窪められ、火床面は明瞭ではないが、径25㎝を測る。奥壁は48°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅35㎝、奥行12㎝を測る。覆土は２層確認された。上層の１層は少量のローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土。下層の２暗褐色土は少量のローム粒・焼土粒子を含む。

覆土　覆土は２層に分層される。いずれも埋め戻し土層である。住居跡の大部分を覆っているのは上層の２層褐色土で、ローム粒子・ロームブロックを多量に含み、締まりがある。下層の１層褐色土は壁際に流れ込



第53図　第９号住居跡実測図

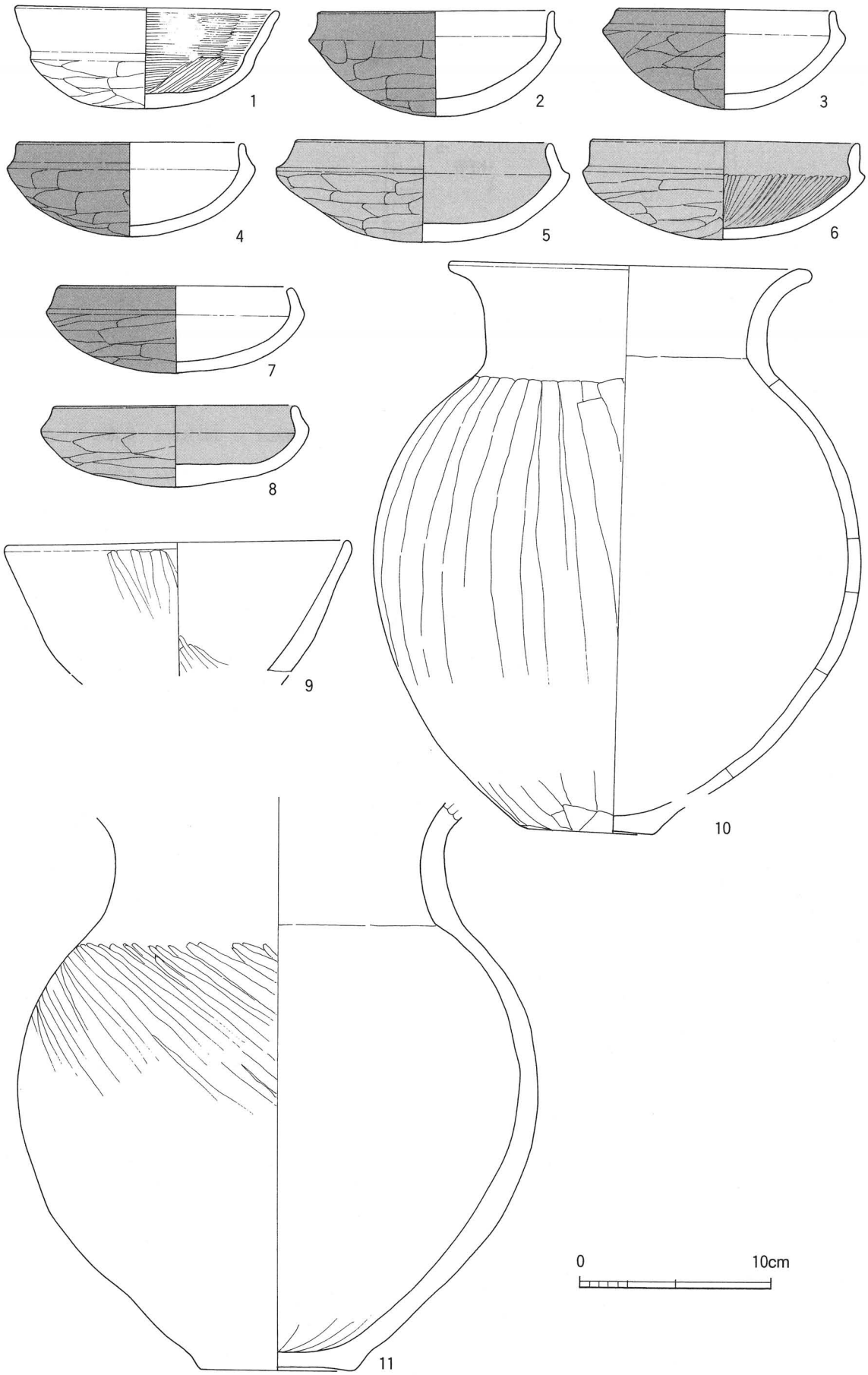


第54図　第９号住居跡カマド実測図

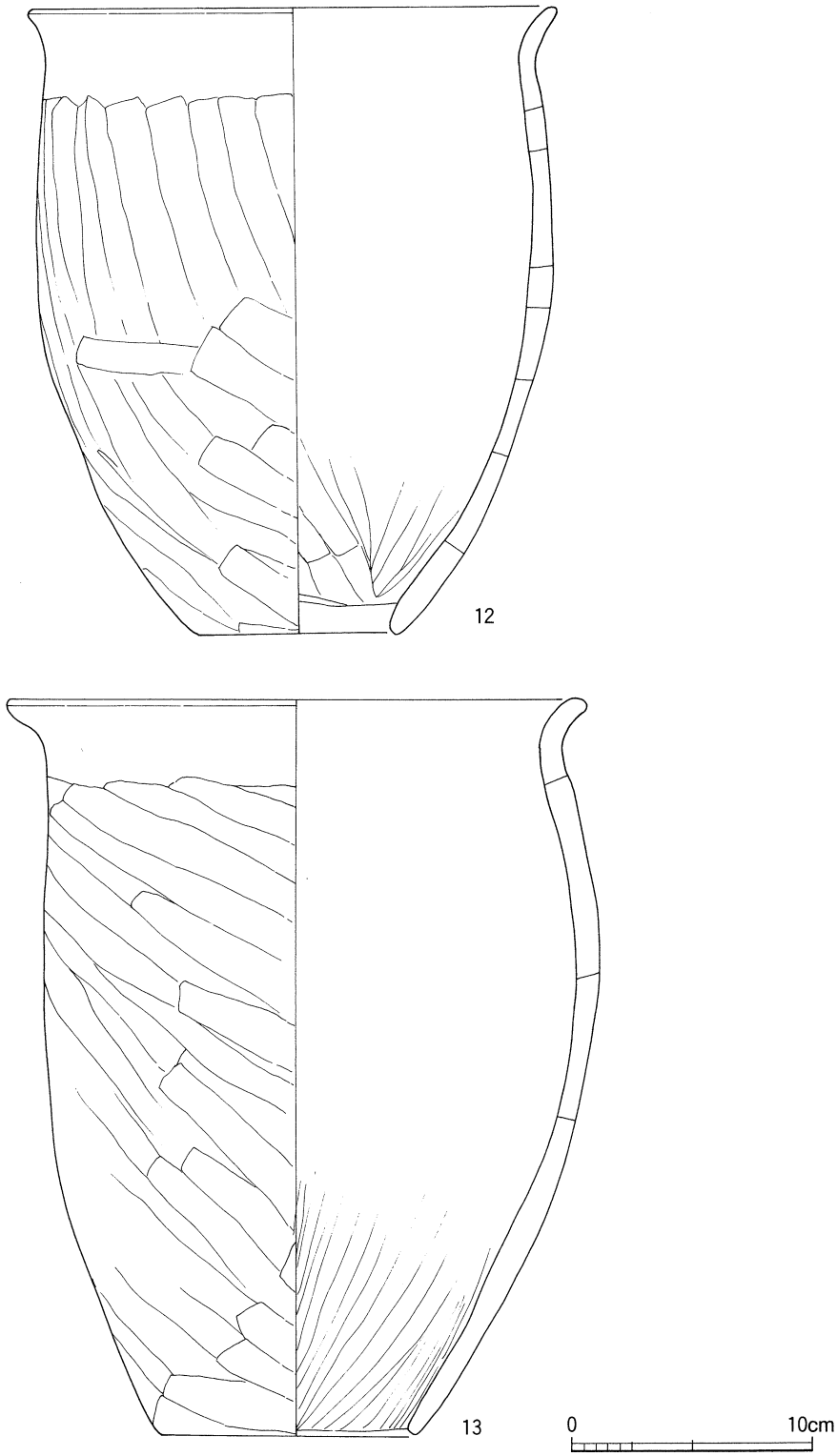
んだ堆積層である。

遺物　小形の住居にしては遺物の量は多いほうである。出土遺物は土師器坏、鉢、甕、甑であるが、甑３点の検出は特筆される。

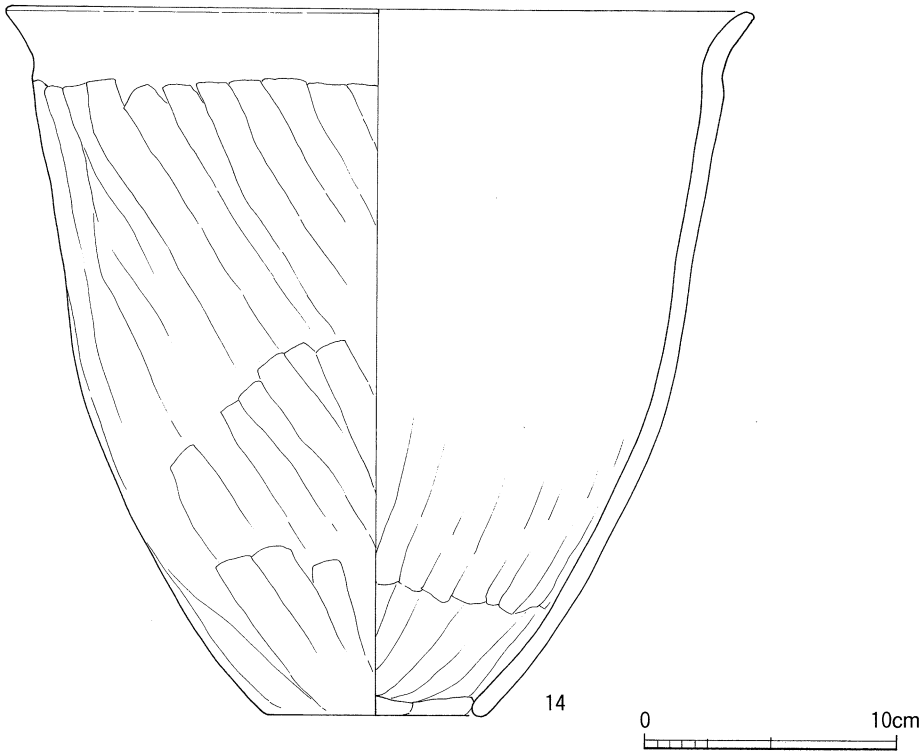
所見　出土遺物から古墳時代後期・６世紀前半に相当するものと思われる。



第55図　第９号住居跡出土遺物（１）



第56図　第９号住居跡出土遺物（２）



第57図　第９号住居跡出土遺物（３）

第９号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径　13.60 底径　— 器高　5.20	丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。	外面ヨコナデのちヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	雲母・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	口縁1/3欠損
2	土師器 坏	口径　12.20 底径　— 器高　5.50	身高が深い。須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は直立して立ち上がる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	外面赤彩 口唇一部欠損
3	土師器 坏	口径　11.40 底径　— 器高　5.20	身高が深い。須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は直立気味に立ち上がる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/3） 良好	外面赤彩 口縁1/2欠損
4	土師器 坏	口径　11.80 底径　— 器高　4.90	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（7.5YR8/3） 良好	外面赤彩 口唇1/4欠損
5	土師器 坏	口径　13.20 底径　— 器高　5.30	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 黒色（7.5YR2/1） 良好	黒色処理 完存品
6	土師器 坏	口径　14.00 底径　— 器高　5.10	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデのちヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰褐色（7.5YR5/2） 良好	黒色処理 口縁1/8欠損 体部1/8欠損
7	土師器 坏	口径　12.20 底径　— 器高　4.50	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	外面赤彩 口縁一部欠損
8	土師器 坏	口径　12.60 底径　— 器高　4.30	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 黒褐色（10YR3/2） 良好	黒色処理 完存品
9	土師器 鉢	口径　18.00 底径　— 器高　[6.80]	体部のみで、体部はほぼ直線的に外傾して開く。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	口縁1/6残存

10	土師器 甕	口径　19.00 底径　7.00 器高　29.30	やや上げ底気味の底部から体部は球形を呈し、頸部は直立して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	口縁1/6欠損 体部1/6欠損
11	土師器 甕	口径　— 底径　9.00 器高 [29.50]	やや上げ底気味の底部から体部は球形を呈し、頸部は直立して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。頸部は肥厚する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリのちヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/4） 良好	口縁2/3 体部1/3 底部1/2残存
12	土師器 甑	口径　21.80 底径　8.30 器高　26.00	単孔式の甑である。体部は内湾気味に直立して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（7.5YR7/4） 良好	単穴式 口縁2/3欠損
13	土師器 甑	口径　24.00 底径　11.00 器高　30.20	単孔式の甑である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（7.5YR8/3） 良好	口縁1/2 底部1/2残存
14	土師器 甑	口径　25.20 底径　9.00 器高　27.90	単孔式の甑である。体部は内湾気味に大きく開き、口縁部は緩く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	チャート・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/4） 良好	口縁1/4 底部1/2残存

第10号住居跡（ＳＩ—10）（第58～61図　ＰＬ９・36）

位置　調査区の北側で、標高23.69～23.76ｍに位置する。

規模　カマドを北壁に設置し、南北軸を長軸とし6.64ｍを測り、東西軸の短軸6.62ｍで、方形の住居跡である。

主軸方向　Ｎ－８°－Ｗ。

壁　確認面からは最深部で64cmであり、壁はいずれも外傾気味に立ち上がる。

壁溝　カマド設置の北壁を除き、西・東・南壁に構築されており、床面からの深さは10～25cm、幅は１～10cmを測り、底面は断面Ｕ字状を呈する

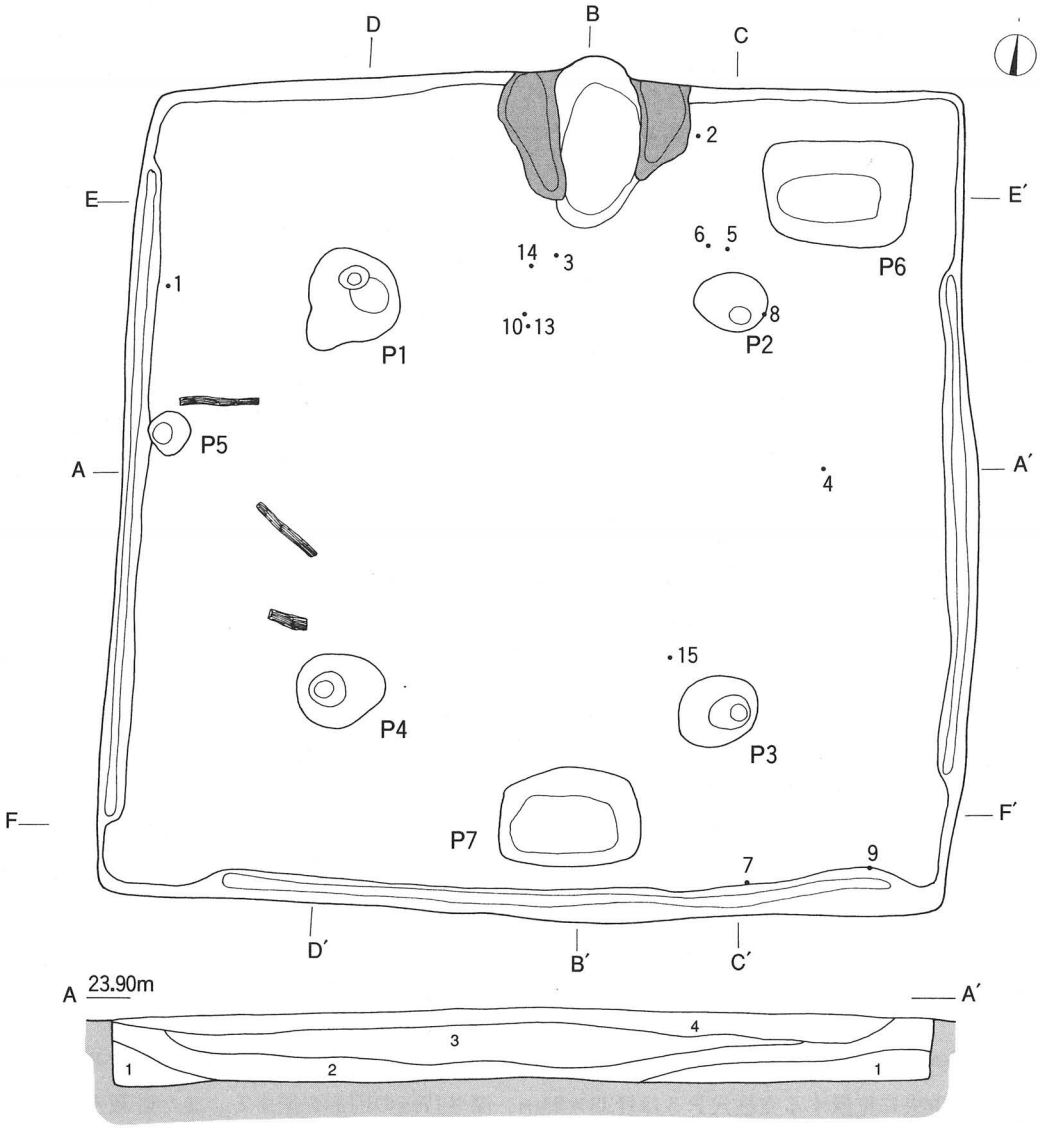
床　貼床で、掘形は不整形に掘り込むものの、極端に深く掘り窪めることはなく、5～15cm前後とほぼ均等に掘り込んでいる。

ピット　主柱穴は竪穴対角線上に４本検出されている。Ｐ１は径78×86cm、深さ112cmの楕円形。Ｐ２は径46×58cm、深さ34cmの楕円形。Ｐ３は径56×63cm、深さ56cmの楕円形。Ｐ４は径59×70cm、深さ58cmの楕円形を呈する。西壁中央に位置する支柱穴Ｐ５は径33×35cm、深さ17cmの円形を呈する。また貯蔵穴として２基検出された。まず北壁カマド設置部の東側に貯蔵穴Ｐ６が構築している。長軸101cm、短軸81cm、深さ72cmの長方形を呈する。また南壁中央に貯蔵穴Ｐ７が構築している。長軸108cm、短軸78cm、深さ44cmの長方形を呈する。

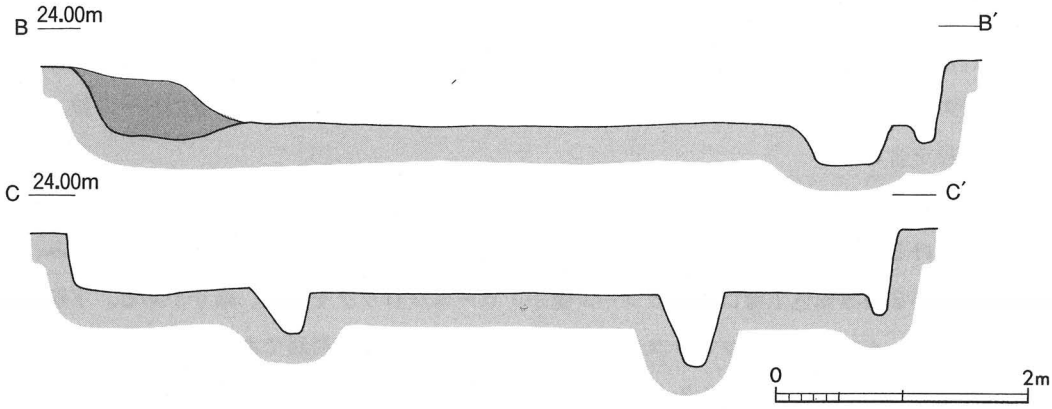
カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡とほぼ一致する。規模は長さ130cm、幅135cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白砂質粘土を構築材に、褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径65×110cm、深さ８cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径47×56cmを測る。奥壁は32°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅60cm、奥行13cmを測る。覆土は３層確認された。上層の１層にぶい黄褐色土は少量のローム粒子・焼土粒に、多量の焼土粒子を含む。２層褐色土は少量のローム粒と多量の焼土粒子を含む。下層の３層にぶい黄褐色土は少量のローム粒、焼土粒子と多量の粘土粒を含む。

覆土　４層の覆土を確認した。埋め戻し土層で、上層の４層暗褐色土層は少量のローム粒子・焼土粒を含み、若干締りに欠ける。中層の３層黒褐色土層は少量のローム粒子と微量のロームブロックを含むみ、締りがある。床面直上の２層黒褐色土層は少量のローム粒子・ロームブロックを含み、締りがある。下層の１層暗褐色土は微量のローム粒・ロームブロックを含む。壁際に流れ込んだ堆積層である。

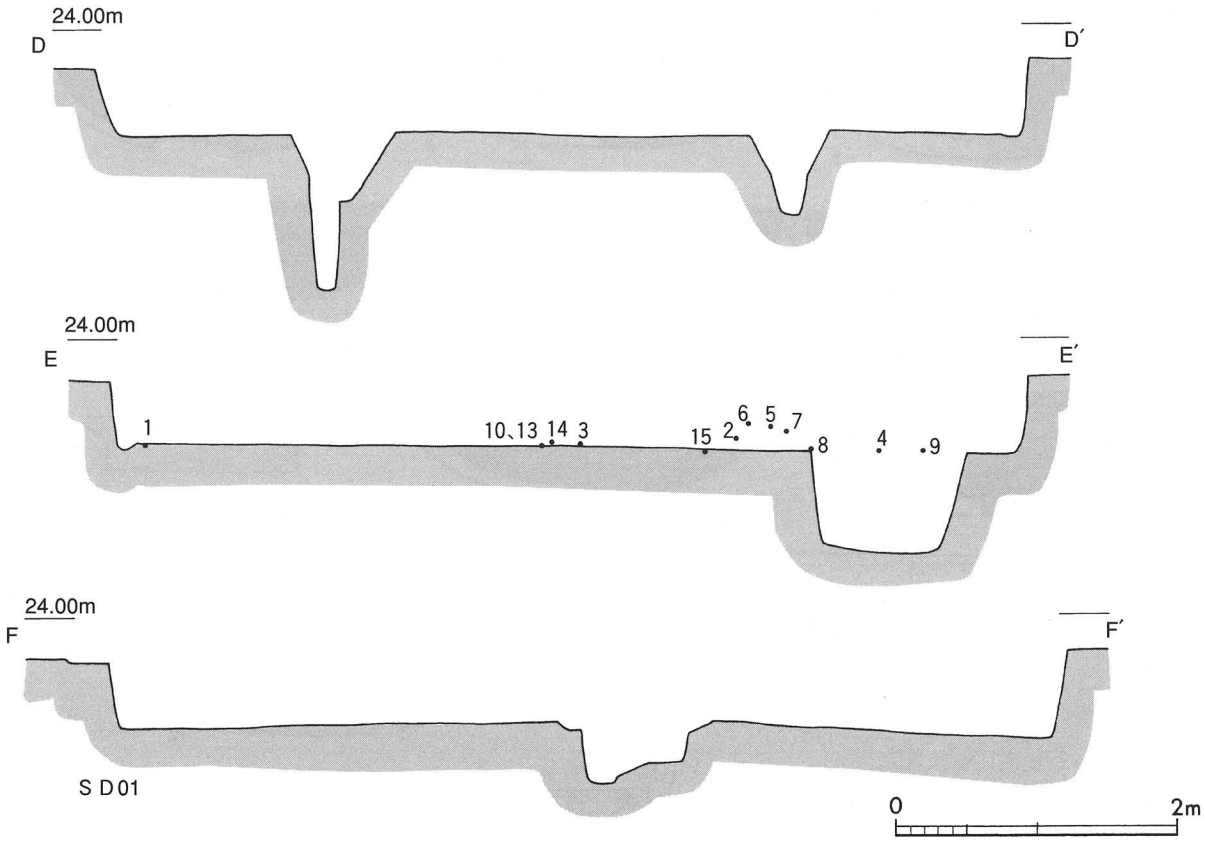
遺物　今回の調査区域内の傾向からみて、構築時期や住居の規模から判断すると、当該期としては遺物の量



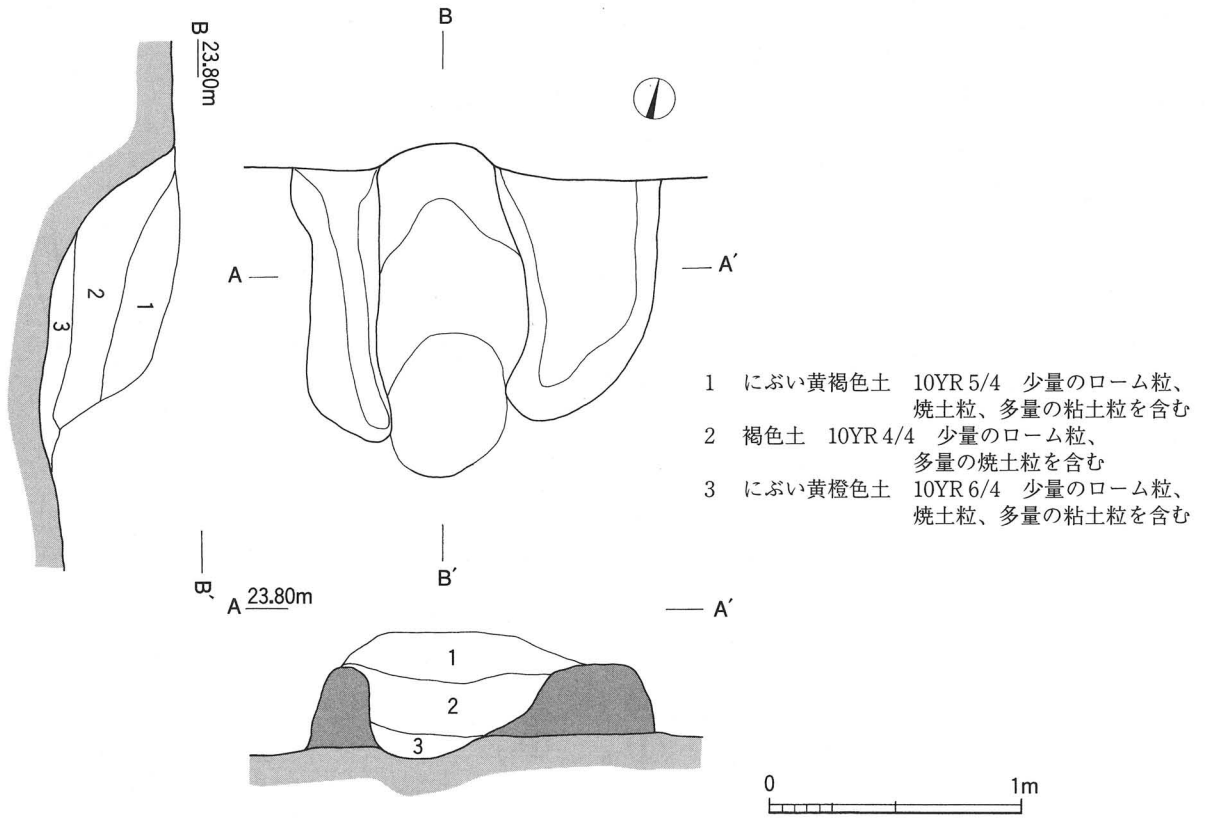
1　暗褐色土　10YR 3/3　少量のローム粒、焼土粒を含む
2　黒褐色土　10YR 2/3　少量のローム粒、微量のロームブロックを含む
3　黒褐色土　10YR 3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　黒褐色土　10YR 2/2　微量のローム粒、ロームブロックを含む



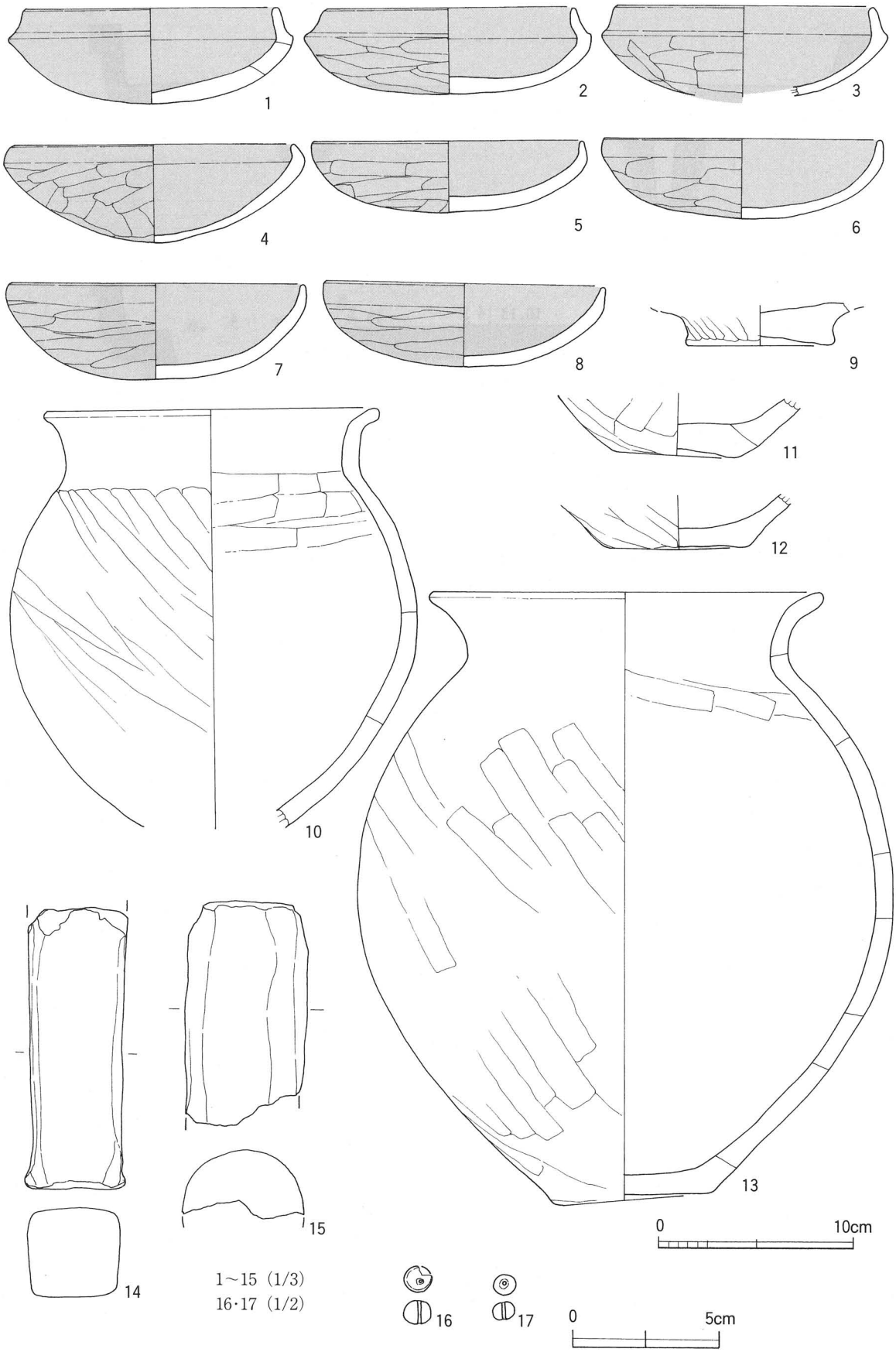
第58図　第10号住居跡実測図（1）



第59図　第10号住居跡実測図（２）



第60図　第10号住居跡カマド実測図



第61図　第10号住居跡出土遺物

は少ない。土師器・坏８点、甕４点と土製支脚２点と小玉２点である。14・15は土製支脚である。14は上端部を欠損する。形状は方形柱状を呈し、現存長さ14.5cm、幅4.95cm、厚さ4.65cmを測る。縦位のナデによる調整が施され、底面もナデ整形されている。焼成は良好で、色調は橙色5YR6/6である。15は下端部を欠損する。形状は円柱形を呈し、現存長さ11.5cm、径6.10cmを測る。縦位のナデによる調整が施されている。焼成は良好で、色調は灰褐色10YR8/2である。16・17は土製小玉である。16は約１/４ほどを欠損している。径9.0mm、厚さ8.8mm、孔径1.1mm、重さ0.66ｇを測る。小粒であるが、比較的丁寧に仕上げられている。表面が黒色10YR2/1を呈し、黒色処理を施している。17は完存する。径7.6mm、厚さ6.3mm、孔径1.2mm、重さ0.40ｇを測る。やはり小粒であるが、丁寧に仕上げられている。表面が剥離し明瞭ではなく、浅黄橙黒色10YR8/4を呈しているが、黒色処理を施しているものと思われる。

所見　出土遺物から古墳時代後期・６世紀後半代と推定される。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　4.90	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/3） 良好	黒色処理 口縁1/4欠損
2	土師器 坏	口径　12.80 底径　— 器高　4.40	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/2） 良好	黒色処理 口縁1/4欠損
3	土師器 坏	口径　13.20 底径　— 器高　4.60	須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 浅黄橙色（7.5YR8/3） 良好	黒色処理 1/3欠損
4	土師器 坏	口径　14.40 底径　— 器高　5.00	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 良好	黒色処理 完存品
5	土師器 坏	口径　14.00 底径　— 器高　3.60	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒色（5Y2/1） 灰色(10RR8/2) 普通	黒色処理 口縁1/6欠損
6	土師器 坏	口径　14.20 底径　— 器高　4.10	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 良好	黒色処理 体部一部欠損
7	土師器 坏	口径　15.00 底径　— 器高　4.90	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰白色（7.5YR8/2） 良好	黒色処理 口縁3/4欠損
8	土師器 坏	口径　14.20 底径　— 器高　4.30	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 浅黄橙色（10YR8/2） 良好	黒色処理 口縁1/3欠損
9	土師器 甕	口径　— 底径　7.60 器高　[2.10]	上げ底気味の底部は下方へ突出し、肥厚する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR4/2） 良好	底部残存
10	土師器 甕	口径　17.00 底径　— 器高 [21.40]	やや胴長気味の球形を呈する体部から頸部は直立して立ち上がり、口縁部は強く短く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい橙色（5YR6/4） 普通	口縁1/2残存 体部1/3残存
11	土師器 甕	口径　— 底径　6.40 器高　[3.20]	上げ底気味の底部から体部は外傾して立ち上がる。肥厚する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 明赤褐色（2.5YR5/6） 良好	底部残存
12	土師器 甕	口径　— 底径　7.20 器高　[2.70]	やや上げ底気味の底部から体部は外傾して立ちる。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 明赤褐色（2.5YR5/6） 良好	底部残存
13	土師器 甕	口径　20.20 底径　8.30 器高　31.20	やや上げ底気味の底部から体部はほぼ球形を呈し、頸部は外傾して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・チャート・石英・長石粒を含む にぶい黄褐色（10YR5/4） 良好	口縁1/3欠損 胴部1/4欠損

第11号住居跡（ＳＩ－11）（第62～67図　ＰＬ９・10・37・38）

位置　調査区の北東側で、標高23.69～23.76ｍに位置する。

規模　カマドを北側中央に設置し、南北軸5.40ｍ、東西軸5.24ｍの方形の住居跡である。

主軸方向　Ｎ－48°－Ｗ。

壁　確認面から49～60㎝、全体的に遺存状態が良好である。いずれも外傾気味に立ち上がる。

壁溝　壁溝は北壁の中央部カマド西側の一部を除きほぼ全周する。幅19～28㎝、深さ２～７㎝の断面Ｕ字形を呈する。また東壁および西壁南側で、それぞれの柱穴に接するように壁面と直交する間仕切り溝が２本構築されている。西壁間仕切り溝１の長さ128㎝、幅24～27㎝、深さ11㎝を測り、断面Ｕ字形を呈する。また東壁間仕切り溝２の長さ103㎝、幅20～29㎝、深さ７㎝を測り、断面Ｕ字形を呈する。

床　全体的に北側が高く、南側が低いものの、起伏はなく平坦である。貼床で、掘形は浅く、目立つ掘り込みではない。規模は５～８㎝前後とほぼ均等に掘り込んでいる。

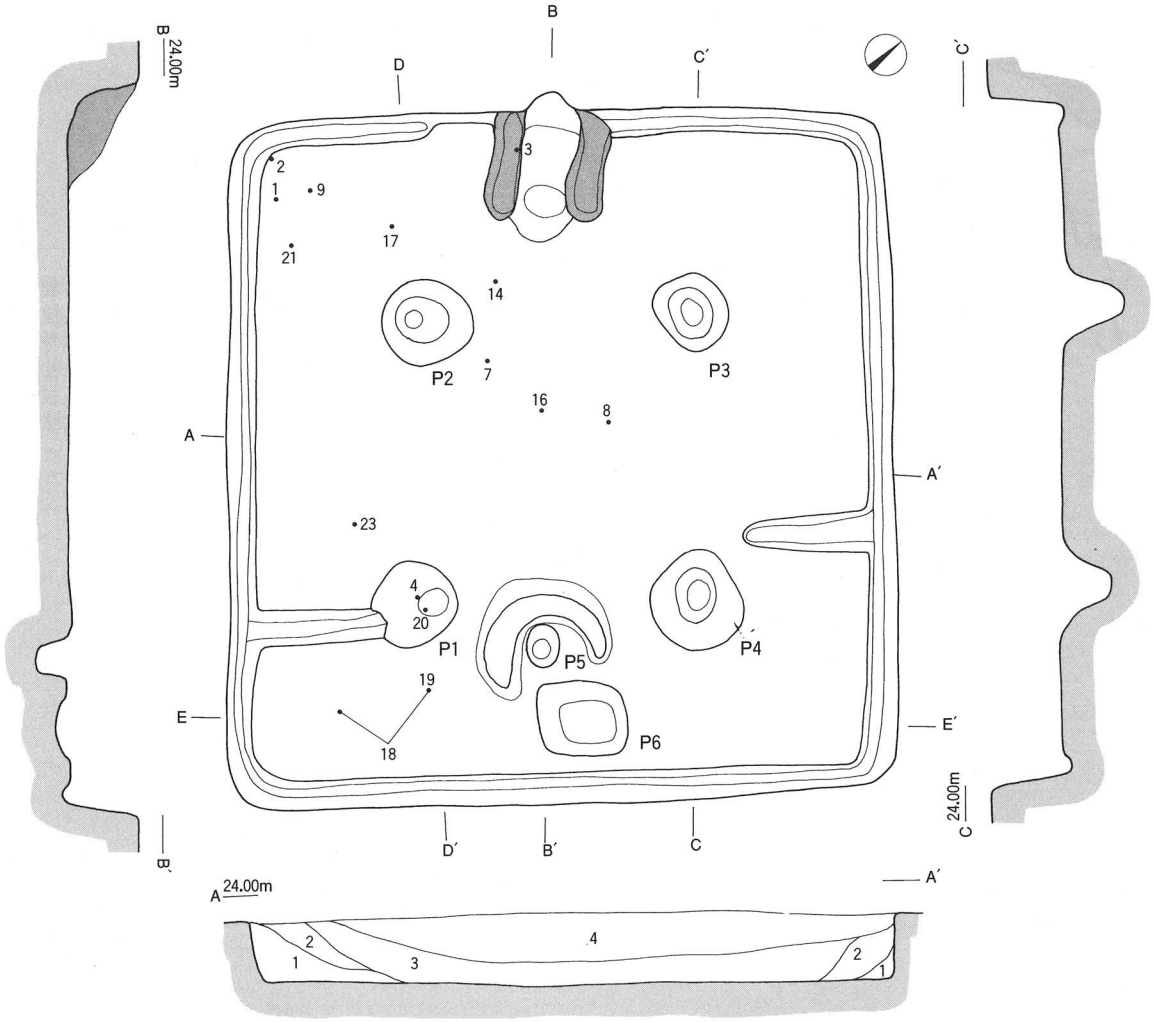
ピット　主柱穴は竪穴対角線上に４本検出されている。Ｐ１は径63×70㎝、深さ36㎝の円形。Ｐ２は径68×72㎝、深さ35㎝の円形。Ｐ３は径54×62㎝、深さ35㎝の円形。Ｐ４は径72×78㎝、深さ40㎝の円形を呈する。南壁中央に梯子穴Ｐ５が穿ってある。径27×33㎝、深さ30㎝の円形で、柱穴北側には高さ２～５㎝程の半円状の土塁が巡り、入口部を構築している。

貯蔵穴　カマドと対峙し、南壁の入口部に貯蔵穴が構築されている。貯蔵穴Ｐ６は長軸59㎝、短軸69㎝、深さ63㎝の隅丸長方形を呈する。覆土は単層で、黒褐色土の自然堆積層である。

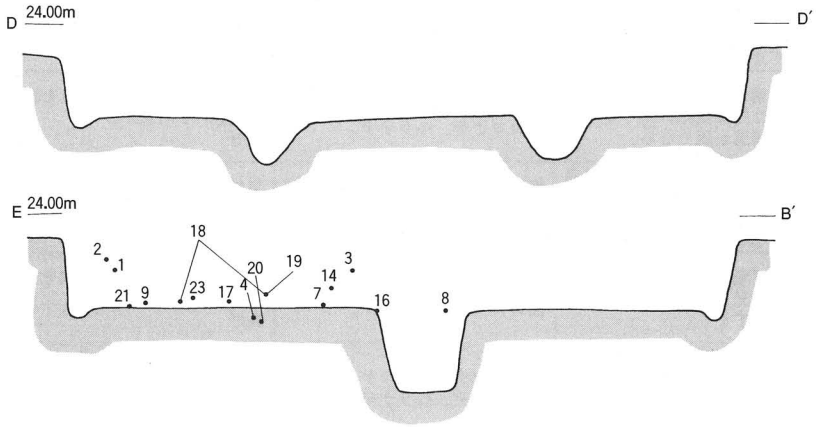
カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡とほぼ一致する。規模は長さ116㎝、幅89㎝で、袖部は壁面に貼付けられ、灰白砂質粘土を構築材に、褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径55×86㎝、深さ11㎝の楕円形状に掘り窪められ、火床面は径47×47㎝を測る。奥壁は32°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅40㎝、奥行18㎝を測る。覆土は3層確認された。上層の１層にぶい黄橙色土は少量のローム粒子、多量の焼土粒子・粘土粒子を含む。２層褐色土は少量のローム粒と多量の焼土粒子・粘土粒子を含む。下層の３層暗褐色土は少量のローム粒、多量の焼土粒・粘土粒を含む。

覆土　覆土は大きく４層に分層可能である。いずれも埋め戻し土層で、ローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土が覆土全体を覆っており、壁からの流れ込みである１層褐色土と２層褐色土層が下層に堆積している。

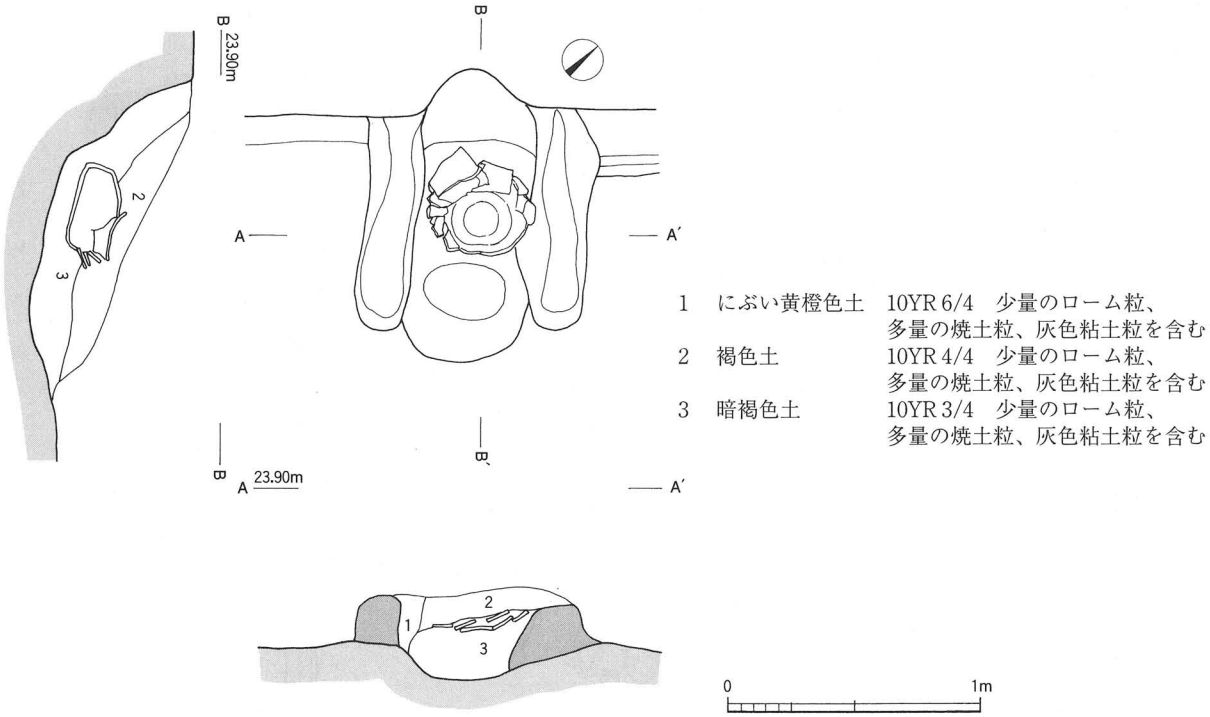
遺物　本跡から土師器・大型甕６点を含め、土師器坏・高坏・壺・鉢・甑のほか、土製紡錘車、砥石、土玉３点が出土している。とくに大甕は土師器としては特別大きいもので特筆される。24は凝灰岩製の紡錘車である。完存品で、上面径4.36㎝、下面径3.13㎝、孔径0.72㎝、高さ1.61㎝、重さ32.12gを測る。斜面は縦位の削り痕がミガキ状に残り、凹面状を呈する。上・下面ともにほぼ平坦である。上側辺部は面取り状に加工が施されている。上・下面とも使用痕とみられるわずかな擦痕が残されている。25は凝灰岩製の砥石である。図面上下半部の一部が欠損しているものの、丁寧に使い込まれている。最大長10.75㎝、最大幅3.47㎝、最大厚さ3.81㎝、重さ298ｇを測る。長方形を呈し、上端面および３面がよく研磨されて、側面である１面のみ剥離面を残存させている。26・27は土玉である。26完存品で、径39.1㎜、厚さ3.46㎜、孔径6.8㎜、重さ48.50ｇを測る。器面は指頭によるナデ整形し、やや粗い仕上がりで、指紋痕が目立つ。胎土は石英・長石粒を含み、色調は灰黄褐色10YR6/2を呈する。27は約１/４ほどが残存している。現存径36.2㎜、現存厚さ28.2㎜、孔径7.0㎜、重さ22.60ｇを測る。比較的丁寧に仕上げられている。胎土は石英・長石粒を含み、色調はにぶい黄褐色7.5YR5/3を呈する。



1　褐色土　10YR 4/6　多量のローム粒、ロームブロック、少量の焼土粒を含む
2　褐色土　10YR 4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
3　黒褐色土　10YR 2/2　多量のローム粒、ロームブロック、少量の焼土粒、微量の炭化粒を含む
4　黒褐色土　10YR 3/1　少量のローム粒を含む



第62図　第11号住居跡実測図



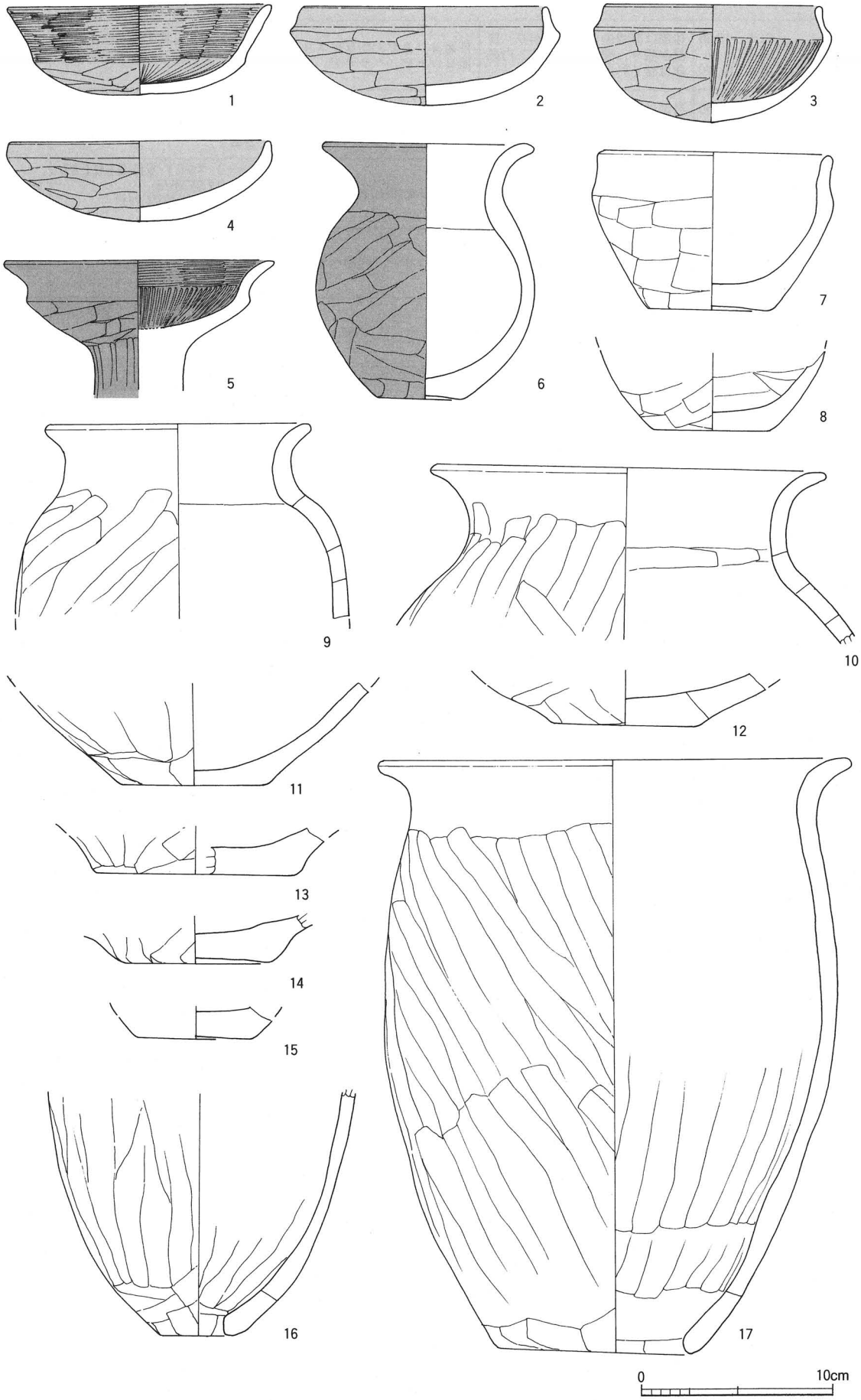
第63図　第11号住居跡カマド実測図

所見　住居の規模は中形であるが、間仕切り溝が構築され、出土遺物から古墳時代後期・6世紀後半に相当するものである。

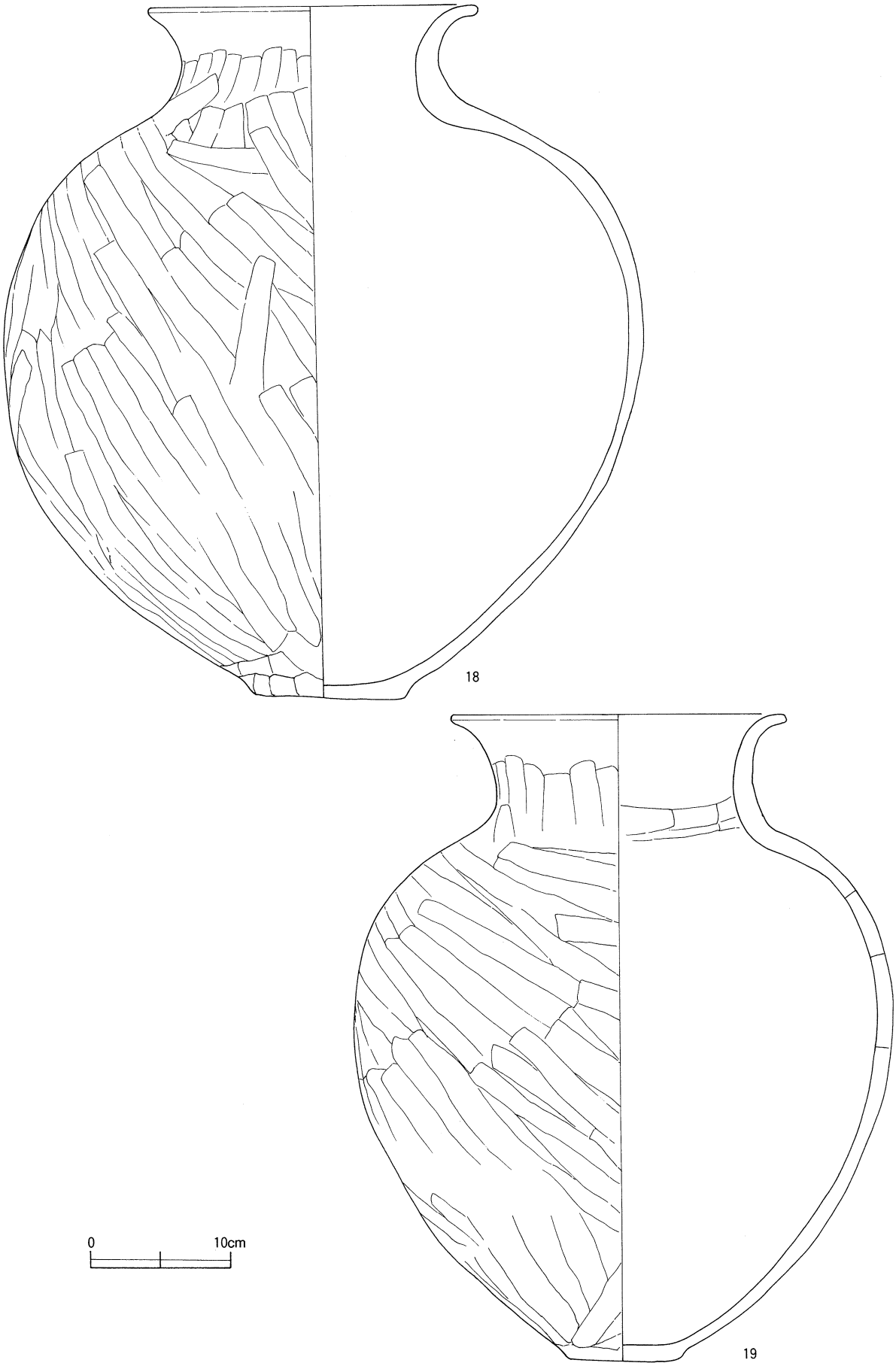
第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径 13.80 底径 — 器高 4.70	丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。	外面ヨコナデのちヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	石英・長石粒を含む 橙色（5YR6/6） 良好	黒色処理 1/2欠損
2	土師器 坏	口径 12.80 底径 — 器高 5.20	身高が深い。須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は直立して立ち上がる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR2/1） 内面　にぶい橙色(7.5YR7/3) 良好	黒色処理 口縁1/3欠損
3	土師器 坏	口径 11.40 底径 — 器高 6.10	身高が深く椀形を呈する。須恵器模倣の坏で、器受け部が張り出し、強く屈曲して口縁部は内傾して立ち上がる。	外面ヨコナデのちヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5YR5/3） 良好	黒色処理 口縁一部欠損
4	土師器 坏	口径 13.60 底径 — 器高 4.20	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5YR2/2） 良好	黒色処理 口縁1/8欠損
5	土師器 高坏	口径 14.00 底径 — 器高 [7.00]	坏部と脚部の一部を残存する。体部は内湾気味に開き、口縁部は大きく外反する。体部と口縁部の境に稜を有する。脚部は垂直気味に移行する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ナデのちヘラミガキ。	雲母・石英・長石粒を含む 明赤褐色（5YR5/6） 普通	赤彩 坏部1/4残存
6	土師器 壺	口径 11.00 底径 4.80 器高 13.40	やや上げ底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 明赤褐色（5YR5/6） 良好	赤彩 ほぼ完存品
7	土師器 小鉢	口径 12.20 底径 6.60 器高 8.20	やや上げ底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、体部と口縁部の境に弱い稜を有し、口縁部は直立する。また底部は肥厚する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄褐色（10YR4/1） 良好	口縁1/3欠損
8	土師器 甕	口径 — 底径 6.40 器高 [4.20]	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（10YR3/1） 良好	底部残存

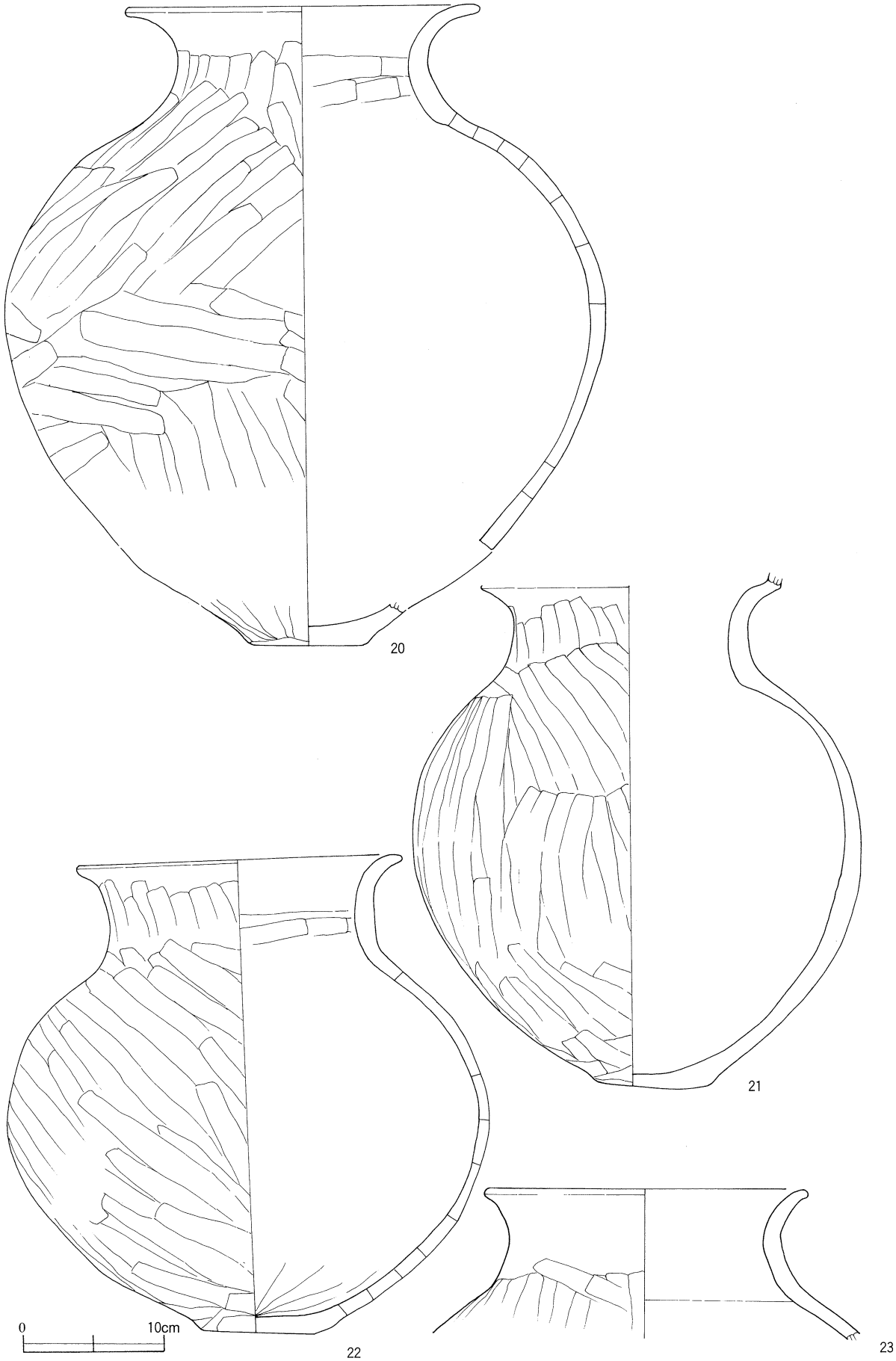
9	土師器 甕	口径 13.60 底径 — 器高 [10.30]	体部は直線的に立ち上がり、肩部が張り、頸部は内傾し、口縁部は緩く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい赤褐色（2.5YR5/4） 良好	口縁部残存
10	土師器 甕	口径 20.60 底径 — 器高 [9.00]	肩部は張り、頸部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい橙色（5YR6/4） 普通	口縁部残存
11	土師器 甕	口径 — 底径 7.80 器高 [5.30]	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR6/6） 内面 黒色(10YR1.7/1) 良好	底部1/2残存
12	土師器 甕	口径 — 底径 7.60 器高 [2.80]	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5YR5/4） 良好	底部残存
13	土師器 甕	口径 — 底径 11.00 器高 [2.50]	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5YR5/4） 良好	底部残存
14	土師器 甕	口径 — 底径 9.00 器高 [2.40]	やや上げ底気味の底部を呈する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（5YR3/1） 良好	底部1/2残存
15	土師器 甕	口径 — 底径 6.20 器高 [1.70]	やや上げ底気味の底部を呈する。底径が小さい。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5YR5/6） 普通	底部1/3残存
16	土師器 甑	口径 — 底径 4.20 器高 [12.60]	単孔式の甑である。体部は胴長で内湾気味に立ち上がる。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR7/6） 普通	単穴式 底部残存
17	土師器 甑	口径 24.80 底径 10.50 器高 31.00	単孔式の甑である。体部は胴長で内湾気味に立ち上がる。口縁部は強く外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR7/3） 良好	単穴式 ほぼ完存品
18	土師器 甕	口径 23.60 底径 10.80 器高 48.00	大型の甕である。平底の底部から体部は球形を呈し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5YR3/2） 明赤褐色(5YR6/6) 良好	口縁一部欠損 底部1/3欠損 体部下部1/2欠損
19	土師器 甕	口径 24.00 底径 8.30 器高 45.80	大型の甕である。平底の底部から体部は最大径が上位に位置する無花果形を呈し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（7.5YR3/2） 良好	口縁一部欠損 体部1/3欠損
20	土師器 甕	口径 25.00 底径 8.40 器高 45.00	大型の甕である。平底の底部から体部は球形を呈し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/3） 黒色（7.5YR1.7/1） 良好	口縁部ほぼ残存 体部1/4残存 底部残存
21	土師器 甕	口径 21.00 底径 9.00 器高 35.80	大型の甕である。平底の底部から体部は球形を呈し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5YR5/4） 普通	胴部1/6欠損
22	土師器 甕	口径 22.80 底径 9.70 器高 33.80	大型の甕である。平底の底部から体部は球形を呈し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR7/6） 良好	ほぼ完存品
23	土師器 甕	口径 22.80 底径 — 器高 [10.60]	大型の甕である。肩部は張り、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は弧状に外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 橙色（7.5YR7/6） 良好	口縁1/2残存



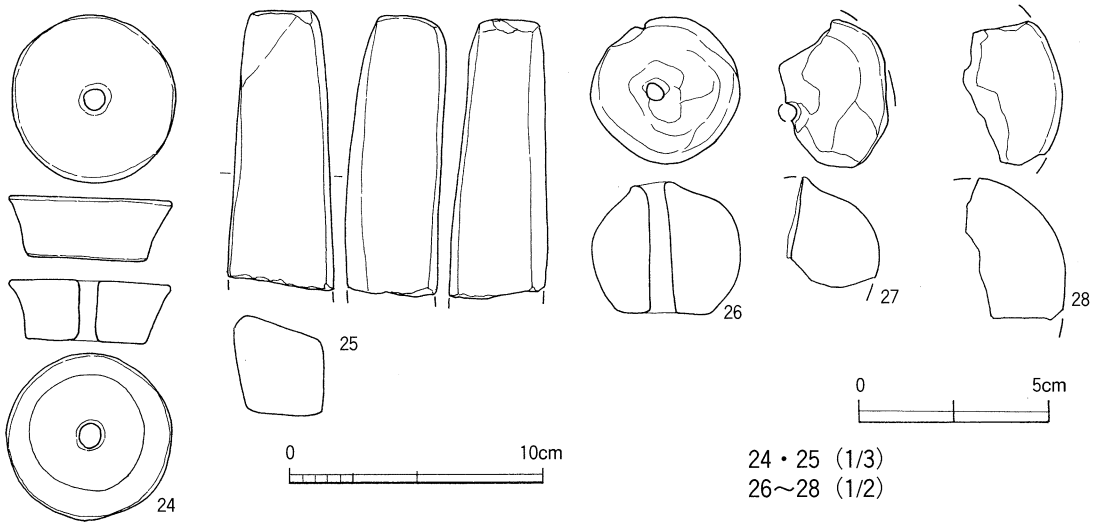
第64図　第11号住居跡出土遺物（1）



第65図　第11号住居跡出土遺物（２）



第66図　第11号住居跡出土遺物（3）



第67図　第11号住居跡出土遺物（４）

第12号住居跡（ＳＩ－12）（第68・69図　ＰＬ10・39）

位置　調査区の北端で、標高23.66～23.76ｍに位置する。

規模　南北軸5.22ｍ　東西軸4.67ｍで、南北軸が長くなっている長方形住居である。

主軸方向　Ｎ－30°－Ｅ。

壁　確認面からの深さは36～51.5㎝を測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

壁溝　壁溝は東壁中央、南壁および西壁の南側に構築されており、床面からの深さは３㎝、幅12～24㎝で、断面Ｕ字状に掘り込まれていた。

床　貼床で、部分的に硬化面を確認した。とくに西側炉址周辺および床面中央付近が顕著であった。掘形の深さはほぼ均等で、10㎝前後の掘削で貼床面を構築していた。なお、東壁際に接して屋根材と推定される少量の炭化物が確認できる。

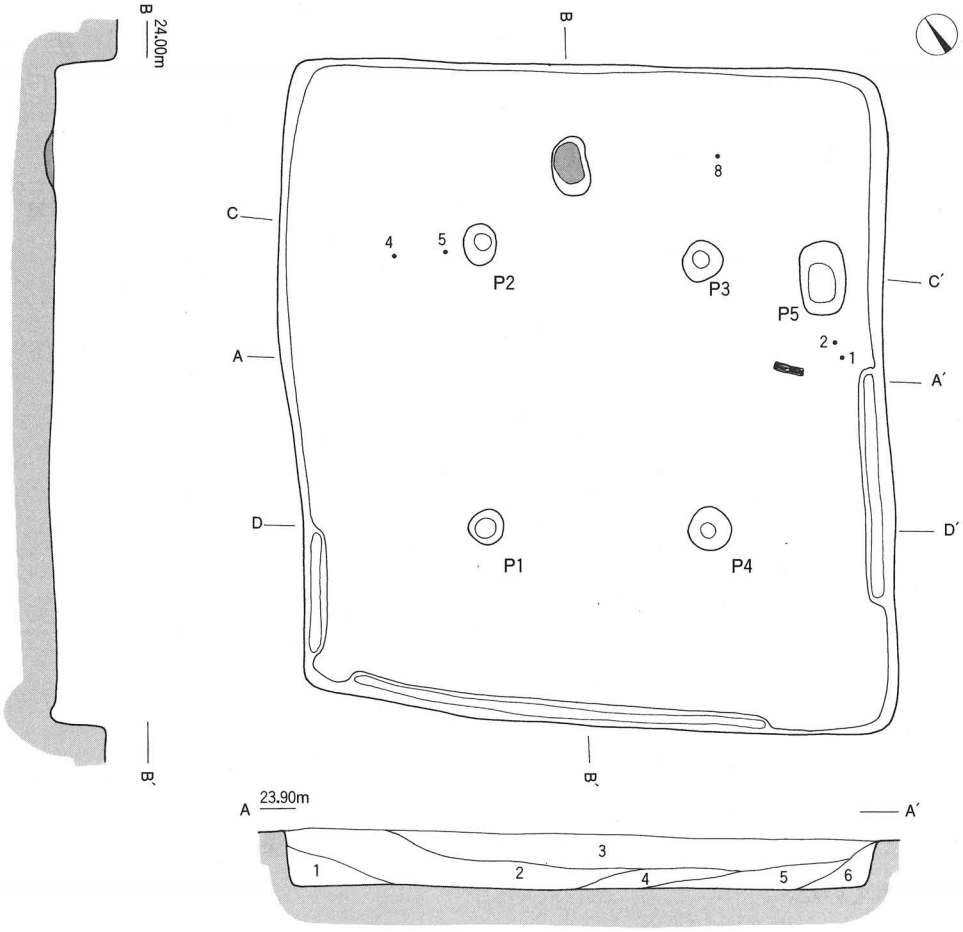
ピット　主柱穴は竪穴対角線上に４本検出されている。Ｐ１は径26×26㎝、深さ46㎝の円形。Ｐ２は径25×32㎝、深さ38㎝の円形。Ｐ３は径30×32㎝、深さ40㎝の円形。Ｐ４は径33×33㎝、深さ47㎝の楕円形を呈する。東壁中央北側に貯蔵穴Ｐ５が穿ってある。長軸58㎝、短軸35㎝、深さ16㎝の長方形を呈する。

炉　北壁中央寄りに構築されている。長軸46㎝、短軸28㎝、深さ８㎝の楕円形で、炉址底面は火熱による赤化が著しい。覆土は僅かに焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積していた。

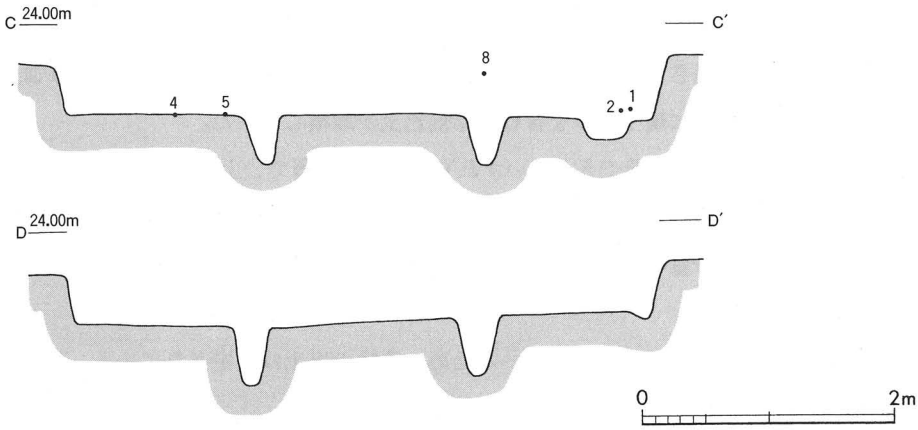
覆土　覆土の土層は７層に分層できる。いずれも埋め戻し土層で、上層の３層暗褐色土は多量のローム粒子、少量の焼土粒・炭化粒を含み、２層の黒褐色土は少量のローム粒子を含み住居跡床面の半分を覆っている。同じく４層暗褐色土は少量のローム粒を含む。５層少量のローム粒子を含む。１層暗褐色土、６層褐色土もローム粒子を少量含む。

遺物　住居の大半が調査区外に広がっているため、遺物の出土は限定されている。検出された遺物は土師器坏・甕である。

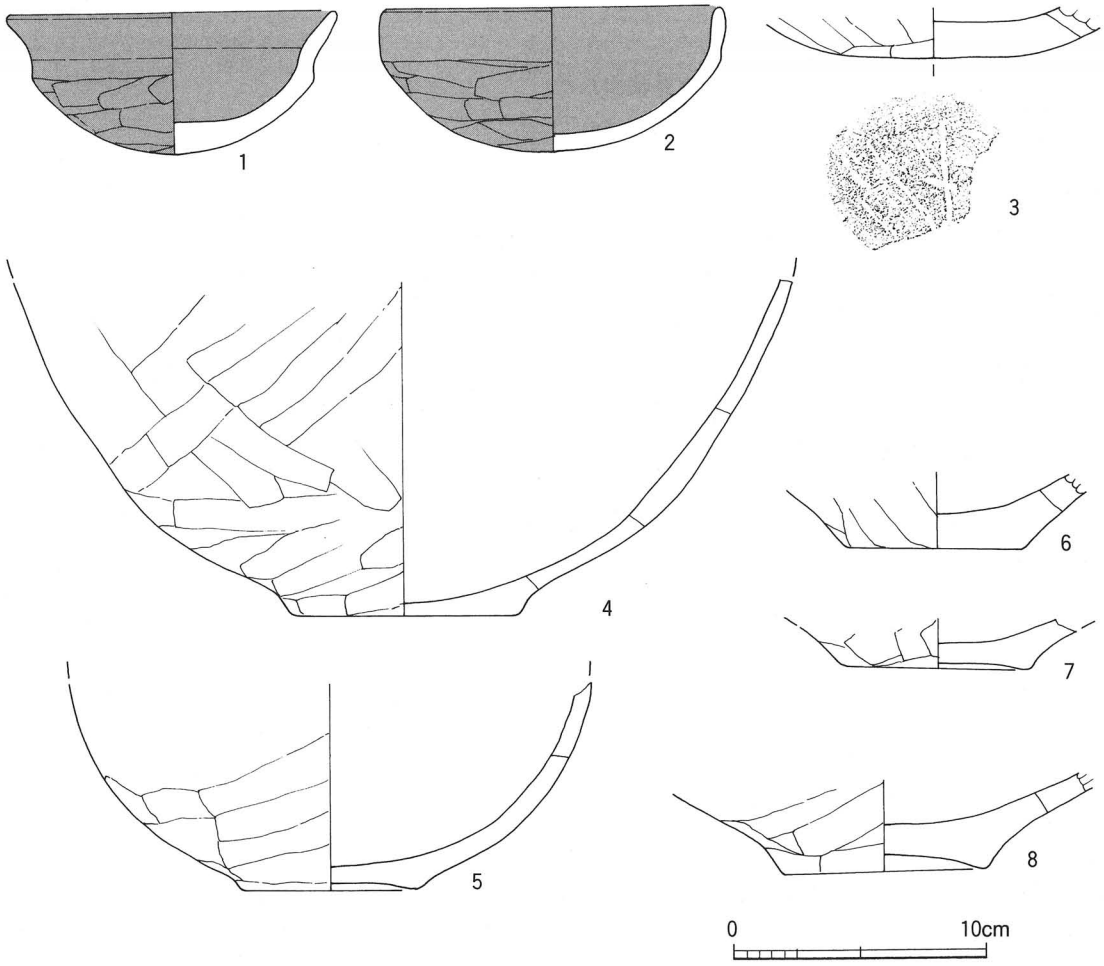
所見　出土遺物から５世紀代と思われる。



1	暗褐色土	10YR 3/4	多量のローム粒、少量の焼土粒、炭化粒を含む	5	暗褐色土	10YR 3/4	少量のローム粒を含む
2	黒褐色土	10YR 2/3	少量のローム粒を含む	6	褐色土	10YR 4/4	少量のローム粒を含む
3	黒褐色土	10YR 3/2	少量のローム粒を含む	7	褐色土	10YR 4/6	少量のローム粒を含む
4	暗褐色土	10YR 3/3	少量のローム粒を含む				



第68図　第12号住居跡実測図



第69図　第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坏	口径　13.00 底径　— 器高　5.60	丸底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデのちヘラミガキ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 赤褐色（2.5YR4/6） 良好	赤彩 完存品
2	土師器 坏	口径　13.40 底径　— 器高　5.60	半球形に近い椀形を呈する。口縁部下にわずかな稜を有し、口縁部は内湾気味にほぼ直立する。	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ナデのちヘラミガキ。	チャート・スコリア・石英・長石粒を含む 赤褐色（2.5YR4/6） 良好	赤彩 口縁1/4欠損
3	土師器 甕	口径　— 底径　7.20 器高　[1.30]	丸底に近い底部を呈する。底部に木葉痕を残置する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・スコリア・石英・長石粒を含む 灰白色（10YR8/2） 良好	底部木葉痕 底部2/3残存
4	土師器 甕	口径　— 底径　9.40 器高 [13.20]	平底の底部はやや突出し、球形の体部へ移行する。	外面ヘラケズリのちヘラナデ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 灰黄褐色（10YR4/2） 普通	底部残存
5	土師器 甕	口径　— 底径　7.20 器高　[3.00]	やや上げ底の底部から体部は球形を呈する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい褐色（7.5YR5/4） 良好	底部1/2残存
6	土師器 甕	口径　— 底径　7.40 器高　[2.00]	平底の底部は肥厚し、体部へ移行する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/3） 良好	底部残存
7	土師器 甕	口径　— 底径　7.00 器高　[8.20]	上げ底気味の底部から体部へ移行する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む にぶい黄橙色（10YR6/4） 良好	底部残存
8	土師器 甕	口径　— 底径　8.00 器高　[3.70]	上げ底気味の底部から体部へ移行する。	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	スコリア・石英・長石粒を含む 黒褐色（10YR2/2） 良好	底部残存

3．土坑

古墳時代に属すると推定される土坑を２基検出した。

第１号土坑（ＳＫ－１）（第71・74図　ＰＬ11・39）

位置　調査区西側、第７号住居跡の北側に接している。

規模と平面形　長軸1.60m、短軸1.56mの方形を呈する。確認面からの深さは15cmである。

長軸方向　方形であるが、南北方向に長軸をもち、主軸方向はＮ－48°－Ｗを示す。

壁面　垂直気味に外傾して立ち上がる。

底面　平坦面は少なく、起伏がある。

覆土　覆土は２層に分層される。床面の大半を覆っているのは２層暗褐色土である。締りに欠け、ローム粒子・ロームブロックを少量含む。

遺物　遺物の出土は、縄文前期後葉・浮島式土器、諸磯式土器が３点出土している他、図示していないが、土師器・甕の小破片が１点出土している。提示したのは縄文土器で、第74図１～４である。１は浮線文が施された諸磯ｂ式土器である。浮線文上には縄文が施文されている。２は平行沈線文の浮島Ｉ式、３は撚糸Ｒが施文されている。４は深鉢の底部破片である。

所見　覆土の状況から判断し、出土遺物が少ないものの古墳時代後期の所産と推定できる。

第５号土坑（ＳＫ－５）（第71図　ＰＬ11）

位置　調査区北部、第３号土坑の北東側に位置する。

規模と平面形　長軸1.08m、短軸1.05mの円形を呈する。確認面からの深さは17cmである。

長軸方向　Ｎ－34°－Ｅ。

壁面　垂直気味に外傾して立ち上がる。

底面　ほぼ平坦面を呈する。

覆土　２層確認され、１層黒褐色土は少量のローム粒子を含む。２層暗褐色土は少量のローム粒を含む。

遺物　遺物は土師器・甕の胴部小破片が出土しているが、小片のため図示できていない。

所見　覆土の状況と出土した遺物から古墳時代後期と推定できる。

第４節　近世以降・その他

１．溝状遺構（ＳＤ）

調査区北端に南北および東西のほぼ主軸方位に沿った溝が検出された。いずれも古墳時代の竪穴住居跡を切って構築され、掘削の幅は狭く、深度が浅いこと、また出土遺物が縄文土器や古墳時代の土師器が主体で、中・近世遺物が皆無であること、さらに区画が明瞭であることなどから近代以降の畑地境溝と判断した。

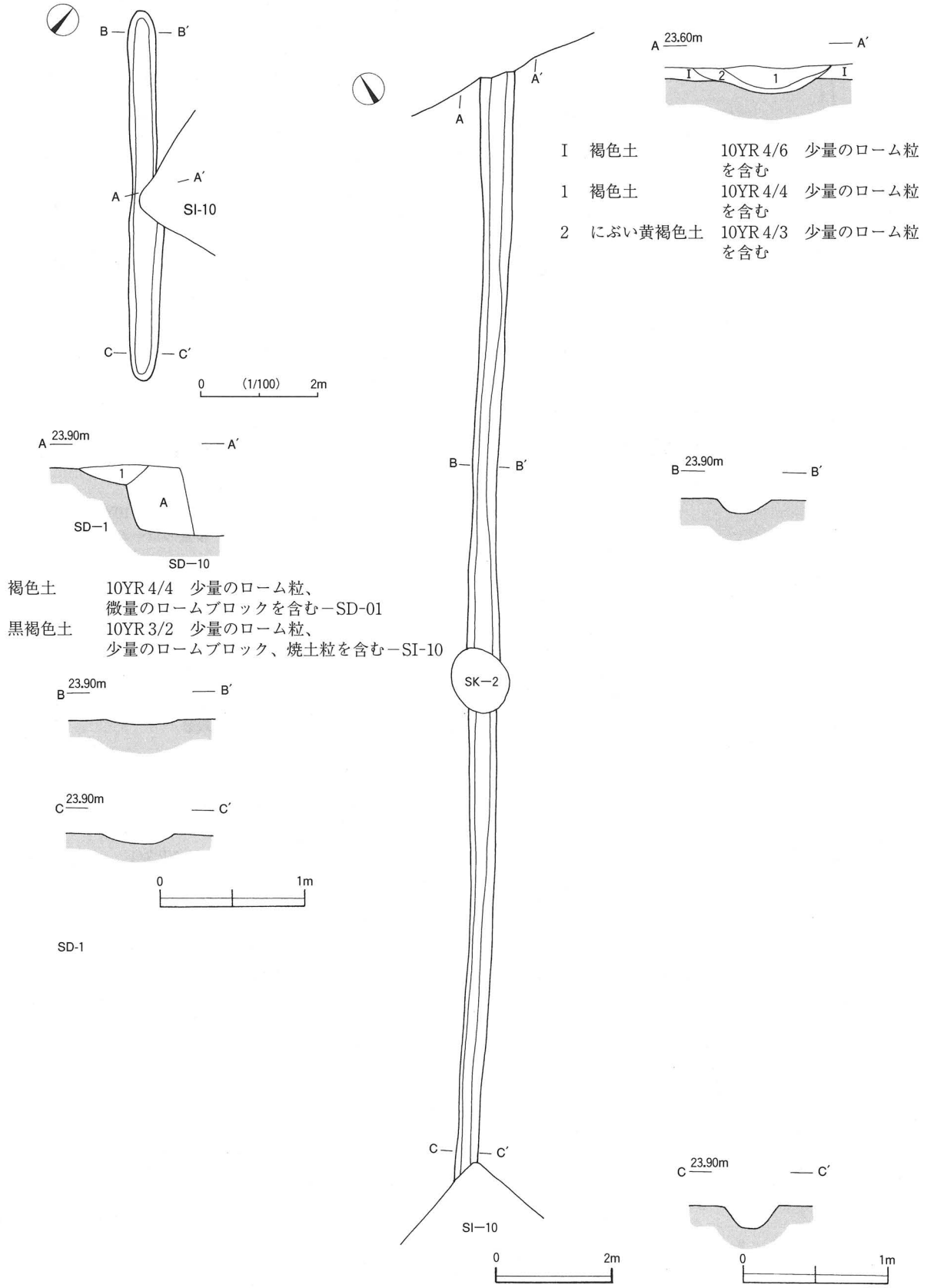
第１号溝（ＳＤ－１）（第70図　ＰＬ14）

位置　調査区の北西側、第10号住居跡の西コーナーに掛かるように構築されており、東西方向に走り、確認面ではおいてかなり小規模な溝である。

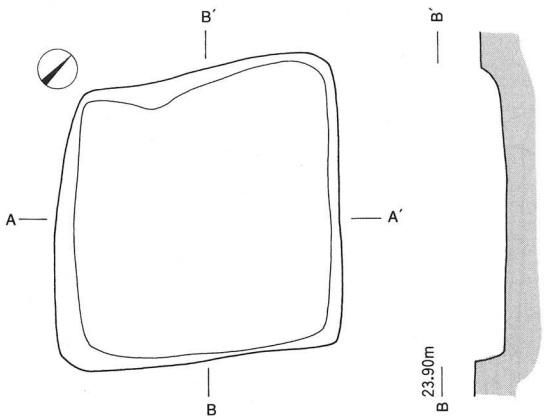
規模　検出部の長さ6.40m、最大幅0.38～0.60m、深さ0.12mである。

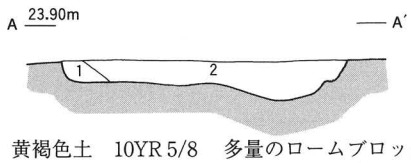
断面形　底面は断面Ｕ字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

主軸方向　Ｎ－38°－Ｗ。



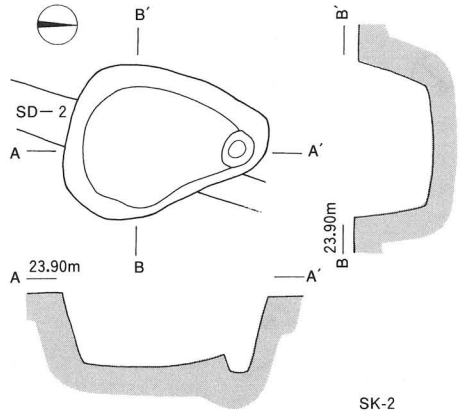
第70図　溝状遺構実測図



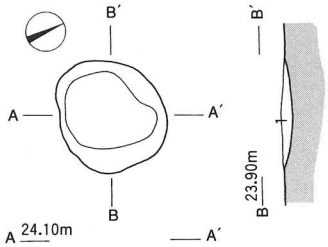


1　黄褐色土　10YR 5/8　多量のロームブロックを含む
2　暗褐色土　10YR 3/4　少量のロームブロック、ローム粒を含む

SK－1

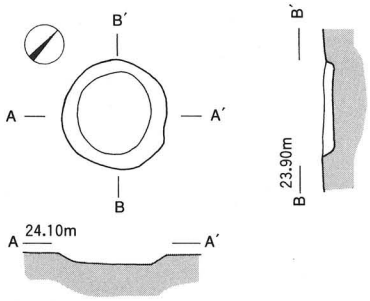


SK-2



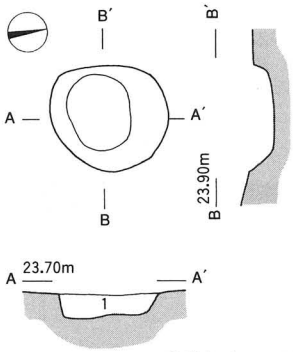
1　暗褐色土　10YR 3/3
多量のローム粒を斑状に含む

SK－4



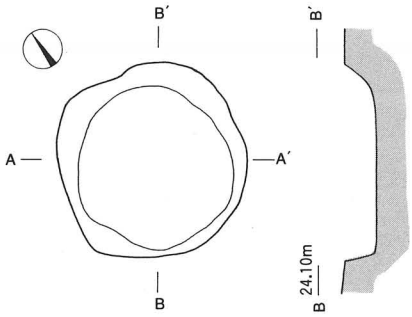
1　暗褐色土　10YR 3/3　少量のローム粒を含む

SK－3



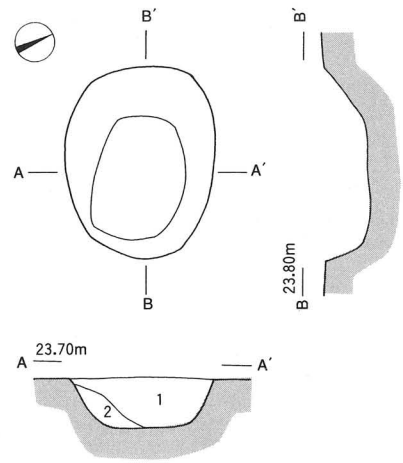
1　暗褐色土　10YR 3/4
少量のローム粒を含む

SK－6



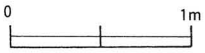
1　黒褐色土　10YR 3/3
少量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR 3/4
少量のローム粒を含む

SK－5

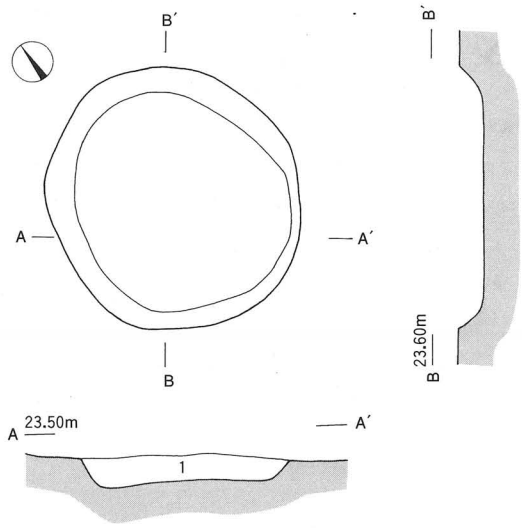


SK－7

1　暗褐色土　10YR 3/4　少量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR 4/6　多量のローム粒を含む

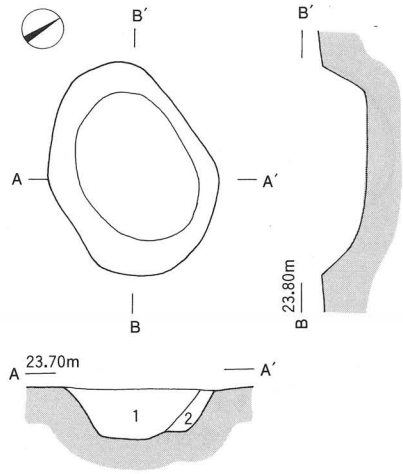


第71図　土坑実測図（1）



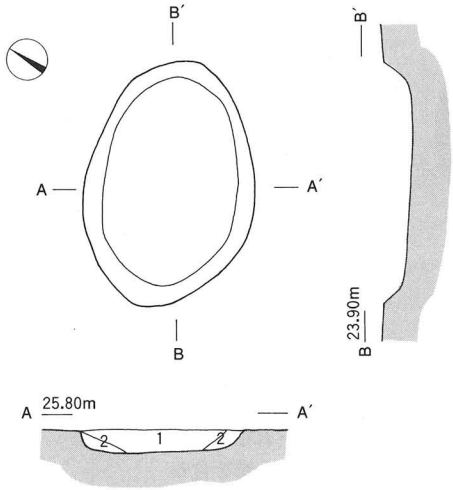
1　褐色土　10YR 4/6　多量のローム粒を含む

SK－8



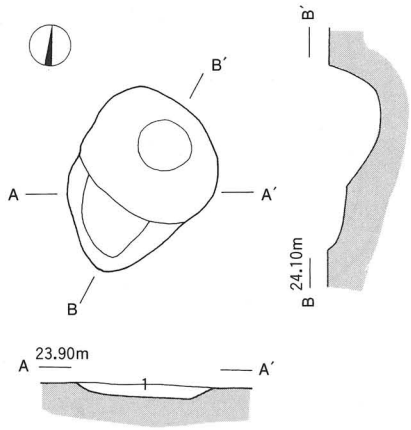
1　褐色土　10YR 4/4　少量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR 4/6　多量のローム粒を含む

SK－9



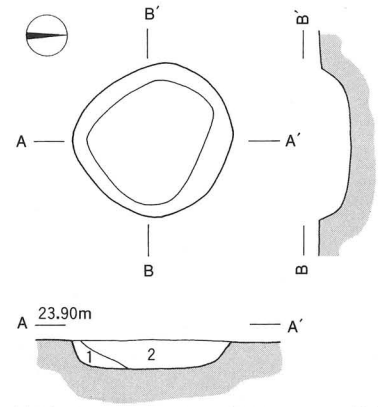
1　暗褐色土　10YR 3/4　少量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR 4/4　多量のローム粒を含む

SK－10



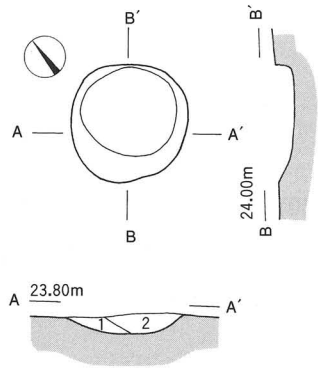
1　暗褐色土　10YR 3/4　少量のローム粒を含む

SK－11



1　暗褐色土　10YR 3/4　多量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR 3/3　少量のローム粒を含む

SK－12

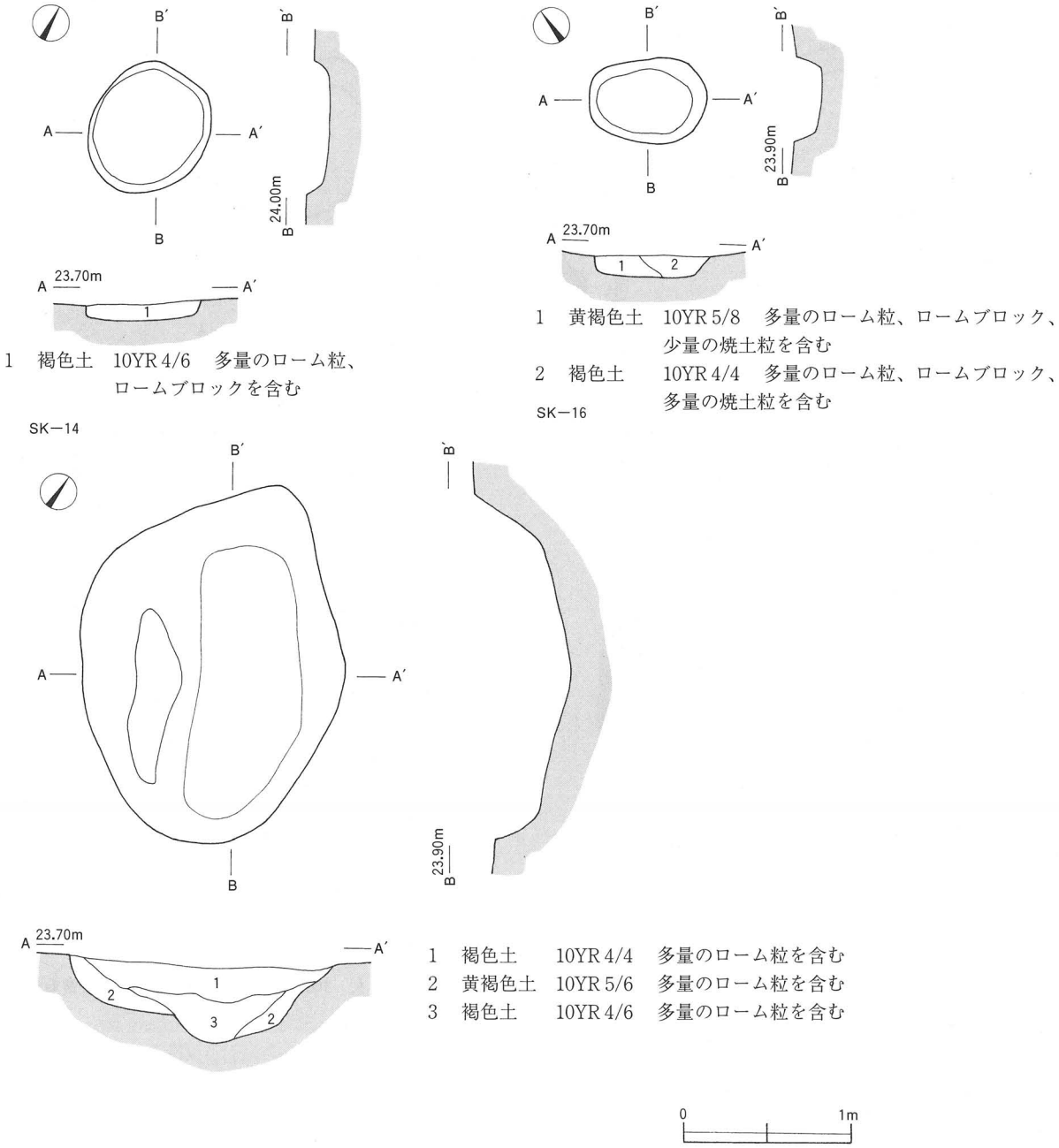


1　黄褐色土　10YR 5/6　多量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR 4/6　少量のローム粒を含む

SK－13

0　1m

第72図　土坑実測図（2）



第73図　土坑実測図（３）

覆土　褐色土(10YR4/4)の単一層で、少量のローム粒子、微量のロームブロックを含み、締りに欠ける。

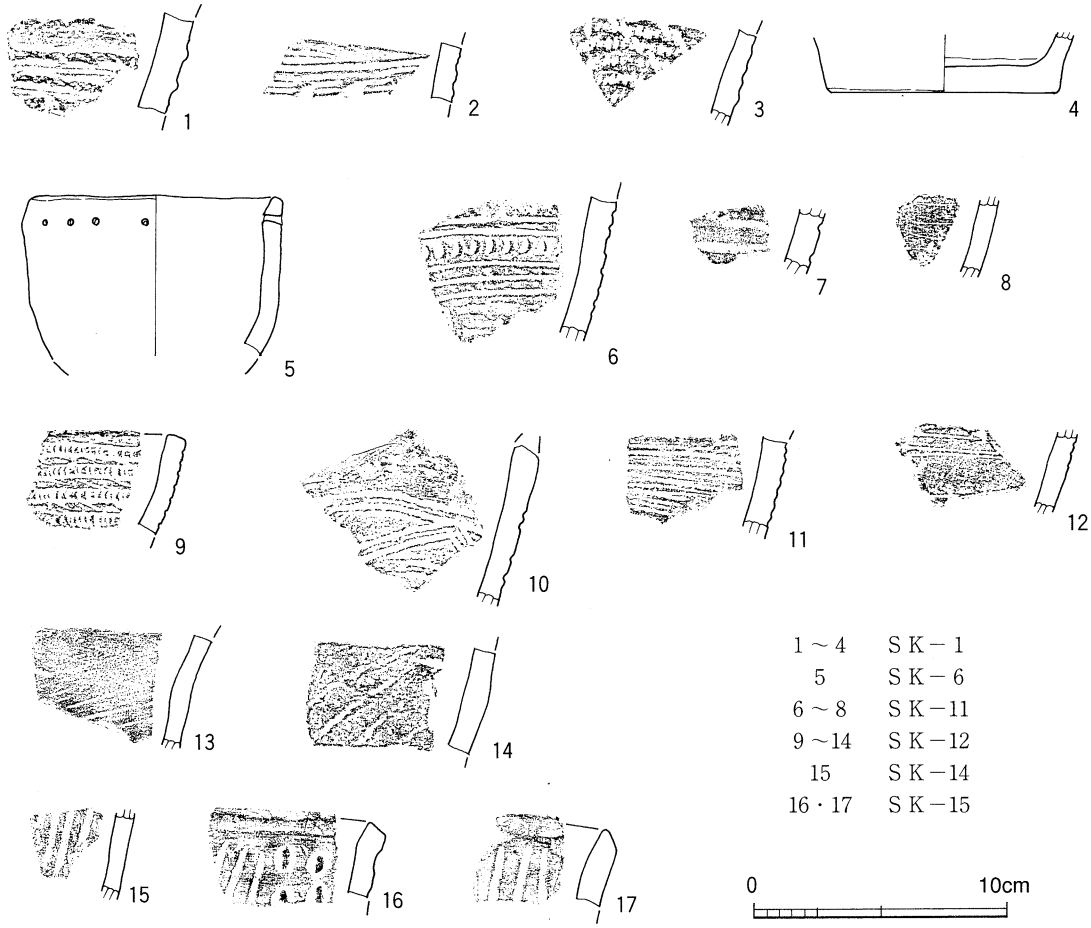
遺物　縄文土器、古墳時代後期の土師器甕小破片が出土している。

所見　覆土の状況から判断して近世以降の地境溝と推定される。

第２号溝（ＳＤ－２）（第70図　ＰＬ14）

位置　調査区の北端で、南北方向に走り、南側で第10号住居跡の北東コーナーと重複し、北側は調査区外に延びる。

規模　北縁端から始まり第10号住居跡の北東縁までの長さ18.85m、幅0.35～0.60m、深さ0.18mである。



第74図　土坑出土遺物

断面形　底面は断面緩やかなU字状の呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

主軸方向　N－30°－E。

覆土　2層に分層が可能である。1層褐色土(10YR4/6)はローム粒子を少量含み、締りに欠ける。2層褐色土(10YR4/4)もローム粒子を少量含み、締りに欠ける

遺物　土師器の小破片が出土している。小破片のため図示はしていない。

所見　覆土の状況から近世以降の地境溝と推定される。

2．土坑（SK）

その他に土坑が1基検出されたが、時期は不明である。

第11号土坑（SK－11）（第72・74図　PL12・39）

位置　調査区西部、第12号土坑の北側に位置する。

規模と平面形　長軸0.97m・短軸0.72mの楕円形を呈する。確認面からの深さは27cmを測る。二段掘り土坑で、南側が浅くなっている。

長軸方向　N－27°－E。

壁面　緩く外傾しながら立ち上がる。

底面　検出面で鍋底状を呈している。

覆土　暗褐色土(10YR3/4)の単一層で、少量のローム粒子を含み、締まりがある。

遺物　出土は縄文早期中葉・田戸下層式土器。図示したのは縄文土器で、第74図６～８である。６は重層する平行沈線文間に爪形状の刺突文を巡らす。７は横走する太沈線文が施文されている。横位に細沈線文を施す。

所見　他の遺構との重複からみて、最も新期の構築であるが、時期・性格については不明である。

３．その他の遺構（ＳＸ）

第１号風倒木痕（ＳＸ－１）（第75・76図　ＰＬ13・40）

位置　調査区南西部、７Ｇ・７Ｈ区に位置する。南西側の住居跡群に囲まれている。

規模と平面形　長軸3.18ｍ、短軸2.29ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは56㎝である。

主軸方向　Ｎ－31°－Ｅ。

壁面　壁は僅かに外傾しながら立ち上がっている。

底面　凹凸面が多く、起伏にとんでいる。

覆土　黒色土が中央に堆積し、壁および底面には黄褐色土が覆っている。

遺物　縄文土器が出土している。図示したのは浮島式土器で、第76図１は輪積痕を磨消す無文胴部破片である。２は平行沈線文が施文されている。

所見　覆土の状況から風倒木痕と判断した。しかし、時期については不明である。

第２号風倒木痕（ＳＸ－２）（第75・76図　ＰＬ40）

位置　調査区南西端部に位置する。

規模と平面形　長軸3.36ｍ、短軸3.16ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは72㎝である。

主軸方向　Ｎ－28°－Ｅ。

壁面　壁は僅かに外傾しながら立ち上がっている。

凹凸面が多く、起伏にとんでいる。

覆土　黒色土が中央に堆積し、壁および底面には黄褐色土が覆っている。

遺物　縄文土器が出土している。第76図３～８で、３は口縁部破片で、口唇部に刻目を施し、口縁部は斜行する条線文を施文する。５は末端結束縄文に無節Ｒが施されている。６は集合沈線が三角形のモチーフをとり、その上にボタン状の突起を貼り付ける。諸磯ｃ式である。７は縦位の結節縄文が施文される。８は平行沈線文を弧状に施文し、沈線間に刻目を充填させ、三角形刻文を交互に配する。五領ケ台式に比定される。

所見　覆土の状況から風倒木痕と判断した。しかし、時期については不明である。

第３号風倒木痕（ＳＸ－３）（第75・76図　ＰＬ13・40）

位置　調査区東側に位置する。

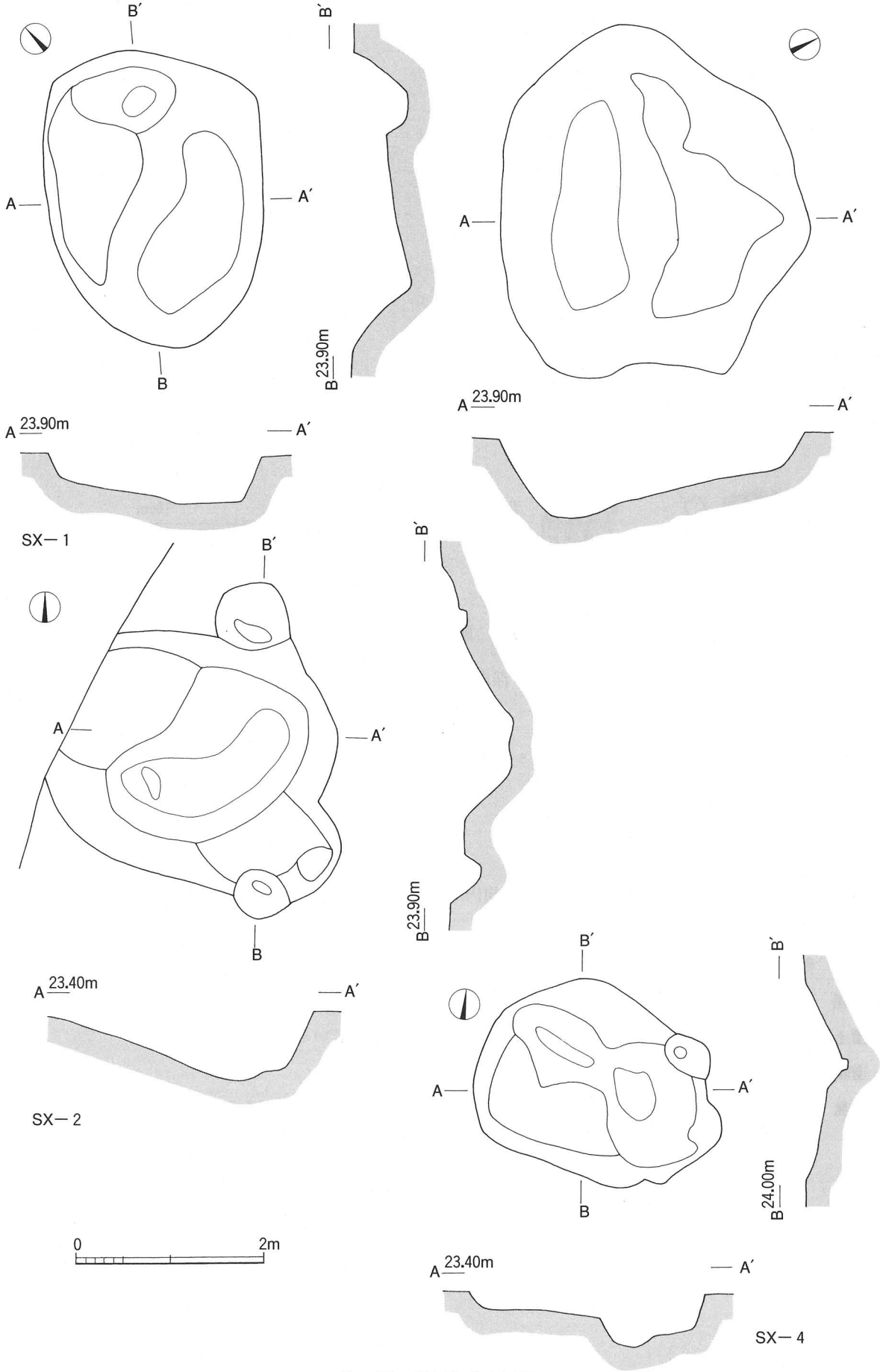
規模と平面形　長軸3.59ｍ、短軸3.18ｍの不正楕円形を呈する。確認面からの深さは84㎝である。

主軸方向　Ｎ－73°－Ｗ。

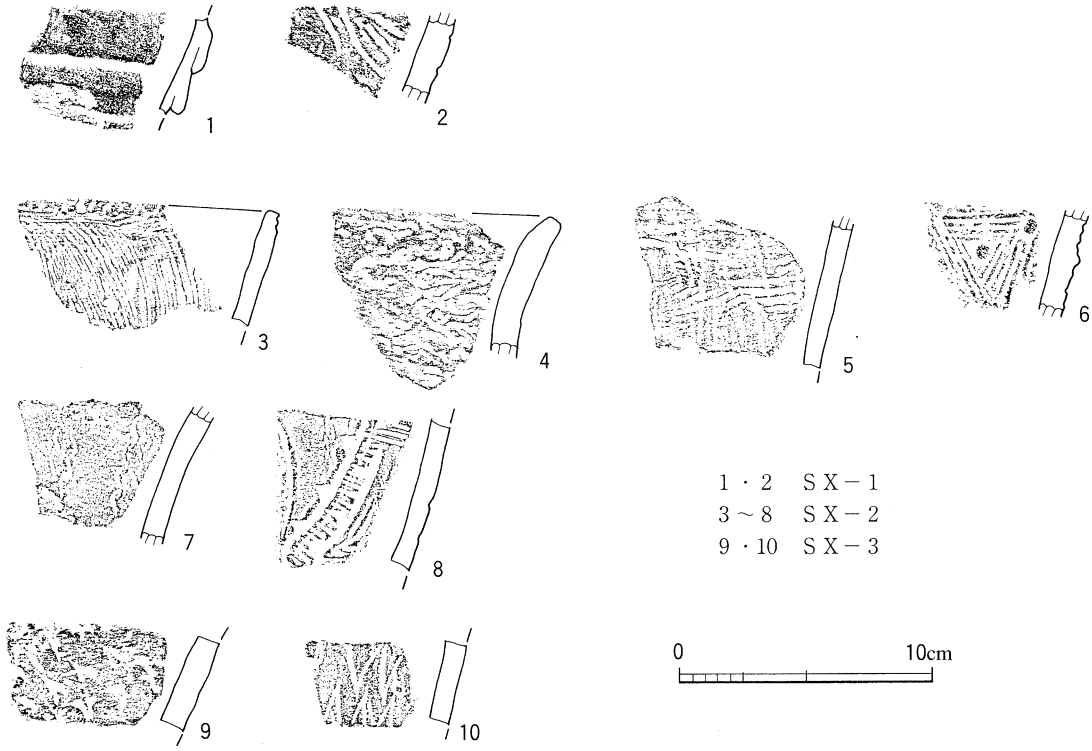
壁面　壁は僅かに外傾しながら立ち上がっている。

底面　凹凸面が多く、起伏にとんでいる。

覆土　黒色土が中央に堆積し、壁および底面には黄褐色土が覆っている。



第75図　風倒木痕実測図



第76図　風倒木痕出土遺物

遺物　縄文土器が出土している。縄文前期・浮島Ⅱ式土器が出土した。第76図９・10は波状貝殻文を施文している。

所見　覆土の状況から風倒木痕と判断した。しかし、時期については不明である。

第４号風倒木痕（ＳＸ－４）（第75図　ＰＬ13）

位置　調査区北東部に位置する。

規模と平面形　長軸2.67m、短軸1.92mの不正楕円形を呈する。確認面からの深さは56cmである。

主軸方向　Ｎ－70°－Ｗ。

壁面　壁は僅かに外傾しながら立ち上がっている。

底面　凹凸面が多く、起伏にとんでいる。

覆土　黒色土が中央に堆積し、壁および底面には黄褐色土が覆っている。

遺物　出土しなかった。

所見　覆土の状況から風倒木痕と判断した。しかし、時期については不明である。

第5章　まとめ

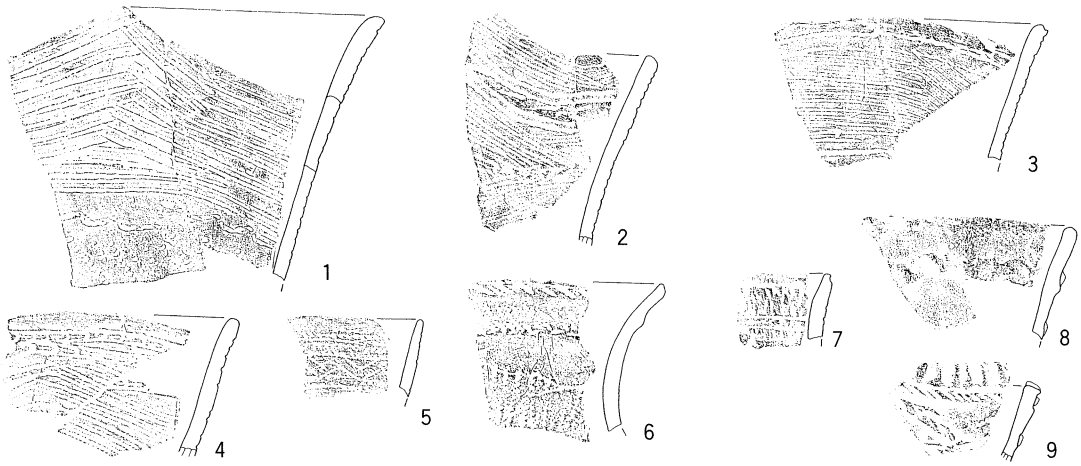
今回の調査で検出された竪穴住居跡は12軒である。2,000㎡にも満たない調査面積対しては、比較的密集した状況を呈していると認識している。またこれら竪穴住居跡はそこから出土した遺物から判断して、縄文時代前期後半、古墳時代中・後期という限られた時期で、縄文時代は１軒、他の11軒は古墳時代である。いずれも市内においてこれらの時代を探るために欠かすことができないほど鍵となる情報を多量に提供するこことなったが、当台地における広がり、あるいは検出された遺構の内容から考えて、おそらく集落のほんの一部を確認したに過ぎないものと推定される。したがって、現段階では集落全体を把握するのは不可能な状況を呈しており、今回の調査で認識された成果についてのみまとめとしておきたい。

１．縄文時代

縄文時代の遺構として、竪穴住居跡１軒と土坑13基が検出されている。第８号住居跡はその出土遺物から前期後葉・浮島式期であることが判明している。残念ながら、西側半分が未調査区域にひろがっていることからその全貌を把握できていない。しかも、出土遺物は豊富で、残り半分に包含されているものがはたしてどのようなものが未発見なのか興味のあるところである。

ところでわずかに１軒であるが、住居跡出土遺物の主体を占めるのはいうまでもなく土器類である。覆土の薄層もあり、ほぼ一括資料として捉えることが可能である。詳細については報文中に記載したとおりである。ここでは主なものについて、その編年的な位置付けについて触れてみたい。まず出土遺物の大半が浮島式土器であり、わずかに諸磯式土器が含まれる。この浮島式については既に種々論議がなされていることは周知のとおりであり、研究史から編年問題については松田光太郎氏の多くの論攷をみることができ、ここで触れる必然性はないが、浮島式の大きな問題はその初現期である浮島Ⅰ式にある。とくに諸磯式との関わりにおいて諸説がみられるが、本跡では浮島Ⅰ式土器でも後半に比定され、浮島Ⅰ式で最も安定した段階に相当する。まずここで簡単に出土遺物から文様要素の分類を行っていきたい。

文様はすべて併せ施文である。また施文部位も口唇部、口縁部、胴部文様帯として分帯が比較的明瞭である。しかし、完形土器がないことから、口唇部・口縁部文様帯が主体となる。まず文様要素として、平行沈線文（平行短沈線文）・爪形文・変形爪形文・有節平行沈線文・短沈線文（斜行沈線）・貝殻復縁文・波状貝



第77図　第８号住居跡出土浮島Ⅰｂ式土器類型

殻文・凹凸文・隆帯文・撚糸文・縄文・結節縄文・浮線文がある。いずれもこれらの文様要素の併せ施文となり、少なくとも口縁部破片に関しては凹凸文以外に単一文様施文がみあたらない。以下分類してみると、

a類（第77図１～５）：平行沈線文を主体とするもので、結節縄文・撚糸文（１）。爪形文・隆帯・斜行沈線文（２）。変形爪形文・短沈線文（３）。爪形文（４）が併せ施文され、（５）の変形爪形文・貝殻復縁文は別系統である。１～３は波状口縁の深鉢である。

b類（第77図６・７）：波状貝殻文を主体とするもので、隆帯・斜行沈線（６）。平行沈線文（７）が併せ施文されている。

c類（第77図８）：凹凸文（８）。

d類（第77図９）：浮線文を主体に縄文・短沈線文（９）が併せ施文されている。

a類の平行沈線文については１～４いずれも幅のある山形文を基本とし、集合沈線状に施文する。５は明らかに別系統の土器である。またb類波状貝殻文は西村正衛氏のいう「拙劣なもの」で、幅狭の施文である。またd類はいわゆる諸磯b式土器である。以上から本跡から出土した土器群は茨城県浮島貝ケ窪貝塚第一群土器や小川貝塚、外山遺跡等に併行する浮島Ⅰb式期とすることができる。

２．古墳時代

古墳時代の遺構の主体となるのは11軒の竪穴住居跡である。時期は中期と後期、すなわち５世紀末葉から７世紀代初頭である。また検出された住居跡の配置として調査区ほぼ全面に確認できるものの、やや南側に偏りみられる。これがすぐ南側未調査区域に集落が延びることを意味しないが、その傾向があることは十分予測されるところであり、さらに北側にも平坦な土地があることから調査区外の南北に広がることは当然想定してよいであろう。これが将来の調査の指針になることは間違いない。またわずか11軒という今回検出された住居跡全てが共通する要素をもつわけではではなく、時期差を含め、外観の所見ではそれぞれ若干の差異を窺い知ることができる。まず大きくはカマド付設の有無である。カマドが確認できず明らかな炉址付設住居跡は第２・６・12号住居跡の３軒である。規模は第２号住居跡と第６号住居跡が6.5m前後と比較的大きく、第12号住居跡が５m前後の中形である。また炉址の位置を基準とする主軸方位はばらばらである。とくに第２号住居跡は南西側に炉址が設置されており、他の２軒が北側方向であるのに対して逆方向を向いている。

次にカマド付設住居跡は第１・３・４・５・７・９・10・11号住居跡の８軒であるが、それぞれ住居のもつ属性については統一性に欠け、やはり外見上ばらつきの目立つ住居群である。まず規模についてみると、一辺８mを越える第５号住居跡と７mを越える第１号住居跡と第３号住居跡は大形住居とすることができ、第10号住居跡も6.5mを越える。また第11号住居跡は５m前後、第７号住居跡は４m前後の中形、第４号住居跡と第９号住居跡は４m以下の小形住居に分類でき、いずれもおよそ統一されたものはみられない。しかもカマド付設位置を含め、主軸方位についても第１・５・10号住居跡が北側に向き、第３・７・11号住居跡が北西側に、第４号住居跡が北東側を指しており、その範囲は74°にも及ぶ。なお柱穴については小形住居跡である第４・９号住居跡の２軒が無柱穴住居であるのに対し、他は４本柱構造を基本とする。１辺８mを越える第５号住居跡ですら４本柱である。また貯蔵穴の設置については統一されたものはみられない。南側が未調査区域に広がり不明である第３号住居跡や第４号、小形住居跡の第９号住居跡を除く５軒に付設されていた。カマドの右側（第１号住居跡）、カマドの対辺の壁際（第５・11号住居跡）、その両方つまりカマド右脇と対辺の壁際（第10号住居跡）、カマド対辺コーナー（第７号住居跡）に付帯する。また間仕切り溝も共

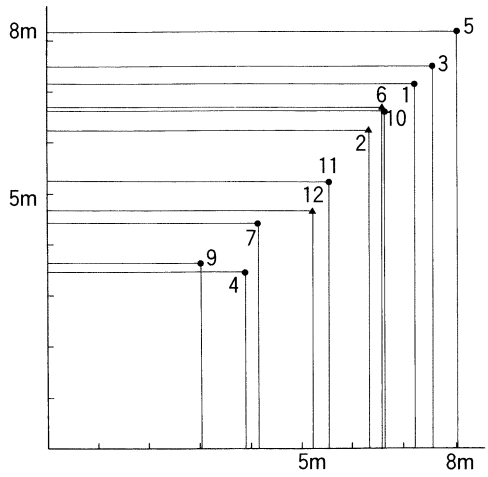
通性がない。間仕切り溝の有する住居跡は３軒確認されている。カマドの付設されていない第６号住居跡でも確認されているが、カマド付設住居跡では第１・５・11号住居跡である。第１・５号住居跡は１辺７ｍを越える大形住居でも、間仕切り溝はわずかに１本のみである。これに対して第11号住居跡は５ｍ前後の中形住居にもかかわらず、主柱穴に連結する溝が構築されており、しかも大甕が集中して出土していることで当該期の中心的な住居跡であったことが想定される。以上は取りあえず出土遺物すなわち時間を無視し、住居跡のあるがままの状況において分類してみた。こうした中で、各戸共通性が少ない意味がはたして時間的なずれによるものであるか次に検討してみたい。

まずカマド付設を伴わない、炉設置住居跡である第２・６・12号住居跡の３軒について触れてみると、第２号住居跡は土師器坏４点と甕２点の出土がある。坏はわずか４点であるが、それぞれ形態差と共に時期差がある。おそらく第３号住居跡と重複しており、混入している可能性が高いと考えられる。まず、第31図１は丸底で、口縁部が外傾して立ち上がる模倣坏である。これを坏Ｂ類と分類する。同じく２は模倣坏でも明らかに後出の段階であり、おそらく重複する第３号住居跡からの混入品とみることができる。これを坏Ｃ類とする。同３は須恵器坏蓋の模倣で、体部との境に稜を有し、口縁部が短く直立する。これを坏Ｄ類とする。４の坏は類似するものが第６号住居跡でも出土しており、丸底で、口縁部が上位で僅かに外反する。これを坏Ａ類とする。５の甕は体部がやや胴長の球形を呈する。１・３が６世紀前半、２が６世紀後半、４と５が５世紀末葉に位置づけられよう。

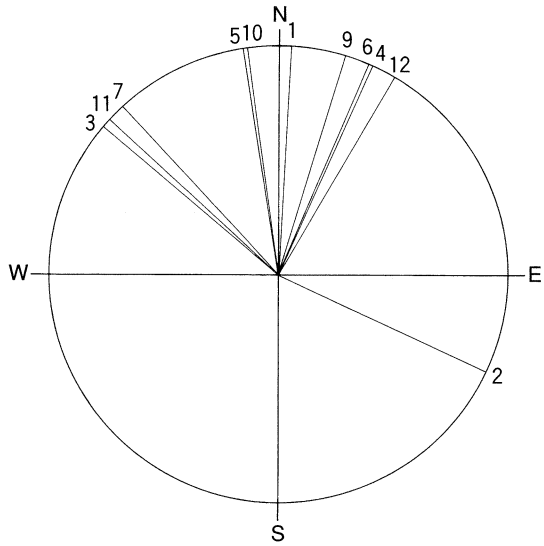
第６号住居跡では坏２点と高坏、埦、甕である。第49図１・２は丸底で、口縁部が短く外反する坏Ａ類で、第２号住居跡出土の４と類似する。甕は体部が球形を呈する。坏および埦・甕は５世紀末葉である。

また第12号住居跡は坏２点と甕６点が出土している。１は丸底で口縁部が外傾する。坏Ａ類。２は丸底の底部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。これら２点は５世紀末葉から６世紀初頭である。以上主な遺物をみてみたが、これらの特徴から検出されたカマド設置のない住居跡は若干の時間的幅があるものの５世紀末葉から６世紀初頭の段階とすることができ、いわゆる鬼高式初期に位置づけられる。

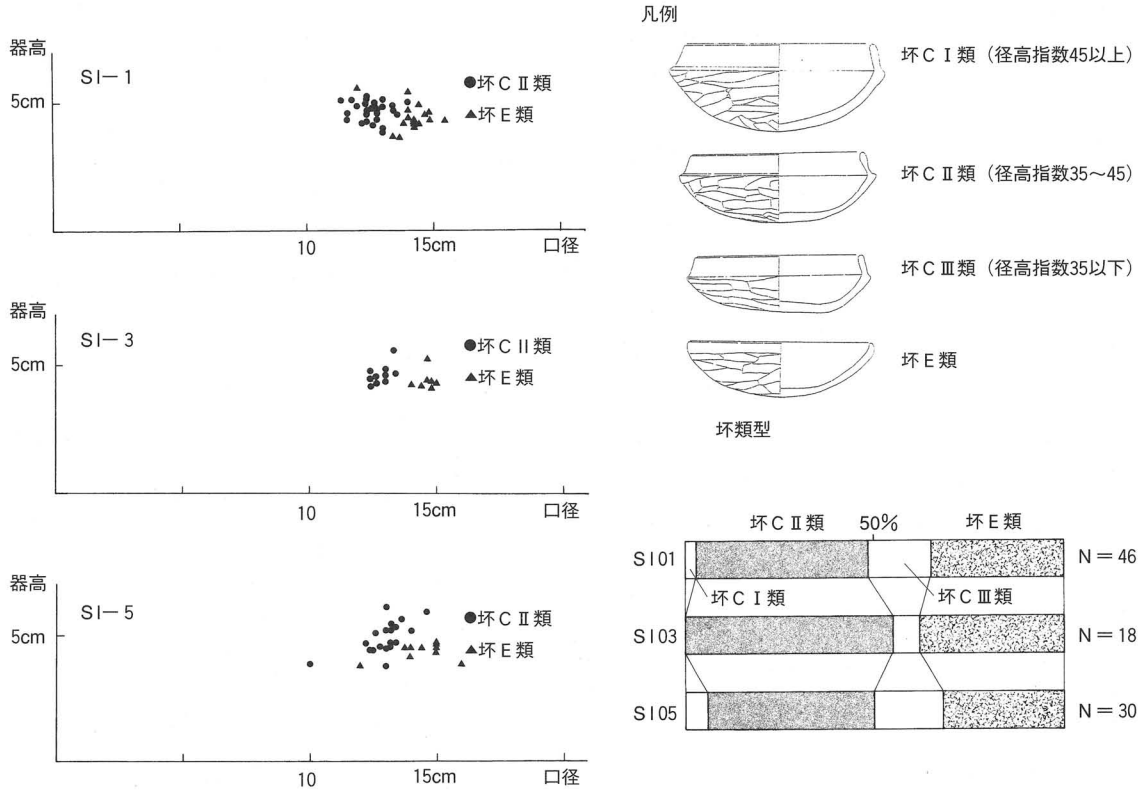
次にカマド付設住居跡について触れたい。まず第７号住居跡で破片であるが陶邑編年ＴＫ23段階併行のものと推定される須恵器蓋（第52図１）が出土している。実年代は５世紀第４四半期に位置づけられているもので、この須恵器蓋と共伴する遺物に土師器坏、高坏２点と甕が出土している。坏は丸底で、口縁部が外反



第78図　住居跡規模関係図



第79図　住居跡主軸方位相関図



第80図　第１・３・５号住居跡出土坏類法量及び割合

する坏ＢⅠ類である。また高坏はそれぞれ脚部および坏部に特徴があり、２形態に分けることができる。第52図３を高坏Ａ類とする。坏部は坏ＢⅠ類に類似し、長脚部を呈するのに対し、同４は逆に短脚部を有するもので高坏Ｂ類とする。いずれも赤彩が施されている。坏Ｂ類・高坏Ｂ類ともに６世紀初頭に比定される。

第11号住居跡では坏・高坏・甕・甑が出土しているが、坏は３種に分類され、口縁部が大きく直線的に外傾する坏ＢⅡ類と須恵器坏身の模倣で、丸底に鋭い稜をもち、口縁部は短く内傾もしくは直立し、さらにここでは身高の深い坏で、これをＣⅠ類とする。これらに浅い埦形を呈する坏Ｅ類が伴う。また高坏は長脚部の高坏Ａ類が出土している。なお、ここでは小形甕を含め、本遺跡で最も特徴的な超大形の甕が６点検出されている。ほぼ球形を呈する胴部中位に最大径を有し、胴部径に対して口径の比率が小さい甕である。器高が45～48㎝、最大径が38～45㎝を測り、通常大甕の1.5倍の大きさをもつ。この超大甕は当住居跡のみの出土に限定されている。坏類には時間的幅があるが、高坏、大甕を含めた甕類や甑は６世紀前半に相当する。

第９号住居跡は坏・鉢・甕・甑が出土しており、ここでも坏類はＢ類とＣ類の２形態に分類することが可能である。まず口縁部が直線的に外傾するＢⅡ類と須恵器坏身の模倣坏Ｃ類である。この坏Ｃ類は器高の差によって３種に分類が可能である。径高指数（器高／口径×100）45以上と深めの坏が２点、逆に坏ＣⅢ類としたものは径高指数35以下と浅めで１点、径高指数35～45の中間を呈する坏ＣⅡ類が４点ある。坏ＣⅠ類は赤彩が施されており６世紀前半、坏ＣⅡ類および坏ＣⅢ類は黒色処理がみられ６世紀後半から末葉に分類され、しかも共伴している甕類についても６世紀前半相当のものもあるが、他の甕・甑類は６世紀後半と時期差がみられる。しかし、ここでは赤彩の施されたＣⅠ類の出土から判断して６世紀前半に位置づけたい。

次に坏類多出住居跡が３軒ある。第１・３・５号住居跡である。第５号住居跡では坏類33点に高坏、甕、甑のほか、須恵器坏蓋か高坏の口縁片、もしくは甕の口縁部と思われる小破片が出土している。坏類はＣ類

とＥ類のみで、身高のＣⅠ類が１点（２）、ＣⅡ類が14点（1・３～11・17～20）、ＣⅢ類が５点（12～16））である。また坏Ｅ類（23～32）は10点出土している。高坏は高坏Ａ類の大型坏を有するもので、口縁部が外反する坏部のみ破片も出土している。これらの時期は須恵器が６世紀前半から中葉に比定され、また坏ＣⅡ類が中心となり６世紀末葉に位置づけられる。第１号住居跡も坏類52点のほか、高坏、埦、甕、甑の出土がある。まず坏類はＣ類とＥ類のみで、身高のＣⅠ類が１点（30）、ＣⅡ類が12点（１～21）、口縁部が直立もしくは外傾するＤ類が８点(22～29)である。また坏Ｅ類（31～46）が15点出土している。高坏は完形品ではないが高坏Ａ類４点が出土している。やはり坏ＣⅡ類と坏Ｄ類が主体となり６世紀後半、高坏Ａ類は６世紀後半に位置づけられる。同じ傾向を示すのが第３号住居跡である。坏類18点のほか、埦、甕、甑の出土がある。まず坏類はＣ類とＥ類のみで、身高のＣⅠ類はなく、ＣⅡ類が８点（１・３～８・10）、ＣⅢ類（２・９）が２点、坏Ｅ類（12～18）が７点出土している。やはり坏ＣⅡ類が中心となり６世紀後半に位置づけられる。

なお、その他に第10号住居跡では坏類８点のほか、甕の出土がある。坏類はＣ類とＥ類のみで、ＣⅡ類が２点（１・３）、ＣⅢ類（２）が１点、Ｅ類が５点(４～８)出土している。坏ＣⅡ類、坏ＣⅢ類が６世紀末葉に位置づけられる。また出土資料が少ないが第４号住居跡は坏ＣⅢ類で６世紀末葉から７世紀に相当する。

以上のようにわずか11軒の住居跡ではあるが、その内容は豊富である。ちょうど時代の画期を迎えた段階に本遺跡が形成されたからであろう。その象徴が住居跡におけるカマドの付設である。ここではカマド出現以前を５世紀末葉とした。いわゆる和泉式期以後鬼高式初期に相当する。遺物の少なさと伴に第２号住居跡では祭祀遺物が共伴する。やがて第７号住居跡でカマドを導入する。出土須恵器は５世紀第４四半期に比定されるが、伴出する土師器は６世紀初頭である。ここでは前段階と土器組成の様相に大きな変化をみることができない。しかし、６世紀前半になると大甕を保有する住居跡第11号住居跡が存在し、継続して小形の第９号住居跡が構築される。そして次段階になって多量の坏類を保有する住居跡が形成される。第１・３・５号住居跡である。坏の形態によって時間幅が広く捉えられるが、主体となるのは径高指数35～45の坏ＣⅡ類である。それに伴い浅い埦形の坏Ｅ類が出土している。いずれも黒色処理が施され、前者が身となり、後者が蓋の関係となるのであろう。時期は６世紀後半に比定される。また終焉は第10号住居跡や第４号住居跡で６世紀末葉から７世紀になろう。

参考文献

樫村宣行 1993「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』２号　茨城県教育財団

樫村宣行 1996「和泉式土器」『研究ノート』５号　茨城県教育財団

樫村宣行 1999「星合遺跡における初期カマドの様相について」『菟玖波』第３号　菟玖波倶楽部

瓦吹　堅 1989「浮島、興津土器様式」『縄文土器大観Ⅰ　草創期、早期』小学館

黒澤春彦　福田礼子 2000「権現前遺跡―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―」土浦市教育委員会

黒澤春彦 2002「阿ら地遺跡―特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―」土浦市教育委員会

佐藤典邦 1991「浮島式土器の成立と展開」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業

縄文時代研究班 1994「茨城県における縄文時代前期後半の住居跡の形態について」『研究ノート』３号　茨城県教育財団

縄文時代研究班 1997「茨城県内における浮島式土器の検討（１)」『研究ノート』６号　茨城県教育財団

縄文時代研究班 1997「茨城県内における浮島式土器の検討（２)」『研究ノート』７号　茨城県教育財団

寺門義範 1977「関東地方東部浮島式土器群の再検討」『霞ヶ浦文化』２　霞ヶ浦文化研究会

西村正衛 1966「茨城県稲敷郡浮島貝ケ窪貝塚」『学術研究』15　早稲田大学

西村正衛 1967「茨城県北相馬郡取出町向山貝塚」『学術研究』16　早稲田大学

藤本弥城 1980「那珂川下流の石器時代研究Ⅱ」

松田光太郎 1990「浮島式土器の研究史－その1」『遡航』8　早稲田大学院文研考古談話会編

松田光太郎 1992「浮島式土器の研究史－その２」『遡航』10　早稲田大学院文研考古談話会編

松田光太郎 1992「浮島式土器の成立について―東関東における縄文時代前期後半の土器文様の伝統―」『古代』第93号　早稲田大学考古学会

松田光太郎 1995「浮島式土器の研究」『古代探叢』Ⅳ　早稲田大考古学会

山本静男 1982「大谷津Ｂ遺跡・外山遺跡他」『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団

竪穴住居跡一覧

住居跡名	主軸方位	規模（m）　確認面 床面	面積（m²）	壁高（cm）	付属施設	時期	備考
1	N－3°－W	7.15×7.23 6.6×6.8	51.7 44.9	35～55	竈・貯	6世紀後半	
2	N－115°－E	6.24×6.34 6.2×6.0	39.6 37.2	20	炉	6世紀初頭	SI－3と重複
3	N－50°－W	7.5×7.59 7.4×7.4	56.9 54.8	24.5～32.5	竈	6世紀後半	SI－2と重複
4	N－24°－E	3.9×〔3.45〕 3.8	—	30～41.5	竈・貯	6世紀後半	
5	N－9°－W	8.18×8.04 7.8×7.8	65.8 60.8	23.5～46.5	竈・貯	6世紀後半	
6	N－23°－E	6.68×6.58 6.6×6.4	44 42.2	33～49	炉・貯	5世紀末葉	
7	N－43°－W	4.44×4.15 4.0×4.4	18.4 17.6	16	竈・貯	5世紀末葉～ 6世紀初頭	
8	N－36°－W	6.67×〔3.24〕	—	10～11	炉	縄文時代 前期後葉	
9	N－17°－E	3.02×3.64 2.9×3.5	11.0 10.2	16	竈	6世紀前半	
10	N－8°－W	6.62×6.64 6.4×6.6	44.0 42.2	64	竈・貯	6世紀後半	
11	N－48°－W	5.24×5.4 5.2×5.2	28.3 27.0	49～60	竈・貯	6世紀後半	
12	N－30°－E	5.67×4.22 5.0×4.6	24.4 23.0	36～51.5	炉・貯	5世紀代	

第6章　総　括

今回報告した形部遺跡は、調査以前の現況が山林であったため遺跡として周知されておらず、試掘調査によって新しく発見された遺跡である。この周辺は谷津が奥深く樹枝状に入り込む地形で、台地は細長い尾根状となっている。これらの台地上には多くの遺跡が存在することから、当地もその可能性は充分に考えられた。調査の結果、縄文時代前期の住居跡や古墳時代中期から後期の集落が発見された。花室川下流域はこの時期の遺跡が多く、本遺跡も同様のあり方を呈している。

本遺跡からは縄文時代前期後葉の浮島式期の竪穴住居跡が検出された。市内では本遺跡の西側の谷を約900m南に上った権現前遺跡等で検出されているが発見例は少ない。しかし土坑や包含層などから遺物が出土している遺跡は数多くあり、居住施設の形態や立地について検討が必要であろう。

花室川下流域の遺跡をみると、縄文時代では、本流から谷津の中ごろに面した台地上に早期後半から前期の遺跡が多く存在している。本遺跡をはじめ、烏山遺跡、内出後遺跡、阿ら地遺跡、永国遺跡などで確認されているが大きな集落はない。一方、谷の奥まった地点では中期から後期にかけての大規模な集落が多くみられる。扇ノ台遺跡、摩利山遺跡、宮前遺跡、六十原遺跡、六十原Ａ遺跡は中期の集落で、袋状土坑などが数多く検出されている。峰崎Ｂ・Ｃ遺跡は摩利山遺跡に隣接し中期から後期の集落が発見された。

古墳時代は、本遺跡を含め中期後半から後期前半にかけての集落が目立つ。本遺跡の周辺では永国遺跡、阿ら地遺跡、内出後遺跡、神出遺跡、烏山遺跡、向原遺跡、宮前遺跡などで確認されている。向原遺跡は前期から継続している集落である。これらの集落は谷のやや中に入った台地上に分布し、稲作や漁撈が集落の立地にかかわっていると推測される。稲作は谷津からの豊富な湧水を利用していると思われ、塩分を含む霞ヶ浦や河口付近の水が稲作には適さなかったことを考えると、谷津の湧水は重要な資源であったのだろう。また、土玉の出土が多いことから、河口から霞ヶ浦にかけての一帯は漁場として最適であったこともうかがえる。

本遺跡の出土遺物を見ると、第１号住居跡から出土した50点以上の杯や、第11号住居跡で出土した器高45㎝、胴部最大径40㎝を越える大型甕が特出される。第１号住居跡の杯は竈周辺に多く、状況から住居廃絶時に廃棄されたものである。第11号住居跡の大型甕は当地域の球胴甕としては最大である。住居内の器種を見ると、第１号住居跡は圧倒的に杯が多く、第11号住居跡は甕が多い。第２号住居跡などからは手捏ね土器や、土製勾玉、小玉などが出土しており集落内で祭祀行為が行なわれたことがうかがえる。第１号住居跡や第11号住居跡の特異な器種構成も祭祀的な要因なのかもしれない。

今回の調査では本文に記載したとおり多くの成果を得ることが出来た。今後、この成果を土浦市周辺の原始古代の解明に活かしたいと思う。

最後になりましたが発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで多くの機関や方々にご協力、ご指導を賜りました。文末ではありますが深く感謝の意を表する次第です。

報告書抄録

ふりがな	かたべいせき				
書名	形部遺跡				
副書名	老人介護保健施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書				
巻次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	小川和博　小林孝秀　黒澤春彦	著者名	小川和博　黒澤春彦　窪田恵一		
編集機関	形部遺跡調査会				
所在地	〒300-0811 茨城県土浦市大字上高津1843　上高津貝塚ふるさと歴史の広場内 TEL 029-826-7111				
発行機関	土浦市教育委員会				
所在地	〒300-0812 茨城県土浦市下高津２丁目７番36号				
発行年月日	2005年(平成17年) 9月30日				

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	(新)	(新)			
形部遺跡	土浦市 大字右籾 1113	０８ ２０３	469	36° 3′ 0″	140° 10′ 53″	2003年 ３月11日～ ４月26日	2,000m²	老人介護 保健施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
形部遺跡	集落跡	旧石器時代		剥片　石核	縄文時代は前期（浮島期）の住居跡１軒が検出され早期・前期の遺物が出土。古墳時代は多量の杯が出土した住居跡や、大形の土師器甕が特筆される。
		縄文時代 （早期・前期）	竪穴住居跡 １軒 土坑　３基	縄文土器 （早期・前期）	
		古墳時代 （後期）	竪穴住居跡 11軒 土坑　２基	土師器　須恵器 祭祀遺物	
		近世以降	溝状遺構２条 土坑　１基		

写　真　図　版

調査区航空写真（南→）

試　掘　状　況

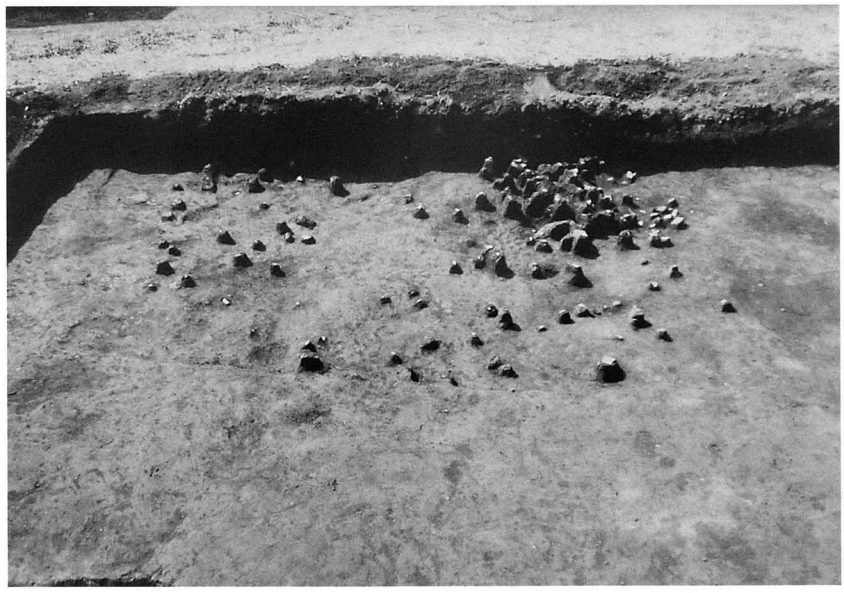
形部遺跡遠景（西→）

調査前全景（北→）

調査終了全景

第 8 号住居跡　完掘

第 8 号住居跡　炉址



第 8 号住居跡
遺物出土状況

第１号住居跡　完掘

第１号住居跡
遺物出土状況（１）

第１号住居跡
遺物出土状況（２）

第２号住居跡　完掘

第３号住居跡　完掘

第３号住居跡
遺物出土状況

第４号住居跡　完掘

第５号住居跡　完掘

第５号住居跡
遺物出土状況

第６号住居跡　完掘

第６号住居跡
炭化物出土状況

第７号住居跡　完掘

第９号住居跡　完掘

第９号住居跡
遺物出土状況（１）

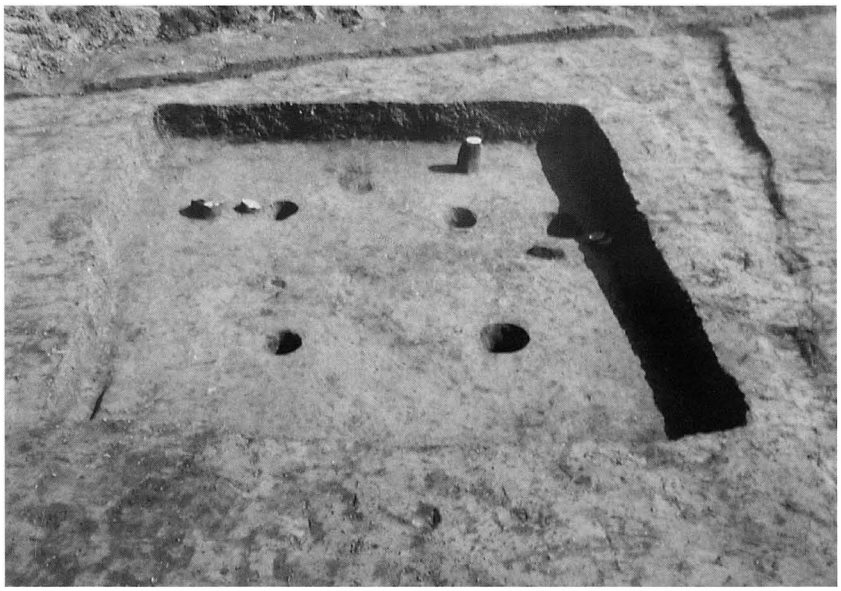
第９号住居跡
遺物出土状況（２）

第10号住居跡　完掘

第11号住居跡　完掘

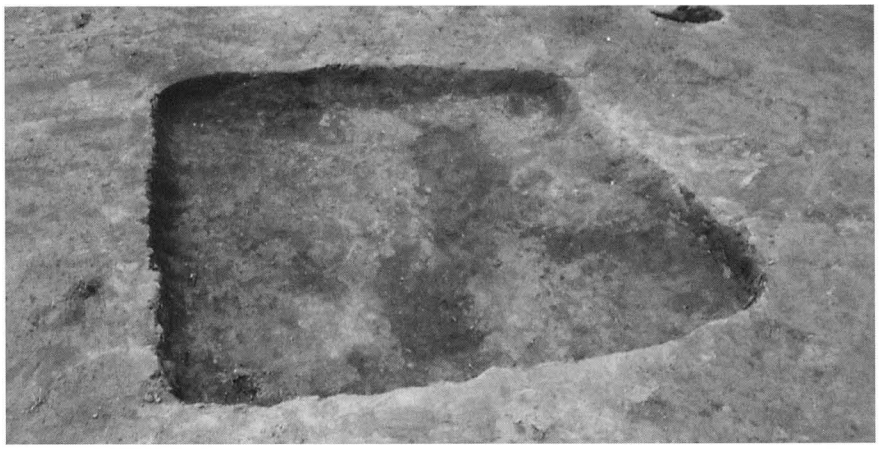
第11号住居跡
遺物出土状況（１）

第11号住居跡
遺物出土状況（２）

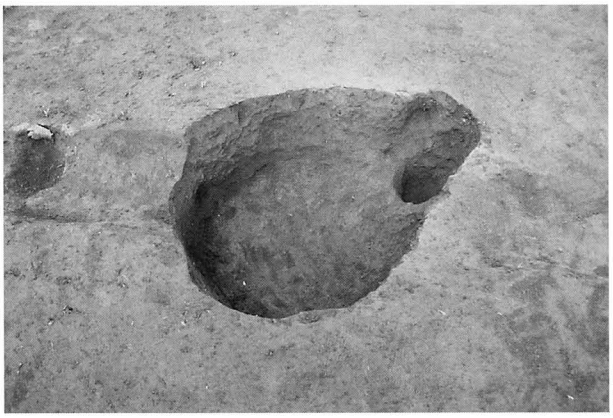


第12号住居跡　完掘

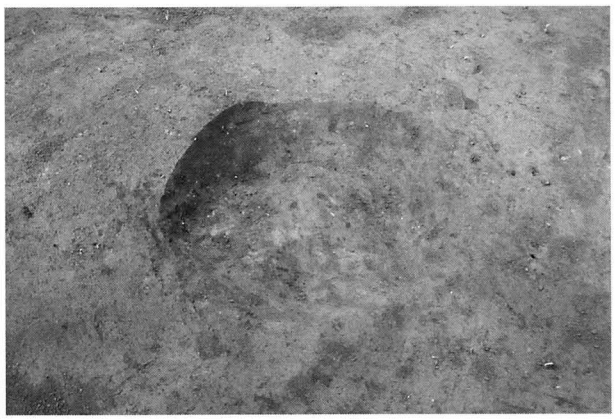
第12号住居跡
遺物出土状況



第１号土坑　完掘

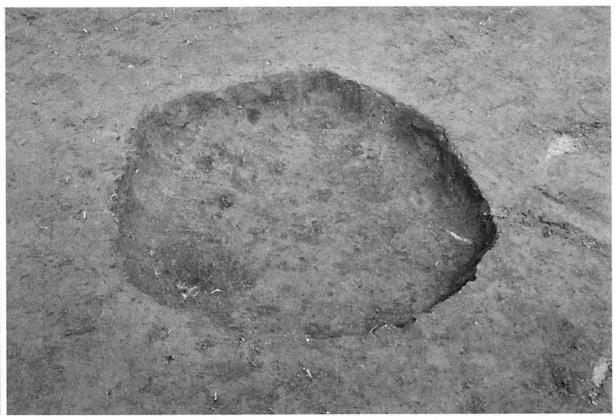


第２号土坑　完掘



第３号土坑　完掘

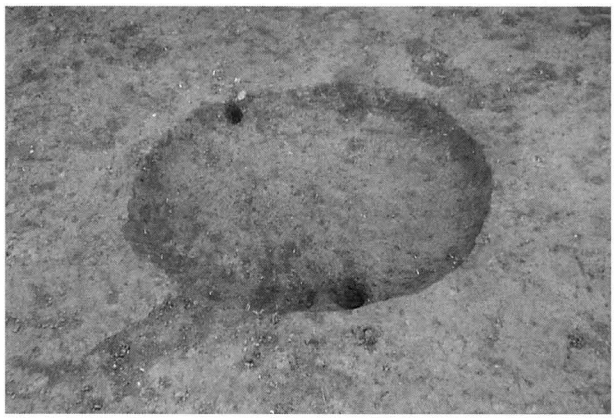
第４号土坑　完掘



第５号土坑　完掘

第６号土坑　完掘

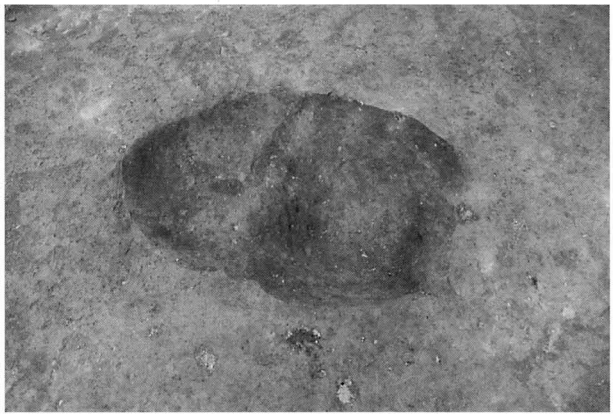
第７号土坑　完掘



第８号土坑　完掘

第９号土坑　完掘

第10号土坑　完掘



第11号土坑　完掘

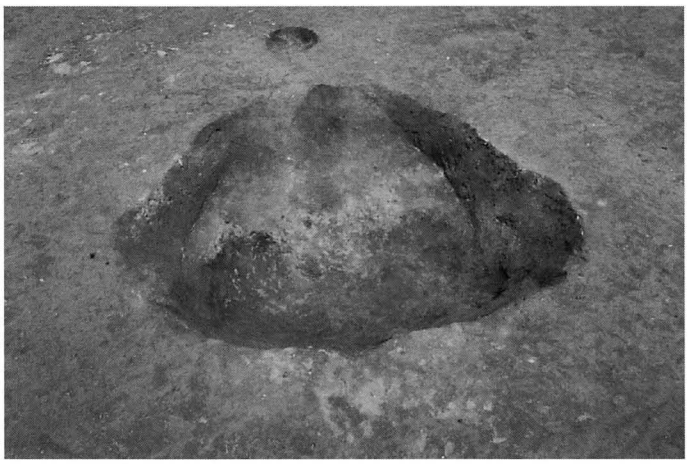
第12号土坑　完掘

第14号土坑　完掘

第15号土坑　完掘

第16号土坑　完掘

第１号風倒木痕



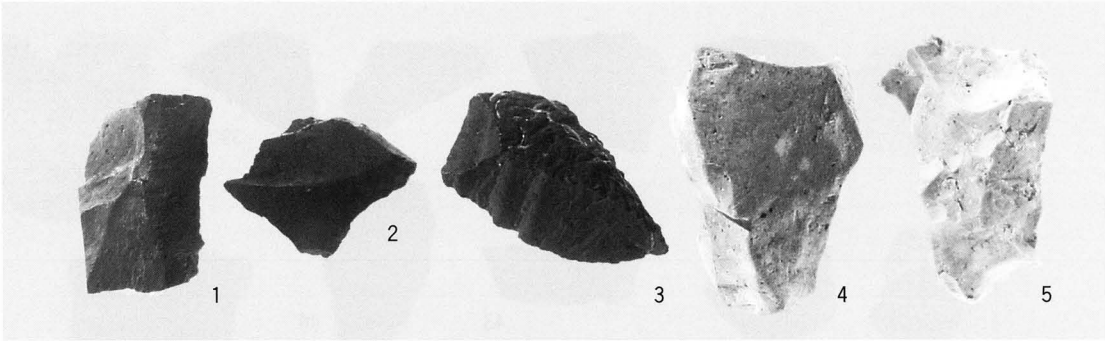
第３号風倒木痕

第４号風倒木痕

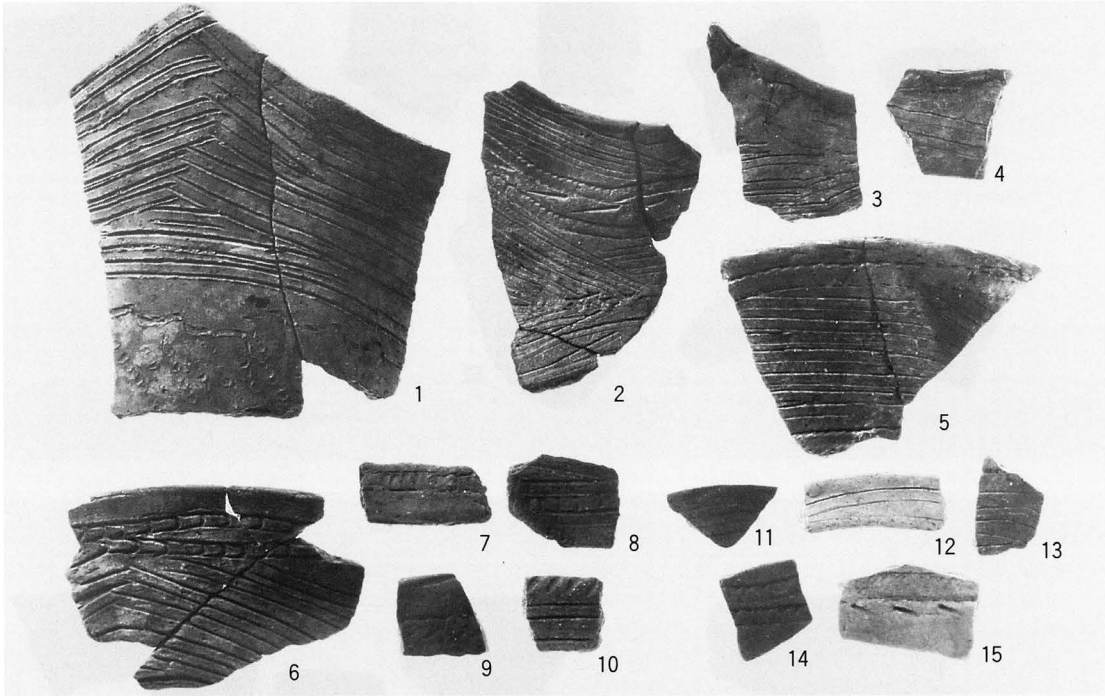
第１号溝状遺構　完掘

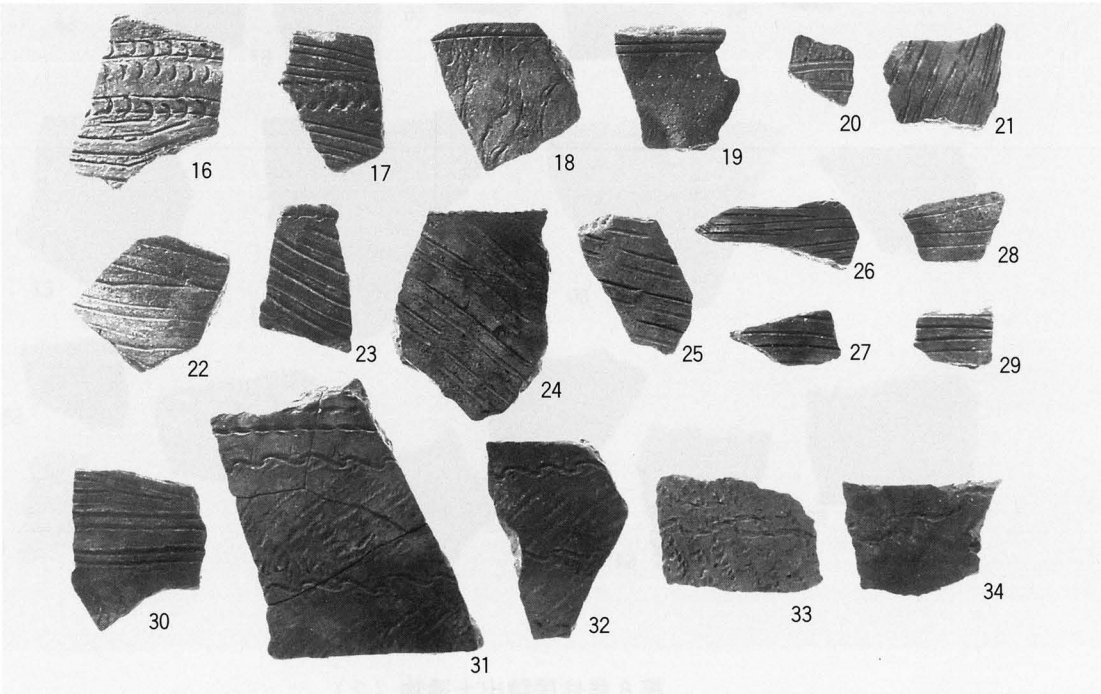
第２号溝状遺構　完掘

第２号溝状遺構　断面

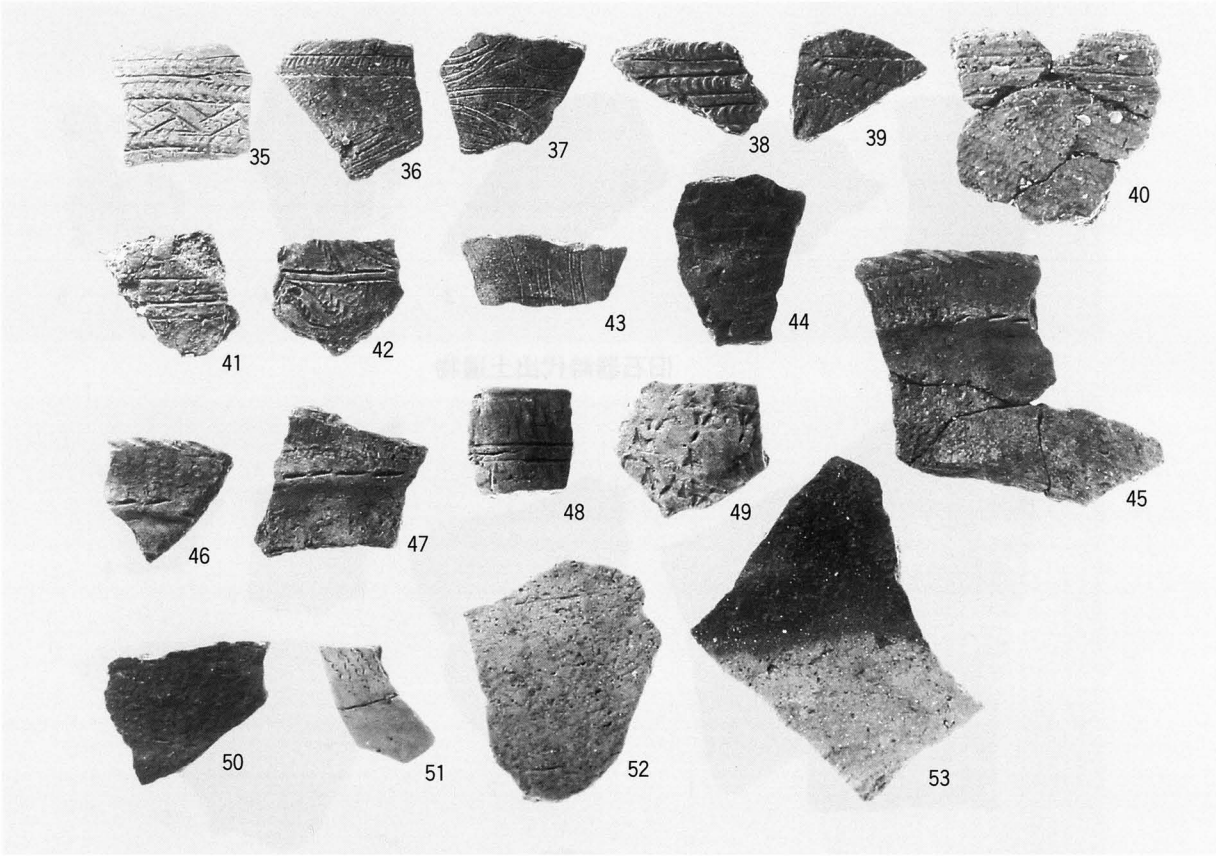


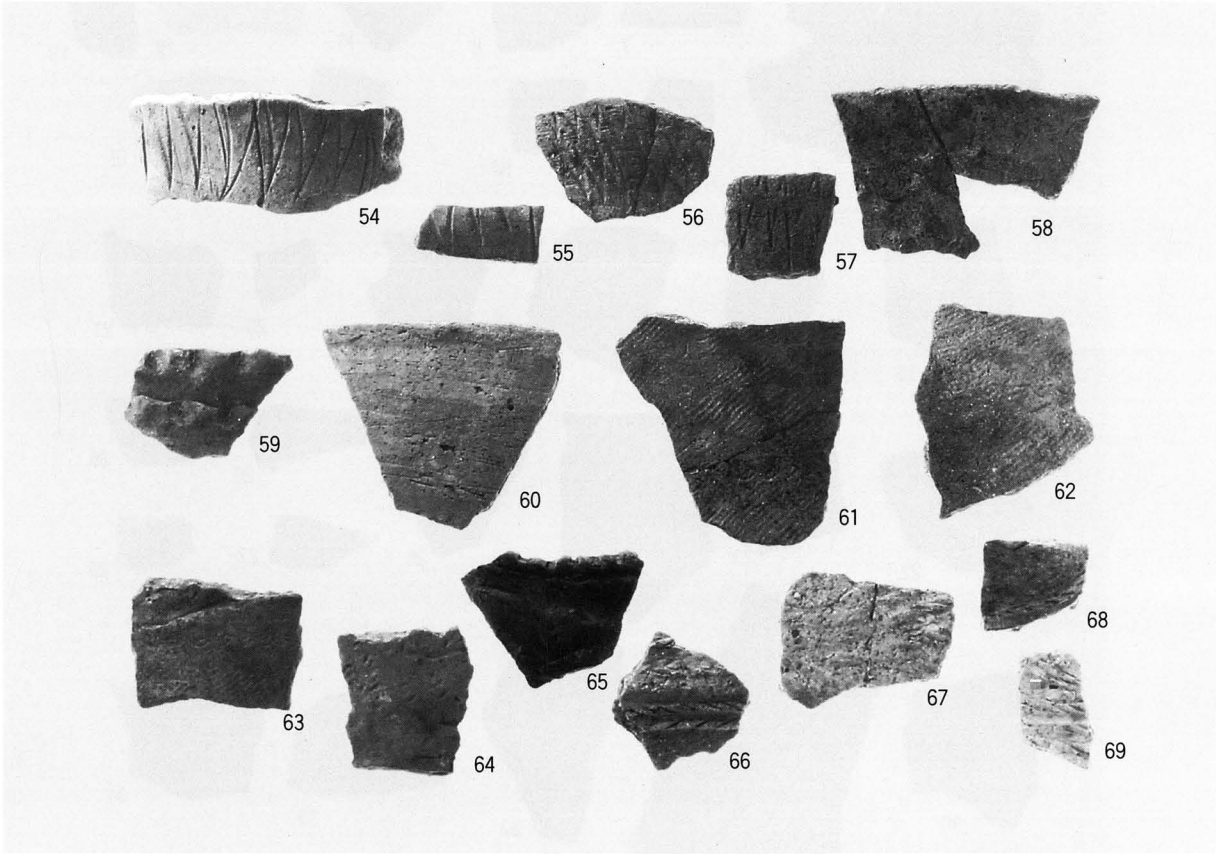
旧石器時代出土遺物



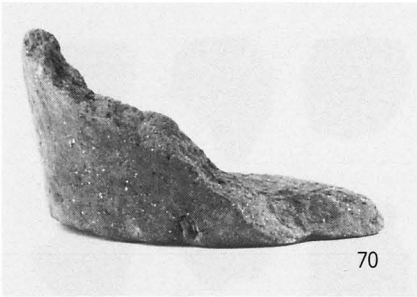


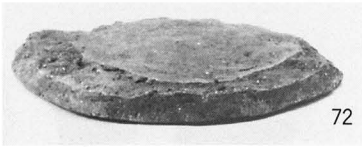
第８号住居跡出土遺物（１）

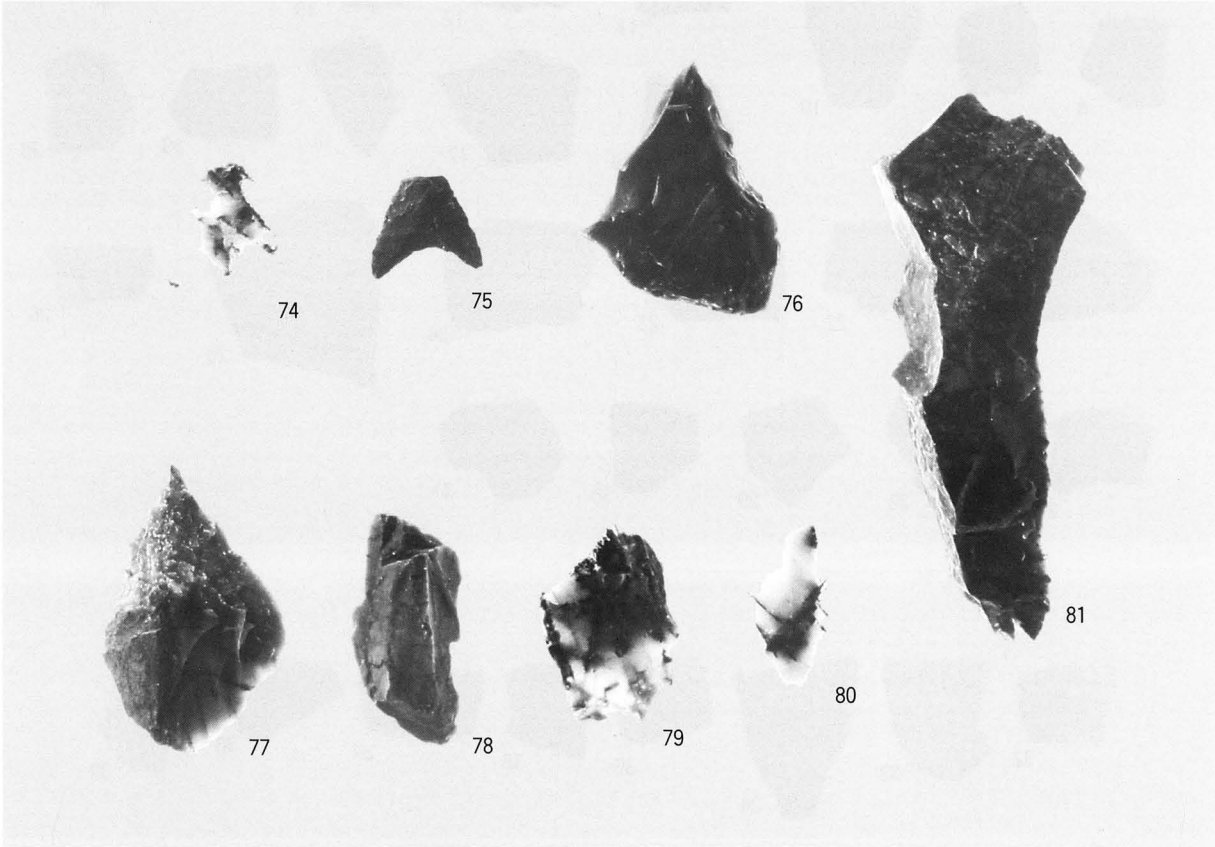




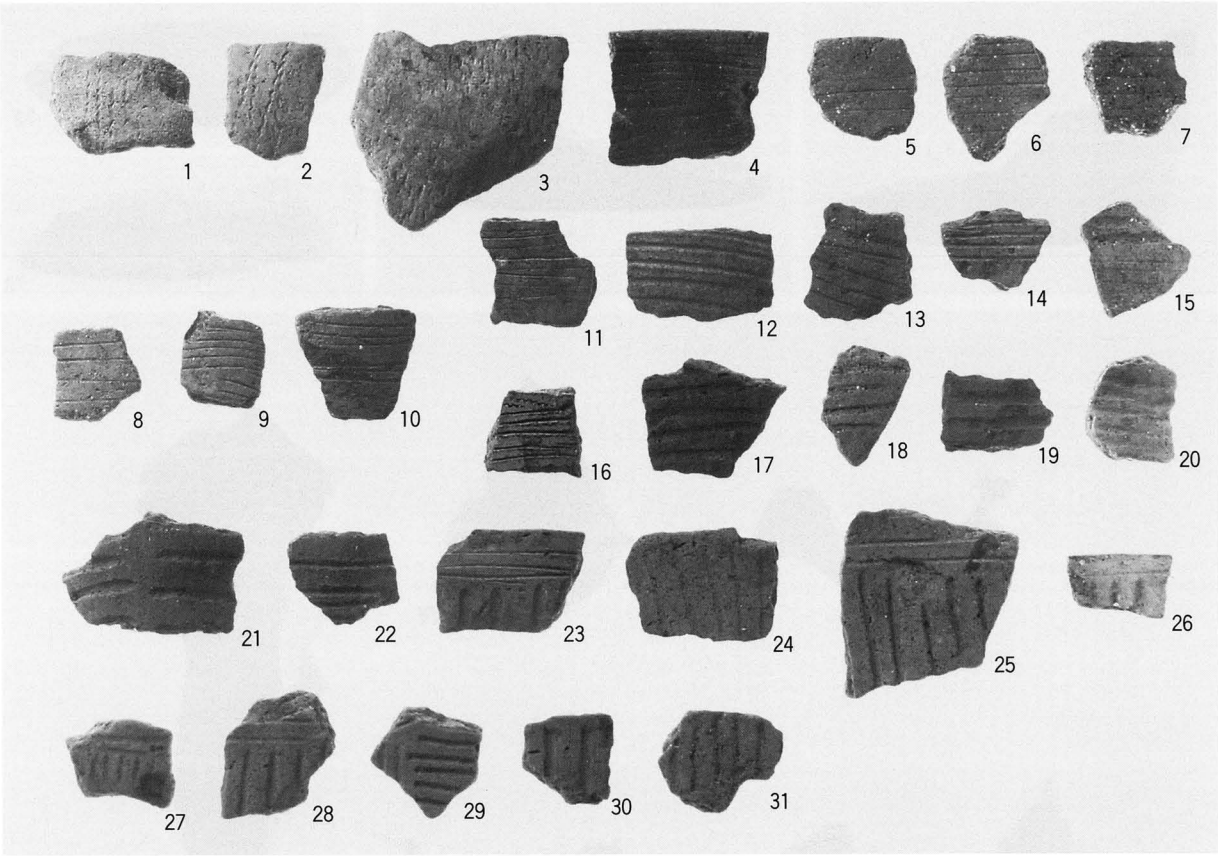
第８号住居跡出土遺物（２）

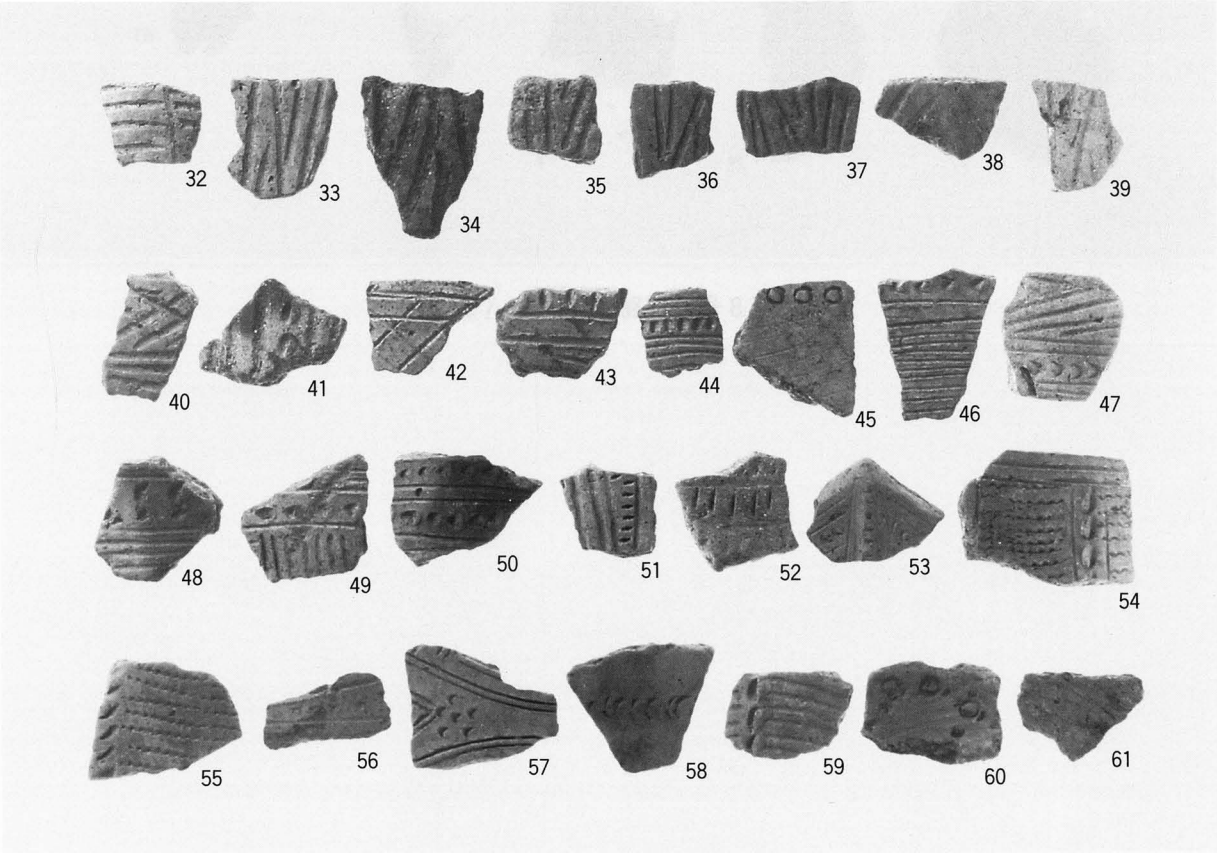




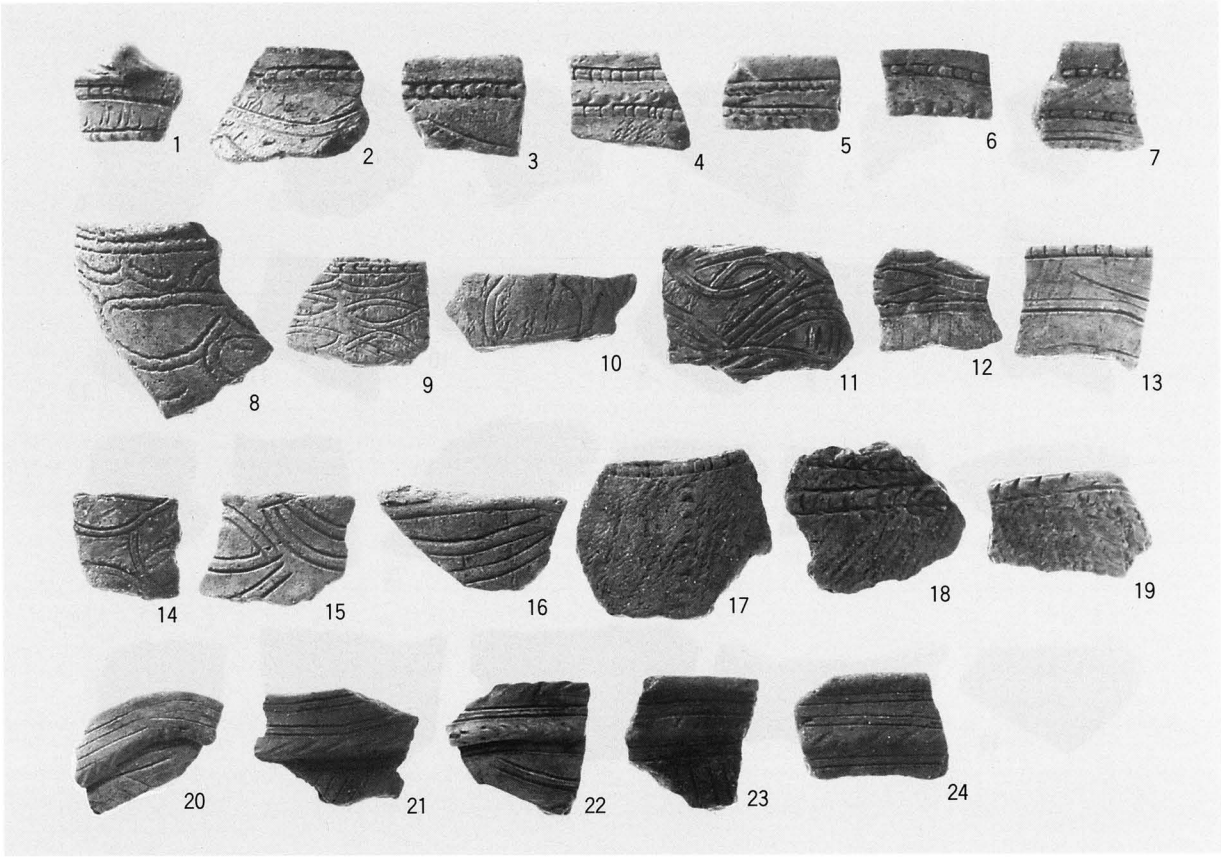


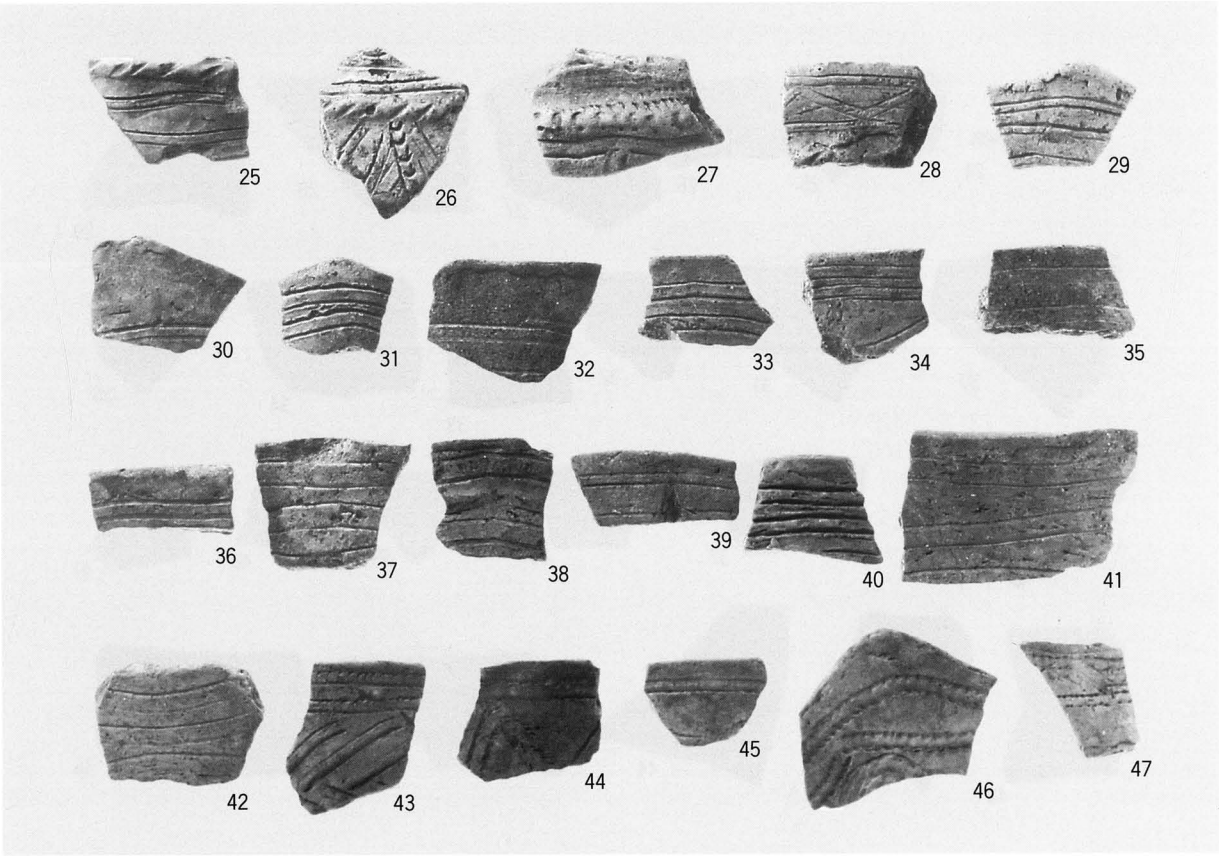
第８号住居跡出土遺物（３）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

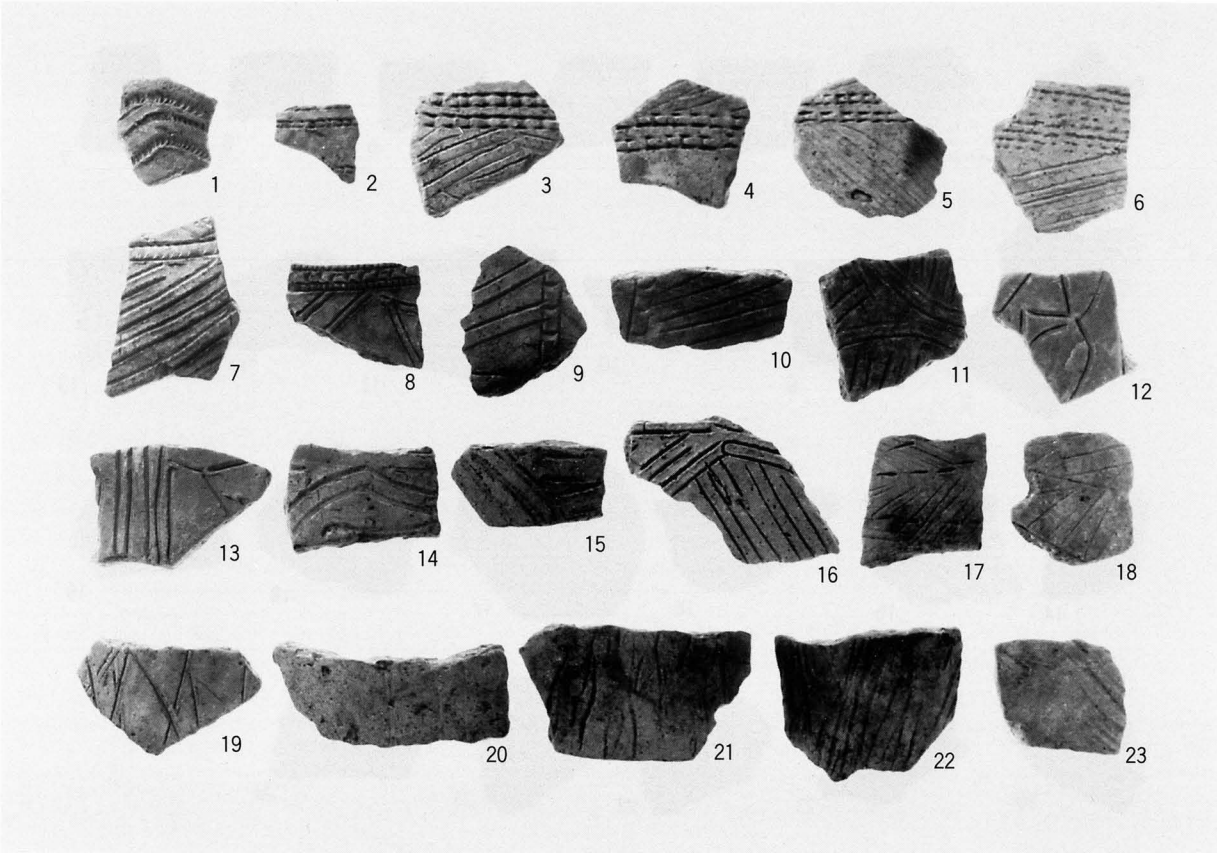

32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61

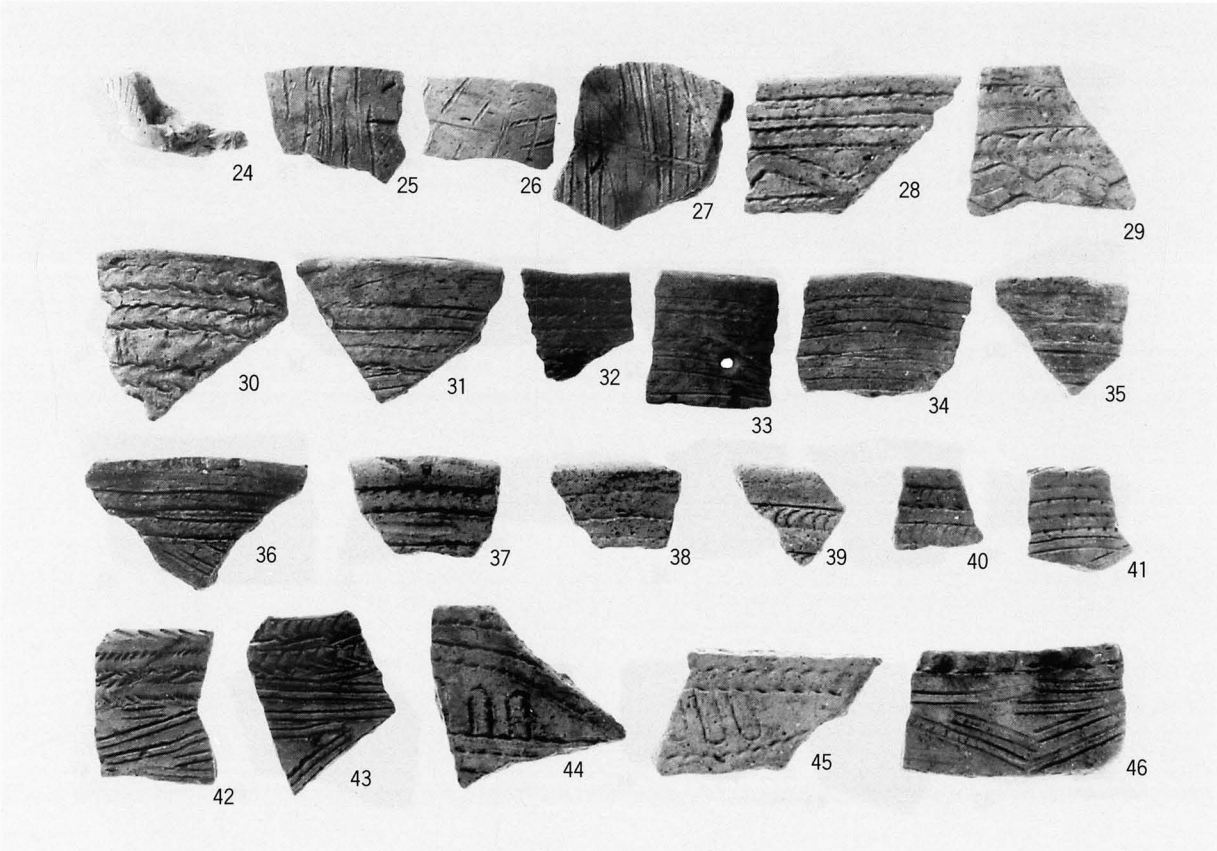
遺構外出土縄文土器（1）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

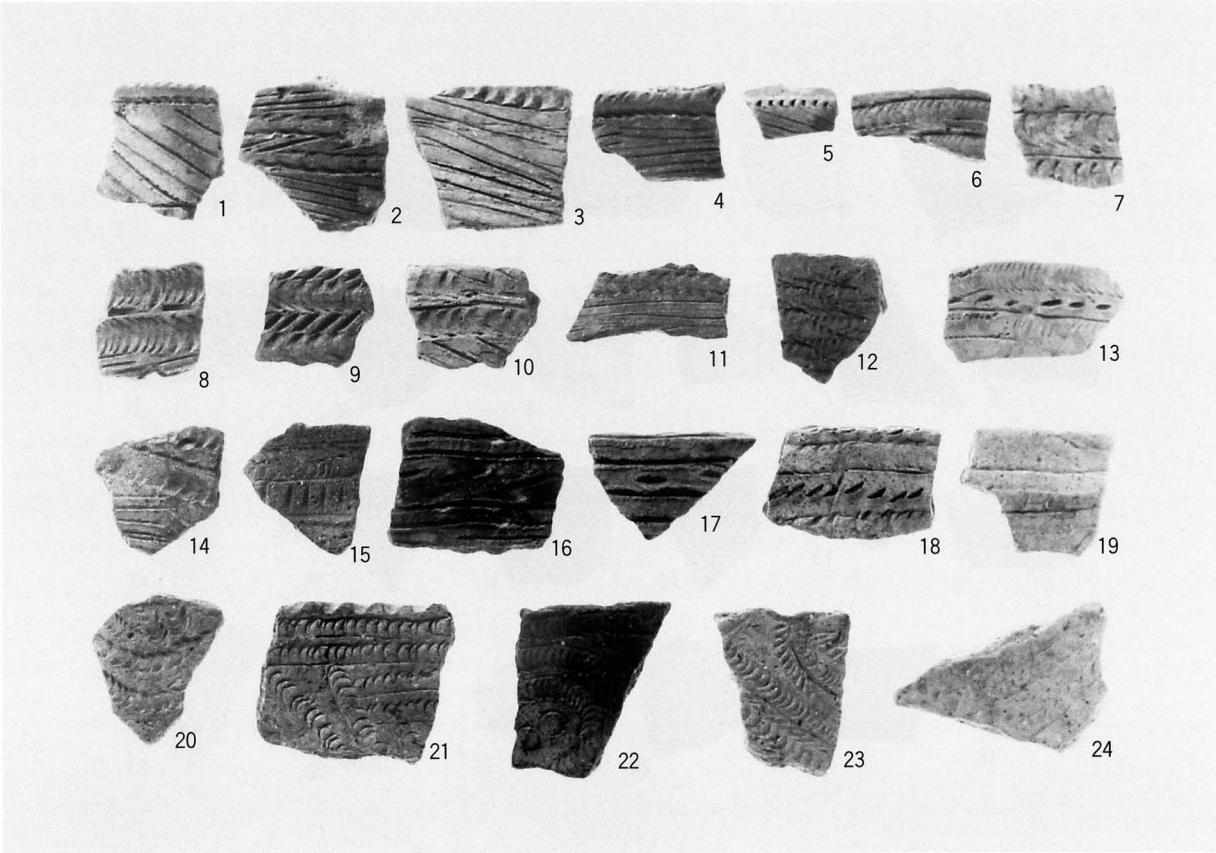

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

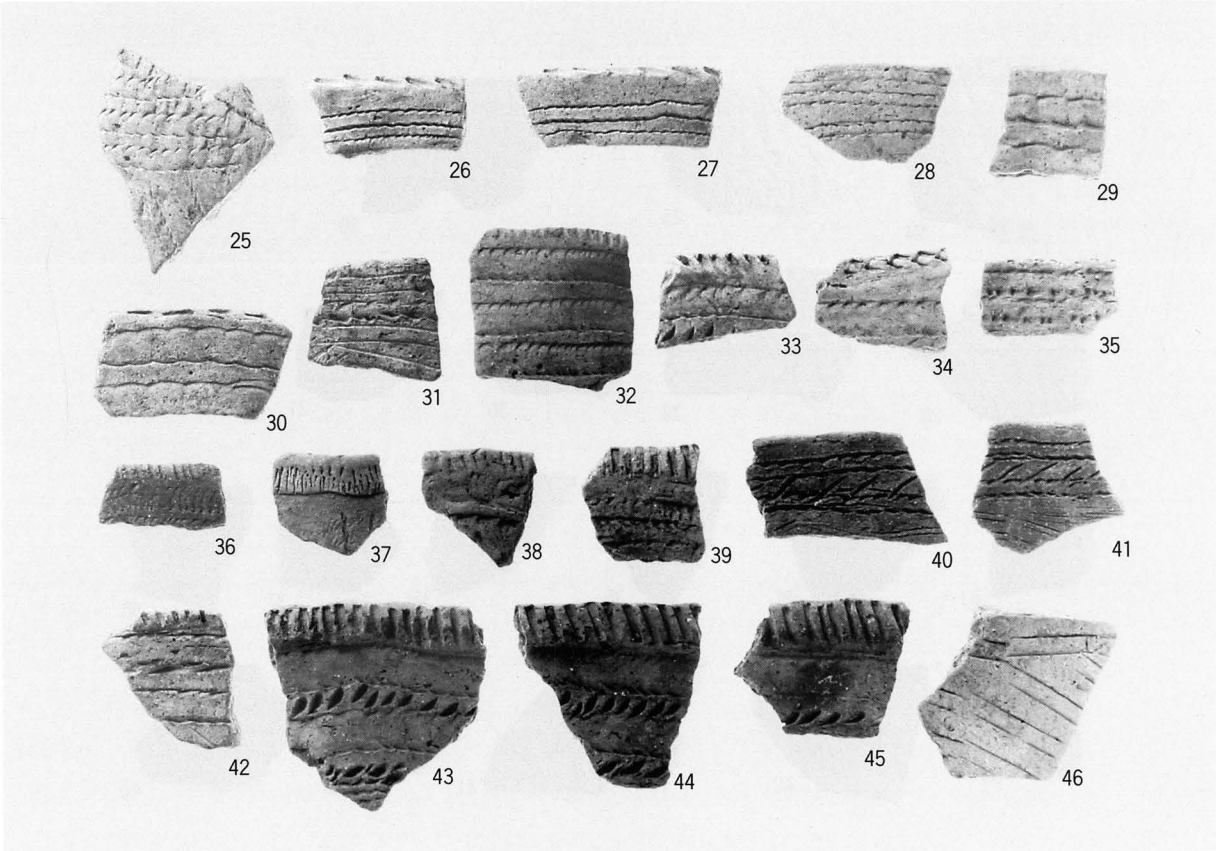
遺構外出土縄文土器（２）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

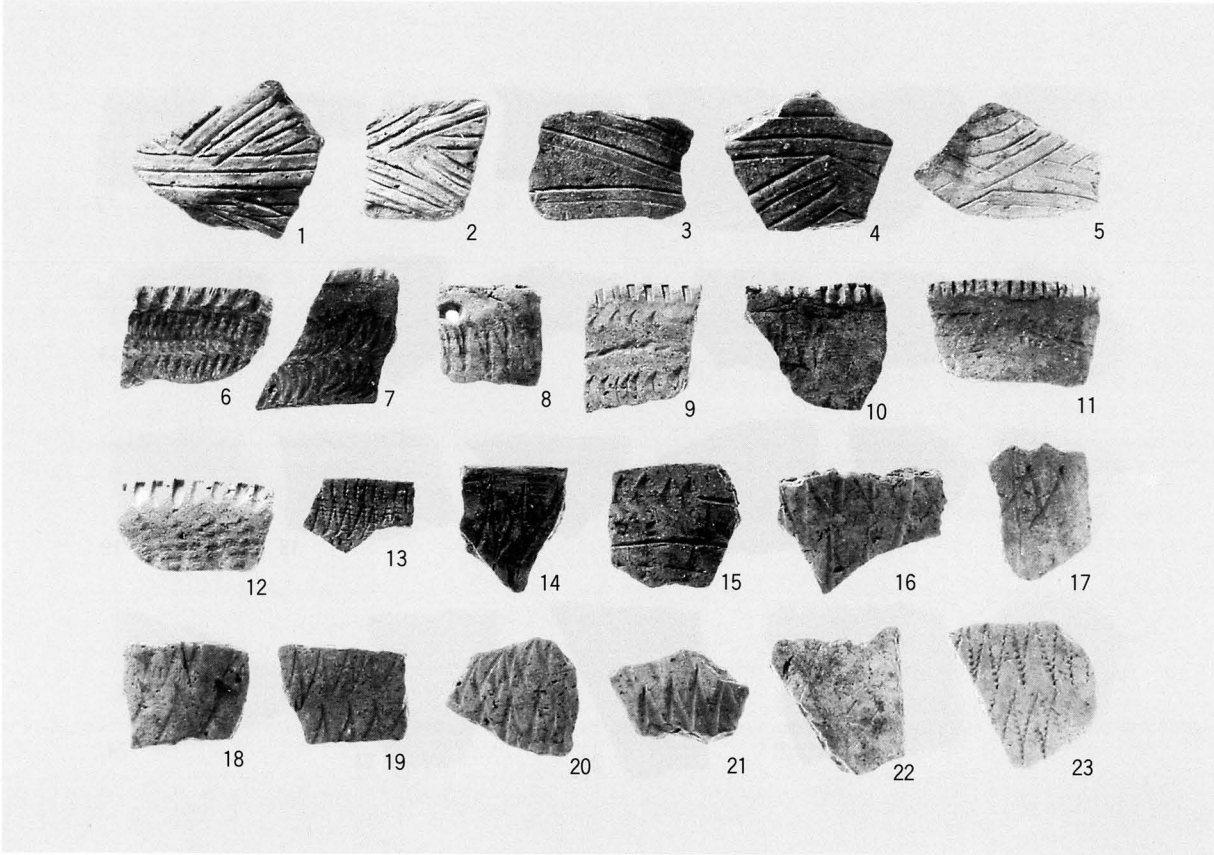

24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46

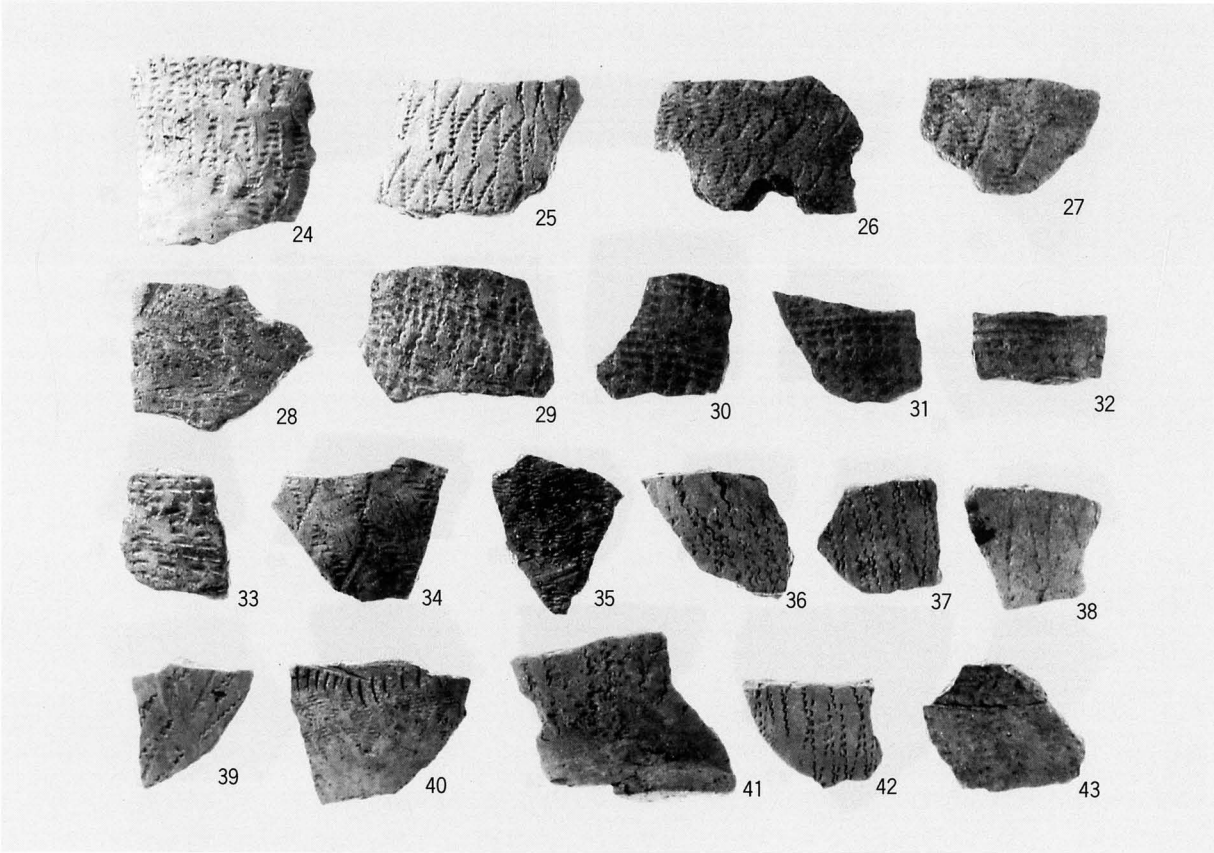
遺構外出土縄文土器（３）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

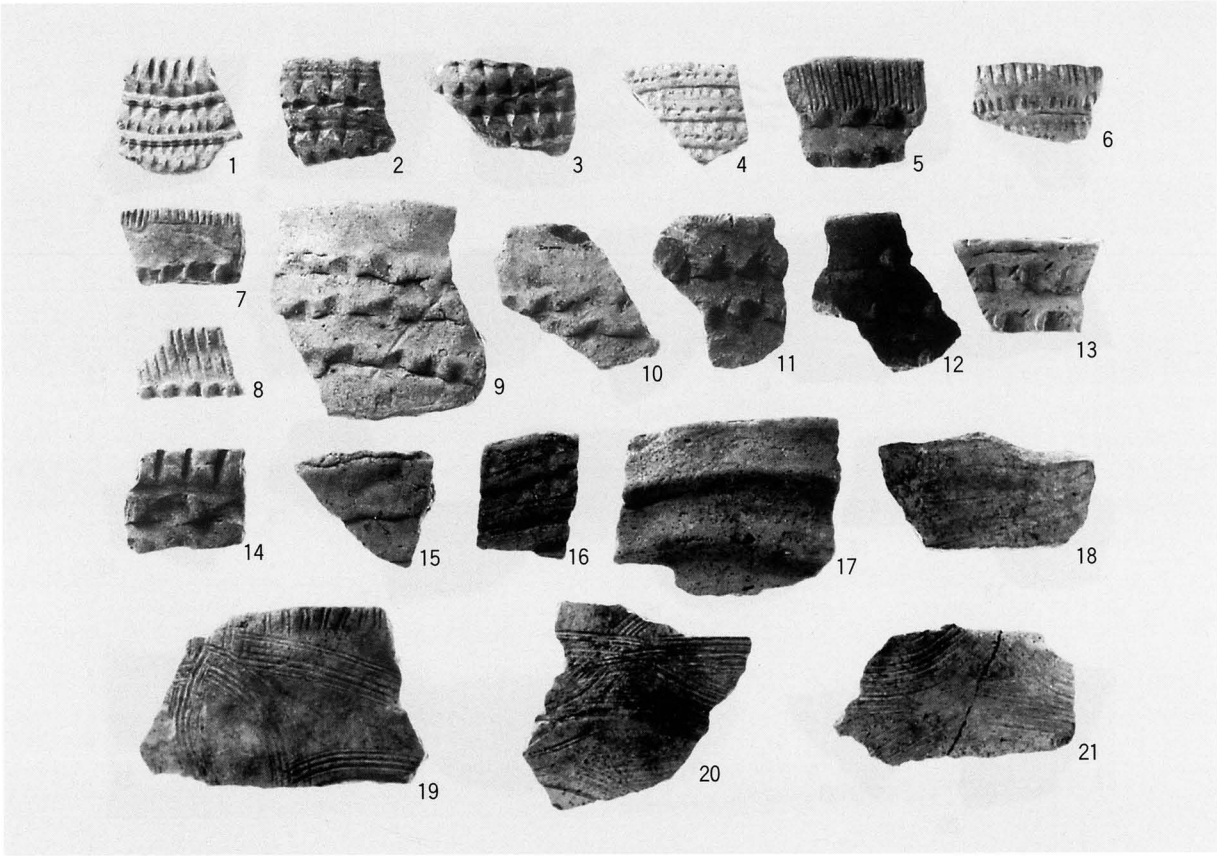

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46

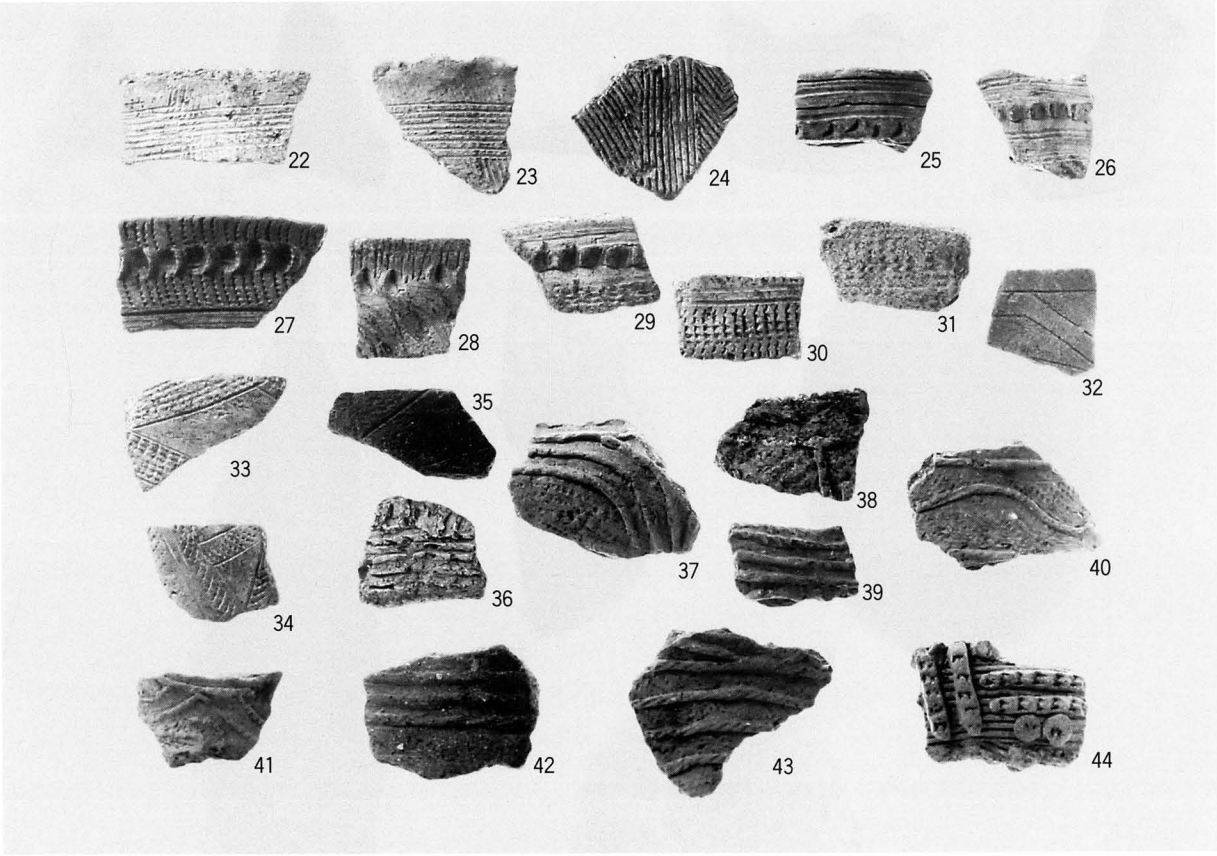
遺構外出土縄文土器（４）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

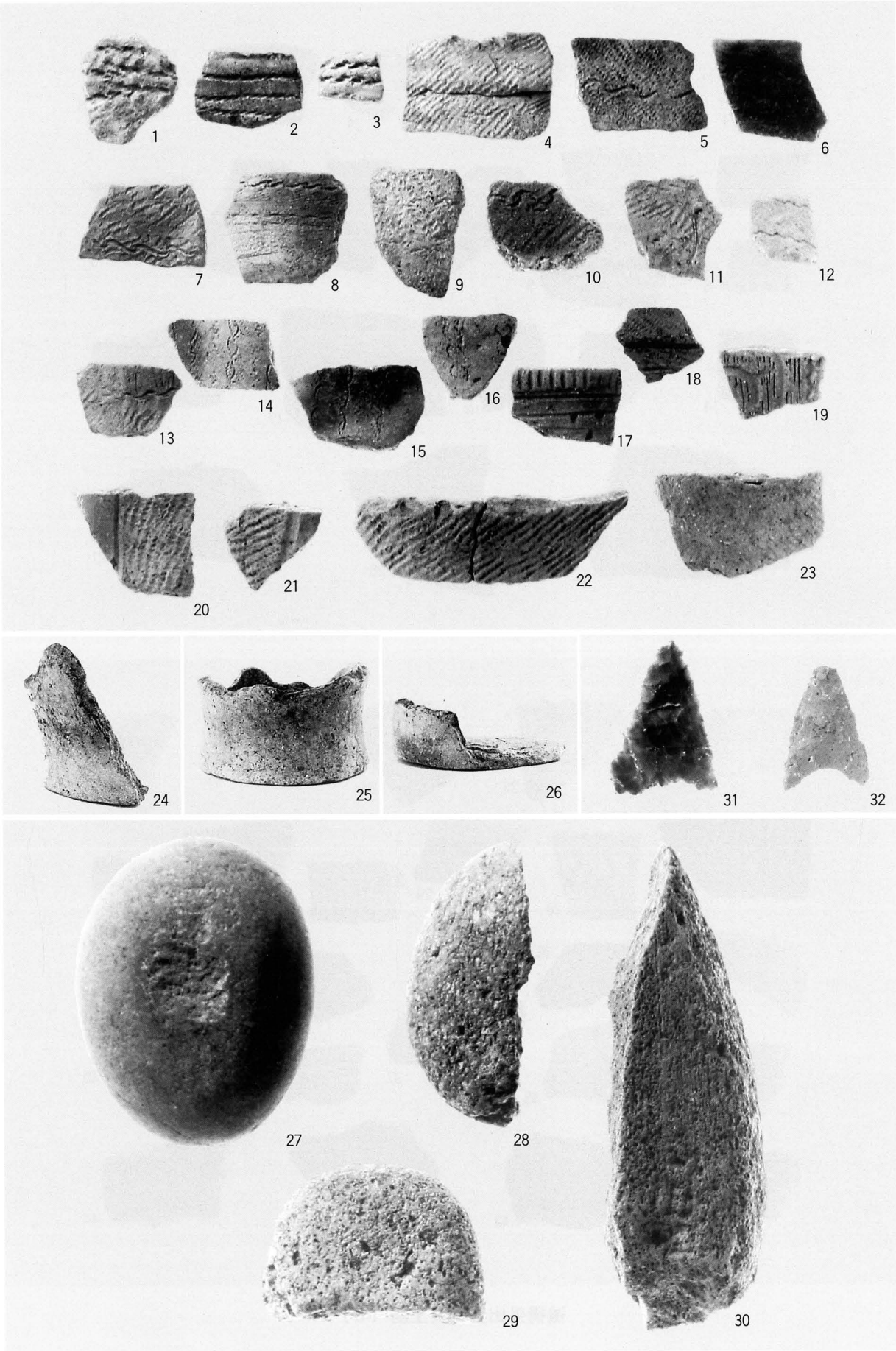

24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

遺構外出土縄文土器（５）

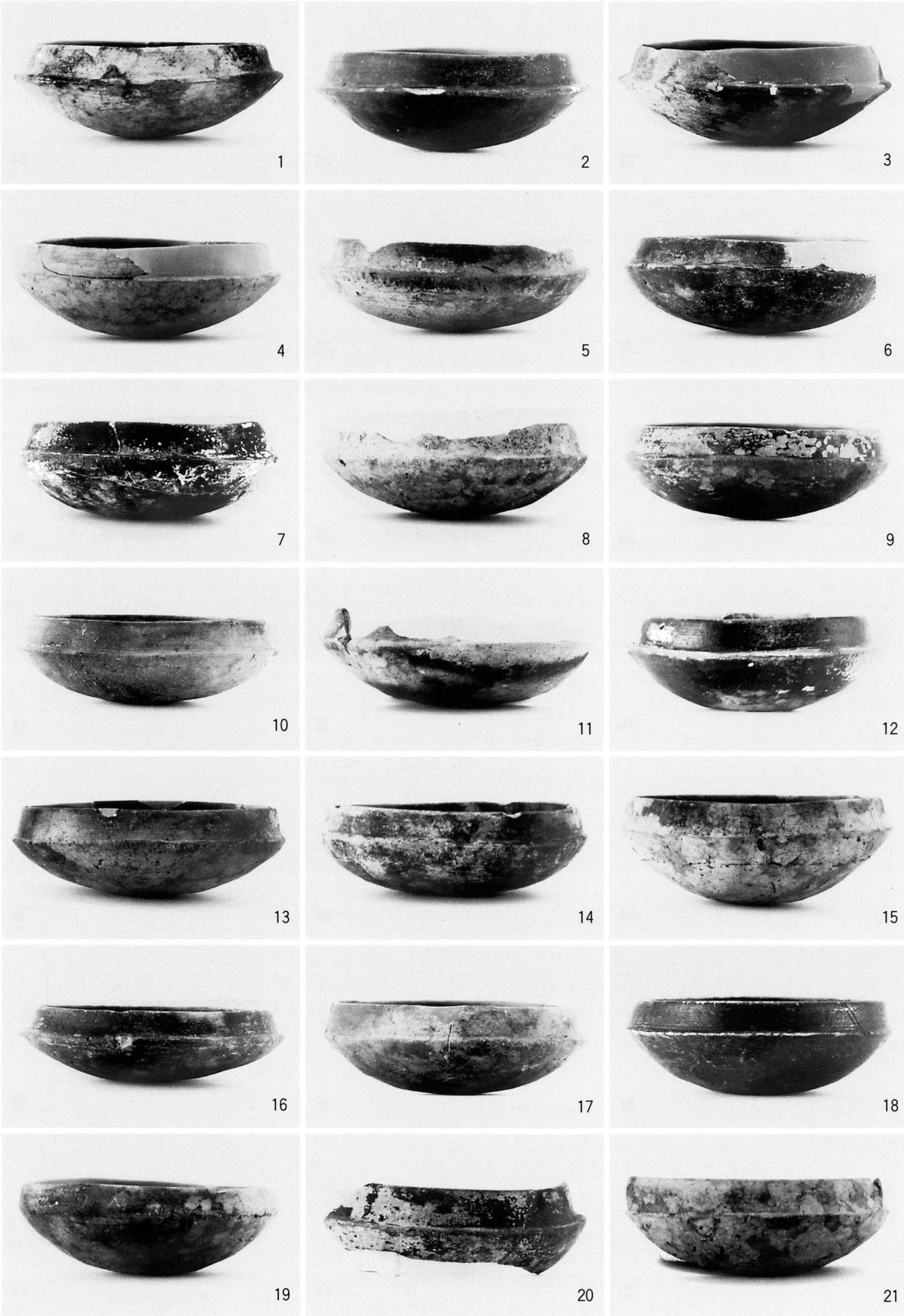

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21


22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

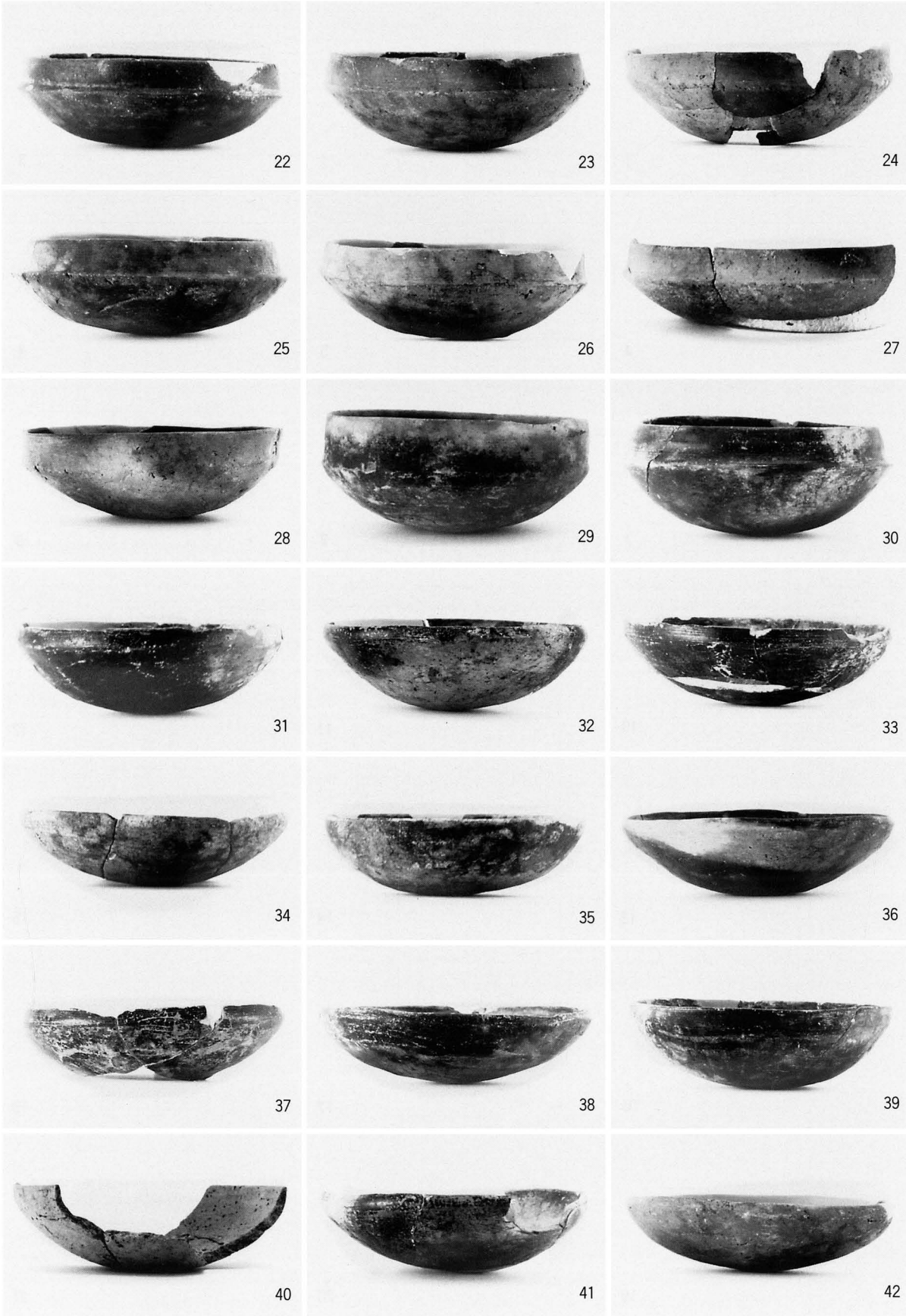
遺構外出土縄文土器（６）



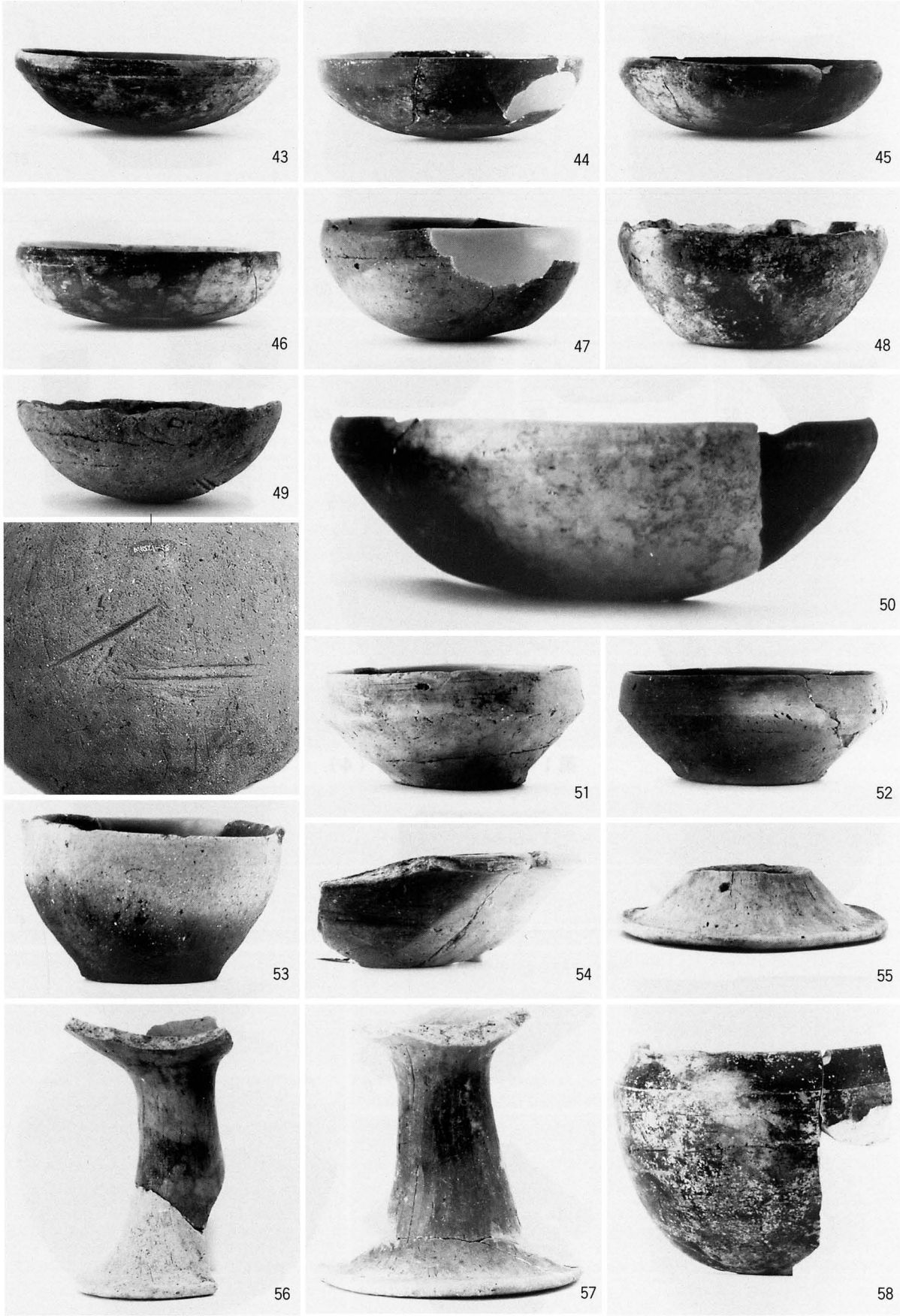
遺構外出土縄文土器（７）及び石製品



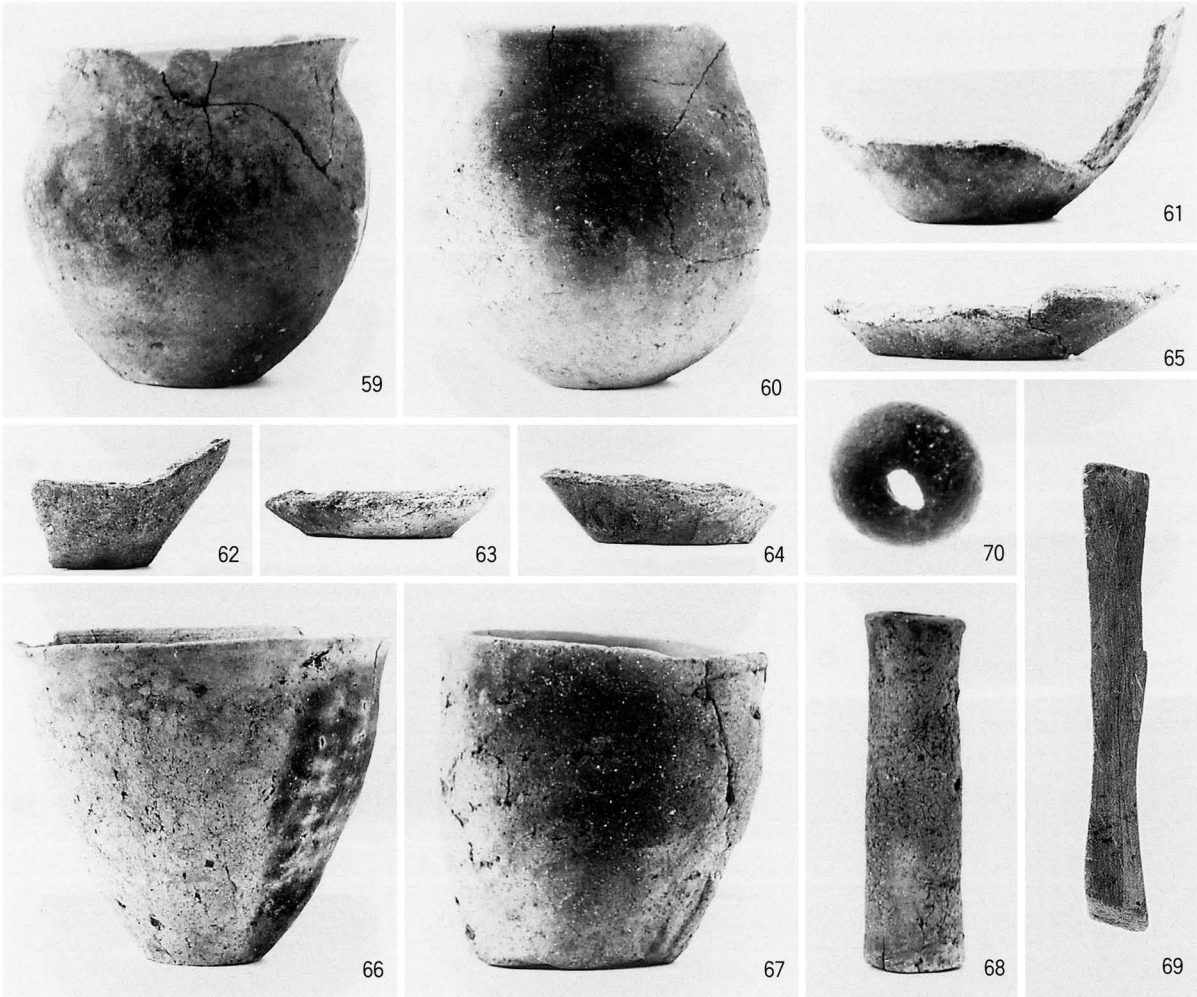
第１号住居跡出土遺物（１）



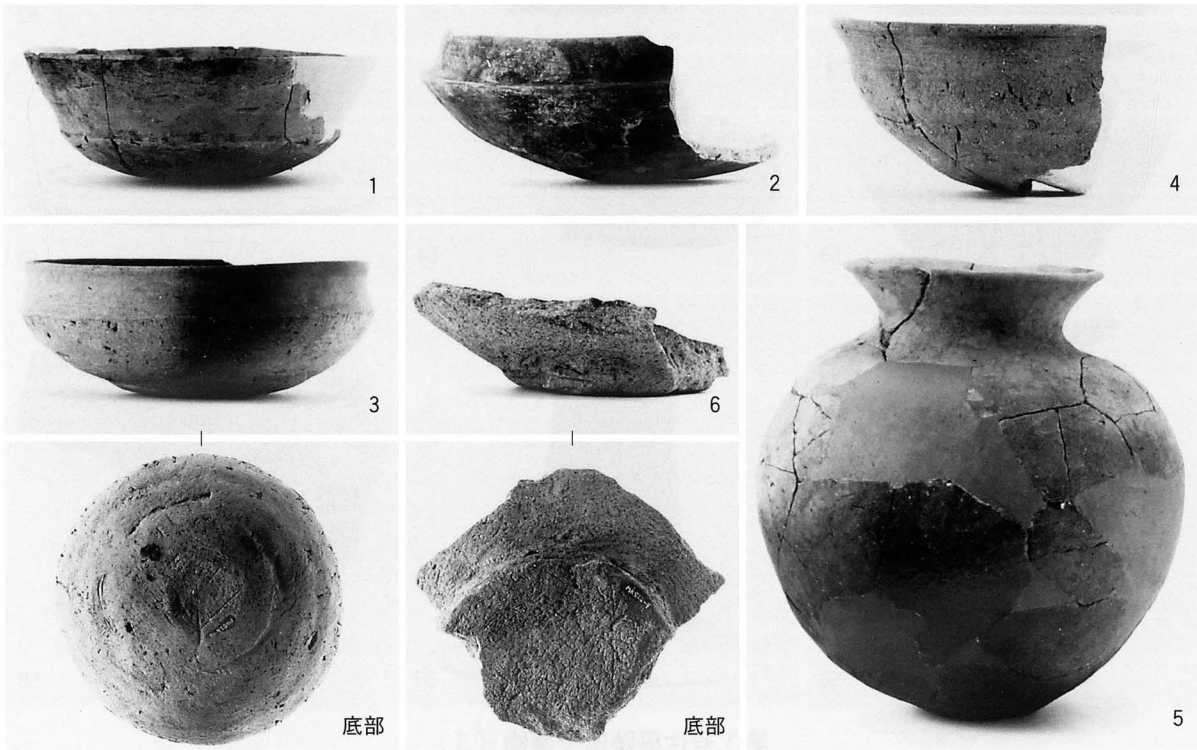
第１号住居跡出土遺物（２）



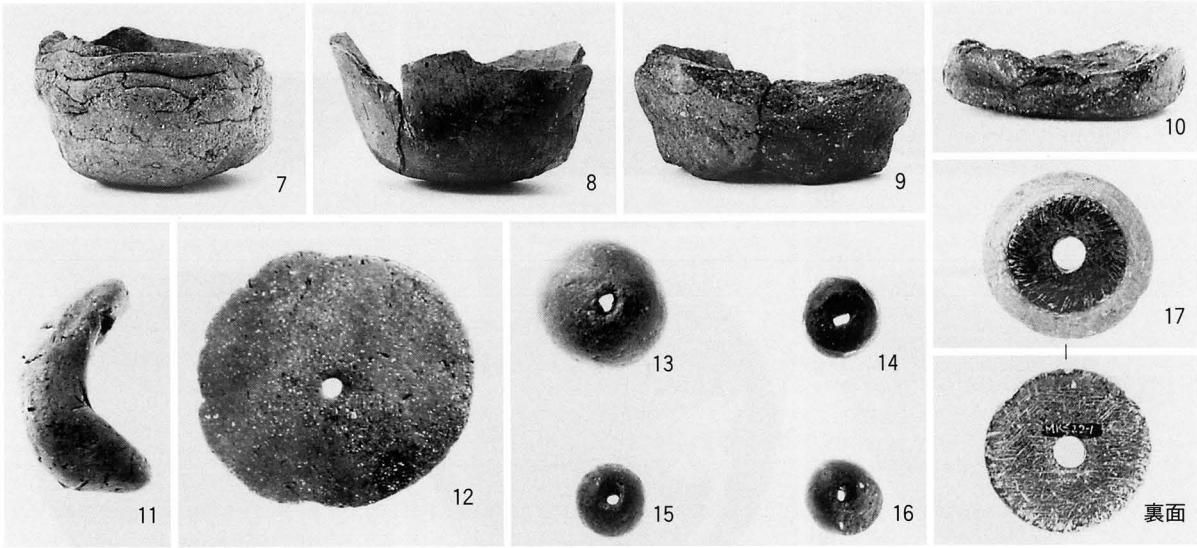
第１号住居跡出土遺物（３）



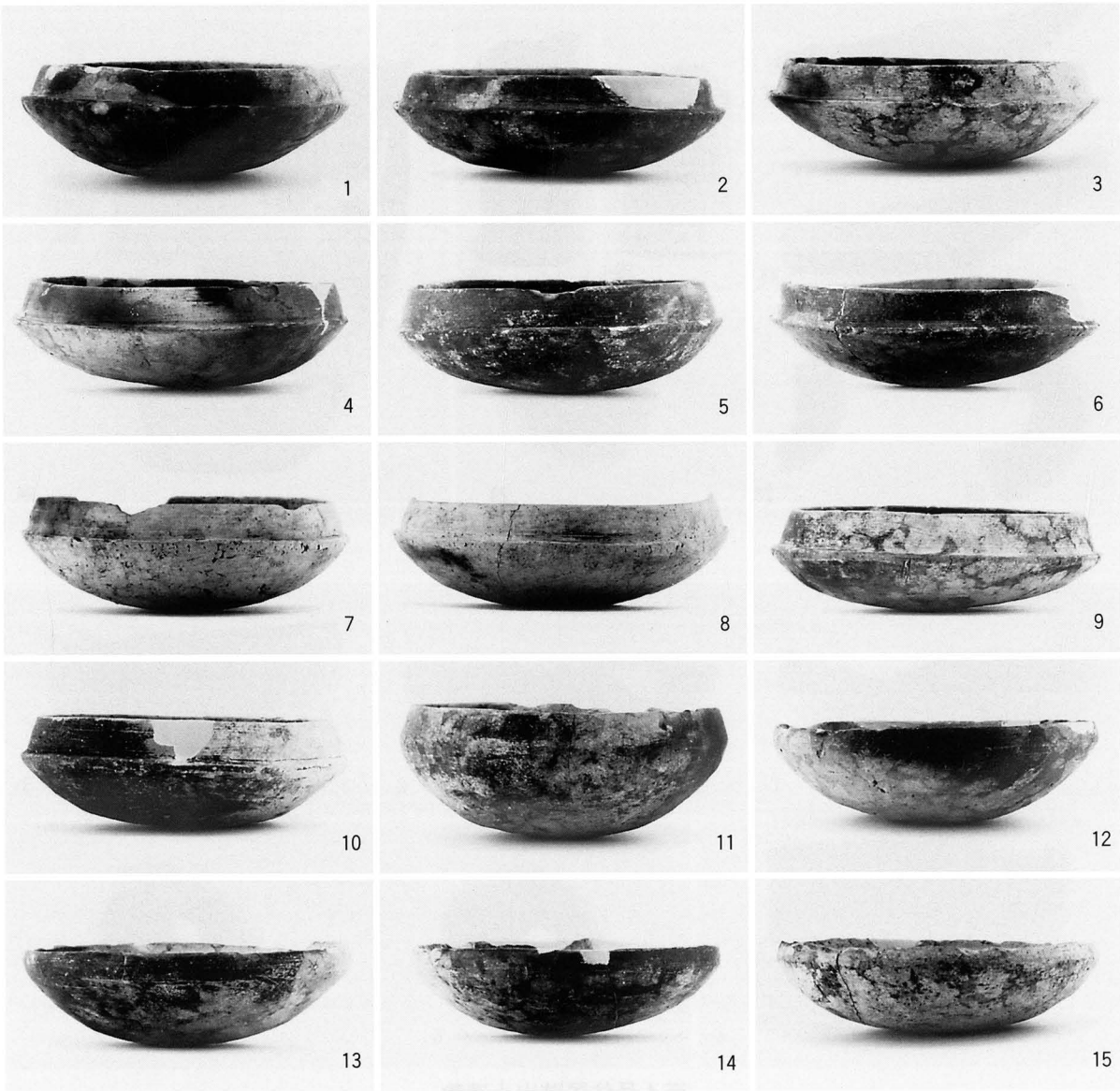
第１号住居跡出土遺物（４）



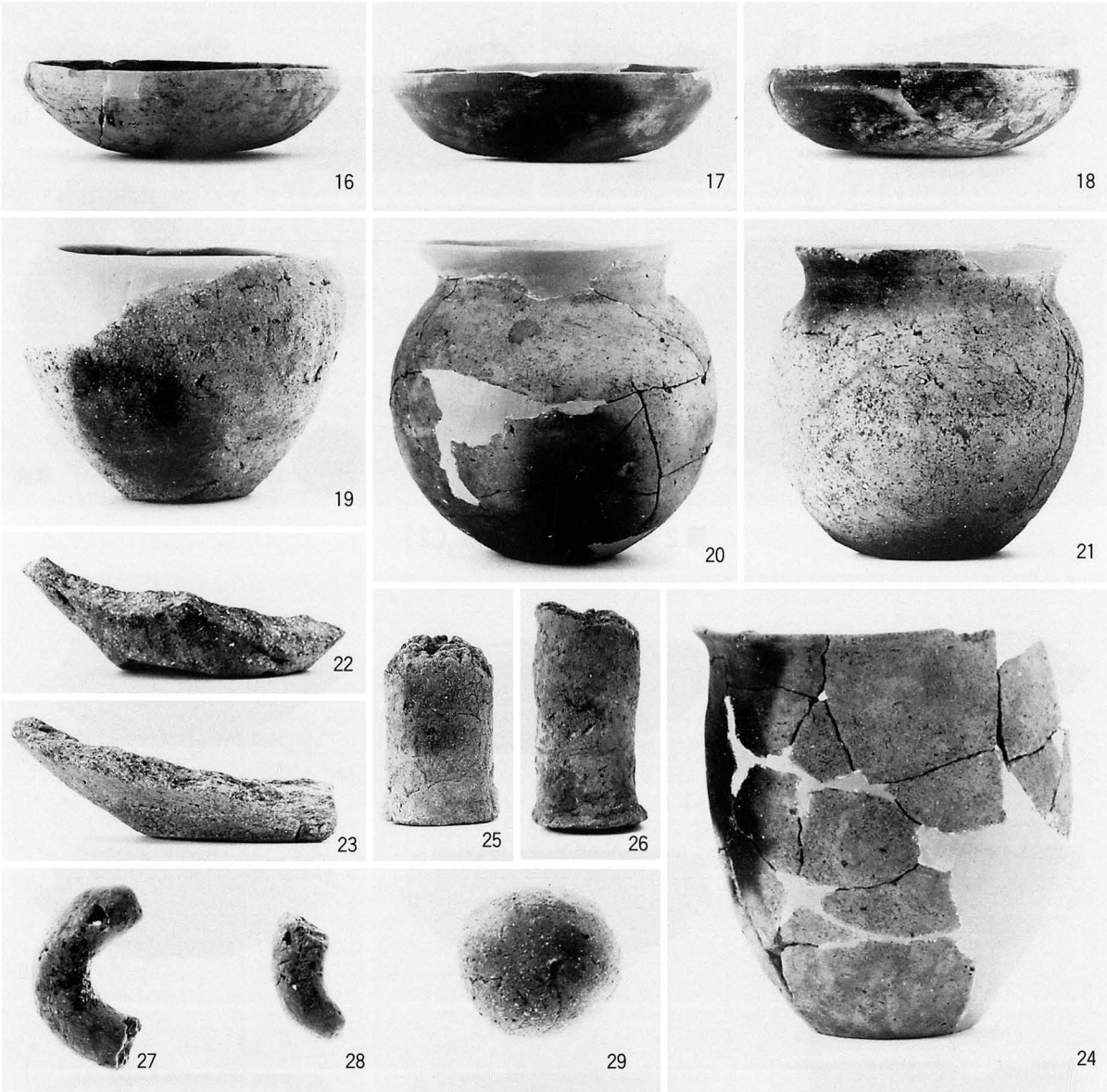
第２号住居跡出土遺物（１）



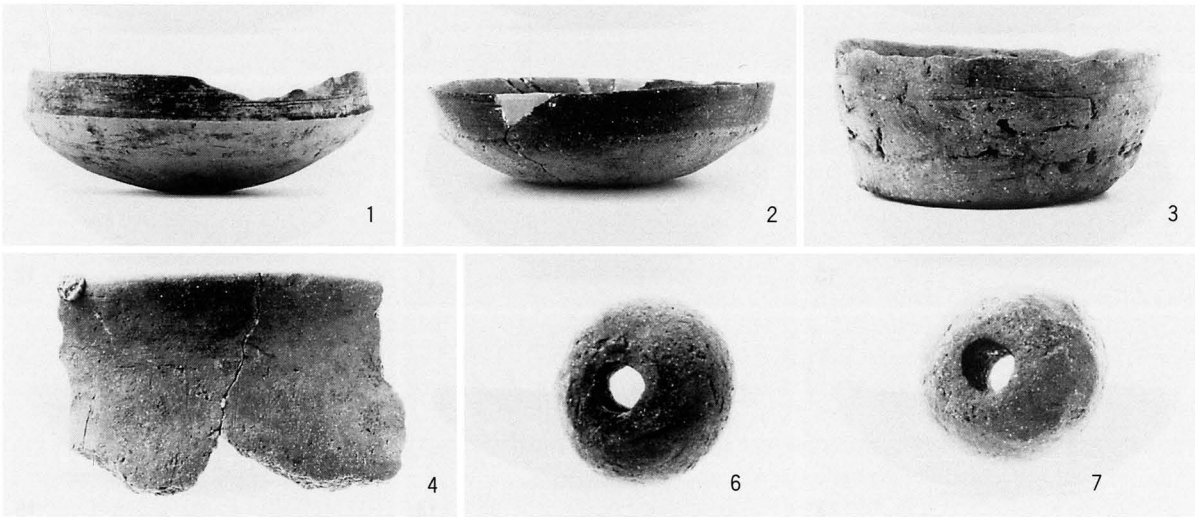
第２号住居跡出土遺物（２）



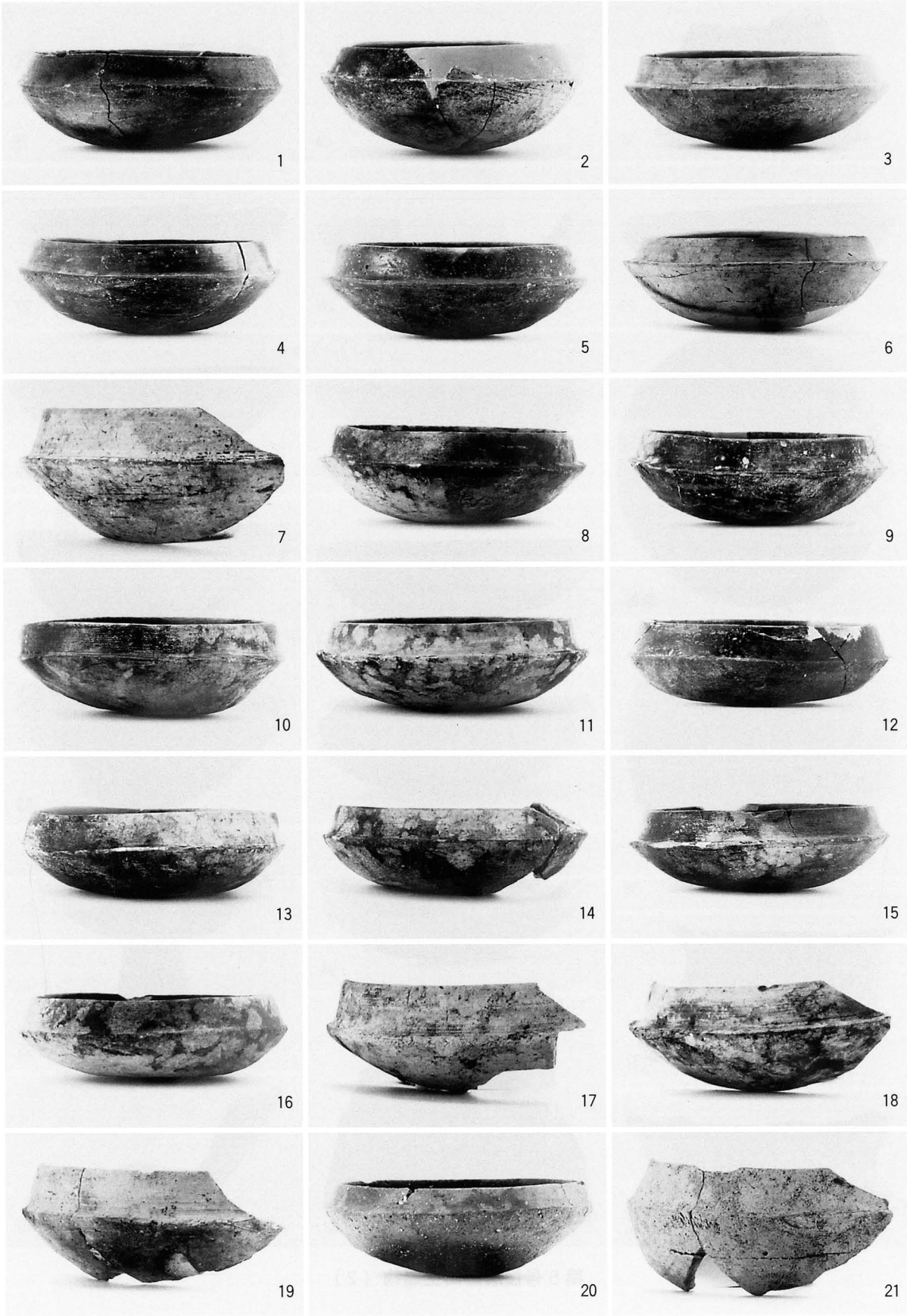
第３号住居跡出土遺物（１）



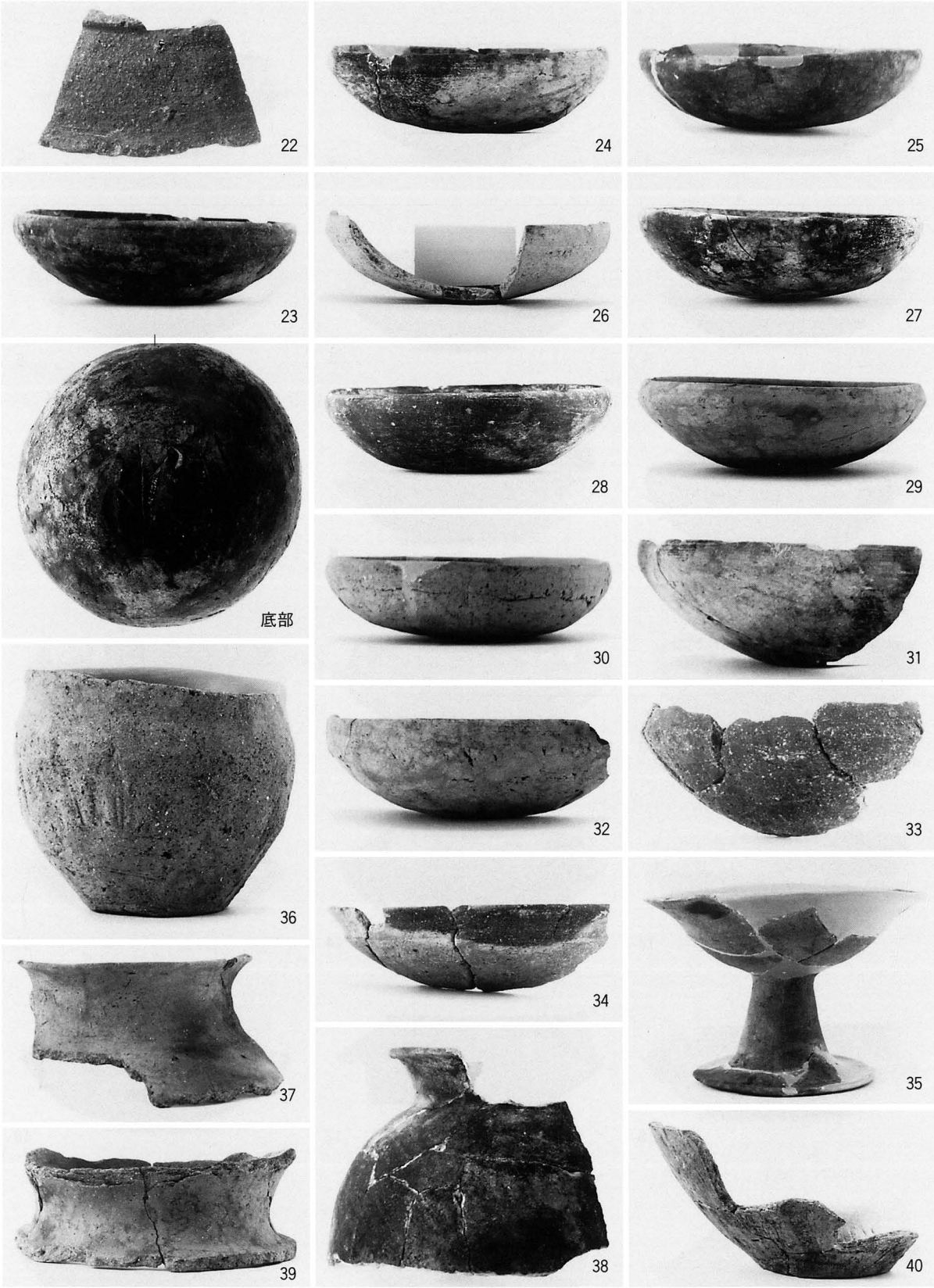
第 3 号住居跡出土遺物（2）



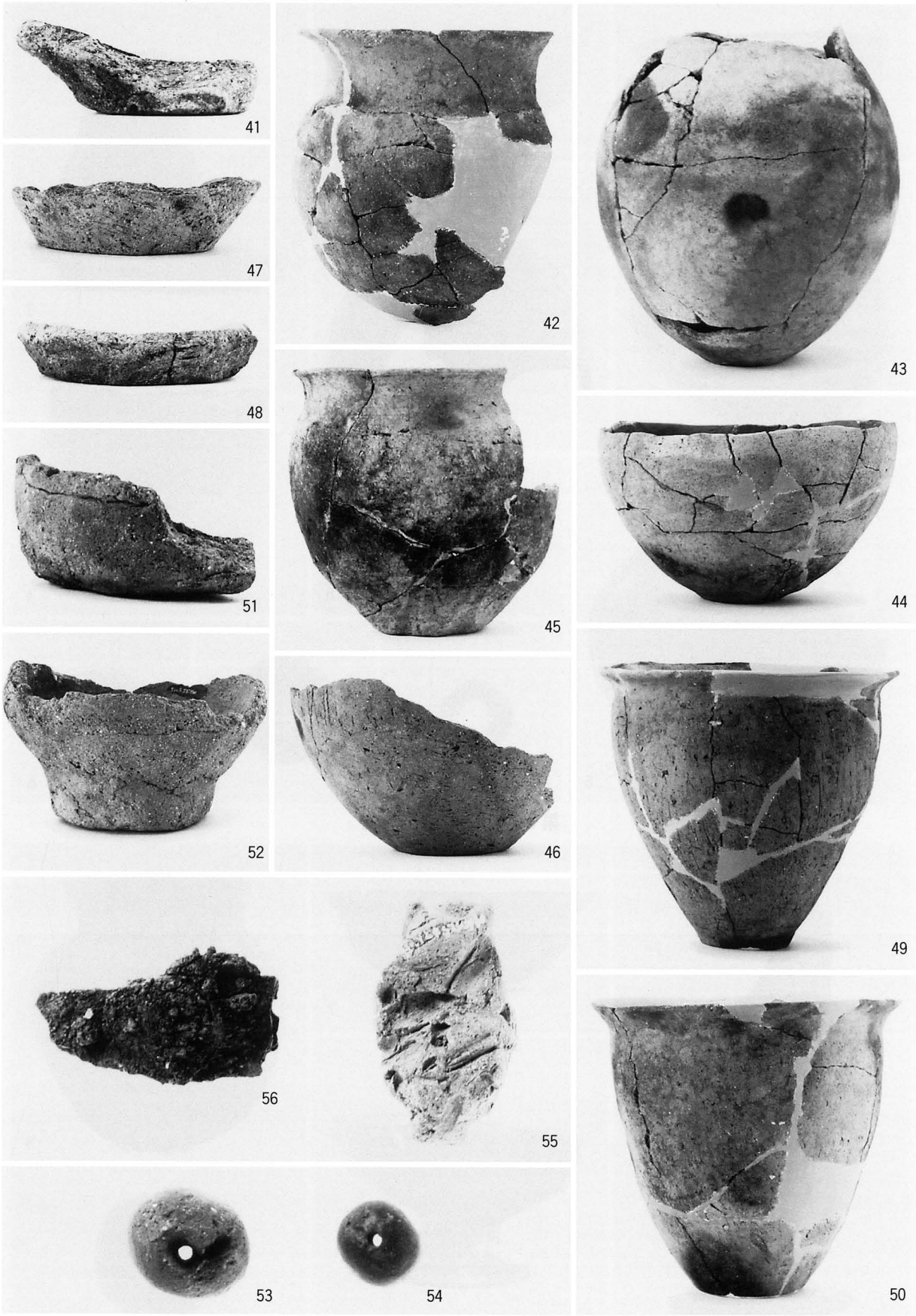
第 4 号住居跡出土遺物



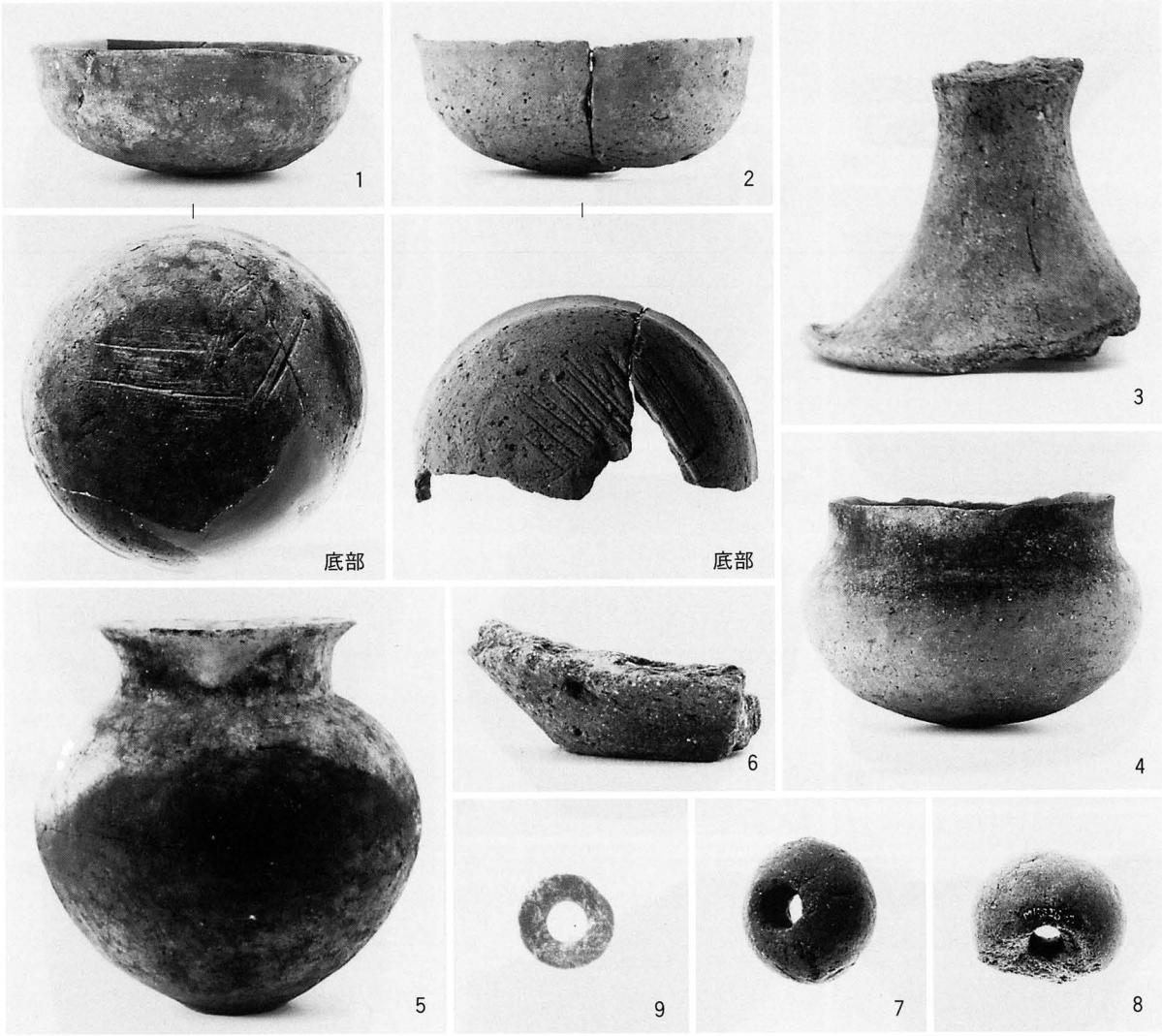
第５号住居跡出土遺物（１）



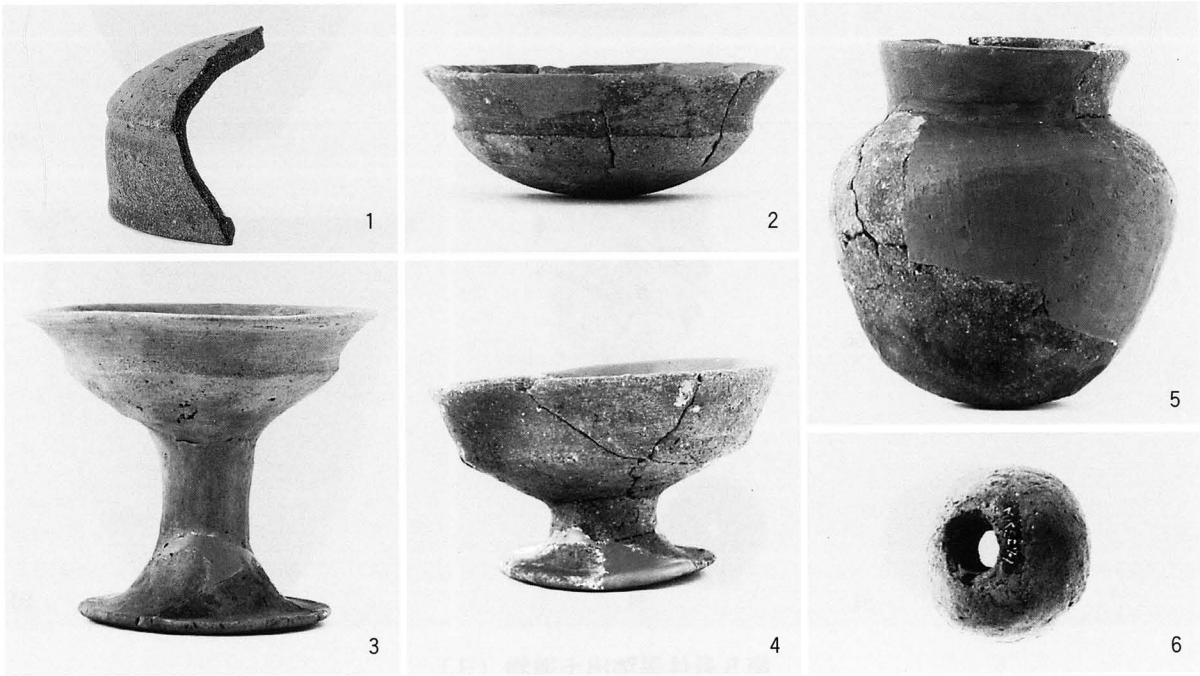
第５号住居跡出土遺物（２）



第５号住居跡出土遺物（３）



第 6 号住居跡出土遺物



第 7 号住居跡出土遺物

1

2

3

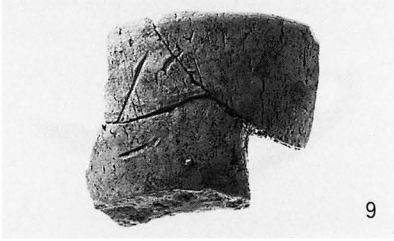
4

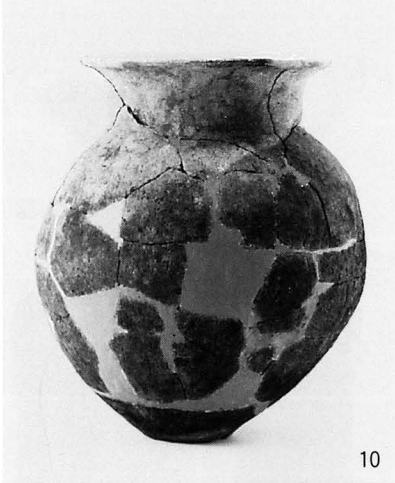
5

6

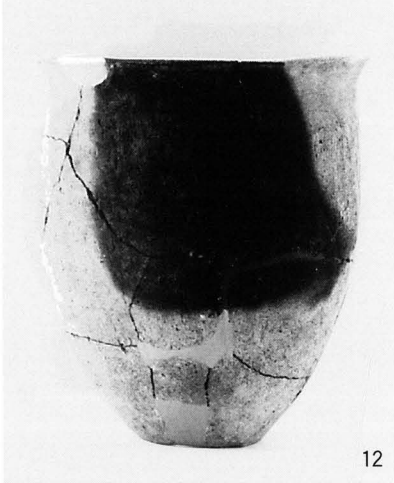
7

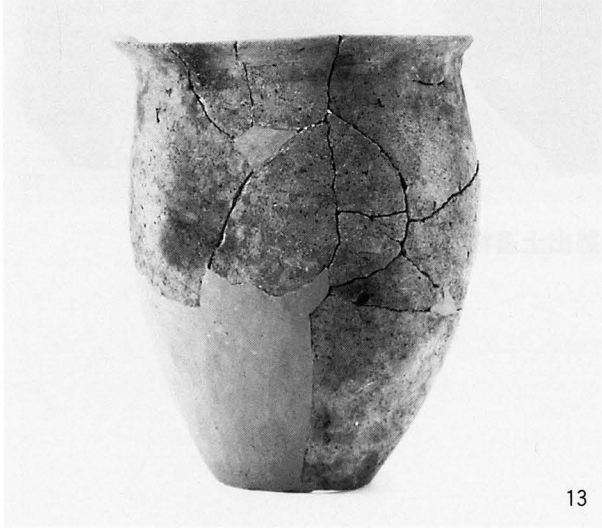
8


9


10

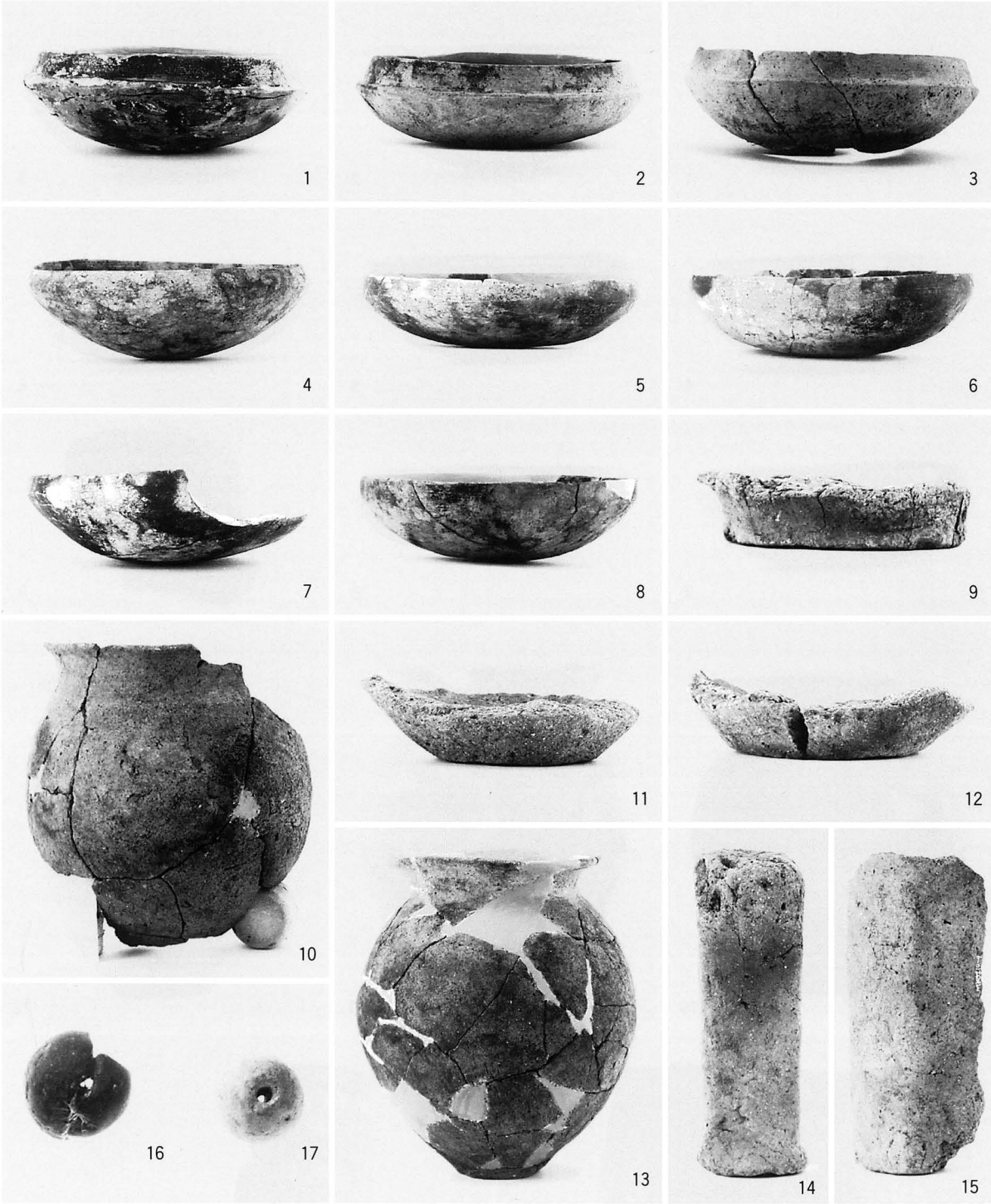
11


12

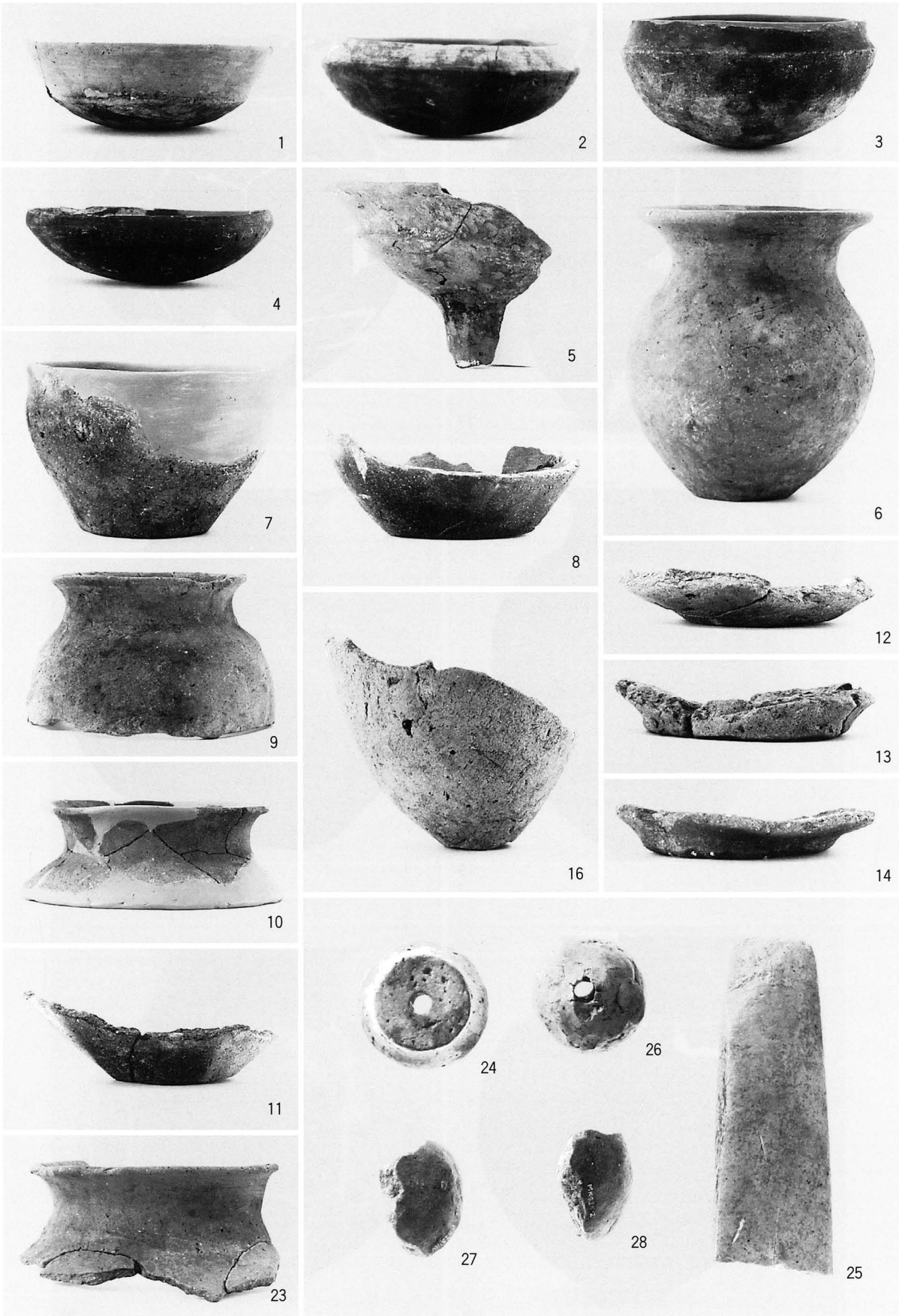

13

14

第９号住居跡出土遺物



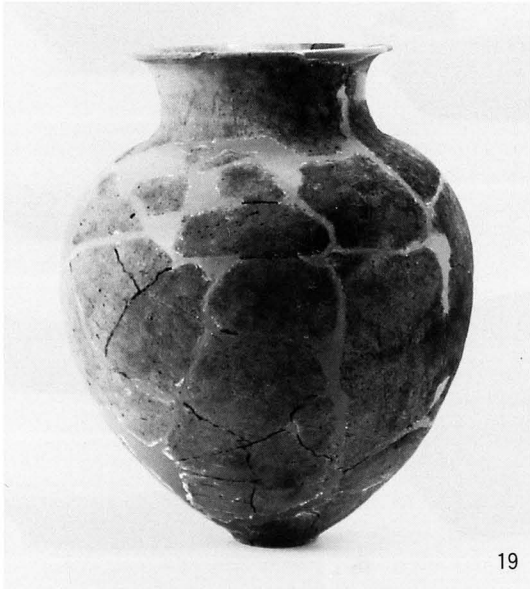
第10号住居跡出土遺物



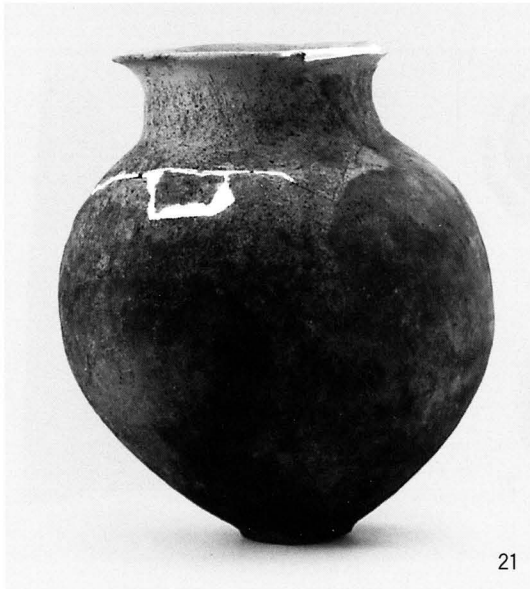
第11号住居跡出土遺物（１）

17

18


19

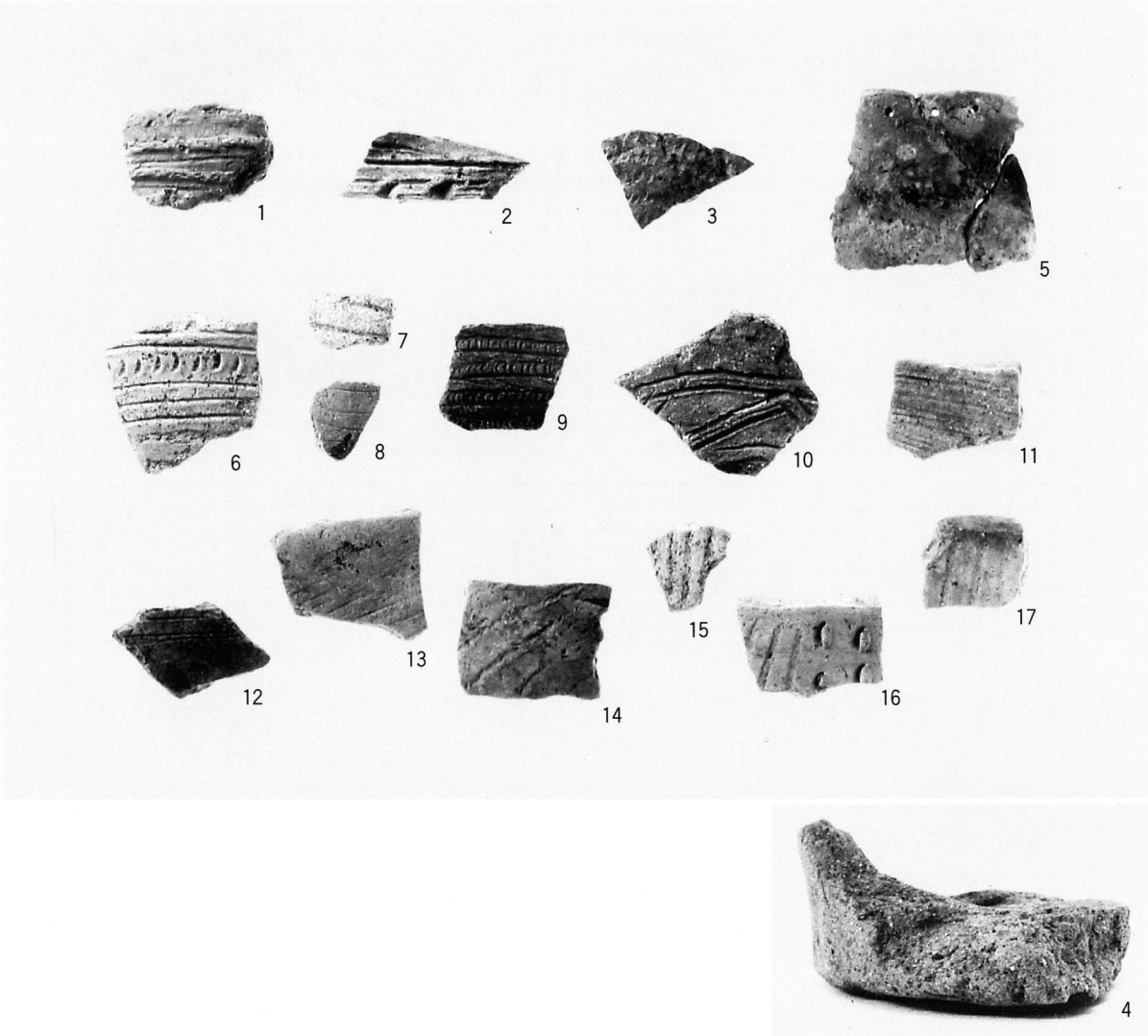
20


21

22

第11号住居跡出土遺物（２）

第12号住居跡出土遺物



土 坑 出 土 遺 物

形　部　遺　跡

老人介護保健施設建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　日	2005年９月30日
編　　集	形部遺跡調査会
発　　行	土浦市教育委員会
問い合せ先	上高津貝塚ふるさと歴史の広場 300-0811 茨城県土浦市大字上高津1843
印　　刷	㈱いなもと印刷